

京都府遺跡調査概報

第123冊

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

(平成16・17年度)

- (1) 池尻遺跡第7次
- (2) 池尻遺跡第12次
- (3) 池尻遺跡第14次・馬路遺跡第6次
- (4) 車塚遺跡第7次

2007

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版1 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡



(1)池尻・馬路・車塚遺跡全景(上空南から)



(2)池尻遺跡全景(上空南から)



(1)池尻遺跡第7次D地区全景(上空から、上が北)



(2)池尻遺跡第7次E地区近景(北から)



(1)池尻遺跡第12次調査地全景(北西から)



(2)池尻遺跡第12次溝S D01出土子持ち勾玉



(1)車塚遺跡全景(上空北から)



(2)車塚遺跡第7次A地区全景

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成16・17年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った、国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査を依頼された農林水産省近畿農政局をはじめ、亀岡市教育委員会などの関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

- (1) 池尻遺跡第7次
- (2) 池尻遺跡第12次
- (3) 池尻遺跡第14次・馬路遺跡第6次
- (4) 車塚遺跡第7次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡			農林水産省近畿農政局	
(1) 池尻遺跡第7次	亀岡市馬路町池尻 高戸・久保前	平16.10.21～平17.3.16		石崎善久
(2) 池尻遺跡第12次	亀岡市馬路町八反 田	平17.10.24～平18.2.27		岡崎研一
(3) 池尻遺跡第14次・ 馬路遺跡第6次	亀岡市馬路町六反 田・壁木ほか	平17.12.19～平18.3.3		引原茂治
(4) 車塚遺跡第7次	亀岡市馬路町吉 備・小弥ヶ口	平16.12.13～平17.5.30		引原茂治 黒坪一樹 福島孝行 筒井崇史

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成16・17年度発掘調査概要

はじめに-----	1
位置と環境-----	2
(1)池尻遺跡第7次-----	5
(2)池尻遺跡第12次-----	63
(3)池尻遺跡第14次・馬路遺跡第6次-----	103
(4)車塚遺跡第7次-----	124
おわりに-----	196

付表目次

付表1	本概要報告収録遺跡一覧-----	1
付表2	器種組成比率-----	163
付表3	B2類bの口縁部文様比率-----	164
付表4	器種別調整比率-----	164
付表5	器種別胎土比率-----	165
付表6	B2類bの文様別胎土比率-----	166
付表7	縄文の撚りの方向-----	167
付表8	調整別胎土比率-----	168
付表9	底部の直径と胎土-----	169
付表10	B地区出土小礫観察表-----	177
付表11	B地区出土石核観察表-----	177
付表12	B地区出土剥片観察表(1)-----	178
付表13	B地区出土剥片観察表(2)-----	179
付表14	B地区出土剥片観察表(3)-----	180
付表15	B地区出土剥片観察表(4)-----	181
付表16	B地区出土石鏃観察表-----	181
付表17	B地区出土石錐観察表-----	182

付表18	B地区出土石匙観察表-----	182
付表19	B地区出土スクレイパー観察表-----	182
付表20	B地区出土楔形石器観察表-----	183
付表21	B地区出土礫石器一覧表-----	190
付表22	B地区出土敲石類の使用痕跡形成部位観察表-----	191

挿 図 目 次

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

第1図	調査遺跡および周辺主要遺跡分布図-----	3
(1)池尻遺跡第7次		
第2図	池尻遺跡第7次・12次調査区位置図および周辺調査状況図(1/4,000)-----	6
第3図	D地区トレンチ配置図(1/1,000)-----	7
第4図	D地区主要部分土層柱状図(1/80)-----	8
第5図	D地区検出遺構全体平板測量図-----	9
第6図	D1～3・10・14トレンチ検出遺構実測図(空撮図化・1/400)-----	10
第7図	D地区掘立柱建物跡SB01実測図(1/100)-----	11
第8図	D地区掘立柱建物跡SB02実測図(1/100)-----	12
第9図	D地区掘立柱建物跡SB03実測図(1/100)-----	13
第10図	D地区掘立柱建物跡SB04実測図(1/100)-----	14
第11図	D地区柵SA02・03・05および土坑SK2実測図(1/100)-----	15
第12図	D地区柵SA04実測図(1/100)-----	16
第13図	D地区柵SA06実測図(1/100)-----	17
第14図	D地区柵SA01実測図(1/80)-----	18
第15図	D地区掘立柱建物跡SB05実測図(1/100)-----	18
第16図	D地区大形柱穴群SB06実測図(1/100)-----	19
第17図	D地区掘立柱建物跡SB07実測図(1/80)-----	19
第18図	D地区土坑SK1実測図(1/40)-----	20
第19図	D1トレンチ下層方形周溝墓検出状況平板測量図-----	21
第20図	D1～3トレンチ出土遺物実測図-----	22
第21図	D1～3・10・14トレンチ出土遺物実測図-----	23
第22図	D7トレンチ検出遺構実測図(空撮図化・1/200)-----	24
第23図	D地区掘立柱建物跡SB08・竪穴式住居跡SH10実測図(1/80)-----	25

第24図	D地区掘立柱建物跡S B09実測図(1/80)-----	26
第25図	D7トレンチ出土遺物実測図-----	27
第26図	E地区検出遺構(方形周溝墓)実測図(空撮図化・1/250)-----	28
第27図	E地区1号墓実測図(1/100)-----	29
第28図	E地区1号墓周溝土層断面図-----	30
第29図	E地区1号墓遺物出土状況図(1)(上段：北溝、下段：西溝)-----	31
第30図	E地区1号墓遺物出土状況図(2)(右図：東溝、左図：南溝)-----	32
第31図	E地区1号墓出土遺物実測図(1)-----	33
第32図	E地区1号墓出土遺物実測図(2)-----	34
第33図	E地区2号墓実測図(1/100)-----	35
第34図	E地区2号墓遺物出土状況および出土遺物実測図-----	36
第35図	E地区3号墓実測図-----	37
第36図	E地区3号墓遺物出土状況図(上段：東溝、下段：南溝)-----	38
第37図	E地区3号墓出土遺物実測図-----	39
第38図	E地区4・5号墓実測図-----	41
第39図	E地区4・5号墓遺物出土状況図-----	42
第40図	E地区5号墓西溝内土壌実測図-----	43
第41図	E地区4・5号墓出土遺物実測図-----	44
第42図	E地区6号墓実測図-----	46
第43図	E地区6号墓遺物出土状況および出土遺物実測図-----	47
第44図	E地区7号墓および出土遺物実測図-----	48
第45図	E地区8号墓および出土遺物実測図-----	48
第46図	E地区9号墓および出土遺物実測図-----	50
第47図	E地区土壙墓S K61・土器棺および出土遺物実測図-----	51
第48図	E地区検出遺構(ピット・土坑など)実測図(空撮図化・1/250)-----	53
第49図	E地区ピット・土坑など出土遺物実測図-----	54
第50図	E地区包含層出土遺物実測図-----	56
第51図	D地区正方位遺構群配置図-----	58
第52図	池尻遺跡周辺方形区画推定復原図-----	59
第53図	E地区方形周溝墓のグルーピング-----	61
(2) 池尻遺跡第12次		
第54図	遺構配置図-----	64
第55図	竪穴式住居跡S H03実測図および出土遺物実測図-----	65
第56図	竪穴式住居跡S H05実測図および出土遺物実測図-----	66
第57図	竪穴式住居跡S H06実測図-----	67

第58図	竪穴式住居跡 S H07実測図-----	68
第59図	竪穴式住居跡 S H07出土遺物実測図-----	69
第60図	竪穴式住居跡 S H08実測図および出土遺物実測図-----	70
第61図	竪穴式住居跡 S H113実測図-----	71
第62図	竪穴式住居跡 S H113出土遺物実測図-----	72
第63図	竪穴式住居跡 S H126実測図および出土遺物実測図-----	73
第64図	竪穴式住居跡 S H45実測図および出土遺物実測図-----	74
第65図	竪穴式住居跡 S H137実測図および出土遺物実測図-----	75
第66図	竪穴式住居跡 S H138・139実測図および出土遺物実測図-----	76
第67図	竪穴式住居跡 S H140・141実測図および出土遺物実測図-----	77
第68図	竪穴式住居跡 S H142・143実測図および出土遺物実測図-----	79
第69図	竪穴式住居跡 S H144・151実測図-----	80
第70図	竪穴式住居跡 S H144出土遺物実測図-----	81
第71図	竪穴式住居跡 S H145・150実測図および出土遺物実測図-----	82
第72図	掘立柱建物跡配置図-----	85
第73図	掘立柱建物跡 S B49・09・29実測図-----	86
第74図	掘立柱建物跡 S B12・79・130実測図-----	87
第75図	掘立柱建物跡 S B161・170・180・194、柵列 S A62・88実測図-----	89
第76図	柱穴出土遺物実測図-----	90
第77図	土坑 S K82・125・159・160実測図-----	91
第78図	土坑 S K82出土遺物実測図-----	92
第79図	溝セクション位置図-----	92
第80図	溝内堆積状況図(1)-----	93
第81図	溝内堆積状況図(2)-----	94
第82図	溝 S D01出土遺物実測図(1)-----	95
第83図	溝 S D01出土遺物実測図(2)-----	96
第84図	溝 S D01・107・108・109出土遺物実測図-----	97
第85図	子持ち勾玉実測図-----	99
第86図	包含層出土遺物-----	99
第87図	遺構変遷図-----	100
第88図	池尻遺跡・馬路遺跡主要調査地配置図-----	101
(3)池尻遺跡第14次・馬路遺跡第6次		
第89図	調査トレンチ柱状断面図-----	103
第90図	調査地区位置図-----	104
第91図	I H-1 トレンチ平面図-----	105

第92図	I H-1 トレンチ溝群実測図	106
第93図	I H-2 トレンチ平面図	107
第94図	I H-2 トレンチ掘立柱建物跡SB01、柵列跡SA03実測図	108
第95図	U H-1 トレンチ平面図	109
第96図	U H-2・3 トレンチ平面図	110
第97図	U H-2 溝群実測図	111
第98図	U H-4・5 トレンチ平面図	113
第99図	U H-6 トレンチ平面および検出遺構実測図	114
第100図	出土遺物実測図(1)	116
第101図	出土遺物実測図(2)	118
第102図	出土遺物実測図(3)	119
第103図	調査地周辺遺構分布図	121

(4)車塚遺跡第7次

第104図	調査地位置図	124
第105図	A地区遺構配置図	126
第106図	方形周溝墓S T01・02実測図	127
第107図	周溝内埋葬S X243実測図	128
第108図	小弥ヶ口古墳実測図	128
第109図	周溝内遺物出土状況図	129
第110図	竪穴式住居跡S H147実測図	129
第111図	溝S D44実測図第図	129
第112図	掘立柱建物跡S B01実測図	130
第113図	掘立柱建物跡S B03実測図	130
第114図	掘立柱建物跡S B02-a・b実測図	131
第115図	掘立柱建物跡S B04実測図	132
第116図	土坑S K177実測図	132
第117図	土坑S K115・107・130実測図	133
第118図	A地区出土遺物実測図(1)	134
第119図	A地区出土遺物実測図(2)	135
第120図	A地区出土遺物実測図(3)	136
第121図	A地区出土遺物実測図(4)	137
第122図	A地区出土遺物実測図(5)	138
第123図	B地区検出遺構配置図	142
第124図	B地区土層断面図	143
第125図	中期の土器	144

第126図	後期前葉の土器(1)	-----	145
第127図	後期前葉の土器(2)	-----	146
第128図	後期前葉の土器(3)	-----	147
第129図	後期前葉の土器(4)	-----	148
第130図	後期前葉の土器(5)	-----	149
第131図	後期前葉の土器(6)	-----	150
第132図	後期前葉の土器(7)	-----	151
第133図	後期前葉の土器(8)	-----	152
第134図	後期前葉の土器(9)	-----	153
第135図	後期前葉の土器(10)	-----	154
第136図	後期前葉の土器(11)	-----	155
第137図	後期前葉の土器(12)	-----	156
第138図	後期前葉の土器(13)	-----	157
第139図	後期前葉の土器(14)	-----	158
第140図	後期前葉の土器(15)	-----	159
第141図	後期前葉の土器(16)	-----	160
第142図	後期前葉の土器(17)	-----	161
第143図	土製品	-----	162
第144図	器種組成比率グラフ	-----	163
第145図	胎土別色調グラフ	-----	166
第146図	B地区出土石器実測図(1)	-----	173
第147図	B地区出土石器実測図(2)	-----	174
第148図	B地区出土石器実測図(3)	-----	175
第149図	B地区出土石鏃法量グラフ	-----	176
第150図	B地区出土楔形石器法量グラフ	-----	176
第151図	B地区出土石器実測図(4)	-----	176
第152図	B地区出土石器実測図(5)	-----	185
第153図	B地区出土石器実測図(6)	-----	186
第154図	B地区出土石器実測図(7)	-----	187
第155図	B地区出土石器実測図(8)	-----	188
第156図	B地区出土石器実測図(9)	-----	189
第157図	竪穴式住居跡S H 5 実測図	-----	191
第158図	竪穴式住居跡S H 4 実測図	-----	192
第159図	土坑S K 7・8 実測図	-----	193
第160図	B地区出土古墳時代以降の土器・鉄器など実測図	-----	194

図 版 目 次

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

(1)池尻遺跡第7次

- 図版第1 (1)池尻遺跡全景(南上空から) (2)D地区全景(南上空から)
- 図版第2 D地区全景(上空から、上が西)
- 図版第3 (1)D地区主要部全景(南上空から) (2)D地区主要部全景(北上空から)
- 図版第4 (1)D地区掘立柱建物跡S B01・S B02全景(上空から、上が東)
(2)D地区掘立柱建物跡S B02・S B03全景(上空から、上が東)
(3)D地区掘立柱建物跡S B03全景(上空から、上が北)
- 図版第5 (1)D地区北半部全景(上空から、上が東)
(2)D地区柵S A02・03・05全景(上空から、上が北)
(3)D地区掘立柱建物跡S B04全景(上空から、上が東)
- 図版第6 (1)D地区D-1・2トレンチ近景(南から) (2)D地区D-1トレンチ近景(南から)
(3)D地区D-1トレンチ近景(南西から)
- 図版第7 (1)D地区D-2トレンチ近景(北から)
(2)D地区掘立柱建物跡S B01検出状況(東から)
(3)D地区掘立柱建物跡S B01掘削状況(東から)
- 図版第8 (1)D地区掘立柱建物跡S B02検出状況(西から)
(2)D地区掘立柱建物跡S B02掘削状況(東から)
(3)D地区掘立柱建物跡S B02掘削状況(北西から)
- 図版第9 (1)D地区掘立柱建物跡S B03検出状況(南から)
(2)D地区掘立柱建物跡S B03掘削状況(南から)
(3)D地区掘立柱建物跡S B03掘削状況(南から)
- 図版第10 (1)D地区柵S A02掘削状況(東から) (2)D地区柵S A02掘削状況(西から)
(3)D地区柵S A03掘削状況(西から)
- 図版第11 (1)D地区D-3トレンチ近景(南から) (2)D地区D-14トレンチ近景(南から)
(3)D地区D-10トレンチ近景(西から)
- 図版第12 (1)D地区D-7トレンチ全景(上空から、上が東)
(2)D地区掘立柱建物跡S B08全景(西から)
(3)D地区竪穴式住居跡S H10全景(西から)
- 図版第13 (1)D地区出土遺物(1) (2)D地区出土遺物(2)
- 図版第14 E地区全景(上空から、上が北)

- 図版第15 (1) E地区全景(北から) (2) E地区全景(南東から)
(3) E地区1号墓全景(北から)
- 図版第16 (1) E地区1号墓全景(北から) (2) E地区1号墓全景(北から)
(3) E地区1号墓北溝全景(北西から)
- 図版第17 (1) E地区1号墓北溝角礫検出状況(北東から)
(2) E地区1号墓北溝角礫検出状況(北西から)
(3) E地区1号墓北溝遺物検出状況(北から)
- 図版第18 (1) E地区1号墓南溝遺物検出状況(北西から)
(2) E地区1号墓南溝遺物検出状況(西から)
(3) E地区1号墓東溝遺物検出状況(北から)
- 図版第19 (1) E地区1号墓東溝遺物検出状況(東から)
(2) E地区1号墓西溝遺物検出状況(北東から)
(3) E地区1号墓西溝遺物検出状況(西から)
- 図版第20 (1) E地区2号墓全景(北西から)
(2) E地区2号墓北溝遺物検出状況(北から)
(3) E地区3号墓全景(北から)
- 図版第21 (1) E地区3号墓東溝遺物出土状況(南から)
(2) E地区3号墓東溝遺物出土状況(南から)
(3) E地区3号墓南溝遺物出土状況(東から)
- 図版第22 (1) E地区4・5号墓全景(北から) (2) E地区4・5号墓全景(東から)
(3) E地区5号墓東溝内土坑検出状況(北から)
- 図版第23 (1) E地区4号墓東溝遺物検出状況(南から)
(2) E地区4・5号墓共有溝遺物検出状況(東から)
(3) E地区6号墓全景(北東から)
- 図版第24 (1) E地区6号墓全景(北から)
(2) E地区6号墓東溝遺物検出状況(南から)
(3) E地区9号墓全景(北西から)
- 図版第25 (1) E地区9号墓西溝遺物検出状況(南から)
(2) E地区7号墓全景(南から) (3) E地区8号墓全景(南西から)
- 図版第26 (1) E地区土壙墓S K61掘削状況(西から)
(2) E地区土壙墓S K61遺物検出状況(南から)
(3) E地区土壙墓S K61完掘状況(西から)
- 図版第27 (1) E地区土器棺検出状況(北東から) (2) E地区出土遺物(1)
- 図版第28 E地区出土遺物(2)
- 図版第29 (1) E地区出土遺物(3) (2) E地区出土遺物(4)

図版第30 (1) E地区出土遺物(5) (2) E地区出土遺物(6)

図版第31 (1) E地区出土遺物(7) (2) E地区出土遺物(8)

(2) 池尻遺跡第12次

図版第32 (1) 調査地東側全景(東から) (2) 調査地西側全景(南東から)

図版第33 (1) 竪穴式住居跡 S H03・S D02全景(上空から、下が北)

(2) 竪穴式住居跡 S H05～07全景(上空から、下が北)

(3) 竪穴式住居跡 S H06～08、掘立柱建物跡 S B09・49・12・29全景(東から)

図版第34 (1) 竪穴式住居跡 S H126、土坑 S K82・159全景(上空から、上が北)

(2) 竪穴式住居跡 S H113、掘立柱建物跡 S B194、土坑 S K125全景(上空から、上が北)

(3) 竪穴式住居跡 S H06～08、掘立柱建物跡 S B09・49・12・29全景(上空から、下が北)

図版第35 (1) 竪穴式住居跡 S H45・137～142近景(南東から)

(2) 竪穴式住居跡 S H45・137・139近景(南から)

(3) 竪穴式住居跡 S H138～142近景(南東から)

図版第36 (1) 竪穴式住居跡 S H138・142・143近景(南東から)

(2) 竪穴式住居跡 S H144・145・151近景(南東から)

(3) 竪穴式住居跡 S H150近景(南東から)

図版第37 (1) 竪穴式住居跡 S H05竈近景(北東から)

(2) 竪穴式住居跡 S H08竈近景(北東から)

(3) 竪穴式住居跡 S H07竈近景(南東から)

図版第38 (1) 竪穴式住居跡 S H137竈近景(南東から)

(2) 竪穴式住居跡 S H113竈近景(南西から)

(3) 竪穴式住居跡 S H113竈内堆積状況(北西から)

図版第39 (1) 竪穴式住居跡 S H140竈検出状況(南から)

(2) 竪穴式住居跡 S H140竈内遺物出土状況(南から)

(3) 竪穴式住居跡 S H140竈近景(南から)

図版第40 (1) 竪穴式住居跡 S H45竈近景(南東から)

(2) 竪穴式住居跡 S H138竈近景(南東から)

(3) 竪穴式住居跡 S H144竈近景(東から)

図版第41 (1) 掘立柱建物跡 S B09・49近景(北東から)

(2) 掘立柱建物跡 S B12・79・130近景(北東から)

(3) 掘立柱建物跡 S B29近景(北東から)

図版第42 (1) 掘立柱建物跡 S B161・170・180近景(南から)

(2) 土坑 S K82・160近景(南東から)

- (3)土坑 S K82内遺物出土状況(北西から)
- 図版第43 (1)土坑 S K159近景(南から) (2)土坑 S K125近景(南から)
(3)土坑 S K160近景(南東から)
- 図版第44 (1)溝 S D01堆積状況 C-C' (南東から)
(2)溝 S D01内子持ち勾玉出土状況(南東から)
(3)溝 S D01内遺物出土状況(南東から)
- 図版第45 (1)溝 S D109堆積状況(南東から)
(2)溝 S D109内遺物出土状況(北西から)
(3)溝 S D111検出状況、溝 S D112完掘状況(南東から)
- 図版第46 (1)溝 S D108堆積状況(南東から) (2)溝 S D107堆積状況(南東から)
(3)溝 S D107内遺物出土状況(北西から)
- 図版第47 出土遺物(1)
- 図版第48 出土遺物(2)
- 図版第49 出土遺物(3)
- 図版第50 出土遺物(4)
- 図版第51 出土遺物(5)

(3)池尻遺跡第14次・馬路遺跡第6次

- 図版第52 (1)調査地遠景(南から、空撮) (2)調査地遠景(東から、空撮)
- 図版第53 (1)調査地東半部(上が北、空撮)
(2) I H-2 トレンチ 掘立柱建物跡 S B01・柵 S A03(南から)
- 図版第54 (1) I H-1 トレンチ溝群(南東から)
(2) I H-1 トレンチ溝 S D02断面(南東から)
(3) I H-1 トレンチ溝 S D02遺物出土状況(東から)
- 図版第55 (1) I H-2 トレンチ全景(南から)
(2) I H-2 トレンチ掘立柱建物跡 S B01(西から)
(3) I H-2 トレンチ掘立柱建物跡 S B01柱穴2断面(北から)
- 図版第56 (1) I H-2 トレンチ柵 S A03(北から)
(2) I H-2 トレンチ溝 S D02遺物出土状況(東から)
(3) I H-2 トレンチ溝 S D12(北東から)
- 図版第57 (1) I H-2 トレンチ溝 S D16(西から)
(2) U H-1 トレンチ全景(南から)
(3) U H-1 トレンチ掘立柱建物跡 S B05(東から)
- 図版第58 (1) U H-2 トレンチ全景(北西から)
(2) U H-2 トレンチ溝群(南東から)
(3) U H-2 トレンチ溝群(南から)

- 図版第59 (1) UH-3 トレンチ全景(西から)
 (2) UH-4 トレンチ全景(東から)
 (3) UH-4 トレンチ溝 S D01断面(西から)
- 図版第60 (1) UH-4 トレンチ東壁断面(西から)
 (2) UH-5 トレンチ全景(西から)
 (3) UH-5 トレンチ土坑 S X07(西から)
- 図版第61 (1) UH-5 トレンチ土坑 S K14(東から)
 (2) UH-6 トレンチ全景(南東から)
 (3) UH-6 トレンチ掘立柱建物跡 S B06・07(北東から)
- 図版第62 出土遺物(1)
- 図版第63 出土遺物(2)
- (4) 車塚遺跡第7次**
- 図版第64 (1) A地区調査地(北から) (2) A地区土坑 S K107近景(南から)
 (3) A地区土坑 S K130近景(南から)
- 図版第65 (1) A地区方形周溝墓 S T01・02近景(北から)
 (2) A地区方形周溝墓 S T01・02近景(東から)
 (3) A地区木棺墓 S X243近景(南から)
- 図版第66 (1) A地区木棺墓 S X243木棺痕跡近景(東から)
 (2) A地区小弥ヶ口古墳近景(北東から)
 (3) A地区竪穴式住居跡 S H147近景(東から)
- 図版第67 (1) A地区掘立柱建物跡 S B01近景(東から)
 (2) A地区掘立柱建物跡 S B02-a・b近景(北から)
 (3) A地区掘立柱建物跡 S B03近景(東から)
- 図版第68 (1) A地区溝 S D44近景(東から) (2) A地区溝 S D44土層断面(東から)
- 図版第69 A地区出土遺物
- 図版第70 (1) B地区調査前全景(南から) (2) B地区調査前全景(北西から)
 (3) B地区掘削作業風景(南西から)
- 図版第71 (1) B2地区縄文土器出土状況(東から)
 (2) B2地区縄文土器出土状況細部(東から)
- 図版第72 (1) B2地区遺構検出状況(南から) (2) B2地区東壁断面(南西から)
 (3) B2地区東壁断面(南から)
- 図版第73 (1) B2地区竪穴式住居跡 S H4 全景(南から)
 (2) B2地区竪穴式住居跡 S H4 竈部近景(南から)
 (3) B2地区竪穴式住居跡 S H4 内須恵器杯出土状況(南から)
- 図版第74 (1) B2地区竪穴式住居跡 S H4 内鉄器出土状況(南から)

- (2) B 2 地区竪穴式住居跡 S H 4 北西隅検出状況(北から)
- (3) B 2 地区竪穴式住居跡 S H 4 完掘状況(南から)
- 図版第75 (1) B 1 地区竪穴式住居跡 S H 5 検出状況(西から)
- (2) B 1 地区竪穴式住居跡 S H 5 中間セクション断面(北東から)
- (3) B 1 地区竪穴式住居跡 S H 5 内土師器出土状況(西から)
- 図版第76 (1) B 1 地区竪穴式住居跡 S H 5 完掘状況(北東から)
- (2) B 1 地区竪穴式住居跡 S H 5 完掘状況(西から)
- (3) B 1 地区遺構検出状況(南東から)
- 図版第77 (1) B 1 地区遺構検出状況(北西から)
- (2) B 1 地区土坑 S K 7・8 検出状況(西から)
- (3) B 1 地区土坑 S K 7・8 完掘状況(南西から)
- 図版第78 (1)出土遺物(1):縄文土器(1) (2)出土遺物(2):縄文土器(2)
- 図版第79 (1)出土遺物(3):縄文土器(3) (2)出土遺物(4):縄文土器(4)
- 図版第80 (1)出土遺物(5):縄文土器(5) (2)出土遺物(6):縄文土器(6)
- 図版第81 出土遺物(7):縄文土器(7)
- 図版第82 (1)出土遺物(8):縄文土器(8) (2)出土遺物(9):縄文土器(9)
- 図版第83 出土遺物(10):縄文土器(10)
- 図版第84 (1)出土遺物(11):縄文土器(11)(表面) (2)出土遺物(11):縄文土器(11)(裏面)
- 図版第85 (1)出土遺物(12):縄文土器(12)(表面) (2)出土遺物(12):縄文土器(12)(裏面)
- 図版第86 出土遺物(13):縄文土器(13)
- 図版第87 出土遺物(14):縄文土器(14)(外面)
- 図版第88 出土遺物(14):縄文土器(14)(内面)
- 図版第89 (1)出土遺物(15):縄文土器(15)(表面) (2)出土遺物(15):縄文土器(15)(裏面)
- 図版第90 (1)出土遺物(16):縄文土器(16) (2)出土遺物(17):縄文土器(17)
- 図版第91 (1)出土遺物(18):縄文土器(18) (2)出土遺物(19):縄文土器(19)
- 図版第92 出土遺物(20):縄文土器(細部)
- 図版第93 出土遺物(21):剥片石器(1)(表面)
- 図版第94 出土遺物(21):剥片石器(1)(裏面)
- 図版第95 出土遺物(22):剥片石器(2)
- 図版第96 (1)出土遺物(23):礫石器(1) 石錘 (2)出土遺物(24):礫石器(2) 敲石類
- 図版第97 (1)出土遺物(25):礫石器(3) 敲石類 (2)出土遺物(26):礫石器(4) 敲石類
- 図版第98 (1)出土遺物(27):礫石器(5) 敲石類 (2)出土遺物(28):礫石器(6) 台石類
- 図版第99 出土遺物(29):古墳時代以降の遺物(1)
- 図版第100 出土遺物(30):古墳時代以降の遺物(2)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成16・17年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、農林水産省近畿農政局が実施している国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて当調査研究センターが行った。

調査範囲は、京都府教育委員会と亀岡市教育委員会による試掘調査の結果をもとに、近畿農政局をはじめとする開発部局と調整を行って決定した。

本概要報告では、付表1に示すとおり、平成16年度に実施した池尻遺跡第7次(D・E地区)、平成16・17年度に実施した車塚遺跡第7次、平成17年度に実施した池尻遺跡第12次・馬路遺跡第6次・池尻遺跡第14次の調査成果を報告し、次年度も整理事業の継続する時塚遺跡と蔵垣内遺跡については次年度以降報告を行うこととする。

本概要報告の執筆は、各調査担当者のほか、位置と環境を花園大学大学院生平井耕平が、車塚遺跡A地区出土遺物については当調査研究センター調査員筒井崇史が、車塚遺跡B地区出土縄文土器に関しては京都大学大学院生稲畑航平が、打製石器に関しては同志社大学大学院生吉村駿吾がそれぞれ担当して執筆した。文責については各項の末尾に記した。また、車塚遺跡B地区出土のガラス玉については、奈良大学の協力のもと、奈良大学大学院生北森さやかが分析作業を実施した。

現地作業を実施するにあたり、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会をはじめとする関係諸機関の協力を得、また、地元自治会、地権者、地元住民の方々のご理解とご協力^(注1)をいただいた。記して謝意を表する。なお、発掘調査に係る経費は全額、農林水産省近畿農政局が負担した。

(石崎善久)

付表1 本概要報告収録遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積(m ²)	担当者
1	池尻遺跡第7次	京都府亀岡市 馬路町池尻高戸・久保前	平成16年10月21日 ～平成17年3月16日	3,430	調査第1係長 小池 寛 専門調査員 黒坪一樹 調査員 石崎善久
2	池尻遺跡第12次	京都府亀岡市 馬路町八反田	平成17年10月24日 ～平成18年2月27日	2,130	調査第1係長 小池 寛 専門調査員 岡崎研一
3	池尻遺跡第14次 馬路遺跡第6次	京都府亀岡市 馬路町六反田・壁木ほか	平成17年12月19日 ～平成18年3月3日	1,300	調査第1係長 小池 寛 主任調査員 引原茂治
4	車塚遺跡第7次	京都府亀岡市 馬路町吉備・小弥ヶ口	平成16年12月13日 ～平成17年5月30日	1,570	調査第1係長 小池 寛 主任調査員 引原茂治 主任調査員 中川和哉 専門調査員 黒坪一樹 調査員 福島孝行

位置と環境

本概要報告において報告する遺跡の所在する亀岡市は、京都市の北西に位置する。亀岡市を含む丹波地域は、丹波高地の鮮新・更新世後半以降の褶曲および断層運動や、諸河川およびそれらの水系によって形成された盆地が点在する地形となっている。亀岡市はその一つである亀岡盆地の大半を占める。盆地の中央部には北西から南東に向かって桂川が流れている。また、周辺の山地から桂川に向かって三俣川、七谷川などの小河川が流れこむ。それらの河川によって浸食され、段丘地形が形成されている。今回報告する遺跡は、この桂川の東岸の段丘上に広がる。桂川東岸地域は、近年まで開発も少なく、遺跡の様相が明らかでなかったが、ここ数年続く農地整備事業に伴う発掘調査を中心に多くのことが明らかになりつつある。

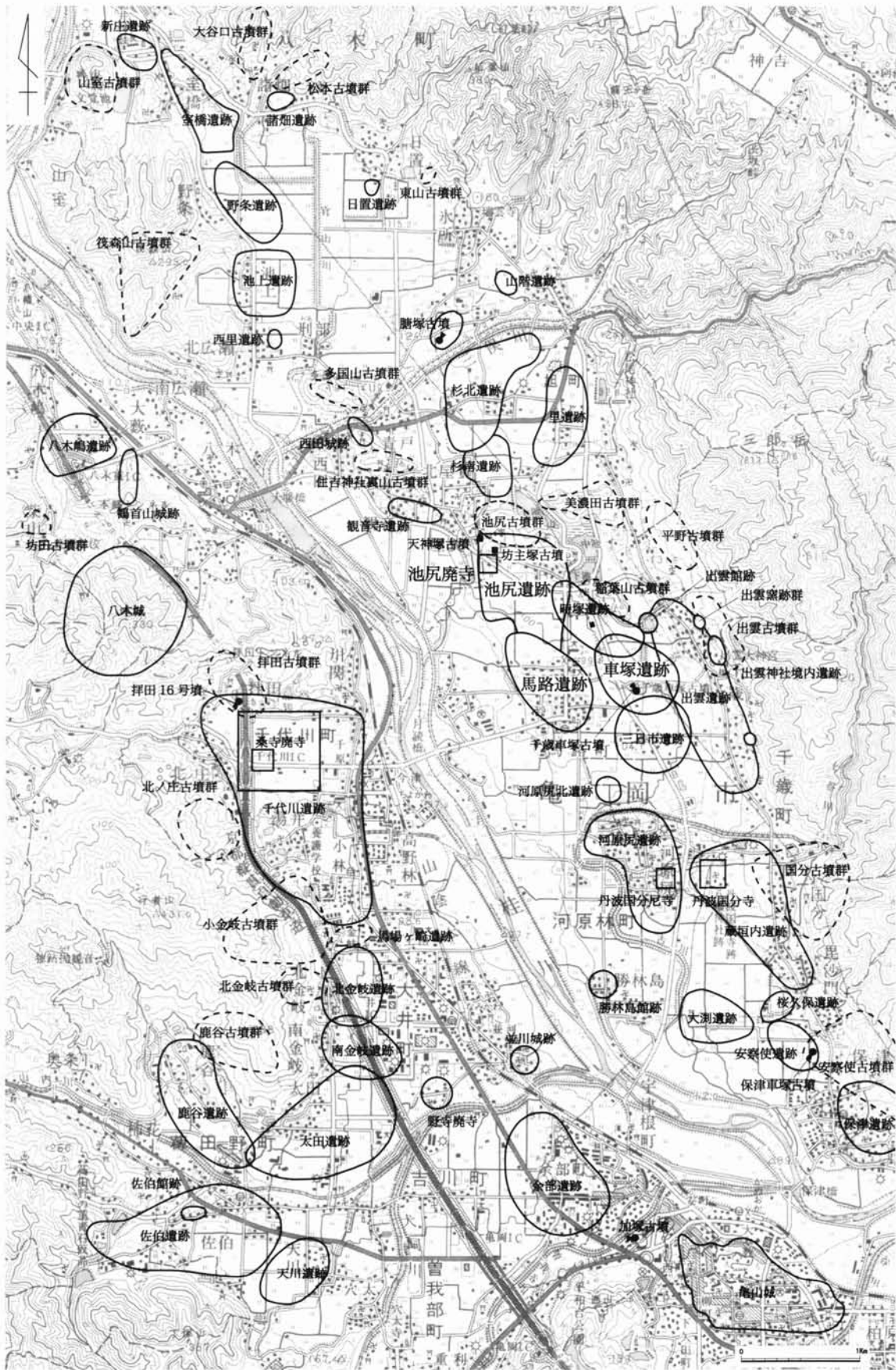
さて、亀岡盆地で最も古い遺物としては、盆地北端部に位置する南丹市池上遺跡^(注2)で後期旧石器時代のナイフ形石器が出土している。これに続く縄文時代草創期のものとして、鹿谷遺跡の槍先形尖頭器や千代川遺跡の有舌尖頭器などがある。

縄文時代には、西岸の千代川遺跡では、早期から晩期にいたるまでの縄文土器や、前期の_状耳飾りなど、晩期まで継続的に遺物がみられる。この他、西岸地域では太田遺跡や北金岐遺跡など土器片が出土している。東岸地域では、亀岡盆地最古の縄文土器が出土した案察使遺跡や、晩期の甕棺が出土した大淵遺跡などがある。また、今回報告する車塚遺跡でも後期の土器資料がまとまって出土している。

弥生時代になると、西岸地域では、前期の環濠集落である太田遺跡や、前期から後期まで継続的に集落を営む千代川遺跡、中期の竪穴式住居跡や方形周溝墓などが検出され余部遺跡・天川遺跡などがある。東岸地域では池尻遺跡で前期の土壙墓などが確認されている。今回報告するものも合わせて中期の方形周溝墓が池尻遺跡・時塚遺跡・馬路遺跡・車塚遺跡などで確認されている。中期から後期にかけて竪穴式住居跡や土坑などが里遺跡・案察使遺跡・時塚遺跡・河原尻遺跡など確認されている。

古墳時代の集落としては、前期の竪穴式住居跡が確認されているのは千代川遺跡のみである。中期から後期にかけて集落としては、西岸地域の鹿谷遺跡・余部遺跡、東岸地域の池上遺跡や里遺跡、今回報告する池尻遺跡などで確認されている。これらの遺跡では竪穴式住居跡が比較的密集して検出されている。

古墳では、前期の古墳として、亀岡盆地と京都市のある山城盆地をつなぐ老ノ坂峠に近い丘陵上で向山古墳が確認されているのみで、前期の古墳はあまりみられない。中期になると、保津山古墳や浄法寺1号墳などの円墳のほか、坊主塚古墳や榊塚古墳などの方墳が築造される。これらは、葺石・埴輪・段築を備えている。これらの大型方墳に続いて中期末から後期初頭には、二重の周溝をもつ全長52mの前方後円墳である保津車塚古墳が築造される。さらに後期前半になると、全長82mの前方後円墳である千歳車塚古墳が築造される。当古墳は、三段築成で、葺石・埴輪・二重の周濠を備え、この時期では丹波地域最大であるとともに、全国的に見ても屈指の規模である。出土した埴輪から後期前半頃と考えられる。一方、西岸地域では、北ノ庄古墳群、拝田古墳



第1図 調査遺跡および周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/50,000京都北西部)

群、小金岐古墳群など横穴式石室を内部主体とする群集墳が数多く造営される。これらのうち、北ノ庄13・14号墳は九州系の横穴式石室をもつ初期の横穴式石室墳で、後期前半に位置づけられる。また、拝田16号墳は全長44mの前方後円墳で石棚を有する横穴式石室を埋葬施設としてもつ。出土遺物はないが、後期前半の古墳と推定される。

古墳時代後期末から飛鳥時代にかけて、南丹市八木嶋遺跡で大型掘立柱建物跡群が確認されている。豪族の居館の可能性も考えられているが、その性格は詳しくは明らかでない。飛鳥時代になると、桑寺廃寺、観音芝廃寺、與能廃寺、池尻廃寺などの古代寺院が確認されている。桑寺廃寺の創建瓦は丹波最古の瓦の一つとされ、また官寺的性格の強い寺院とされる。観音芝廃寺では、類例が少ない掘立柱建物跡の講堂跡が確認されており注目される。桑寺・観音芝・與能の各寺院が西岸地域に位置するのに対して、東岸で確認されているのは池尻廃寺のみである。また、今回報告する馬路遺跡や池尻遺跡、河原尻遺跡など、ここ数年東岸地域では飛鳥時代の竪穴式住居跡が多数見つかり、東岸地域に大規模な集落域が形成されていたことが明らかになっている。

奈良時代には、律令制が整えられ、地方の支配体制も確立していく。その一環として、丹波国は和銅6(713)年に丹後国と分国される。それ以降、丹波国の中心地は亀岡市にあったと考えられている。今回報告する池尻遺跡では初期の丹波国府跡の可能性も考えられる大規模な掘立柱建物跡群が検出されている。このほか、東岸地域では河原尻遺跡・車塚遺跡・時塚遺跡・馬路遺跡などで官衙的な性格をもつ大型の掘立柱建物跡群が検出されている。これに対して西岸地域では奈良時代の集落跡が北金岐遺跡や千代川遺跡などで確認されているに過ぎない。また、東岸地域には丹波国分寺・国分尼寺が建立される。これに関連して三日市遺跡では、国分寺・国分尼寺の創建時の瓦が大量に出土しており、瓦窯群の存在が考えられている。ここ数年の発掘調査で明らかになった奈良時代に関する考古学的な成果や、国分寺・国分尼寺や丹波国一宮である出雲神社などが東岸地域に所在することなどを考えると、奈良時代の亀岡盆地の中心地は東岸地域にあったと考えられる。

平安時代には、千代川遺跡で緑釉陶器や瓦などが出土し、掘立柱建物跡が検出されている。また、遺跡内には「国司牧」、「国守ヶ森」などの地名が残ることから丹波国府の有力な候補地と考えられている。千代川遺跡では、奈良時代の遺構や遺物が少なく、平安時代以降にこれらが増加することから、上記の地名も平安時代以降に国府が所在したことを表すと考えられる。盆地南部の丘陵上に所在する篠窯跡群は、平安時代の須恵器、緑釉陶器、瓦などを大量に生産していた一大生産遺跡群であったことが明らかになっている。

中世以降は、山城が数多く築造されている。また、近世には明智光秀が築造した亀山城がある。^(注3)

(平井耕平)

(1) 池尻^{いけじり}遺跡第7次

1. 調査経過

池尻遺跡は呉弥山南麓に位置する東西800m、南北900mの範囲を有する遺跡である。また遺跡の東辺は時塚遺跡、遺跡の南辺は馬路遺跡と重複している。

調査は大きくD・E地区の2つに分けて実施した。池尻遺跡第7次D地区は京都府亀岡市馬路町池尻高戸・久保前に所在する。遺跡は呉弥山南裾からのびる低位段丘上に位置している。周辺の水田面高から地形を復原すると、近接する池尻廃寺を中心に北西から南にのびる舌状の微高地が復原される。調査地南東には小規模な谷地形が観察され、池尻遺跡第5次調査区や池尻遺跡第7次E地区はちょうど微高地から谷地形への傾斜変換点に立地しているとみられる。また、遺跡の南方は桂川旧河道によると思われる浸食面が観察される。池尻遺跡第12次調査地区はこの段丘面に接する。

周辺部では、過去の調査により、弥生時代前期の遺構群や白鳳寺院とされる池尻廃寺が存在し、また、亀岡市教育委員会と京都府教育委員会が実施している発掘調査により、部分的ではあるが大型掘立柱建物跡が確認されている。池尻遺跡第1次調査は府道新設に伴い実施され、D地区の南東部で大型の掘立柱建物跡とともに飛鳥時代末～奈良時代初頭の漆工房に伴う廃棄土坑が確認されている。また、遺跡北西部には中期の大型方墳である坊主塚・天神塚古墳が存在し、呉弥山には中・後期の古墳群である池尻古墳群が分布している。このように、呉弥山を含むこの地域には弥生時代前期から奈良時代にかけての遺跡・遺構が密に分布する地域であるといえる。

池尻遺跡第7次D地区の発掘調査は亀岡市教育委員会の試掘調査結果を受け、平成17年10月21日より重機による、耕作土・床土の除去作業を開始した。

調査は当初、D1～3・D7トレンチの4か所を対象として実施したが、調査途上で実施された協議により、D4・5、D6、D14トレンチを追加・拡張調査することとなった。また、亀岡市教育委員会により調査が実施されたD10トレンチについても遺跡の性格上、座標の記録が必要と判断されたため、併せて実測図を作成した。

調査の進行に伴い、D1～3・14トレンチを中心に大型掘立柱建物跡の存在が確認され、官衙遺構である可能性が高いものと判断された。この成果を受け、平成16年12月27日に協議を行い、現状での掘削作業中断と埋め戻し保存を実施することが決定した。

平成17年1月5日～1月14日にかけて遺構保存のなされないD7トレンチの遺構完掘・記録作業を、平成17年1月14日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。また、平成17年2月6日には現地説明会を実施し多数の参加者を得ることができた。平成17年2月22日には真砂土を用い、人力での遺構埋め戻し作業を実施し、平成17年2月22日～3月16日の間に遺構を真砂土により埋め戻し、その後重機により床土・掘削土・耕作土を埋め戻し調査を完了した。

池尻遺跡第7次E地区はD地区の南東約200mに位置する。地権者同意の確認できた平成16年



第2図 池尻遺跡第7次・12次調査区位置図および周辺調査状況図(1/4,000)



第3図 D地区トレンチ配置図(1/1,000)

12月5日より重機掘削を開始し、重機掘削の終了後、平成17年1月18日より本格的に人力掘削作業を開始した。

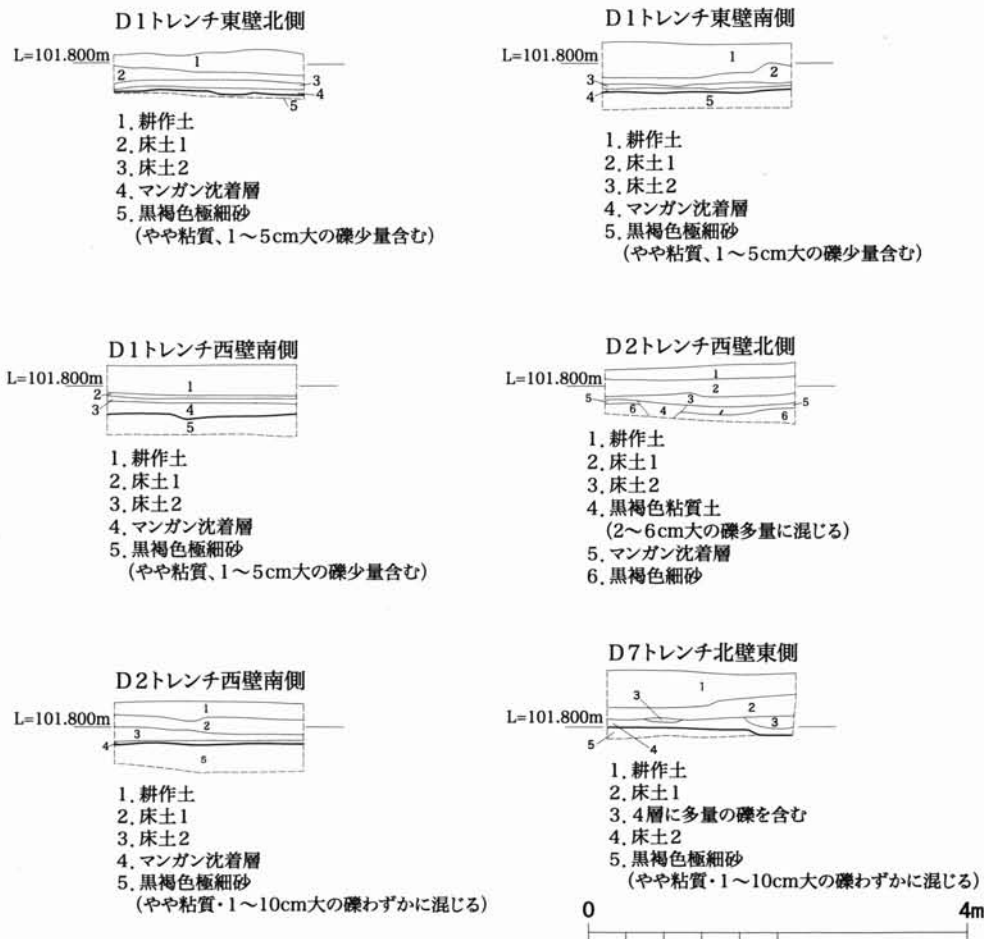
なお、調査を進めるうちに、遺構面として認識した黒ボク層上面では遺構を検出するのに時間を要するものと判断し、全体の調査期間との兼ね合いから、更に下層の礫層上面で遺構検出作業を実施することが現実的であると考え、平成17年2月上旬より遺構未検出部分について再度重機掘削作業を実施した。

遺構掘削作業をほぼ完了し、平成17年2月23日、ヘリコプターによる空中写真撮影を時塚遺跡第10次・車塚遺跡第7次・馬路遺跡第4次とともに実施した。

人力による遺構掘削作業は平成17年2月25日に終了し、平成17年2月27日には時塚遺跡第10次・車塚遺跡第7次・馬路遺跡第7次とともに現地説明会を実施し、約120名の参加者を得た。

平成17年3月1日～平成17年3月4日にかけて遺構の図化作業、部分的な掘削作業を実施し、3月4日、すべての発掘機材を撤収し、現地作業を終了した。

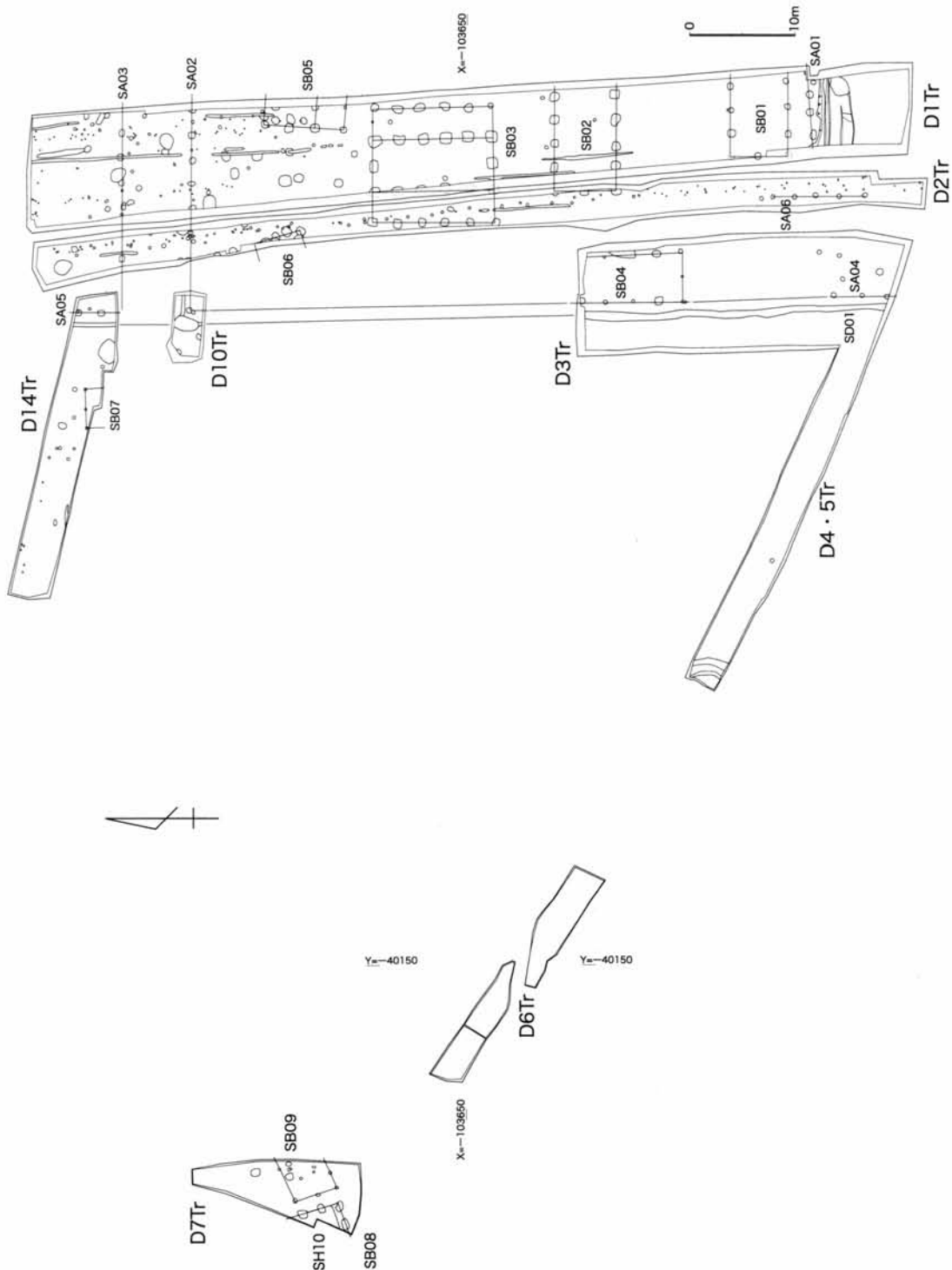
なお、この調査と併せて実施した池尻遺跡第7次F地区は、時塚遺跡に含まれることとなった^(注5)(時塚遺跡第10次J地区)ため詳細は次年度以降「時塚遺跡」として報告することとする。



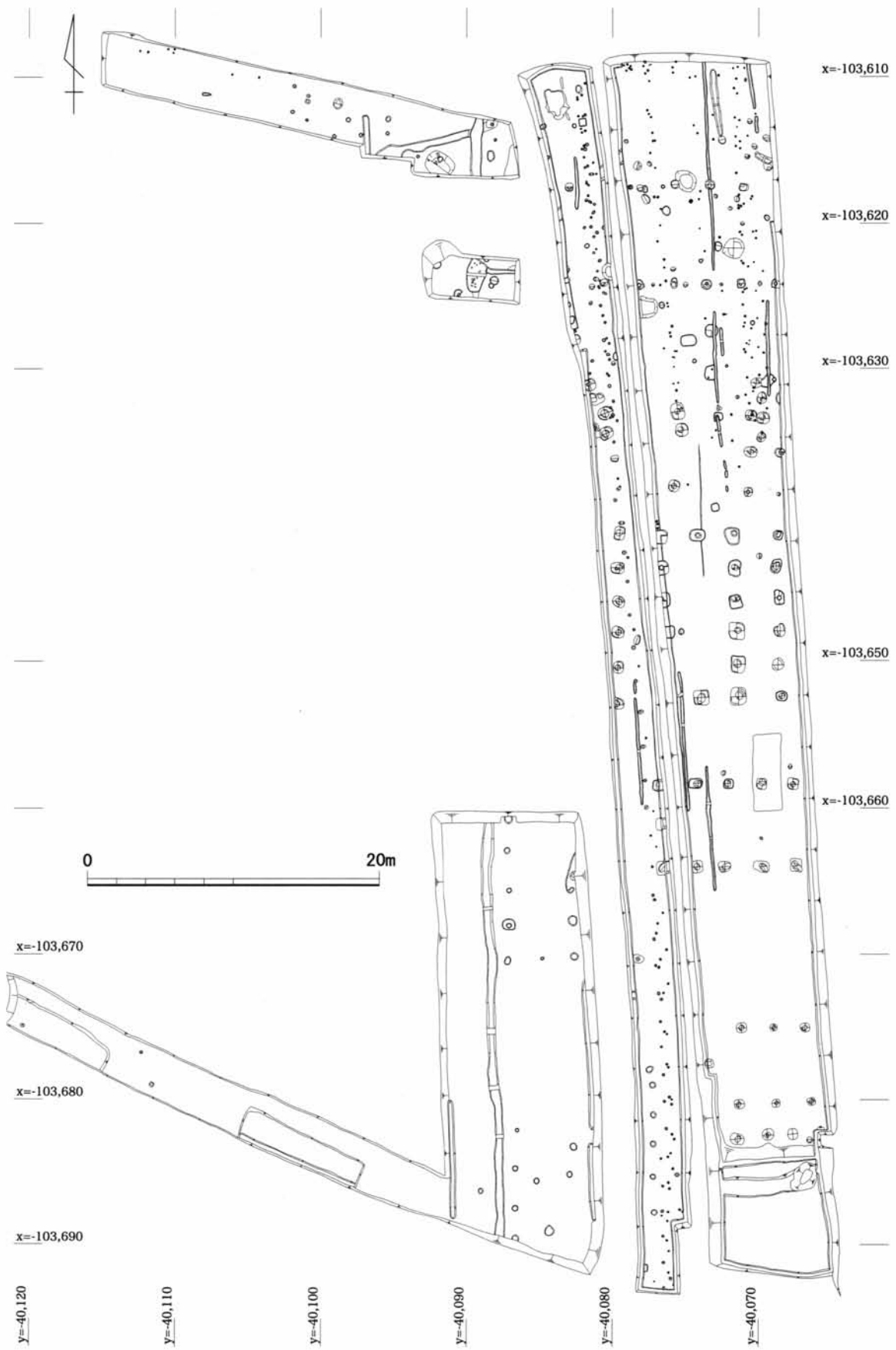
第4図 D地区主要部分土層柱状図(1/80)

2. 池尻遺跡第7次D地区の調査概要

D地区における調査は当初、D1～3・D7トレンチの4か所を対象として実施したが、調査途上で実施された協議により、D4・5・6・14トレンチを追加・拡張調査することとなった。また、亀岡市教育委員会により調査が実施されたD10トレンチについても遺跡の性格上、座標の記録が必要と判断されたため、併せて実測図を作成したため、第3図に示すとおり合計8か所のトレンチの調査を実施することとなった。以下、本調査区の概要について述べることにする。



第5図 D地区検出遺構全体平板測量図



第6図 D1～3・10・14トレンチ検出遺構実測図(空撮図化・1/400)

(1) 基本的層序(第4図)

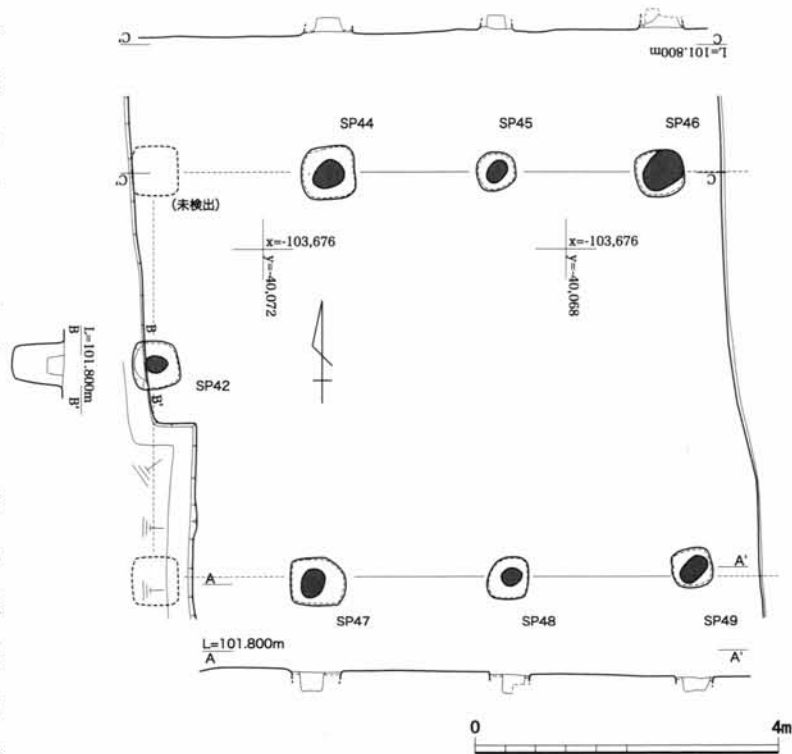
池尻遺跡第7次D地区における基本的な層序は第4図に示すとおりである。耕作土・床土下には、耕作に伴い形成されるマンガン質の沈着層があり、その下部が基本的に遺構面となる。遺構面は黒褐色極細砂層上に相当し、このいわゆる「丹波黒ボク層」上面から奈良時代から中・近世にかけての遺構が掘り込まれているものと判断される。その下層には黄褐色粘質土層が確認され、この面で初めて認識できる遺構の存在も確認している。ただし、これらの遺構も黒褐色極細砂層から掘り込まれている可能性は否定しきれず、亀岡盆地を中心とした丹波地域の遺構検出を困難にしているものといえる。遺構面は概ね北西から南東へむけてゆるやかに傾斜する。また、遺構検出面はD1・D2トレンチがD3トレンチより一段深くなっているが、D1トレンチでは遺物包含層がほとんど形成されておらず、D3・2トレンチでは南端を中心にわずかではあるが遺物包含層が形成されていたことから、D1トレンチは後世の削平を受けているものと判断される。また、D1トレンチ南端部は近代の水田耕作により大きく削平を受け、遺構を検出することはできなかった。

一方、D7トレンチでは黒褐色土の存在を確認することはできず、床土直下が黄褐色砂層の地山面を形成し、この面で飛鳥・奈良時代の遺構を検出した(第23図SH10土層断面参照)。

(2) D1～3・10・14トレンチ検出遺構

池尻遺跡第7次D地区では、D1～3・10・14トレンチを中心に、座標北に主軸をとる掘立柱建物跡群・柵・溝などを検出した。また、これらとは方位を異にする掘立柱建物跡や中世の土坑などを確認している。また、現在の畔と同方向に並ぶ小ピットや、小規模な溝群も併せて確認しているが、これらは埋土が灰褐色粘質土であるという共通性をもち、ピット埋土から江戸時代の染付片が出土していることから近世の耕作に伴う稲木や杭などの遺構群であると考えられる。D4・5、D6トレンチは遺構が希薄であり、D4トレンチでは自然流路と考えられる溝を1条検出したのみである。

最初に述べたとおり、D1～3・10・14トレンチの大部分の遺構は一部を掘削したのみにとどまるため、遺構の形態の詳細や、出土遺物の詳細については不明瞭な部分が多いが、以下、主要な検出遺構



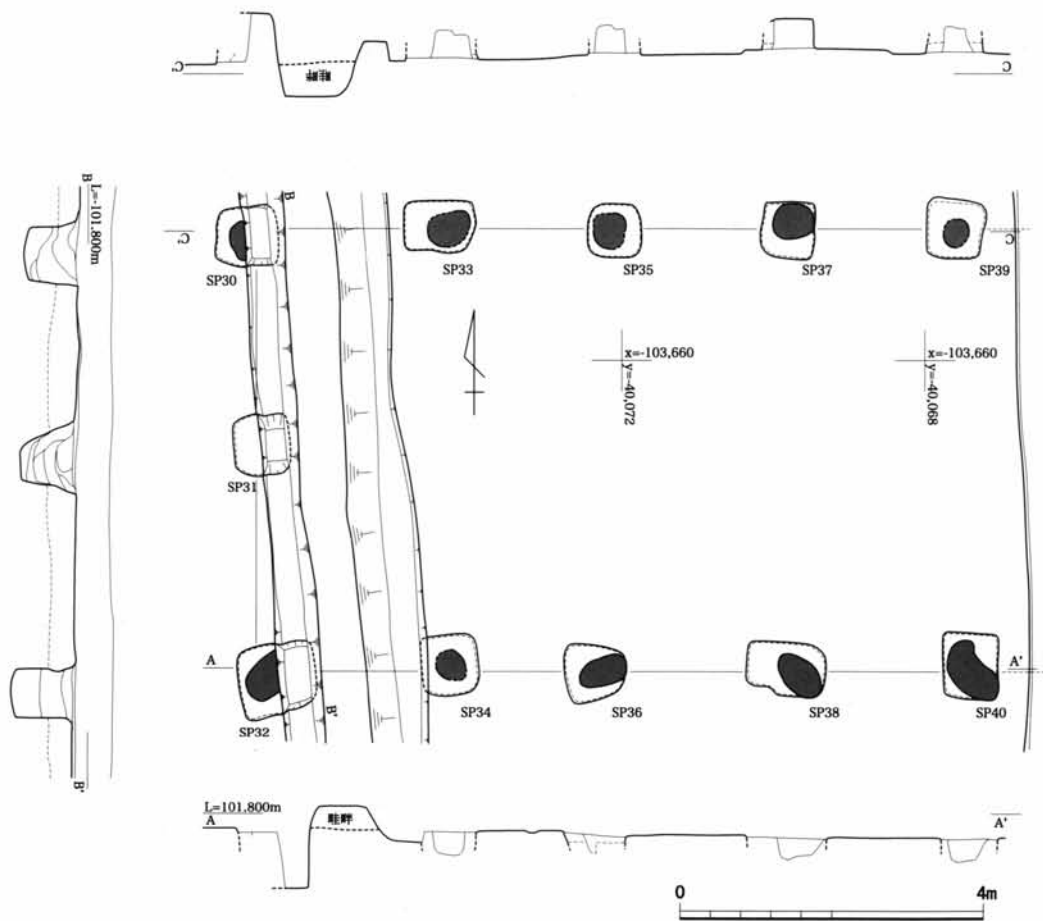
第7図 D地区掘立柱建物跡S B01実測図(1/100)

について概要を記すこととする。

掘立柱建物跡 S B01(第7図) D1 トレンチ南側で検出した真東西に主軸をとる掘立柱建物跡である。桁行4間以上(6.6m以上)、梁行2間(5.3m)を測る。なお、北西隅柱穴については遺構の検出にいたらなかったが、南西隅柱穴については、柱穴推定地点から排水用側溝掘削中に土師器甕片が出土していることからその存在は確実視できる。各柱穴は一辺0.7m前後を測るやや不整形な方形を呈する。また、各柱穴の深さについてはすべてを底まで確認していないが、一部、底まで掘削したものや、排水用側溝内で掘削した柱穴から見て、梁行の柱が深いものと推測される。また、各柱穴からは径25cm以上の柱抜き取り痕とみられる土色の変化が確認されている。

掘立柱建物跡 S B02(第8図) D1・D2 トレンチで検出したS B01の北11mに位置する、真東西に主軸をとる掘立柱建物跡である。桁行5間以上(9.1m以上)、梁行2間(5.8m)を測る。柱穴は一辺0.7~1mを測る方形を呈し、S B01に比して大型である。また、各柱穴の深さについてはすべてを底まで確認していないが、一部、底まで掘削したものや、排水用側溝内で掘削した柱穴から見て、梁行の柱が深いものと推測される。また、各柱穴からは径35cm以上の柱抜き取り痕とみられる土色の変化が確認されている。抜き取り痕埋土は粘質を帯びた土質である。

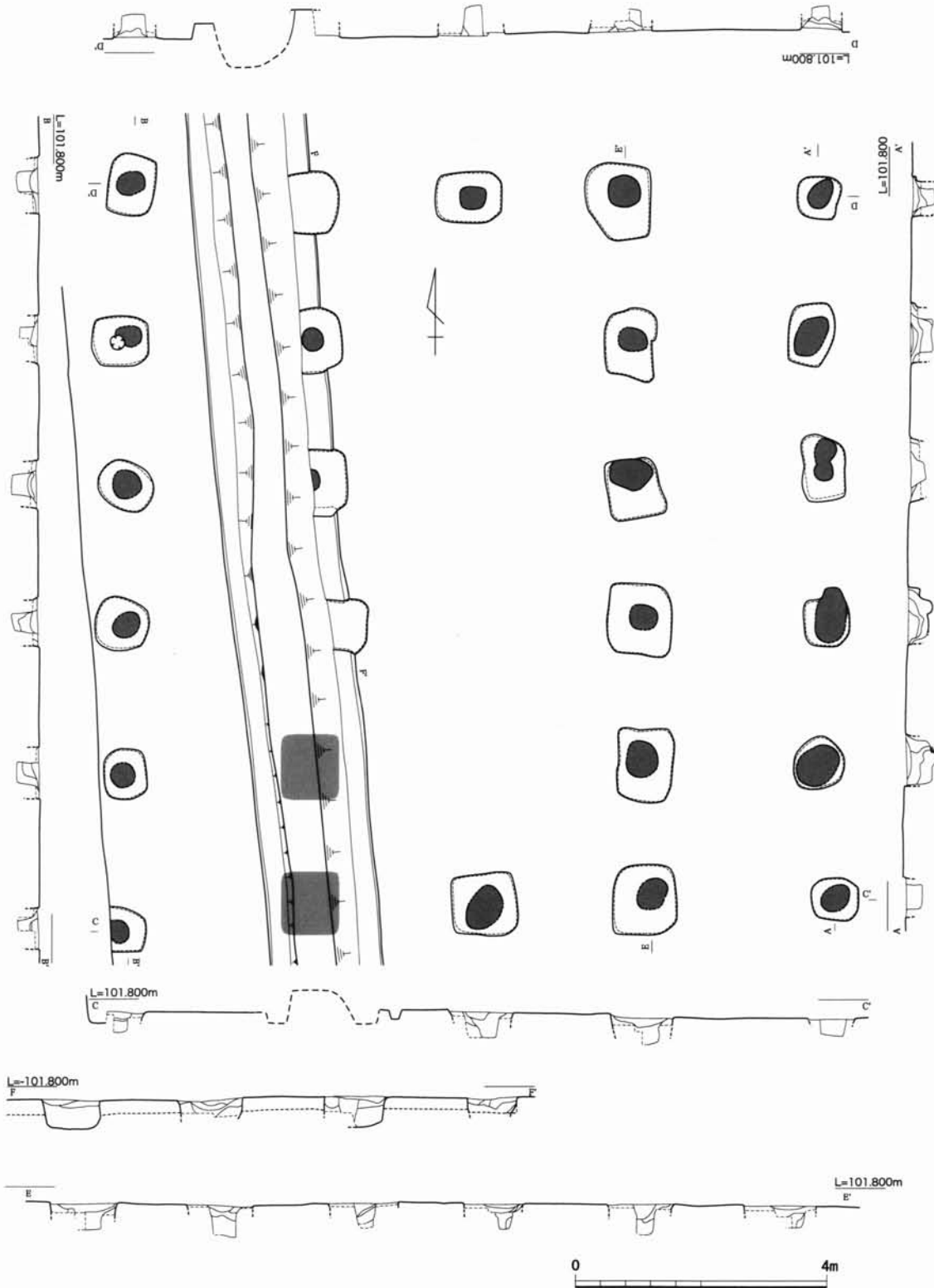
掘立柱建物跡 S B03(第9図) D1・D2 トレンチで検出した桁行5間(11.3m)、梁行2間(5m)の身舎の東西に各1間の庇が付く南北棟の掘立柱建物跡である。主軸は真南北にとる。な



第8図 D地区掘立柱建物跡 S B02実測図(1/100)

お、身舎の南西2か所の柱穴については、現状の畦畔の下部と推定され確認することはできなかった。桁行はほぼ2.2m(7尺)等間であるが、西庇南端のみ2.6m(約8尺)と南北に長い。梁行は身舎が2.5m(8尺)等間、東西庇が3m(10尺)である。

各柱穴は身舎部分が一辺1m前後を測る方形もしくは不正方形を呈する。庇部分は身舎より一



第9図 D地区掘立柱建物跡S B03実測図(1/100)

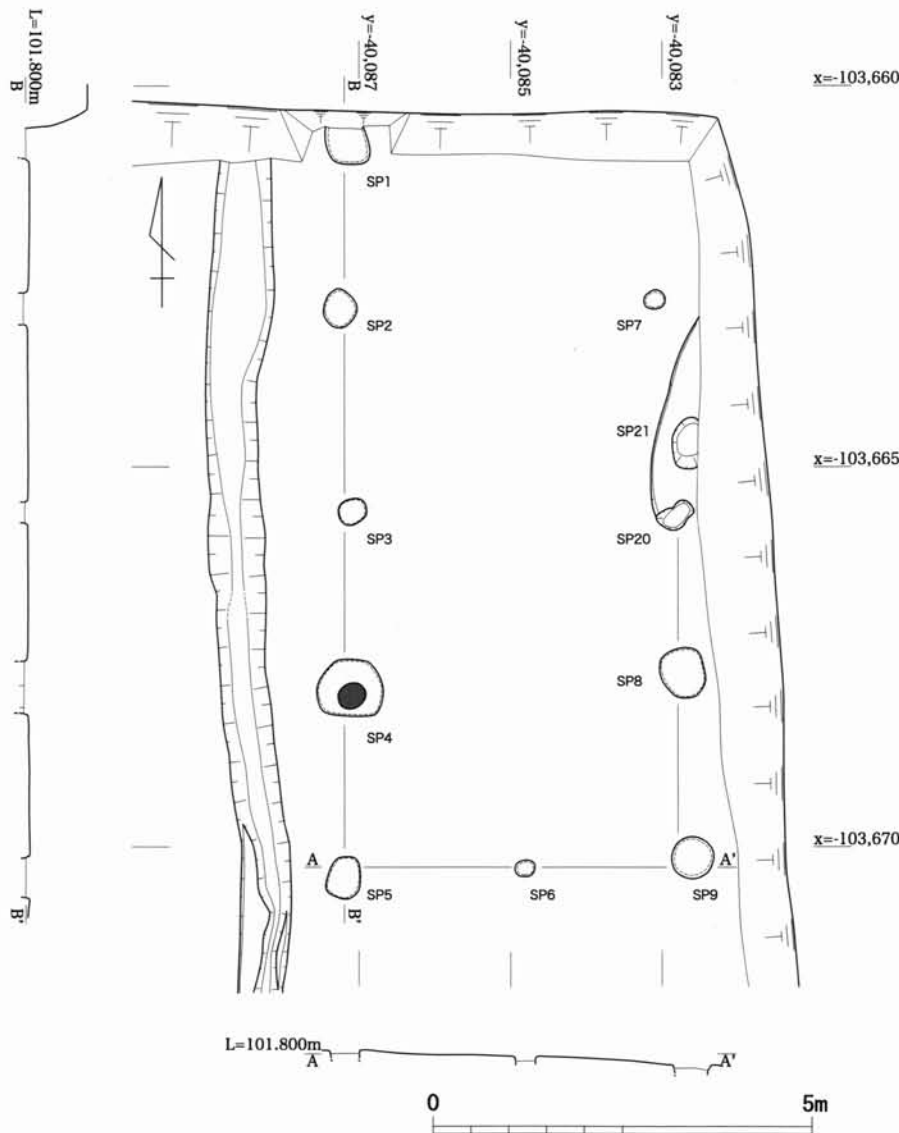
回り小型であり、一辺0.7m前後の方形もしくは不正方形を呈する。底面を確認した柱穴は少ないが、身舎部分のほうで底部分よりわずかに深いものと判断される。身舎では径0.4m以上、庇では径0.3m以上の抜き取り痕を確認した。

遺物は柱穴SP11柱抜き取り痕内より布目瓦(第20図12)、SP28より須恵器杯身片などが出土している。以上の点から、この建物は瓦葺きであった可能性がある。

掘立柱建物跡SB02との位置関係は北に6.0mを測り、西側底部の桁は掘立柱建物跡SB02の西梁より3m西に位置することとなる。

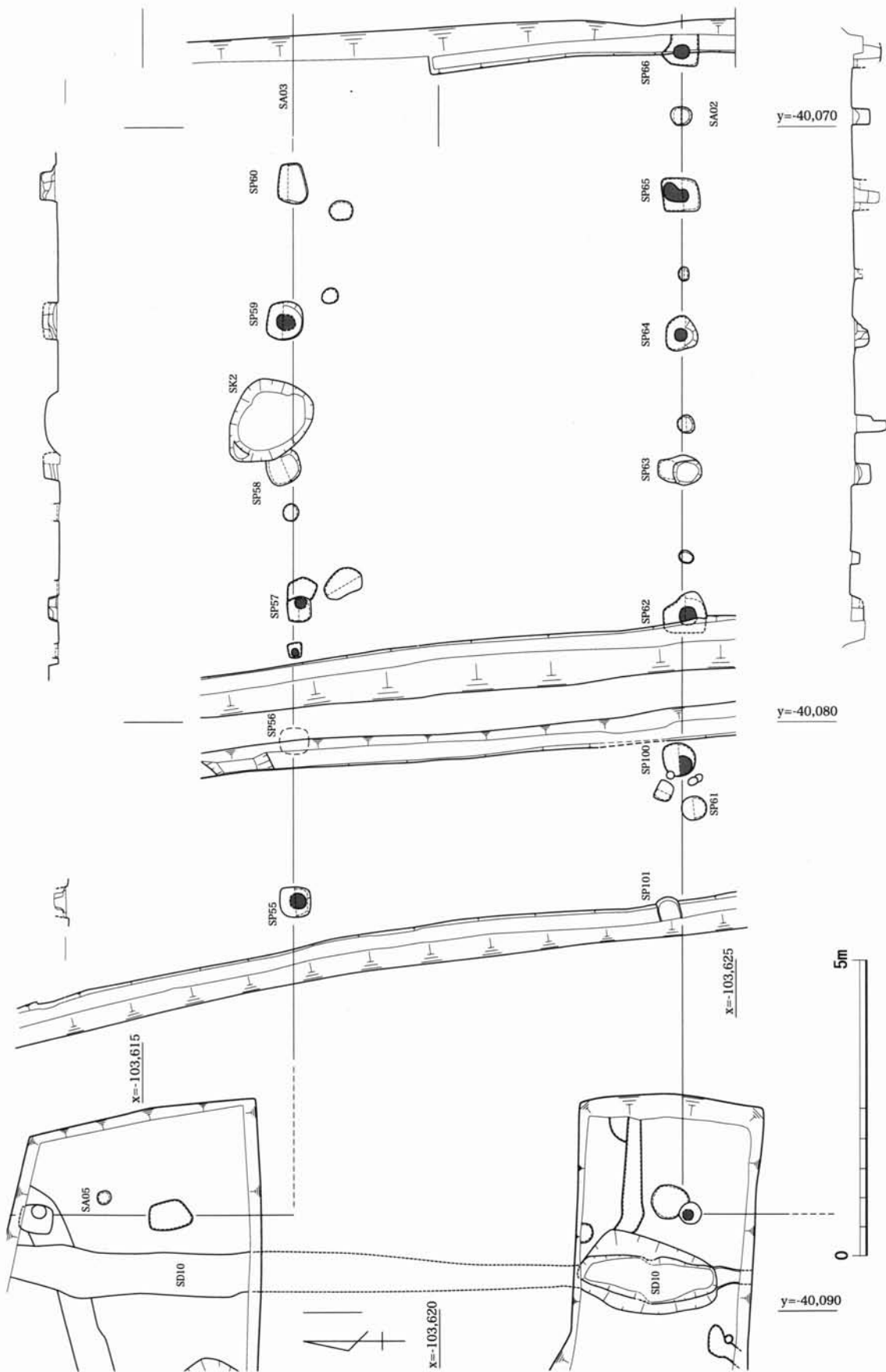
掘立柱建物跡SB04(第10図) D3トレンチで検出した南北棟の掘立柱建物跡である。調査が途中で終了したため、東桁行の北半部については詳細不明である。梁行は2間(4.5m)、桁行は4間(9.7m)以上と推定される。また、後述する柵SA02や、SA04と一体化した建物である可能性がある。

各柱穴は直径0.26~0.88mの円形を呈しており掘立柱建物跡SB01~SB03と比較すると小型である



第10図 D地区掘立柱建物跡SB04実測図(1/100)

柵SA02(第11図) 掘立柱建物跡SB03の北17.1mの地点で検出した真東西方向の柵跡である。推定分を含め8間分を検出した。1間2.2~2.4mを測る。各柱穴は1辺0.5~0.6mの方形もしくは不整形を呈し、深さ0.4~0.5mを測る。また、各柱穴間に径0.2~0.3mの円形ピットが検出されている。このピットは埋土の状況から、近世に属するものではないことは間違いなく、柵

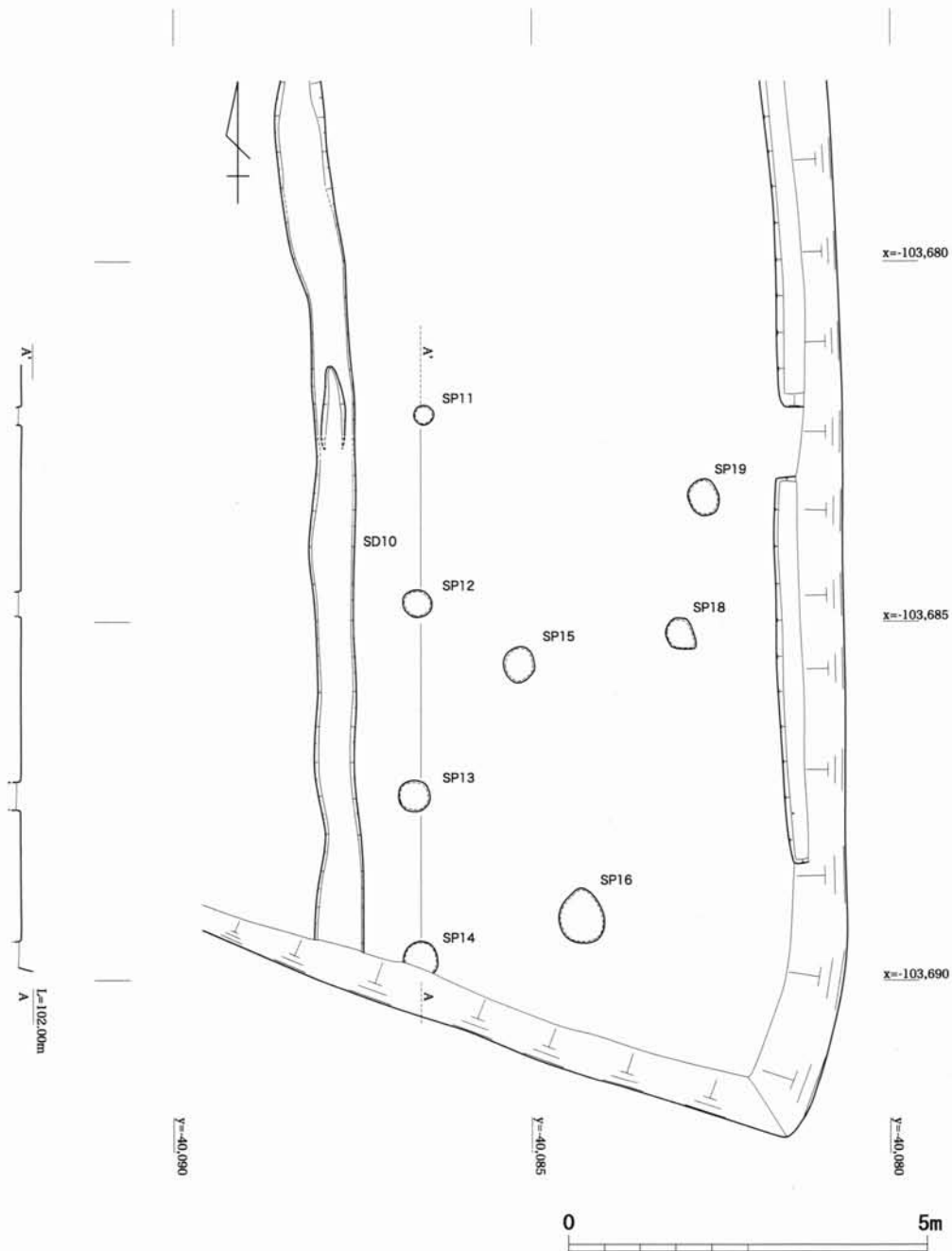


第11図 D地区柵S A02・03・05および土坑SK2実測図(1/100)

S A02を補強するための杭や小規模な柱を設置したものとする。またこの柵は、亀岡市教育委員会の試掘調査の成果から、D10トレンチで南に屈曲し、D3トレンチ掘立柱建物跡S B04西桁やD3トレンチS A04へとつながるものと判断される。

柵S A03(第11図) S A02の北6.5mの地点で確認した新東西方向に主軸をとる柵跡である。調査地内では5間分を確認した。なお、柱穴S P56は排水用側溝断面によりその存在を確認している。推定ではあるが、D14トレンチで確認した柵S A04にとりつくものと思われる。

柵S A05(第11図) D14トレンチで検出した1間分以上の柱穴列である。周囲の状況からさらに南北にのびるものとする。1間約2.5mを測る。両柱穴とも平面は方形プランを呈し、1辺



第12図 D地区柵S A04実測図(1/100)

0.5～0.7mを測る。

柵 S A 04(第12図) D 3 トレンチで検出した。各柱穴は直径0.3～0.5mの円形を呈する。3間分(7.6m)を確認したが、南は調査対象地外となり、北は十分に精査ができていないため詳細は不明である。なお、掘立柱建物跡 S B 04の西桁にとりつく可能性が高いが、この柵と一体と考えられる柵 S A 02の北西隅の柱穴からは東に約1.5m、S B 04西桁からは東に0.6mずれているため、南北方向の柵はわずかに西に振っていた可能性がある。

柵 S A 06(第13図) D 2 トレンチで検出した真南北方向の柵である。4間分(8.8m)を確認した。調査時の所見から南へのびる可能性は低く、北へのびる可能性は否定できない。また、D2トレンチは非常に狭小なトレンチであるため、南北方向の掘立柱建物跡となる可能性も考慮しておく必要がある。

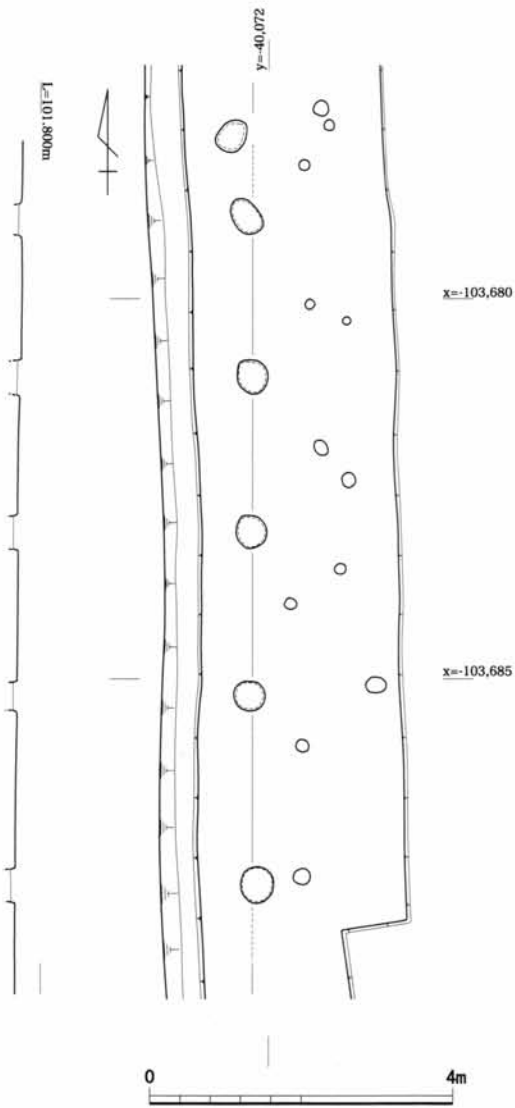
溝 S D 01 D 3・D10・14トレンチで検出した南北方向の素掘溝である。検出分総延長で78mを測る。溝は幅0.5～0.6mを測り、溝底面はほぼ完掘したD 3 トレンチではゆるやかに北から南へむけて傾斜していることを確認した。また、D14トレンチでは土坑状の形態を示し、東へ分岐する幅約0.4mの溝がとりつくことを確認している。出土遺物は少ないが、第20図10・11に示す土師器甕が出土している。

以上の新東西・新南北に主軸をもつ遺構群は、柵並びに溝による圍繞施設と、その内部に配された一連の関連施設と考えられ、柵の状況から2か所の圍繞施設を確認したものと判断する。

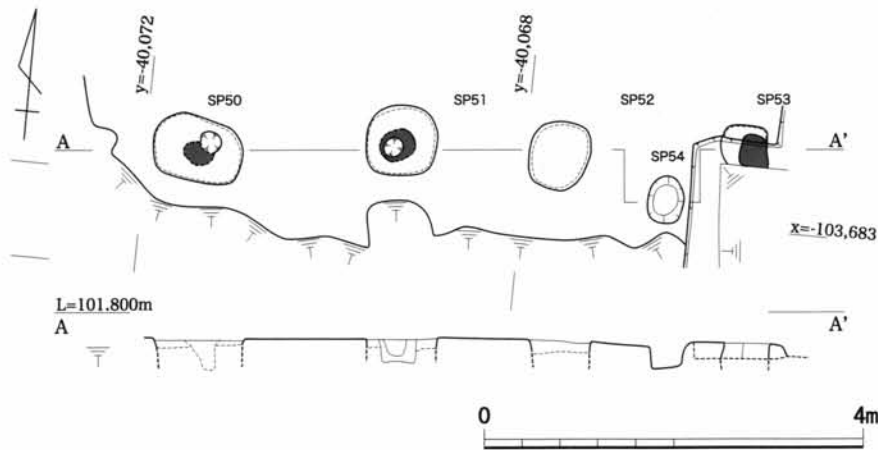
これらの遺構、以外にも、主軸を新南北にとらないものや、中世に属する遺構がある。以下、主要なものについて概観する。

柵 S A 01(第14図) 新東西より主軸をわずかに南に振る柱穴列である。3間分(5.9m)を確認した。各柱穴は1辺0.5～1.1mの方形もしくは不整形を呈し、その内の3基から柱痕もしくは抜き取り痕と思われる土色の変化を確認している。南側が大きく削平されていることや各柱穴の規模から判断して東西方向の掘立柱建物跡の北桁行であるものと思われる。

掘立柱建物跡 S B 05(第15図) D 1 トレンチ北東部で検出した掘立柱建物跡である。大部分が調査区外のため詳細は不明であるが、桁行2間(2m)以上・梁行2間(4.8m)の身舎の南に1間



第13図 D地区柵 S A 06実測図(1/100)

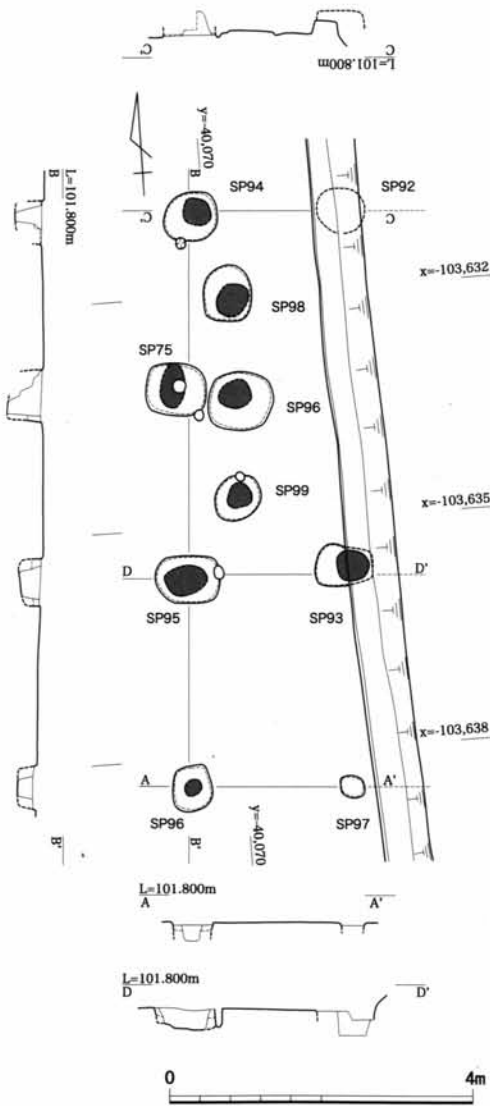


第14図 D地区柵 S A01実測図(1/80)

(2.6m)分の底がつく東西方向に主軸をとる掘立柱建物跡として復原した。また、身舎の内側で確認された3基の南北方向の柱穴もこの建物に関連する柱穴である可能性がある。身舎の柱穴は1辺0.6~0.8mの方形もしくは円形に近い不整形方を呈し、底部分の柱穴は一回り小さい。主軸はN4°Eを測り真南北より東に主軸を振っている。身舎内の3基の柱穴は1辺0.6~0.8mの隅丸方形もしくは不整形方を呈し、2間分(2.7m)が存在することを確認した。

掘立柱建物跡 S B06(大形柱穴群)(第16図) 平板測量図作成段階で掘立柱建物跡として復原できるものと判断し、説明会開催時には掘立柱建物跡 S B06として報告したが1/20平面図作成段階でややまとまりに欠け、各々の柱穴の組み合わせ関係について不明な部分が多いことが判明したため、本概要報告では大形柱穴群として報告するに留めておきたい。なお全体的な遺構の状況から見て、新南北より主軸を西に振る掘立柱建物跡群である可能性が高いものと思われる。

掘立柱建物跡 S B07(第17図) D14トレンチで検出した小規模な掘立柱建物跡もしくは柵である。東西方向の2間分(3.6m)を確認した。各柱穴は直径0.3~0.4m・検出面からの深さ0.1~0.2mを測る。調査区の状況からさらに南に展開するものと判断さ



第15図 D地区掘立柱建物跡 S B05実測図(1/100)

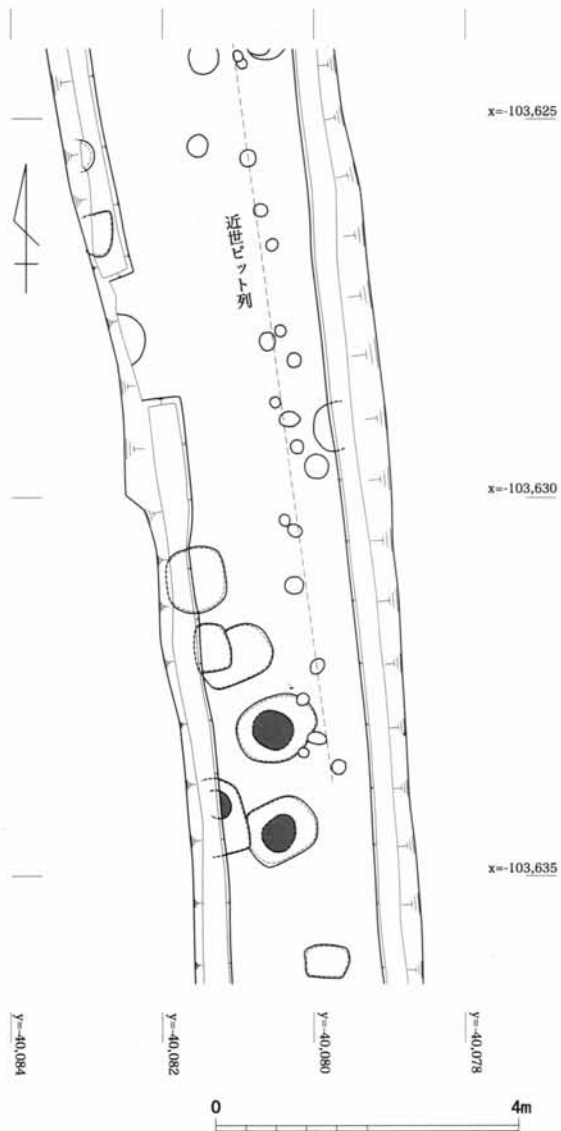
れる。主軸はN4°Wを測り、わずかに西に振る。出土遺物がなく時期については不明であるが、柱穴の規模からみて中世に属する可能性がある。

土坑SK1(第18図) D2トレンチ北端で検出した不整形な土坑である。土坑の規模は南北約2m、東西1.3m、深さ0.12mを測る。また、土坑南半の両側辺には小土坑が掘削されている。土坑底面には南側を中心に炭が厚く堆積しており、焼土の面的な広がりや、焼土塊・火を受けた5~20cm大の角礫が埋土中から確認され、この土坑で火を用いた何らかの行為がなされていたものと判断されるが、壁面にはほとんど酸化還元した痕跡が認められない。

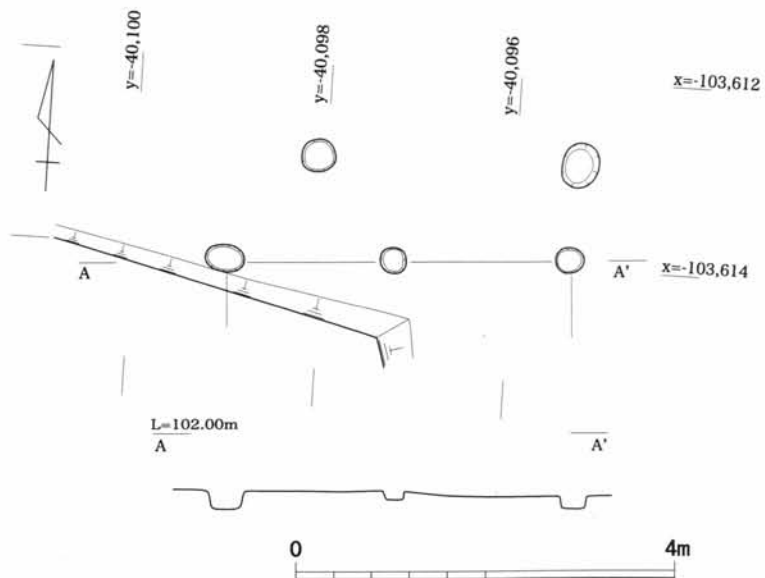
土坑埋土中からは瓦器碗(第20図13~15)のほか南東側の小土坑内から鉄釘と思われる棒状鉄製品(第20図16)が出土している。

鉄製品が出土していることから鍛冶関連遺構の可能性を考え、採取した土壌を一部洗浄したが鉄滓・鍛造剥片・湯玉などは確認されず、鉄器生産との関連性は認められないものと判断した。

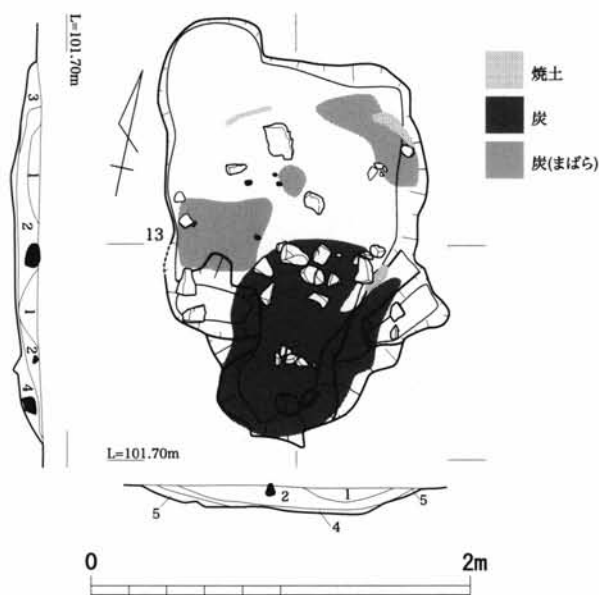
土坑SK2(第11図) D1トレンチ北部で確認した柵SA03を切る長軸1.6m、短軸1.2m、検出面からの深さ0.2mを測る楕円形の土坑である。底面は浅い碗状を呈している。土坑SK01とは異なり埋土は単層で炭や焼土などの痕跡は認められなかった。埋土中から瓦器や土師皿の小片が出土しておりSK01と同じく鎌倉時



第16図 D地区大形柱穴群S B 06実測図(1/100)



第17図 D地区掘立柱建物跡S B 07実測図(1/80)



1. 暗オリーブ褐色極細砂(やや粘質、褐色極細砂ブロック・炭含む)
2. 暗褐色極細砂(やや粘質、炭・焼土含む)
3. 暗灰黄色極細砂(炭含む)
4. 炭層(炭の密度大・わずかに焼土含む)
5. 灰色極細砂

第18図 D地区土坑SK1実測図(1/40)

(3) D1～3・10・14トレンチ出土遺物(第20・21図)

池尻遺跡第7次D地区の出土遺物は遺構完掘作業を実施していないことや大部分の包含層が削平されていることもあり、D7トレンチ出土遺物と併せても総量で普通形コンテナ2箱程度と極少量である。その大部分は包含層出土遺物である。

1～19は遺構出土遺物、20～60は包含層出土遺物である。基本的に全容の判明する個体はほとんどなく、口径すら求められない小片であるが、遺構の時期を示すものとして図化している。

1は近世小ピットSP88から出土した須恵器杯蓋小片である。笠型の天井部から端部を下方に屈曲させる。

2・12は掘立柱建物跡SB03に伴うものである。2は柱穴SP28掘形埋土より出土した須恵器杯身小片である。12は柱穴SP11の柱抜き取り痕内から出土した平瓦片である。凸面には斜格子タタキが施され、凹面側には細かい布目がみられる。焼成は軟質で淡灰白色を呈する。同様のものが池尻廃寺から出土している。

3は掘立柱建物跡SB02の柱穴SP36掘削中に出土した須恵器杯身小片である。2に比してやや小法量かと思われる。

4・6はD3トレンチSP16から出土している。直接建物を構成するピットではないが出土遺物としては時期の判断の可能なものである。4は体部のやや丸みを帯びた須恵器杯身小片である。6は底部のみの須恵器杯身である。高台は杯底部のやや内側に付され、内端面にて接地する。

5はD1トレンチ柵SA01を構成する柱穴SP52掘形埋土内から出土した須恵器杯身小片である。掘立柱建物跡SB02・03出土の須恵器杯に比してやや直線的な印象を受ける。

代の遺構と考える。

下層方形周溝墓群(第19図) 精査が進行し、黒褐色土を取り除いた段階で確認される土色変化から方形周溝墓の存在を確認した。なお、精査が十分に進んでいない地点ではその存在については不明と言わざるを得ない。今回の調査ではD1トレンチ南端で、4基の存在を確認した。長軸6m前後、短軸5m前後を測る。これら方形周溝墓に確実に伴うと考えられる遺物はないが、D2トレンチの排水用側溝掘削中に出土した弥生土器甕底部(第20図34)が方形周溝墓群の帰属時期を決定する資料である可能性が高い。この土器から判断するならばこれらの方角周溝墓群は中期に属するものと考えることができよう。

7は柵跡SA2を構成する柱穴SP64から出土した須恵器杯身底部片である。やや大形の法量になるものと推定され、高台は内端面で接地する。

8は土坑SK91から出土した土師器甕である。小形品であり口縁は直線的に短く立ち上がり、体部は球形を呈する。

9は近世小ピットSP78から出土した土師器皿である。口縁部がやや厚みを帯びる。

10・11はD3トレンチ溝SD01埋土南半から出土した。10土師器甕である口縁が大きく横方向に外反し、口縁端下半を強くなで上げる。調整は口縁外面に横方向、体部外面に縦方向のハケメが観察される。11は土師器鉢である。大きく横方向に外反する口縁を有する。調整は体部から口縁部外面にかけて縦方向のハケメ、口縁内面には横方向のハケが施される。

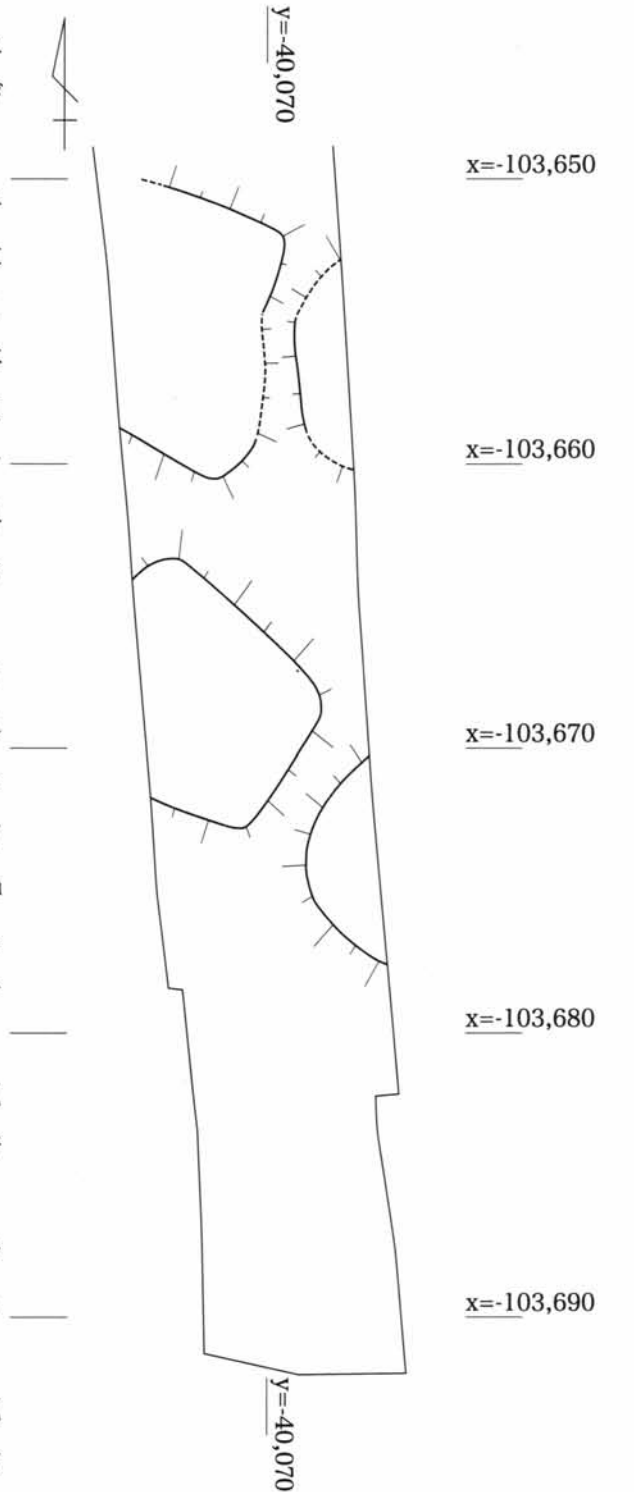
13～16はD2トレンチの焼土坑SK1より出土した。13～15は瓦器椀であるいずれも器壁の磨耗が著しい。高台は低く扁平な断面三角形を呈する。13・14は外面に横方向のミガキが観察される。16は全長6.3cmを測る鉄釘と思われる棒状鉄製品である。先端はやや細く断面方形を呈する。もう一端は楕円形を呈する。

17は近世小ピットSP84から出土した瓦器椀である。器壁は薄く、高台は扁平な断面三角形を呈する。

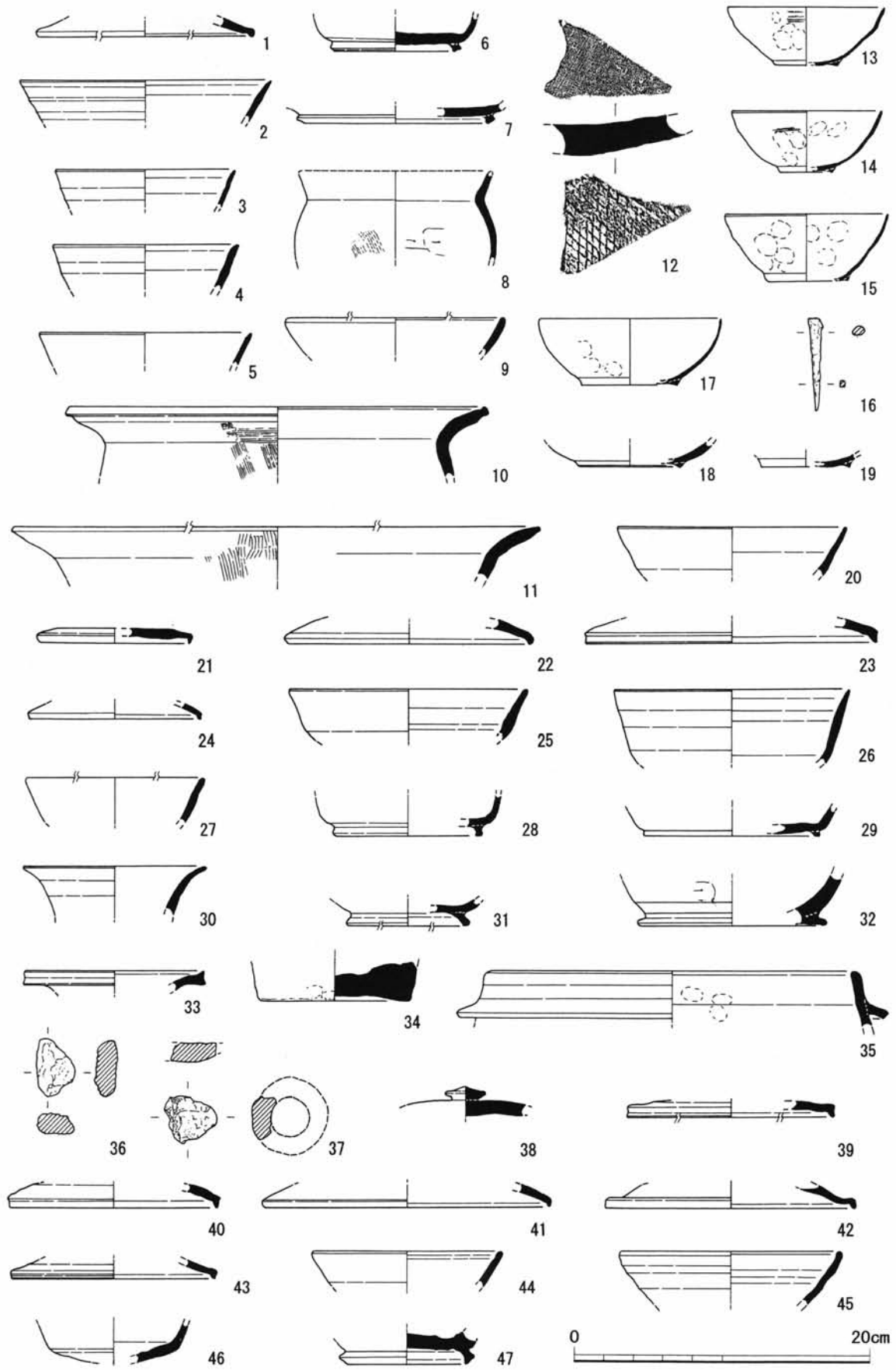
18は素掘溝SD68から出土した瓦器椀である。扁平な断面三角形を呈する高台をもつ。

19は近世小ピットSP81から出土した瓦器椀である。扁平な断面三角形を呈する高台をもつ。

20・21はD1トレンチ包含層から出土した。20は須恵器杯身小片である。わずかに



第19図 D1トレンチ下層方形周溝墓検出状況平板測量図

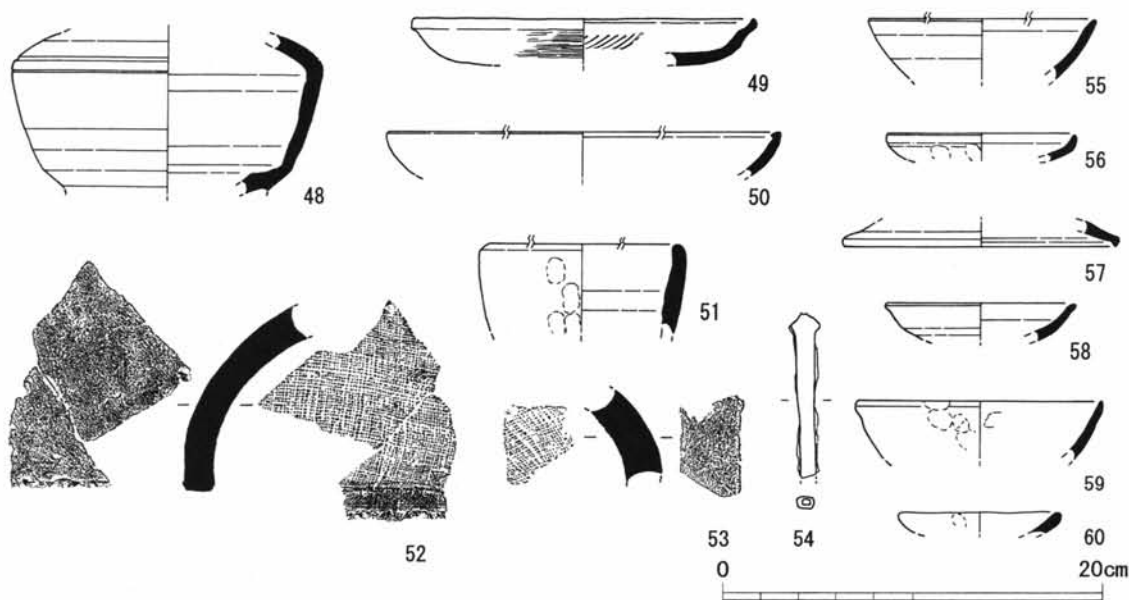


第20図 D1~3トレンチ出土遺物実測図

丸みを帯びた体部をもつ。21は須恵器杯蓋である。口径は小さく、扁平な天井部に短く内側に垂下する口縁部を有する。

22～33・35～37はD 2 トレンチ包含層から出土した。包含層はD 2 トレンチでも南東隅にのみ認められ、大部分の遺物はここから出土している。22～24は須恵器杯蓋である。法量に差異はあるもののいずれも低い笠型の天井部から口縁を下方に屈曲させる。25～29は須恵器杯身である。25・27はやや丸みを帯びた体部をもち、26は深手のプロポーションを呈する。28・29は底部である両者とも高台は底部のやや内側に付される。30・33は須恵器壺口縁である。30の口縁は頸部からなめらかに外反し、端部は丸みを帯びる。33は横方向に外反する口縁部に上方に拡張した端部をもつ。31は土師器脚杯皿と思われる小片である。やや内湾し丸みを帯びた端部を有する高台をもつ。色調は赤褐色を呈する精製品である。32は土師器壺と思われる。底部には外方に拡張する高台を貼り付ける。35は瓦器羽釜である。内傾する口縁にやや垂下する鏝をもつ。36は不整形な鉄片である。完成品や、鉄器の一部というよりは鍛冶に使用される鉄素材である可能性が高い。37はフイゴ羽口片である。34はD 2 トレンチの排水用側溝掘削中に出土した弥生土器甕底部である。厚手のつくりであり底部はわずかに上げ底気味となる。D 1 トレンチで確認した方形周溝墓群に伴うものである可能性が高い。

38～54はD 3 トレンチ包含層から出土した。38～43は須恵器杯蓋である。38は扁平な宝珠つまみをもつ。39は扁平な天井部に短く垂下する口縁をもつ。40～41・43は笠型の天井部に短く垂下する口縁部を付す。42は高く丸みを帯びた天井部から口縁部にかけてわずかに面をもつ。口縁端部は下方に屈曲させる。44～46は須恵器杯身である。44はやや丸みを帯びた体部をもつ。45は椀形のプロポーションを呈し、体部外面に回転ナデによる段が多数形成される。46は高台をもたないタイプである。47・48は須恵器壺である。47は底部片である。断面台形で内端面で接地する高台をもつ。48は長頸壺体部と考えられる。やや扁平なプロポーションを呈し、肩部に1条の沈線



第21図 D 1～3・10・14トレンチ出土遺物実測図

を付す。49・50は土師器皿である。49は口縁を内湾気味に屈曲させる。内面に放射状暗文が施される。50は内湾する体部に内側に肥厚させる口縁をもつ。両者とも色調が赤褐色を呈する精製品である。51は製塩土器と考えられる小片である。外面に指頭圧痕が観察される。胎土は砂礫を多く含む粗いものである。52・53は丸瓦である。内面は布目がのこり外面はナデにより仕上げられる。両者とも焼成状況は硬質である。54は全長8.5cmを測る鉄釘である。

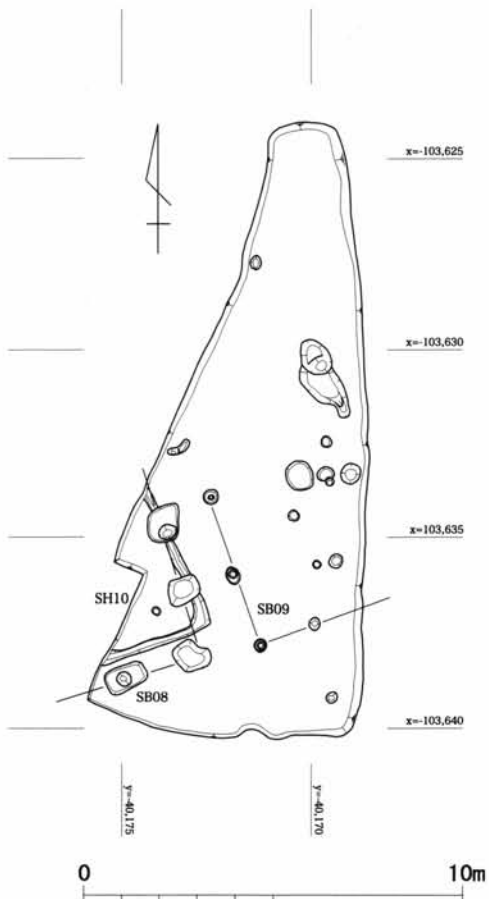
55・56はD10トレンチ包含層出土遺物である。55は須恵器杯である。丸みを帯びた体部をもち、口縁はわずかに肥厚した後端部をやや鋭利に仕上げる。56は土師器皿である。浅く扁平なプロローションを呈し、口縁は上方につまみ上げることにより整形する。

57～60はD14トレンチ包含層から出土している。57は須恵器杯蓋である。笠型の天井部に短く垂下する口縁を付する。58は緑釉陶器皿である。浅く口径は小さい。色調は淡黄緑色を呈する。59は瓦器碗である。体部はやや厚手である。60は土師器皿である。器壁は厚い。

(4) D7トレンチ検出遺構

D7トレンチでは主軸を東に振る掘立柱建物跡2棟、竪穴式住居跡1基を検出した(第22図)。先述のとおりこのトレンチでは包含層・黒褐色土層が形成されておらず黄褐色砂層の地山面ですべての遺構を検出した。

掘立柱建物跡 S B08(第23図) トレンチ南西部で検出した主軸を西に振る(N25°W)掘立柱建物跡である。竪穴式住居跡 S H10を切る。南北2間(3.5m)以上、東西1間(2.2m)以上の規模を有するが、



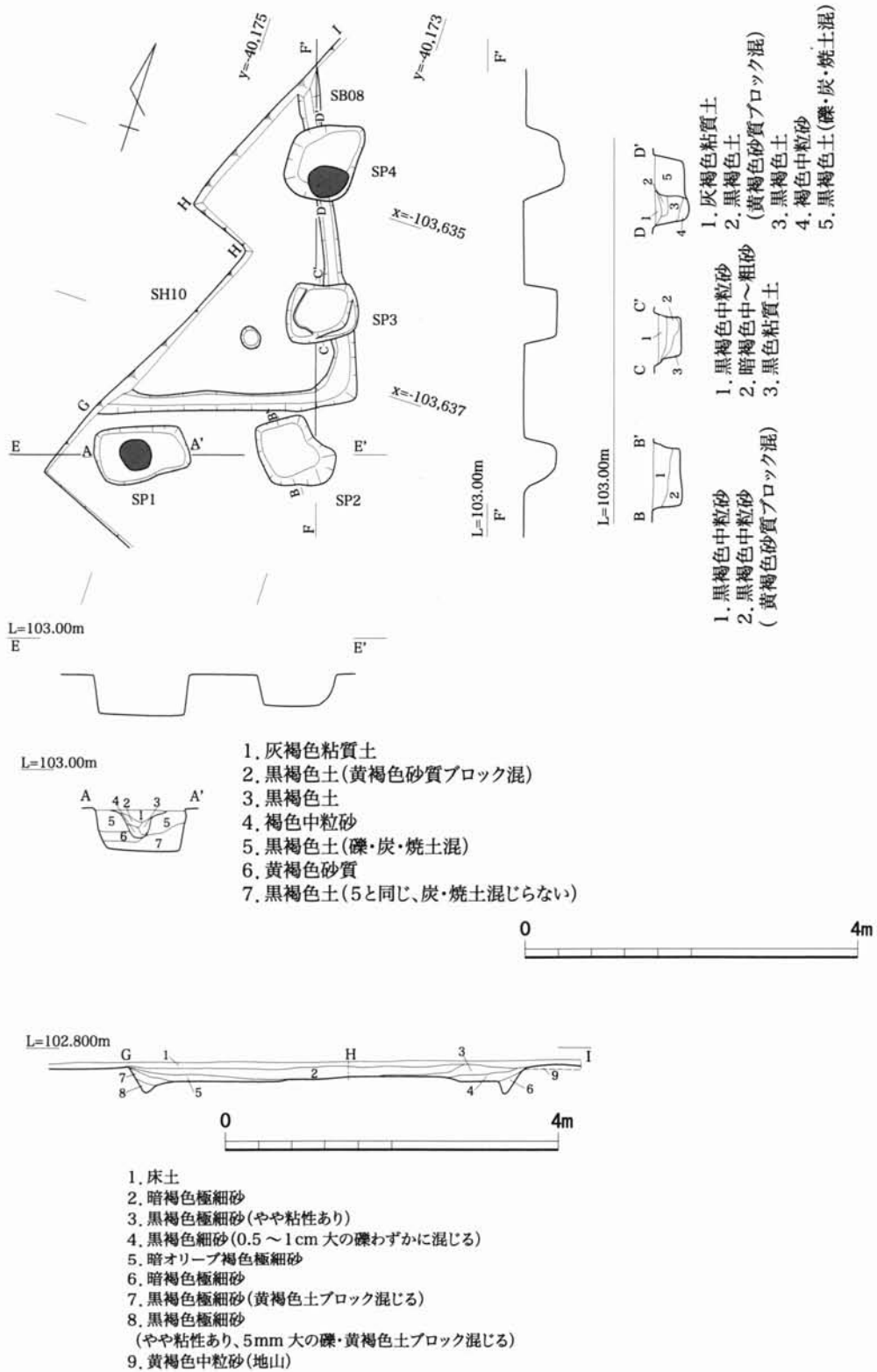
大部分が調査区外であり東西棟建物か南北棟建物であるか判断できない。

各柱穴は1辺0.8m前後の長方形もしくは不整形であり、検出面からの深さ0.3m前後を図る。柱痕の確認されたものから直径約30cm程度の柱材が使用されていたものと判断される。また、柱穴 S P 4 の柱裏込め埋土からは焼土・炭などが確認されている。柱痕内からはほとんど焼土・炭が検出されていないことからみて、掘立柱建物跡建造時に整地などを行った可能性も考えられる。遺物は柱穴 S P 1 から須恵器杯身片(第25図62)、柱穴 S P 4 掘形埋土から須恵器杯身(第25図63)、土師器高杯片(第25図64)が出土している。これらの遺物からこの建物は奈良時代初頭に属するものとする。

竪穴式住居跡 S H10(第23図) 掘立柱建物跡 S B08 に切られる竪穴式住居跡である。大部分が調査区外のため全容は不明である。規模は南北4m以上、東西3m以上、検出面から床面までの深さ0.15mを測る。主

第22図 D7トレンチ検出遺構実測図 (空撮図化・1/200)

軸は掘立柱建物跡S B08に比して若干西に振る。この竪穴式住居跡に伴う施設として、周壁溝と小ピットを検出した。周壁溝は幅約20cm、住居床面からの深さ約15cmを測り、検出した部分では完周している。小ピットは床面南東で確認され直径25cm・深さ4cmを測る。規模からみて支柱穴とは考えられない。住居に伴う遺物として、南側周壁溝埋土上面(第23図7層)から陶硯(第25図



第23図 D地区掘立柱建物跡S B08・竪穴式住居跡S H10実測図(1/80)

61)が出土している。この陶硯以外には土師器・須恵器の小片すら検出することはできず、一般の居住用竪穴式住居跡とは性格を異にする可能性がある。

掘立柱建物跡 S B 09(第24図) 掘立柱建物跡 S B 08の東に位置する。主軸はN19°Wを測り、掘立柱建物跡 S B 08に比べて若干西に振る。南北2間(4.1m)以上、東西1間(1.5m)以上を測る。

各柱穴は直径0.3m前後の円形もしくは不整円形を呈する。南西隅の柱穴は特に深く掘削される。遺物は検出することができなかった。柱痕は最大径0.2mを測る。

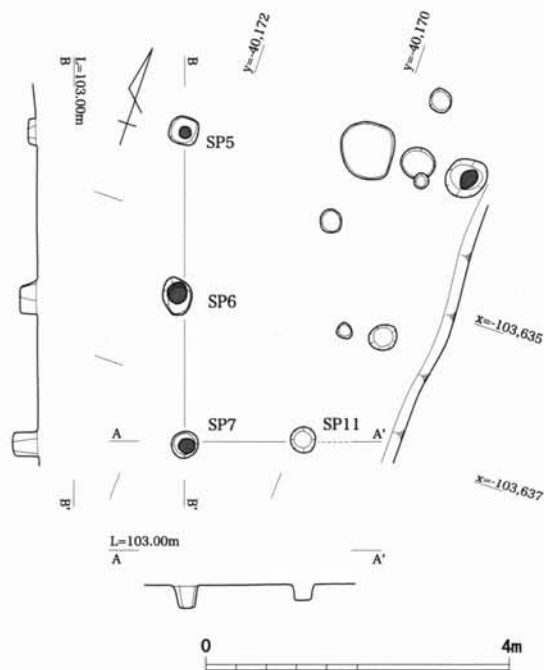
(5) D 7 トレンチ出土遺物(第25図)

D 7 トレンチ出土遺物には掘立柱建物跡 S B 08に伴うものと、竪穴式住居跡 S H 10に伴うものがある。

61は竪穴式住居跡 S H 10から出土した須恵器陶硯である。高杯形円面硯とされるものであり、硯面は凸形を呈し、陸と海の高差が0.9cmと大きい。脚部は欠損しているため詳細は不明であるが、長方形スカシが密に施されるものと考えられる。残存高2.15cm、硯部径9.0cmを測る。また、硯面に自然釉の付着が認められる。墨痕や明瞭な研磨痕は認められない。このタイプの陶硯については杉本宏氏の^(注7)論考がある。氏の論考からみて飛鳥時代前半代に所属時期を求めて良いものと思われる。この年代観は後述する掘立柱建物跡 S B 08出土土器に先行し、遺構の切り合い関係から求められる年代観と矛盾するものではない。

62は掘立柱建物跡 S B 08を構成する柱穴 S P 1 から出土した須恵器杯身である。63・64は同じく掘立柱建物跡 S B 08を構成する柱穴 S P 4 の裏込め土内から出土した。63は須恵器杯身である口径に比して器高の低いプロポーションを呈し、底部から体部にかけては丸みを帯びる。高台は底部のやや内側に付され、内端面で接地する。64は土師器大形高杯の杯部片である。浅く直線的

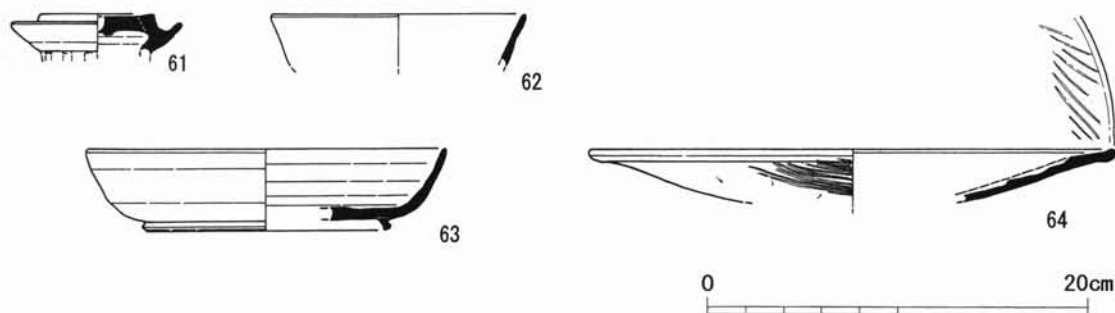
な体部にやや受け口状に屈曲させる口縁をもつ。内外面に暗文を施す。外面の調整は不定方向のケズリにより行われている。色調は暗赤褐色を呈する精製品である。飛鳥時代末～奈良時代初頭のものと考える。



第24図 D地区掘立柱建物跡 S B 09実測図(1/80)

3. 池尻遺跡第7次E地区の調査概要

池尻遺跡第7次E地区からは、弥生時代中期初頭の方形周溝墓群並びに奈良時代から中世にかけてのピット群が検出された。調査経過で述べたとおり黒ボク層上面で十分な遺構検出作業を実施できておらず、またピット群についてもさまざまな角度から掘立柱建物跡の復原を試みたが確実なまとまりを見いだすことはできなかった。



第25図 D7トレンチ出土遺物実測図

なお、各方形周溝墓の規模については後述するように周溝が完周せず、各々独立した土坑状を呈しているため、従来のように溝と溝の心々間距離を求めることは困難であり、これらの溝により区画された平坦面の規模について記載することとする。

(1) 基本的層序

池尻遺跡第7次E地区の基本的な層序は、トレンチ外にのびる方形周溝墓の土層図に示すとおり、耕作土の下部に床土が形成され、その直下が黒褐色粘質土層の遺構面となる。またトレンチ西側は近・現代の耕作に伴う造成で若干の削平を受けている。黒褐色粘質土層のさらに下層には河川などの堆積層とおもわれる黄褐色粗砂礫層が形成されており、各方形周溝墓の周溝はこの層まで掘り込まれている。遺構面はおおむね北西から南東方向にむけてゆるやかに傾斜している。

(2) 検出遺構(第26図)

1) 弥生時代

現地作業の行程上で確認された周溝墓については検出順に番号を付した。その結果、1号墓～9号墓の計9基の方形周溝墓を検出することができた。以下、各方形周溝墓について遺構と出土遺物について概観する。

1号墓(第27図) 調査地中央で検出した方形周溝墓である。墳丘上の埋葬施設は検出できなかった。各溝は連結せず独立した土坑状を呈する。各溝は北溝・東溝が深く、細長いのに対し、西溝は幅の広い深い土坑状を呈し、さらに南側が一段深く掘削されている。また、南溝は小形で浅い土坑状を呈するなどその形態に差異が認められる。

各溝の規模は北溝が幅2.0m、長さ9.2m、深さ0.9m、東溝が幅2.5m、長さ6.9m、深さ1.1m、南溝が幅1.08m、長さ2.3m、深さ0.5m、西溝が幅2.8m、長さ4.3m、深さ1.22m(上段で1.0m)をそれぞれ測り、これらの溝から区画される平坦面は東西9m、南北7mを測る東西方向に長軸をもつ長方形に復原される。墳丘の主軸はN37°Wを測る。

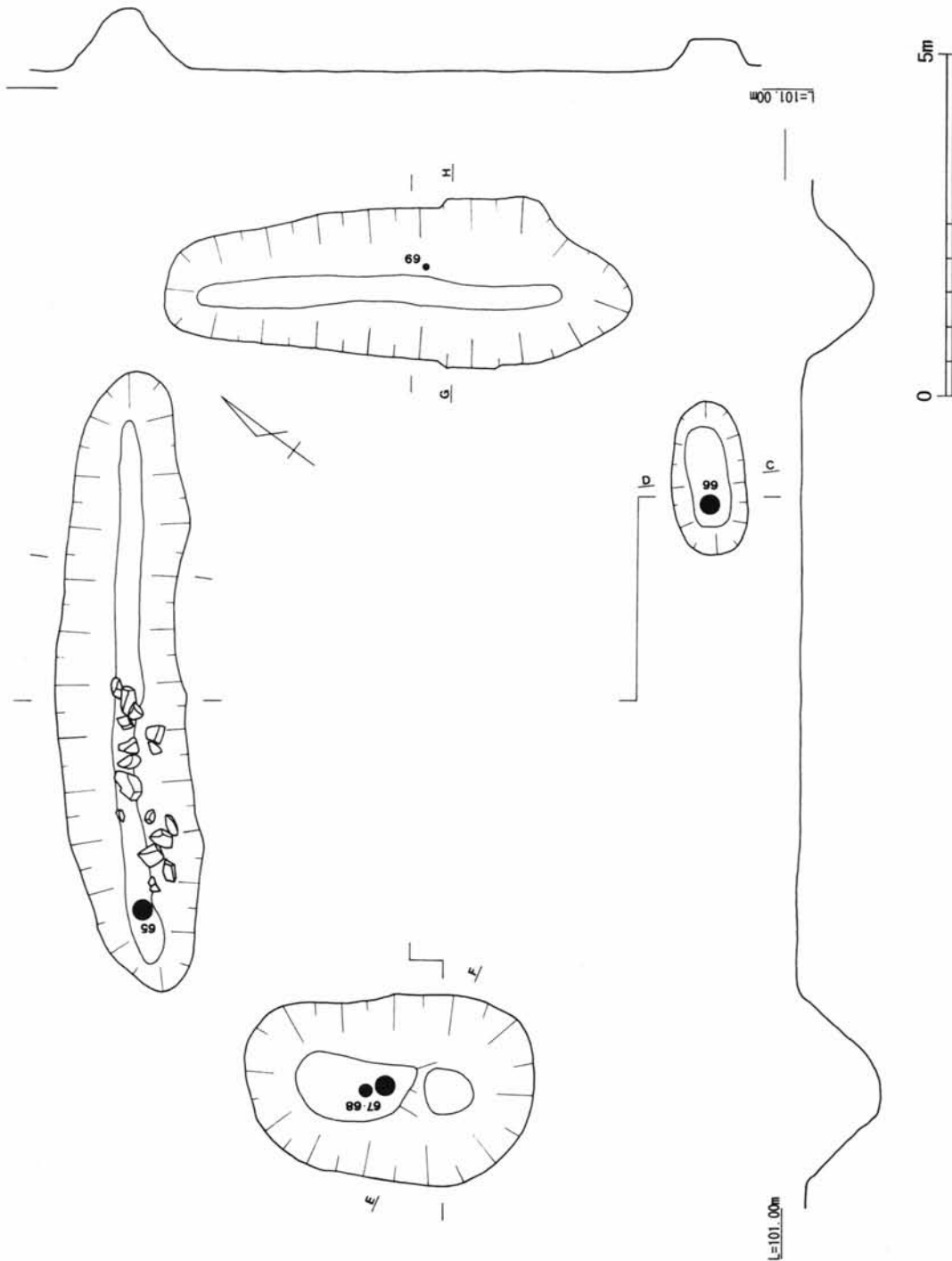
各溝内からはそれぞれ、遺物が出土している。北溝内からは西半部分から安山岩の角礫15石とともに半完形個体の壺1個体(第31図65)が第28図2層上面から検出された。角礫は20～40cmを測り、ほとんど磨耗していない。また、調査地のベースである黒褐色粘質土層やさらに下層の黄褐色粗砂礫層内にこの種の大形の角礫は含まれていないことから別の地点で採集されたものが持ち込まれたものと考えられる。角礫は第29図上段に示すように1～3石が近接して南墳丘側からずり落ちたようなような状況を示している。また壺(第31図65)は溝の東端から口縁を北に向けた状



第26図 E地区検出遺構(方形周溝墓)実測図(空撮図化・1/250)

態で横位で出土している。これらの壺や角礫は底面から浮いていることから方形周溝墓の造成後、一定期間の時期をおいた後に転落、もしくは供献されたものであると考える。また、その他の小片が1層を中心に出土した。

東溝からはほぼ中央で転落した角礫2石とその石材間から細片化した甕2点(第31図67・68)が検出された(第29図下段)。底面に接せず、第28図2層上から検出されたことから北溝同様、方形周溝墓の造成後、一定期間の時期をおいた後に転落、もしくは供献されたものであると考える。



第27図 E地区1号墓実測図(1/100)

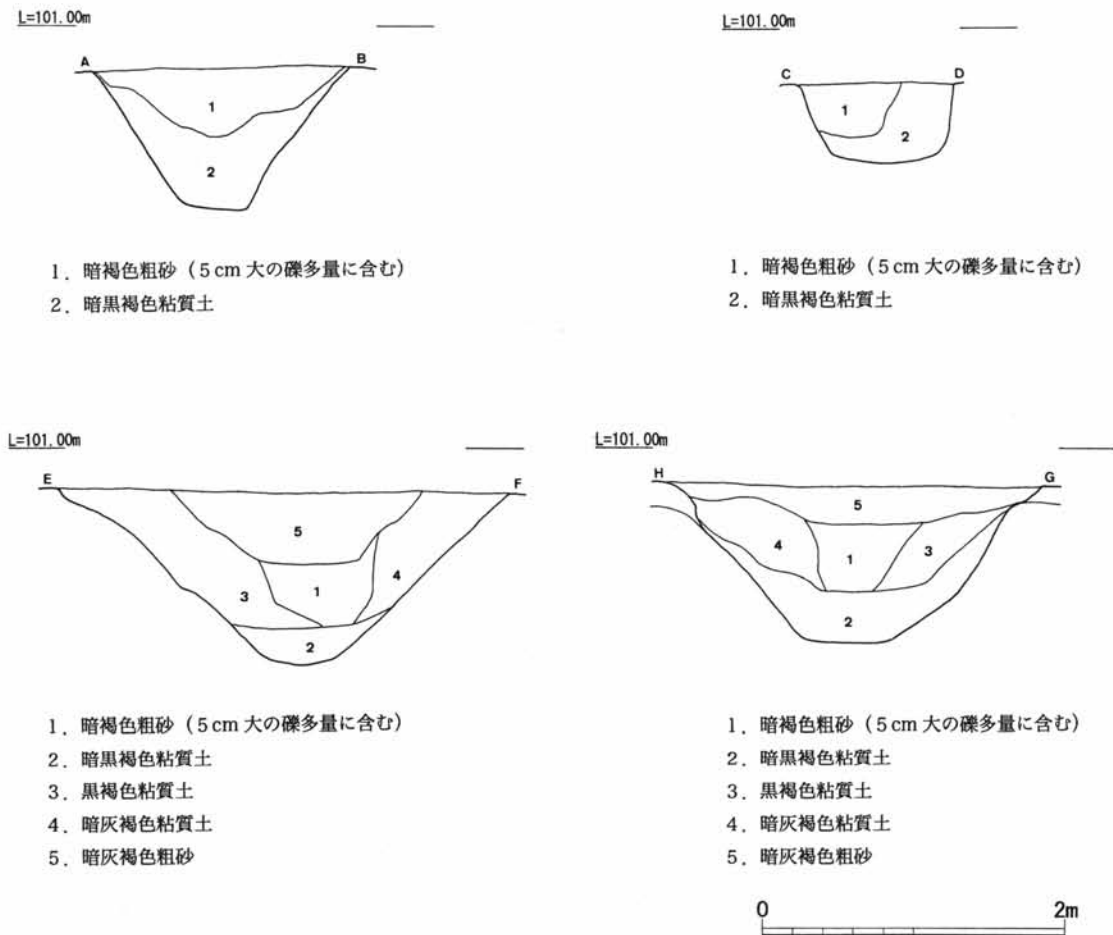
また、細片化した土器片が出土している

南溝西半からは台付鉢(66)と甕胴部片が接して溝底部より遊離した状態で検出された(第30図左)。鉢は口縁を東に向けて横位で、壺片は鉢の下部に組み合わせるように検出された。この出土状況から土器棺の可能性も考えられたが、鉢が完形品ではなかったこと、壺胴部片が鉢に先行して置かれ、鉢に対する蓋としては機能していないことなどから、他の溝同様、方形周溝墓の造成後、一定期間の時期をおいた後に転落、もしくは設置されたものであると考える。

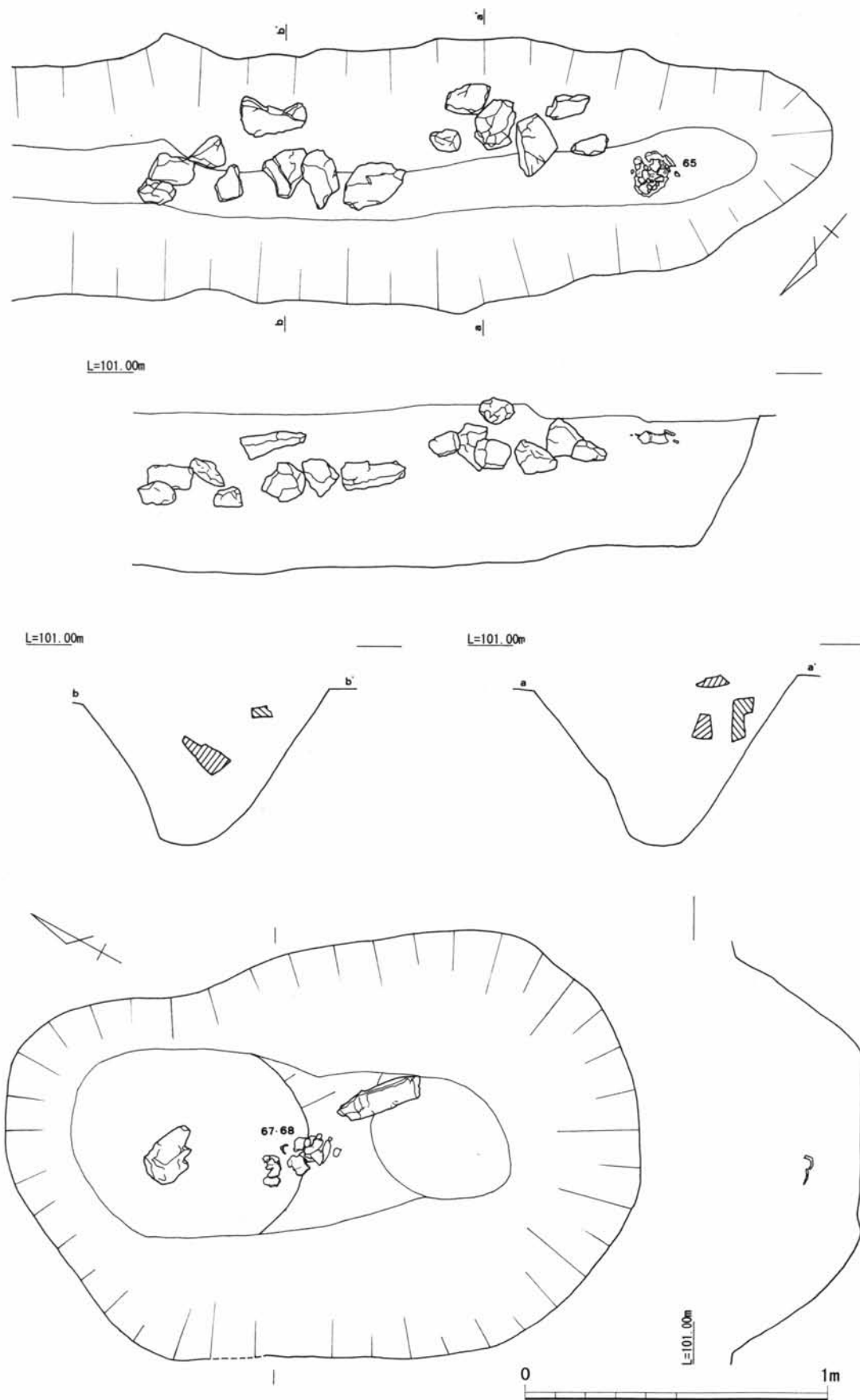
東溝中央東肩部では小形の甕(第31図69)が第28図4層中から検出された。出土位置からみて方形周溝墓の墳丘に設置されていたものが転落したものととは考えがたく、方形周溝墓の造成後、一定期間の時期をおいた後に周溝墓東側から転落したものと考えられる。

出土遺物(第31図) 1号墓出土遺物には、各溝内から出土した弥生土器がある。出土状況図を掲載したもの以外は細片化したものが多い。

65は北溝西端から出土した壺である。体部最大径は胴部の中央よりやや下方にある。外面の調整は上半は縦方向のハケ、下半は縦方向のハケのち斜め方向の粗いミガキにより調整される。内面は磨耗が著しく調整不明である。文様は、頸部下半から体部上半にかけて施文される。上から



第28図 E地区1号墓周溝土層断面図



第29図 E地区1号墓遺物出土状況図(1)(上段：北溝、下段：西溝)

櫛描き直線文2条、櫛描き波状文1条、櫛描き直線文1条、櫛描き波状文1条、櫛描き直線文1条、櫛描き波状文1条、櫛描き直線文1条、櫛描き波状文1条の計9条が認められる。

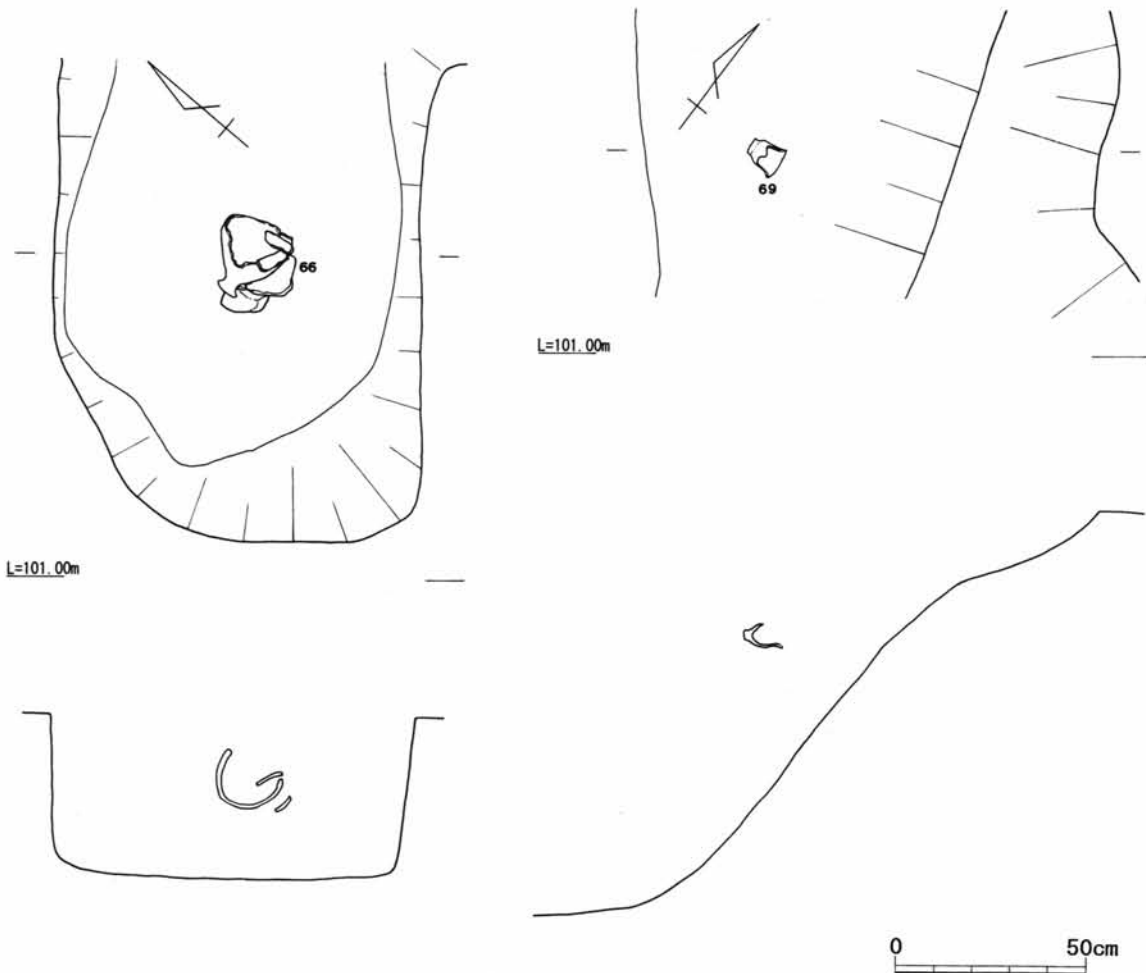
66は台付の鉢である。深い椀状の鉢部に厚く低い台部が付く。口縁端部はやや内傾する面を持ち、台部はやや上げ底気味である。調整は外面横方向のヘラミガキ、内面は磨耗のため不明であるがなんらかの工具痕と思われる痕跡が残る。施文は口縁下端から体部上半にかけて4条の櫛描き直線文により加飾される。

67は西溝出土の甕である。口縁はほぼ横方向にのび体部はほとんど張らない。口縁端面は面をなす。外面は縦方向のハケ、内面は上半に横方向のハケが認められるが下半部は使用によるススの付着により不明である。また底部中央には焼成後と思われる穿孔が1か所確認される。

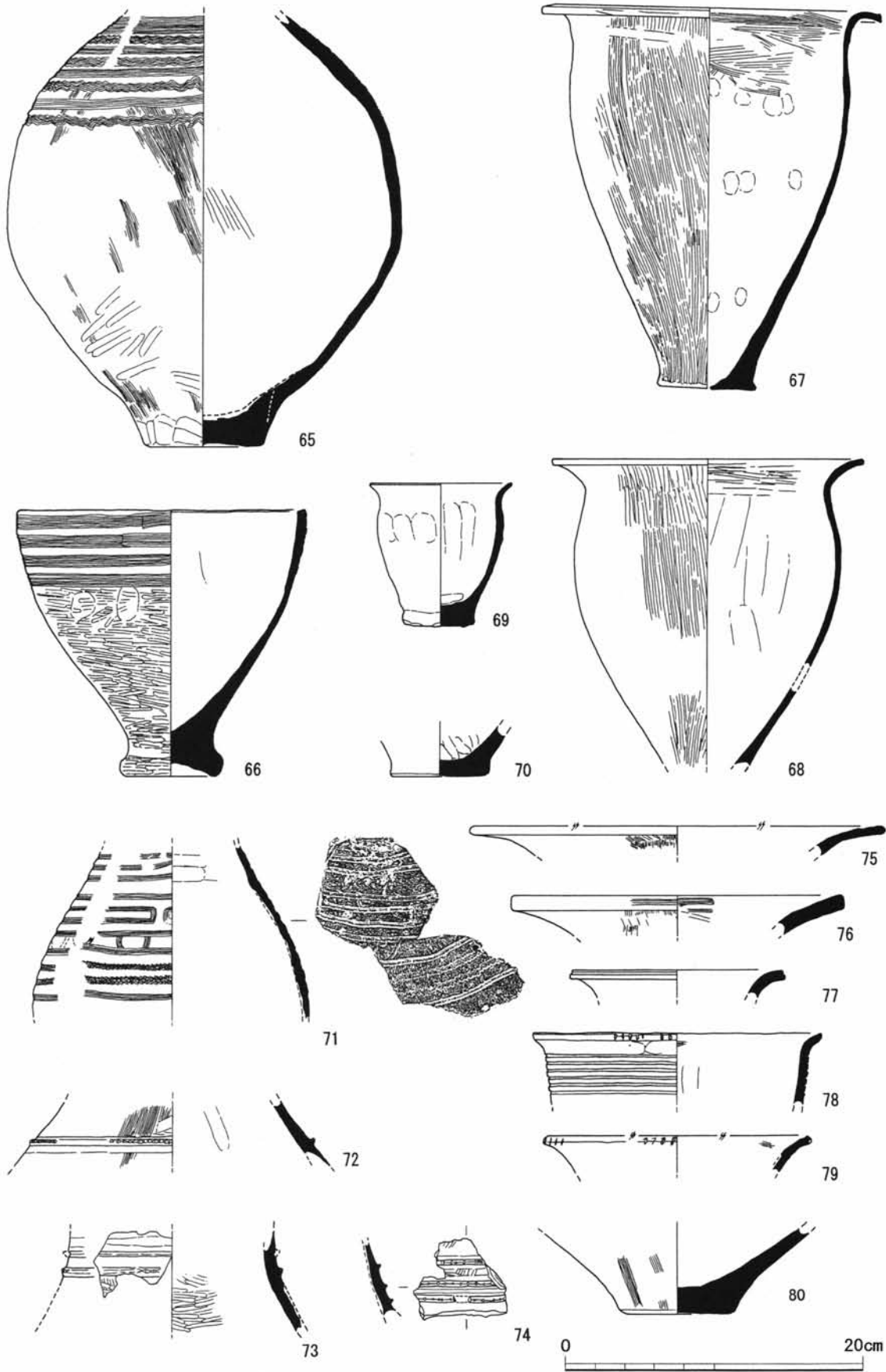
68は67と同一か所から出土した甕である。口縁は外反し、やや体部に丸みがある。外面は粗い縦方向のハケが口縁下端にまで及んでいる。内面は口縁内面に横方向のハケ、体部内面は頸部まで縦方向にケズリあげられている。火を受けているためか外面が赤変している。

69は東溝東肩部で検出された小型甕である。口縁は短くわずかに外反し、底部は厚い。火を受けているためか、赤変し、外面の器壁の剥落が著しい。

70は東溝北半2層中から検出された甕底部である。内面にユピナデの痕跡が残る。



第30図 E地区1号墓遺物出土状況図(2)(右図：東溝、左図：南溝)



第31図 E地区1号墓出土遺物実測図(1)

71は南溝南半上層から検出された壺小片である。文様構成は上から櫛描き直線文4条、櫛描き流水文、櫛描き直線文、櫛描き半弧文、櫛描き直線文、櫛描き波状文2条、櫛描き直線文が観察される。施文原体は幅が狭小で各線も浅い。

72~74は貼り付け突帯をもつ壺の頸部である。72は西溝からの出土である。73は剥離した突帯の下層に篋描きによる直線が引かれ、突帯を貼り付ける計画線であると判断される。74は東溝から出土している。

75~77は広口壺の口縁である。75は北溝、76・77は東溝からそれぞれ出土している。

78・79は北溝から出土した甕である。両者とも口縁端部に刻目を施す。78は6条の篋描き直線文を施文している。

80は壺底部である。東溝上面で検出した。底部から体部へは大きく外反気味に広がる。外面には縦方向のハケが観察される。

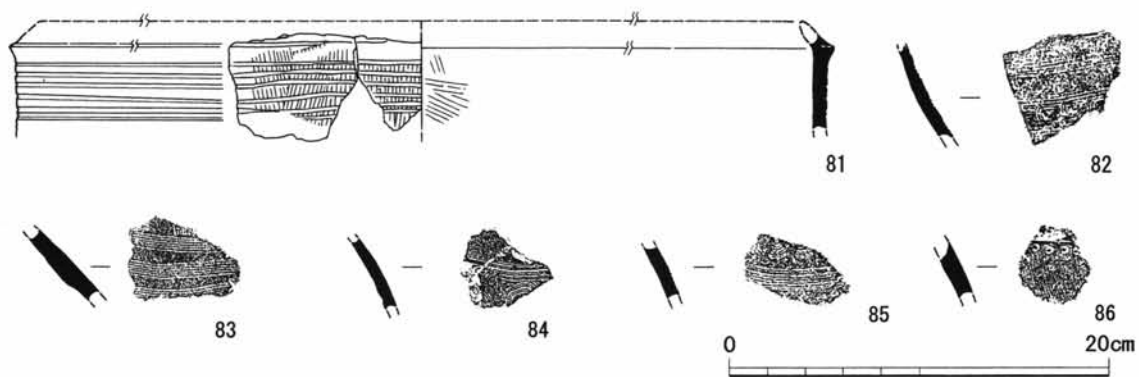
81は東溝で出土した大形の鉢である。口縁は欠損するが、剥離面から内面に屈曲するものと思われる。外面に6条の篋描き直線文が施文される。類例が太田遺跡に存在する。

82~86は壺体部小片である。施文のバリエーションを提示するために掲載した。82は北溝から出土した。櫛描き直線文と扇状文の組み合わせが認められる。83は北溝から出土した。3条以上の櫛描き直線文がみられる。84は西溝から出土している。櫛描直線文と円弧文がみられる。85は西溝から出土した。櫛描直線文と扇状文が施される。86は東溝から出土している。円形竹管文が施されている。

2号墓(第33図) 1号墓の西に位置する方形周溝墓である。この周溝墓に伴う溝としては北と西の2条を確認している。また、トレンチ壁面の土層の観察から第6層にみられる落込み部分が南溝に相当する可能性があるが、大部分が調査区外のため確証を得ることができなかった。仮にこの落込みを南溝と想定した場合、墳丘の規模は東西4.8m以上、南北9.7m以上となる。

各溝の規模は北溝が幅1.6m、長さ3.5m以上、深さ0.35m、西溝が幅1.4m、長さ4.0m、深さ0.8mを測る。墳丘の主軸方位は1号墓とほぼ同じである。

遺物は北溝より細片化した弥生土器壺が出土した(第34図)。溝底面より遊離しているため方形周溝墓造成後一定の期間をおいた後に投棄もしくは転落したものとする。なお、この土器につ

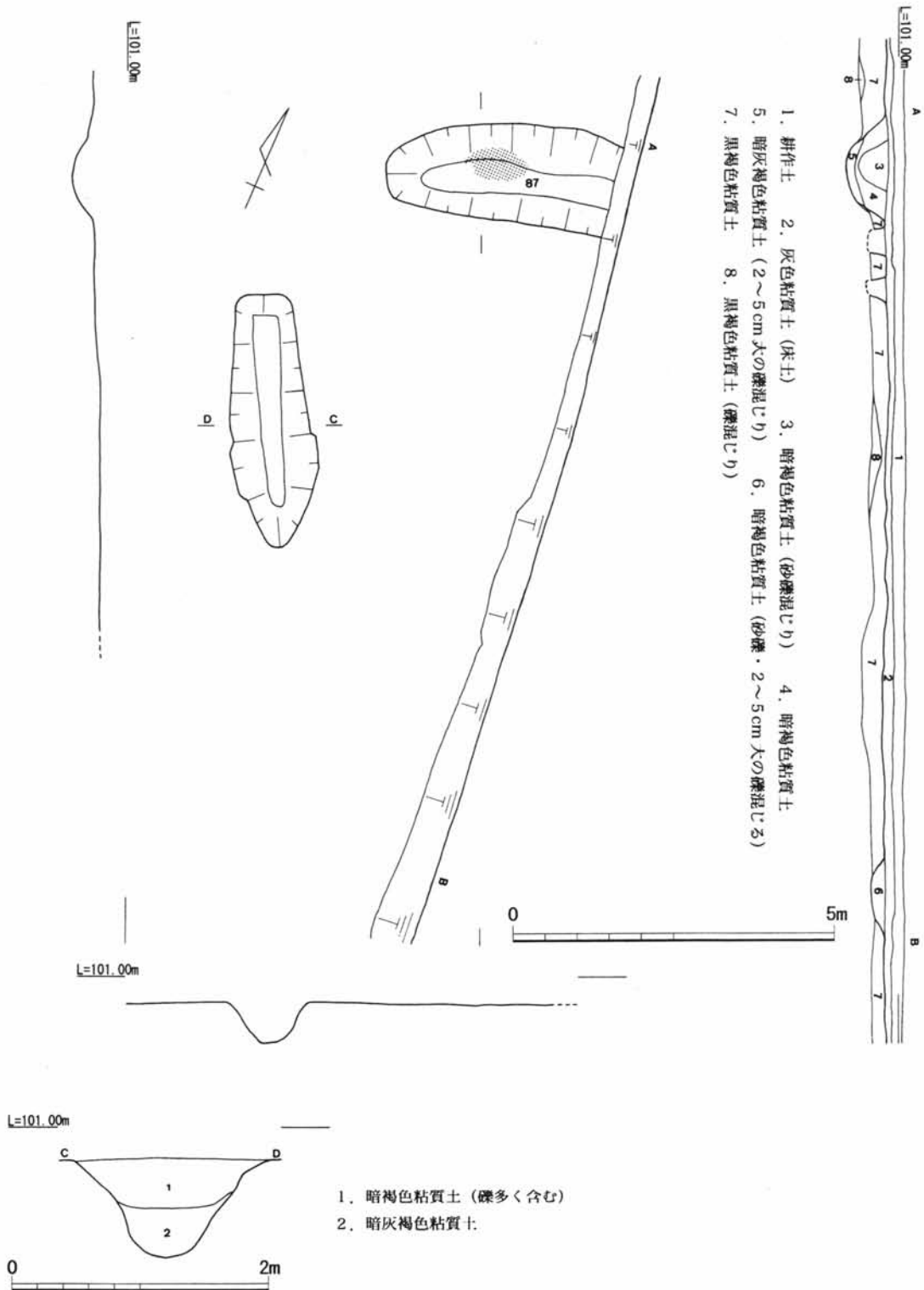


第32図 E地区1号墓出土遺物実測図(2)

いては胎土や色調、施文から同一個体とみられるが、ほとんど接合することができなかつた。おそらく、溝に埋没した段階ですでに細片化していたものと思われる。

出土遺物(第34図) 2号墓出土遺物には北溝出土の弥生土器がある。西溝からはごく小片の土器が出土したのみで図示できなかつた。

87は北溝から細片化して出土した壺である。外面は横ないし斜め方向の粗いミガキがみられる。

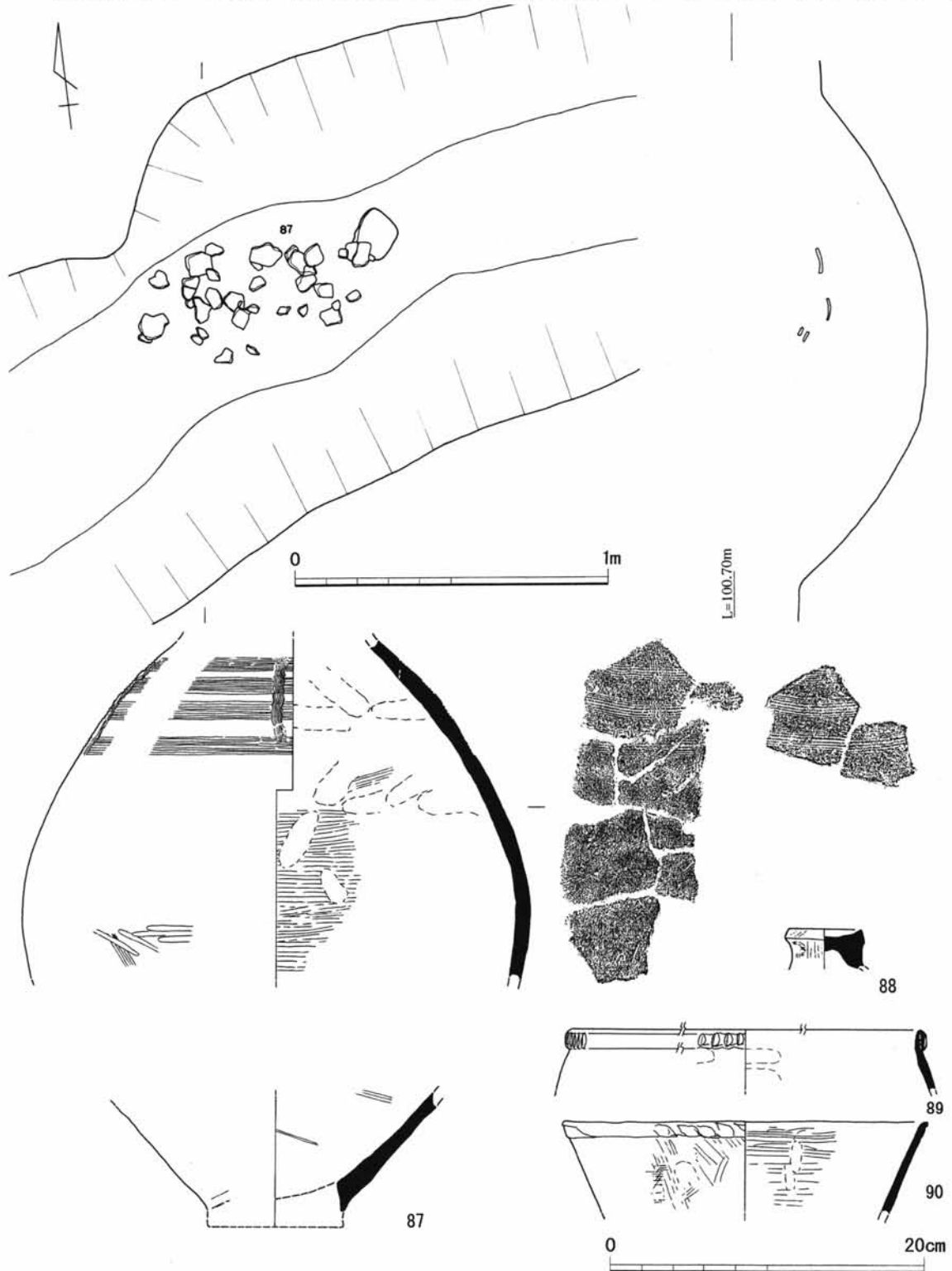


第33図 E地区2号墓実測図(1/100)

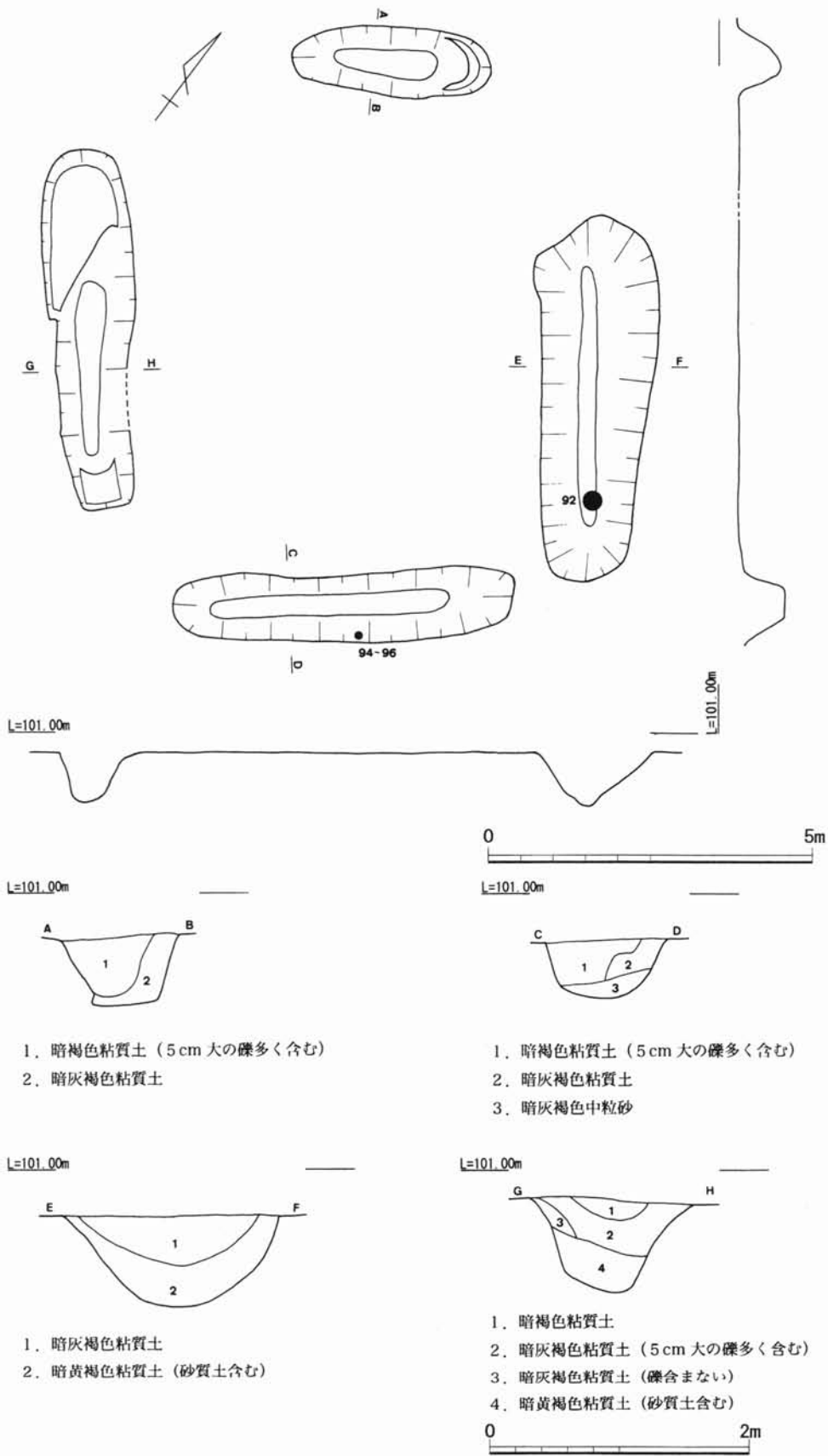
内面は横方向のハケが体部中にみられ、その後上半部をユビによりなで上げることにより調整されている。施文は体部上半に4条の櫛描き直線文を施した後、縦方向の櫛描き波状文を施文する。4・5号墓の例からみて、体部の4方に施文されていたものと推定される。

88は蓋の小片である。89は鉢小片。90は縄文土器鉢片である。

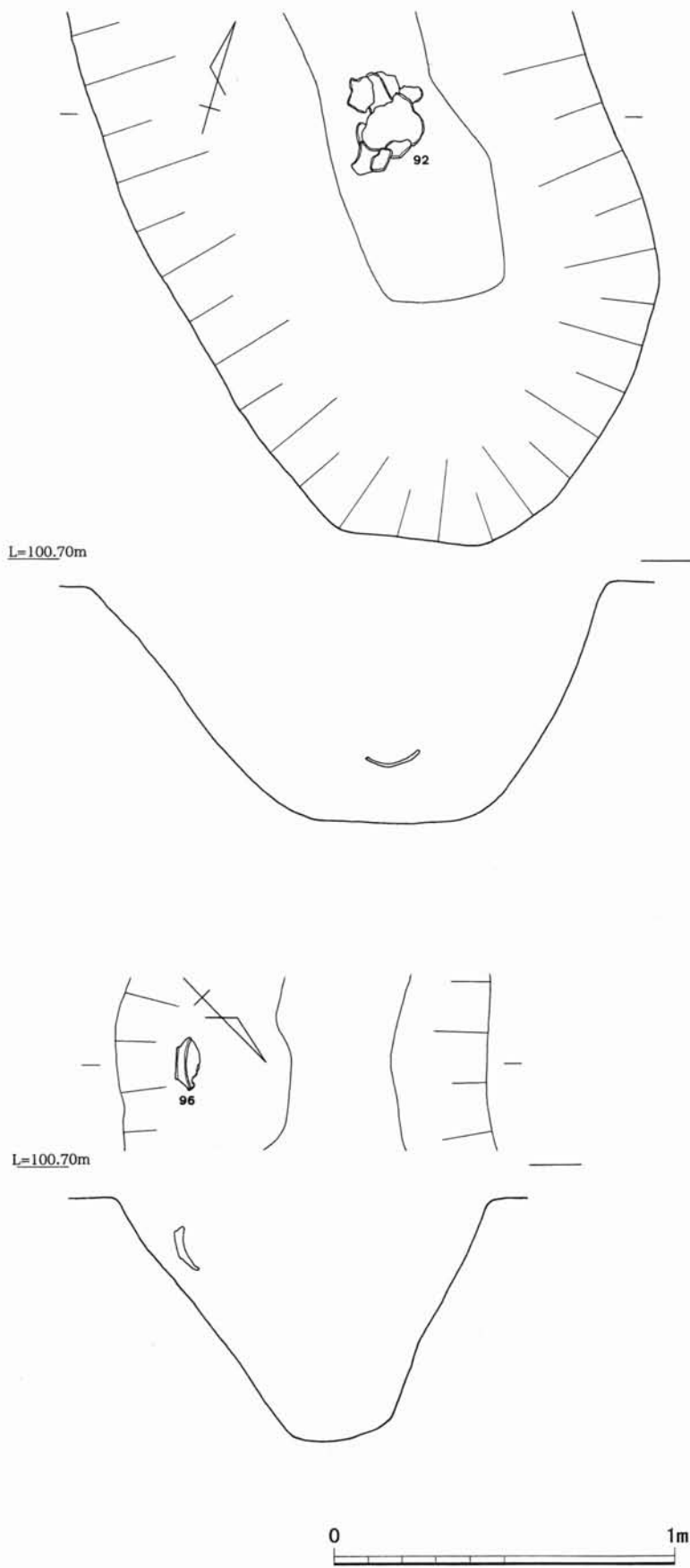
3号墓(第35図) 1号墓の南に近接して存在する方形周溝墓である。1号墓と溝を共有しない。



第34図 E地区2号墓遺物出土状況および出土遺物実測図



第35図 E地区3号墓実測図



墳丘上の埋葬施設は検出できなかった。各溝は連結せず独立した細長い土坑状を呈する。各溝は南溝・東溝・西溝が細長いのに対し、北溝は幅の狭い土坑状を呈する。各溝の規模は北溝が幅1.1m、長さ3.1m、深さ0.65m、東溝が幅1.6m、長さ5.7m、深さ0.7m、南溝が幅1m、長さ5.3m、深さ0.7m、西溝が幅1.1m、長さ5.5m、深さ0.7mをそれぞれ測り、これらの溝から区画される平坦面は東西6.3m、南北7.3mを測る南北方向に長軸をもつ長方形に復原される。墳丘の主軸は1号墓とほぼ同じである。

遺物は東溝南端より壺(第37図92)が出土した(第36図上段)。溝底面より遊離していることから方形周溝墓造成後一定期間が経過した後に転落もしくは設置されたものと思われる。また、南溝中央南肩部では壺底部(第37図96)が周溝墓外より転落した状態で確認された(第36図下段)。溝底面より遊離していることから方形周溝墓造成後一定期間が経過した後に転落もしくは設置されたものと思われる。また、この壺底部に近接して、頸部(第37図94)・体部(第37図95)が出土している。これらの破

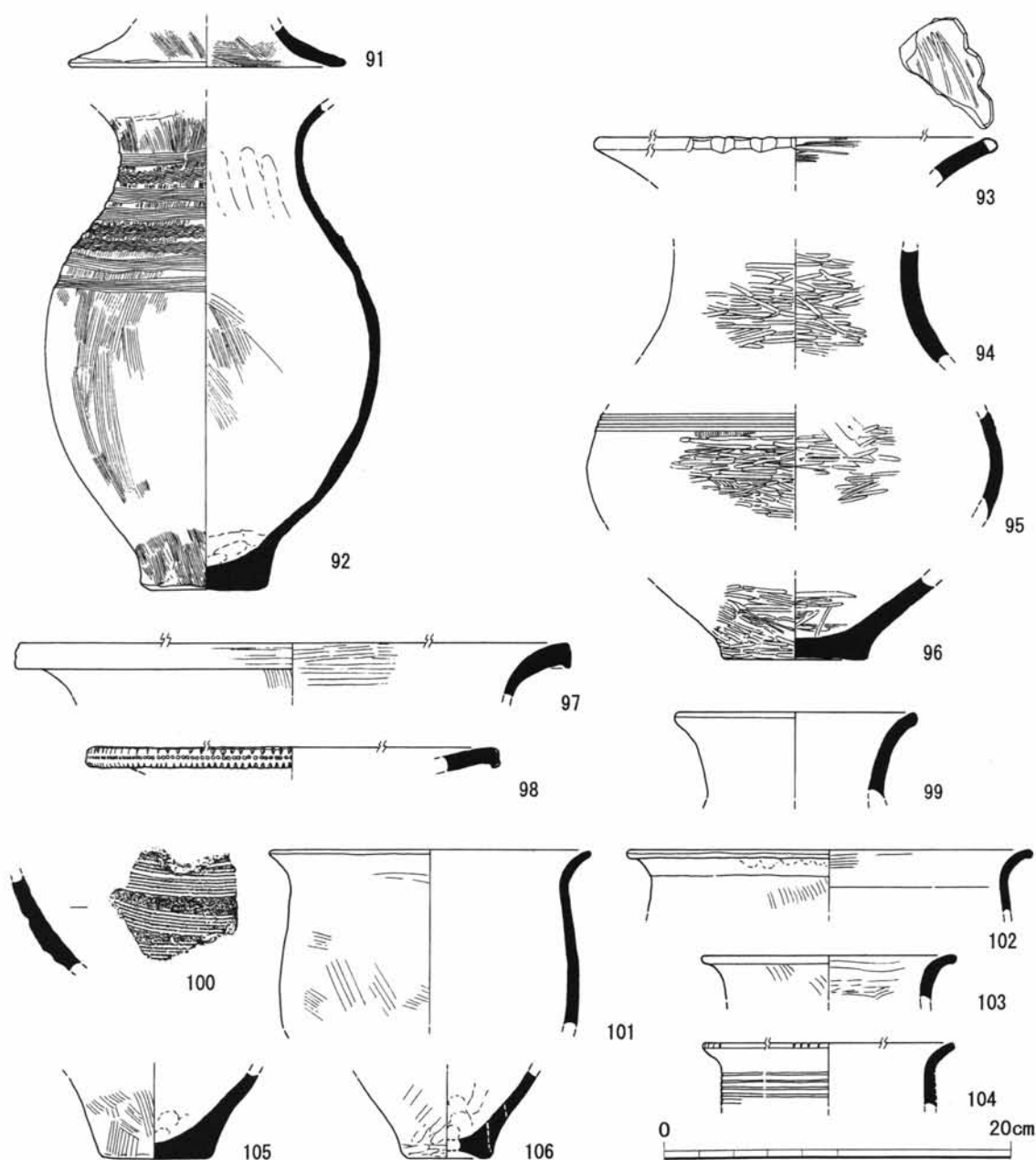
第36図 E地区3号墓遺物出土状況図(上段：東溝、下段：南溝)

片は胎土や色調、調整から同一個体と考えられる。

出土遺物(第37図) 3号墓出土遺物には各溝から出土した弥生土器がある。出土状況図を掲載したもの以外は小片が多い。

91は壺蓋と考えられる小片である東溝より出土した。内面は微細なハケにより調整される。

92は東溝南半より出土した広口壺である。口縁を欠損する。体部は細長く最大径を体部中央にもつ。底部はやや突出気味にとりつく。外面は縦方向のハケ、内面は底部付近はユビによるなで上げ、体部中央に縦方向のハケ、頸部からはユビによるなで上げにより調整される。施文は頸部から体部上半にかけて行われる。文様の構成は上から櫛描直線文1条、櫛描波状文1条、櫛描直線文2条、櫛描波状文2条、櫛描直線文2条の計8条により加飾される。また、この壺の破片



第37図 E地区3号墓出土遺物実測図

が3号墓南溝から出土している。このことから完形品を東溝に据え置いたのではなく、溝内に存在したときにはすでに割れていたものと判断される。

93は南溝東半から出土した広口壺口縁片である。大きく広がるプロポーションを呈し、口縁端部には大きな「V」字状の切り込みで加飾する。内面に横方向のミガキが観察される。詳細な出土位置が不明であるが、胎土・焼成・色調が94～96と共通するため同一個体の可能性が高い。

94～96は壺である。精良な胎土をもち、また近接して出土していることから同一個体の可能性が極めて高い。94は頸部である。内外面とも横方向のミガキにより調整される。95は体部片である。内外面ともミガキにより調整される。最大径の上半に2条の篋描直線文を施文する。96は底部である。底部から体部にかけて大きく広がる。内外面ともミガキにより調整される。

97・98・99は広口壺口縁である。97は北溝から出土した。磨耗が著しいが、大きく外反する口縁をもち、口縁端部は下に拡張し面をなす。口縁外側面には櫛描直線文かと思われる直線文がわずかに認められる。外面は縦方向のハケ、内面には横方向のハケにより調整される。98は南溝から出土した。口縁はほぼ水平にのび、端部をわずかに下方に拡張する。口縁端部外側面は上下に刻目を施し、中央は竹管文で加飾する。99は東溝から出土した粗製の壺であり、器壁が厚い。

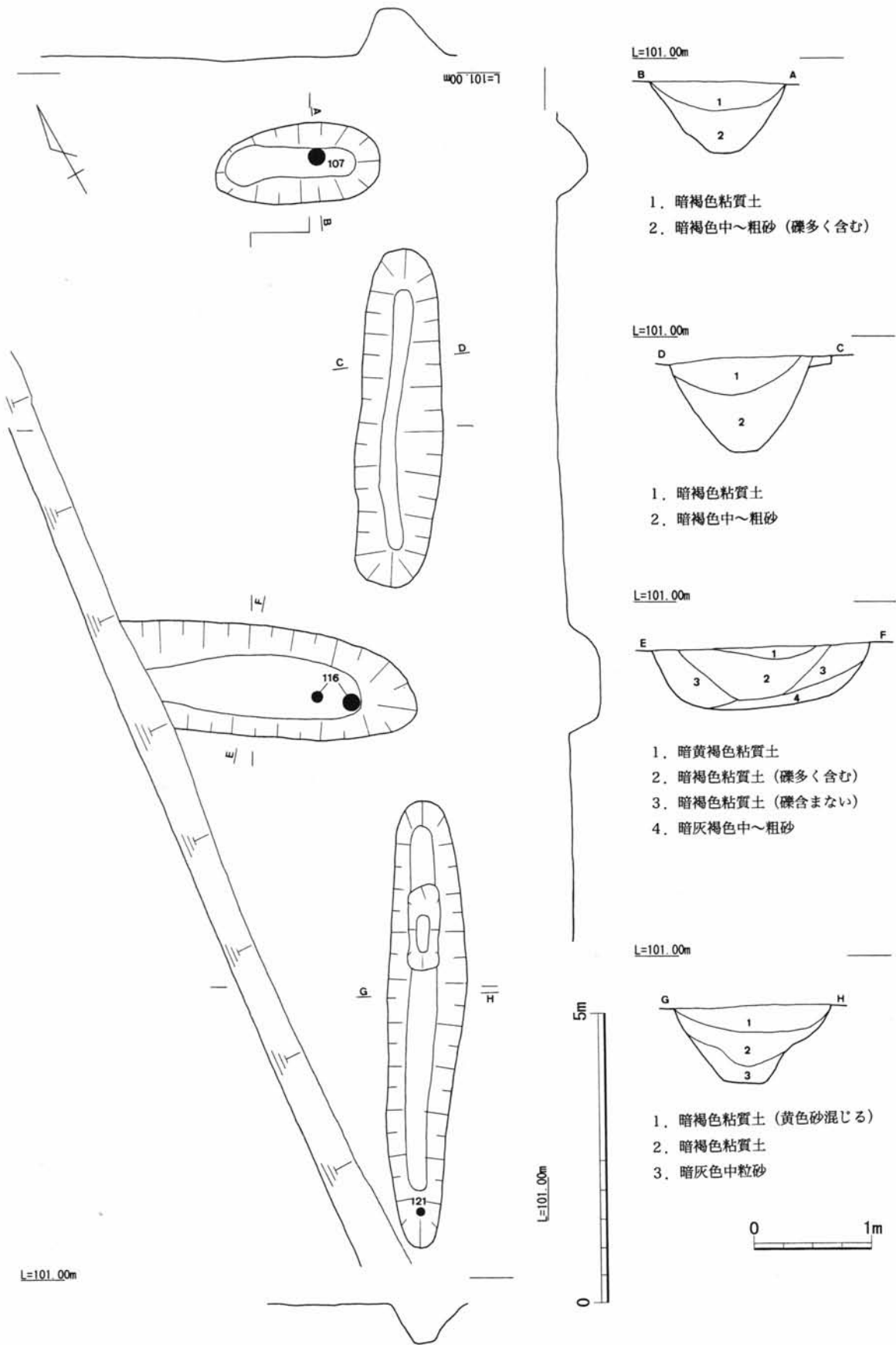
100は文様の分かる壺体部片である。4条の櫛描直線文が認められる。

101～106は甕である。101は西溝から出土した。口縁は短く外反する。外面はハケにより調整される。102は西溝から出土した。口縁は大きく屈曲し端部を丸く収める。口縁下半に指頭圧痕がみられる。外面は縦方向のハケ、口縁内面には横方向のハケが施される。103は南溝から出土した。口縁は短く外反する。104は東溝から出土した。口縁は短く直線的にのみ端部に刻目を施す。体部上半には5条の篋描直線文が観察される。105は西溝から出土した甕底部である。外面はハケ、内面はユビによるなで上げにより調整される。106は南溝から出土している底部である。底部はやや上げ底気味となる。底部外側面はヘラ状工具により面取りを行い、内面はユビによるナデ上げを施す。

4・5号墓(第38図) 1号墓の西に近接して検出された2基の方形周溝墓である。墳丘上の埋葬施設は検出できなかった。各溝は連結せず独立した細長い土坑状を呈する。4号墓は北溝・東溝・南溝の3基の溝を検出した。この周溝墓は南溝を南に位置する5号墓と共有している点が他の周溝墓とは異なる点と言える。北溝は長さの短い土坑状を呈し、東・南(4・5号墓共有)溝は細長い平面形を呈する。

各溝の規模は、北溝が幅1.3m、長さ2.8m、深さ0.65m、東溝が幅1.5m、長さ5.9m、深さ0.9m、南(4・5号共有)溝が幅1.9m、長さ5.3m以上、深さ0.76m、これらの溝から区画される平坦面は東西4.3m以上、南北7mを測る。墳丘の主軸はN29°Wを測り、1号墓より主軸を東に振る。

遺物は東溝南端より広口壺(第41図107)を検出した(第39図下段)。口縁を欠くもののほぼ完形品である。口縁を南西に向け横位で検出された。溝底面よりかなり遊離して検出されていることから方形周溝墓造成後一定期間の経過後、転落もしくは設置されたものとする。



L=101.00m

1. 暗褐色粘質土
2. 暗褐色中～粗砂 (礫多く含む)

L=101.00m

1. 暗褐色粘質土
2. 暗褐色中～粗砂

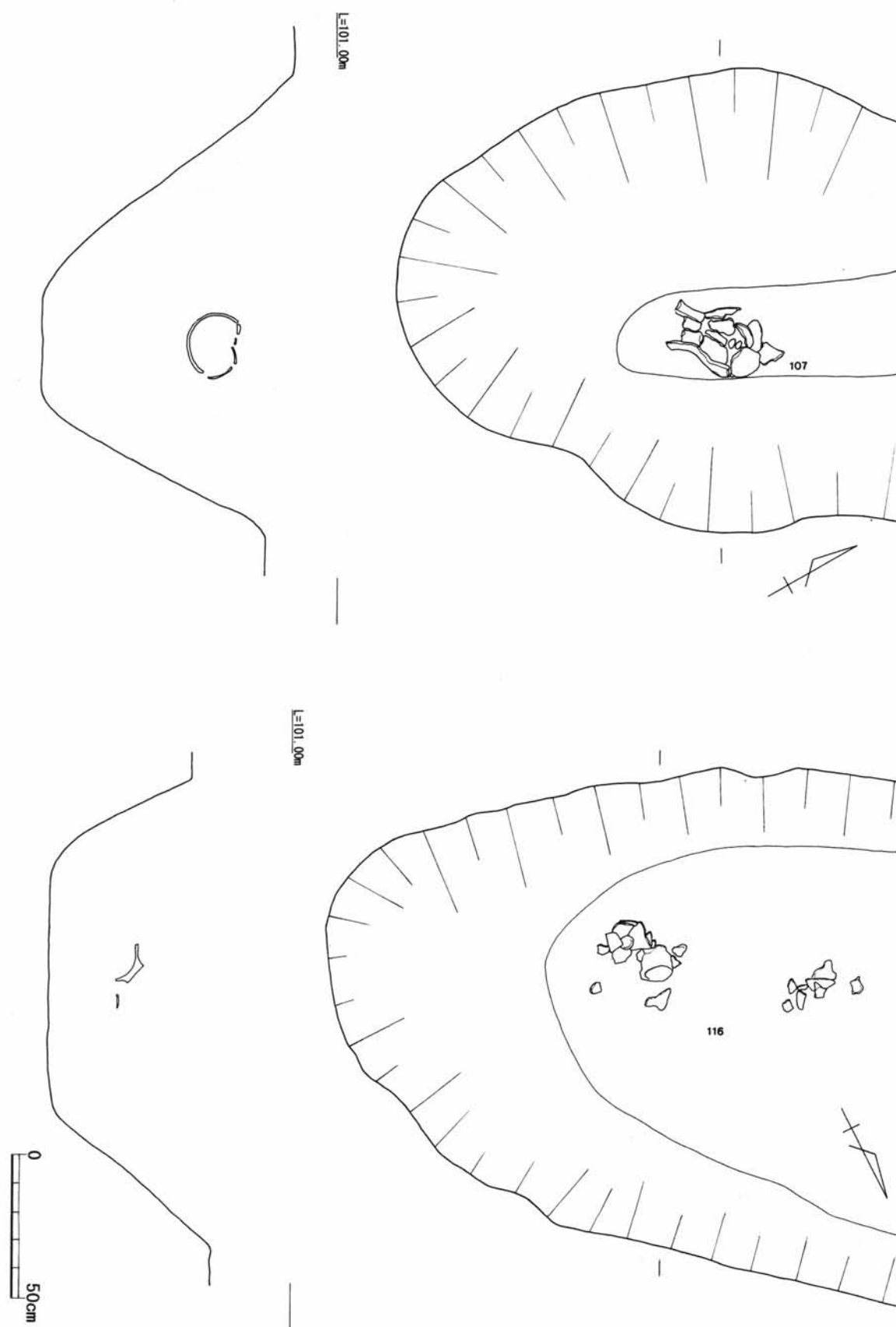
L=101.00m

1. 暗黄褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土 (礫多く含む)
3. 暗褐色粘質土 (礫含まない)
4. 暗灰褐色中～粗砂

L=101.00m

1. 暗褐色粘質土 (黄色砂混じる)
2. 暗褐色粘質土
3. 暗灰色中粒砂

第38図 E地区4・5号墓実測図



第39図 E地区4・5号墓遺物出土状況図

南(4・5号共有)溝東端では壺(第41図116)が検出された(第39図上段)。この壺は概ね2か所にまとまった状態で細片化して検出されている。溝底面より遊離して検出されていることから、方形周溝墓造成後一定期間の経過後、転落もしくは投棄されたものとする。この土器については溝のほぼ中央部分で検出されたため4・5号墓どちらに伴うものか明らかではない。

南に近接する5号墓は、北溝(4・5号墓共有溝)と東溝を検出した。東溝は幅1.4m、長さ7.6m、深さ0.75mを測る。この溝により区画される平坦面は南北8.8m以上、東西4.3m以上を測る。主軸は4号墓と同一方向にとる。

また、西溝北半では溝底面より掘り込まれる長方形の土坑を確認した(第40図)。形状からみて周溝内埋葬の土壙墓である可能性が高い。全長1.2m、幅0.5m、深さ0.5mを測る。土坑底面は北から南に傾斜する。南小口の検出面には拳大の円礫が置かれており、標石であった可能性がある。

出土遺物(第41図) 4・5号墓出土遺物には各溝から出土した弥生土器がある。107～114が4号墓に伴うものであり、115・116は4・5号墓共有溝から、117～121は5号墓東溝からの出土である。

107は東溝から出土した広口壺である。頸部は長く拡張され施文帯を確保している。体部は細長く最大径を体部中央よりやや下方にもつ。外面の調整はハケの後粗いミガキにより行い、内面の調整は縦方向のなで上げにより行う。施文は頸部から体部上半にかけて櫛描直線文8条を施すことにより行っている。

108は東溝から出土した広口壺の口縁である。わずかに外反して立ち上がり口縁端部は丸く収める。また端面には刻目を施文する。1か所の焼成前穿孔が認められる。

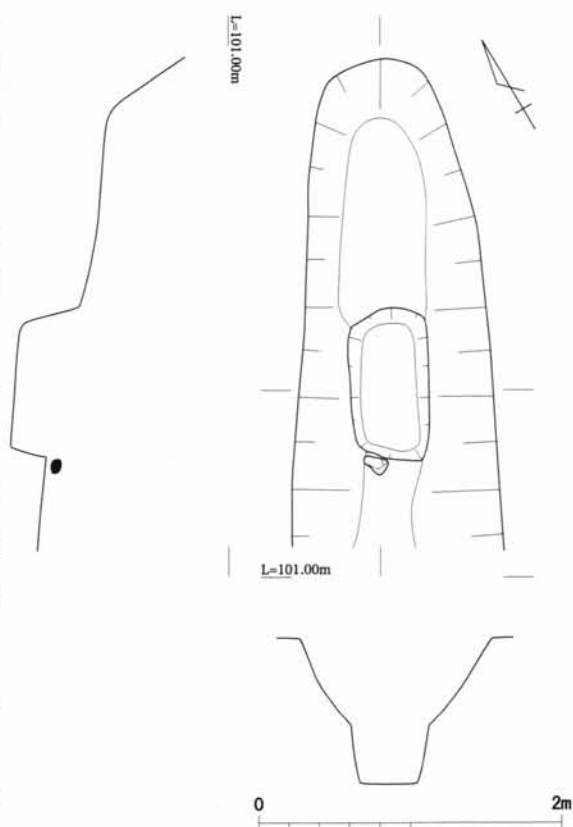
109・110は東溝より出土した壺体部片である。109は2条の櫛描直線文、110には1条の櫛描直線文と2条の櫛描波状文が確認される。

111は東溝から出土した甕片である。短く外反する口縁をもち端部には刻目を施す。

112は北溝から出土した甕片である。短く直線的に外方にのびる口縁をもち、端部は丸く収め、刻目で加飾する。体部上半には2条の櫛描直線文が施される。

113は北溝から出土した大形の壺底部である。外面に縦方向のハケがみられる。

114は東溝から出土した鉢である。口縁はわずかに外反し、端部を丸く収める。外面には縦

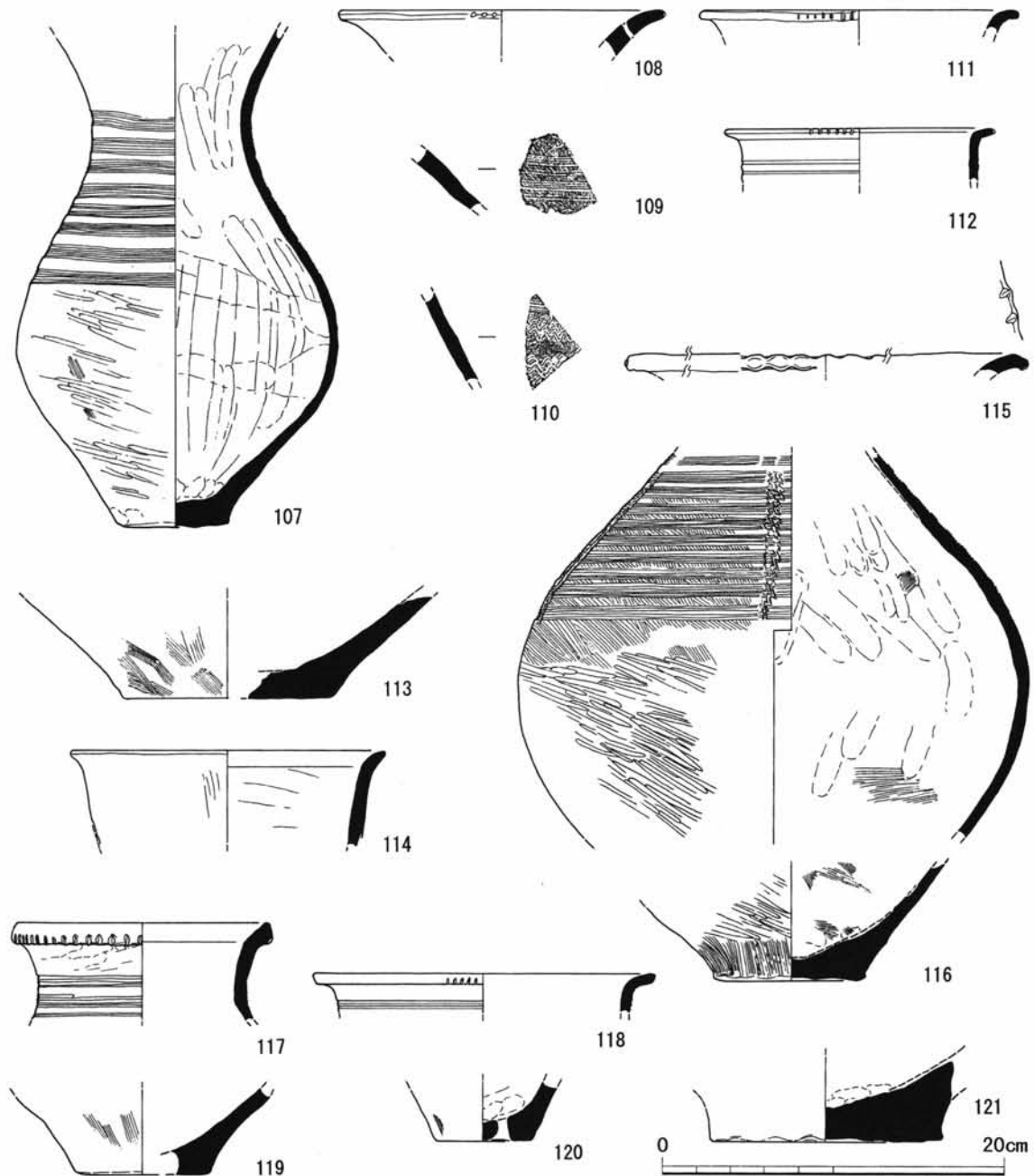


第40図 E地区5号墓西溝内土壙実測図

方向のハケ、内面は横方向のナデにより調整を行う。

115は4・5号共有溝出土の壺口縁である。上下に棒状工具による圧痕を施すことにより口縁端部を波状に仕上げている。

116は4・5号共有溝出土の壺である。体部は最大径をほぼ中央にもち、上半部を直線的に仕上げる。外面は縦方向のハケの後、斜め方向のミガキ、内面は底部から体部下半にかけてはハケ、体部上半はユビによりなで上げることにより調整する。施文は頸部から体部上半にかけて行っており、櫛描直線文10条を施したあと、縦方向の櫛描波状文を4方に施しているようである。また、櫛描直線文と櫛描波状文の原体に相違がみられ、櫛描直線文を施した後、施文工具の交換もしくは破損があったものと推定される。



第41図 E地区4・5号墓出土遺物実測図

117は広口壺口縁である。頸部は太く口縁は短い。口縁端部はわずかに肥厚させ、外側面下端に刻目を施す。また、頸部は3条の櫛描直線文により加飾する。

118は甕口縁である体部から短く屈曲する口縁をもち、端部は面をなす。端部下端には刻目を施す。

119は壺底部である。外面はハケにより調整する。

120は甕底部である。1か所の孔がみられる。

121は東溝南端で検出した大形の壺底部である。

6号墓(第42図) トレンチ南端中央で検出した方形周溝墓である。南西隅が調査区外となるがほぼ四周の溝を確認している。この周溝墓では少なくとも北・東・南溝は連続し、各々の溝端部が浅くなっているため方形周溝墓のコーナーが陸橋状に削り残されているように視覚上は認識される。一段深く掘り込まれている部分での規模は北溝が幅1.2m、長さ8.4m、深さ0.3m、東溝が幅0.8m、長さ7.4m、深さ0.7m、南溝が幅1.2m、長さ3.9m以上、深さ0.5m、西溝が幅1.1m、長さ2.7m以上、深さ0.1mをそれぞれ測る。

これらの溝から区画される平坦面は東西9.4m、南北7.7mを測る東西方向に長軸をもつ長方形に復原される。墳丘の主軸はN33°Wを測る。また、トレンチ壁面の土層観察により、この方形周溝墓は盛土をもつことが明らかとなっている。

遺物は量的には少ないものの、東溝中央から壺底部(第43図122)が細片となって溝底面にほぼ接地して検出されている(第43図左)。また、北溝東端からは甕底部(第43図123)がやはり溝底面に接地して検出されている。これらの土器は方形周溝墓造成後にほどなく溝内に転落もしくは遺棄されたものと考えられることができる。

出土遺物(第43図) 6号墓出土遺物で図示しうるのは2個体のみである。

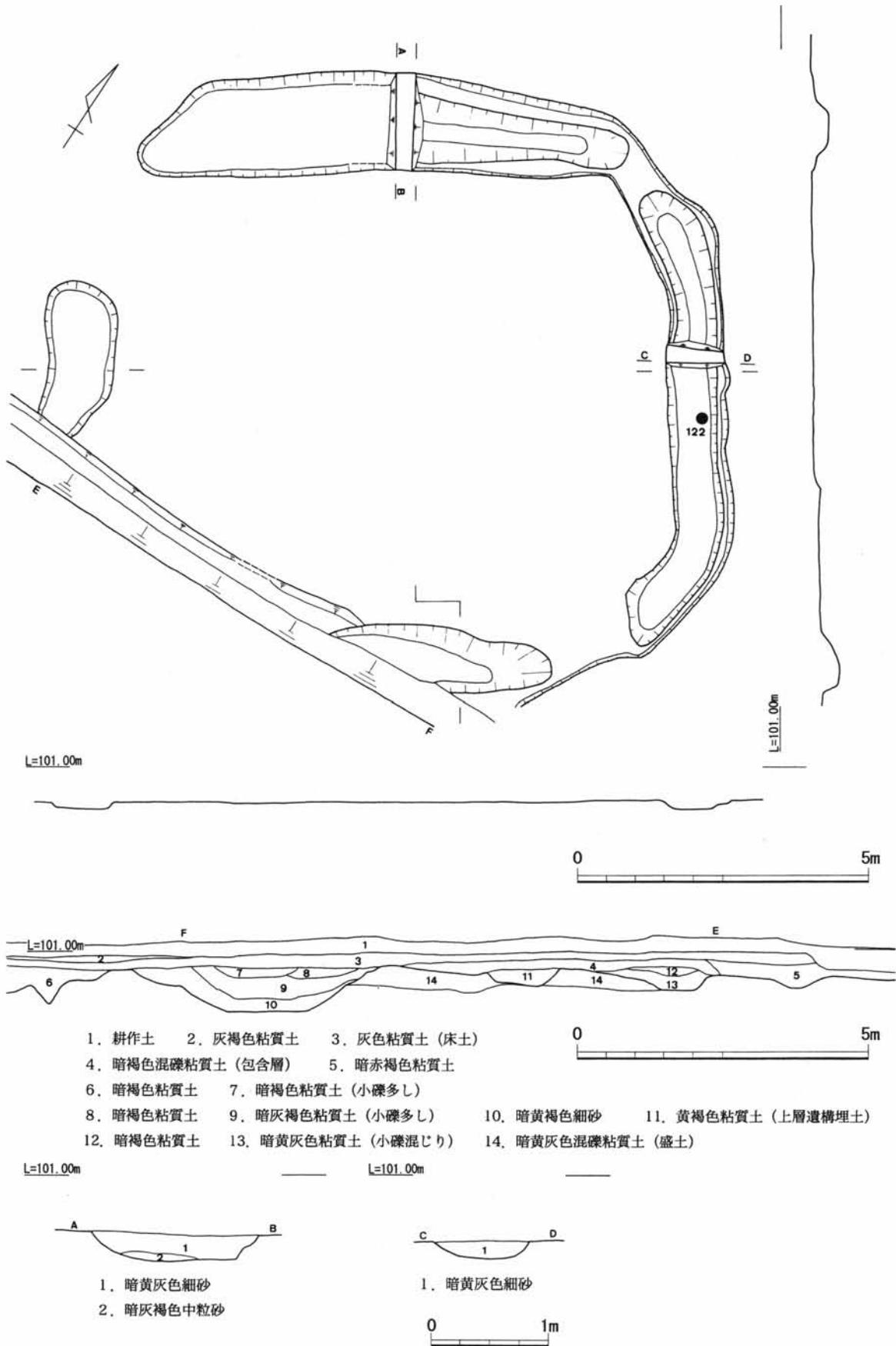
122は東溝中央で検出された壺底部である。厚く作られた底部よりわずかに屈曲した後、内湾しながら体部にいたる。調整は磨耗が著しく外面については不明。底部内面には指頭圧痕が認められる。

123は北溝東端から検出された甕底部である。底部から直線的に体部にかけて立ち上がる。また、底部はわずかながら上げ底気味になっている。外面は縦方向のハケ、内面はユビによるなで上げにより調整される。底部外面には木葉圧痕が観察される。

7号墓(第44図) トレンチ北側中央で検出した方形周溝墓である。西溝・南溝・東溝を確認した。また、東溝と南溝は接続しており、各々中央部分が深く掘削されることによりコーナー部分が陸橋状に削り残されていることが明らかとなった。

東溝は細長く深く掘削されているのに対し、南溝は幅広く浅い土坑状を呈している。東溝に関しては南端の一部および断面からその存在を確認したに過ぎず、大部分が調査区外のためどのような形状になるのかは不明である。

各溝の規模は西溝が幅1.4m、長さ2.4m以上、深さ0.9m、南溝が幅2.1m、長さ4.6m、深さ0.4m、東溝が幅1.2m、長さ0.5m以上、深さ0.5m以上をそれぞれ測り、これらの溝から区画さ



第42図 E地区6号墓実測図

れる平坦面は東西6.5m、南北2.5m以上を測る方形に復原される。墳丘の主軸はN23°Eを測る。

遺物は細片化したものが大部分であり、明らかな使用状況の判明するものはなかった。

出土遺物(第44図) 西溝出土の壺口縁片1点のみを図示できた(第44図124)。口縁はゆるやかに外反し、端部外面に面を構成する。調整は外面に縦方向のハケが部分的に観察される。

8号墓(第45図) トレンチ北東コーナーで検出した方形周溝墓である。西溝および南溝の一部を確認した。遺構の大部分が調査区外のため詳細については明らかにし得なかった。

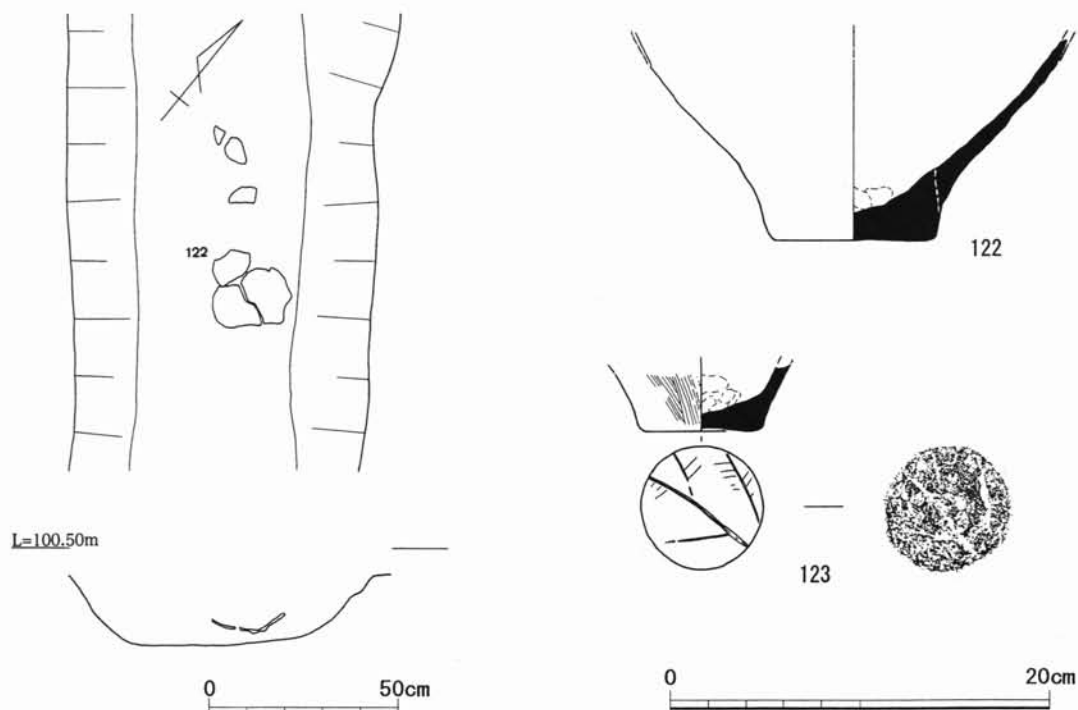
各溝の規模は西溝が幅0.9m、深さ0.3m、長さ1.1m以上、南溝が幅0.8m、深さ0.5m、長さ1.7m以上を各々測り、これらの溝により区画される平坦面は東西3m以上、南北3m以上を測る。現状で想定される墳丘主軸はほぼ真北である。

遺物は遺構を検出した部分がわずかなため、各溝から使用状況の判明する状態で検出することはできず、わずかな小片が出土したに過ぎない。

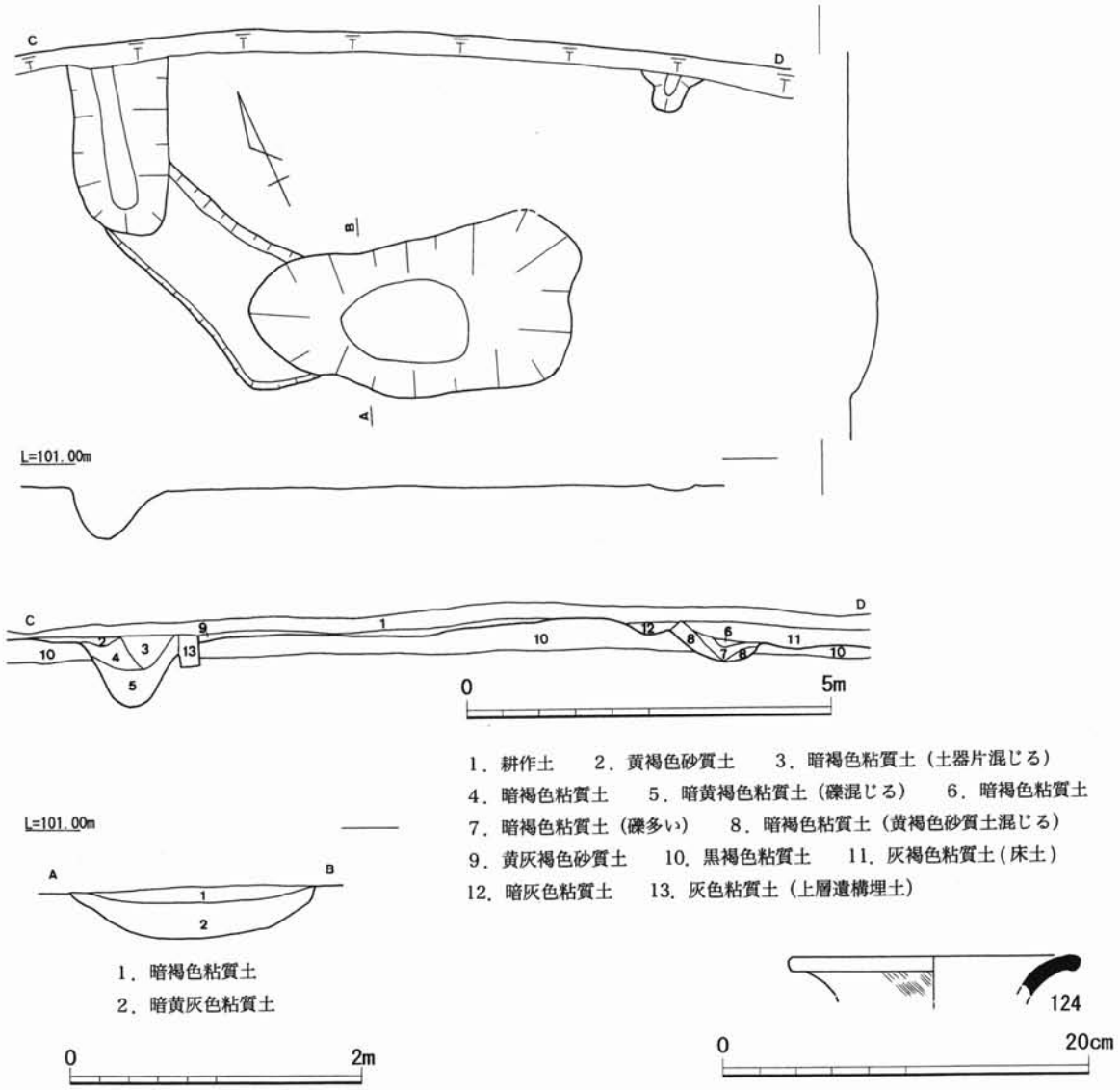
出土遺物(第45図) 図示しうるのは西溝掘削中に出土した甕底部(第45図125)に過ぎない。底部から体部にかけてわずかに屈曲し、体部下半は直線的にのびる。調整は体部外面下半に縦方向のハケを施した後、底部外側面を横方向のヘラ状工具によるミガキを行うことにより仕上げている。内面は横方向にユビによりなでることにより調整を行っている。

9号墓(第46図) 6号墓の西側で検出された方形周溝墓である。西溝および北溝の一部を確認している。また、トレンチ壁面の土層観察により墳丘の南辺と推測される落込みを検出した。

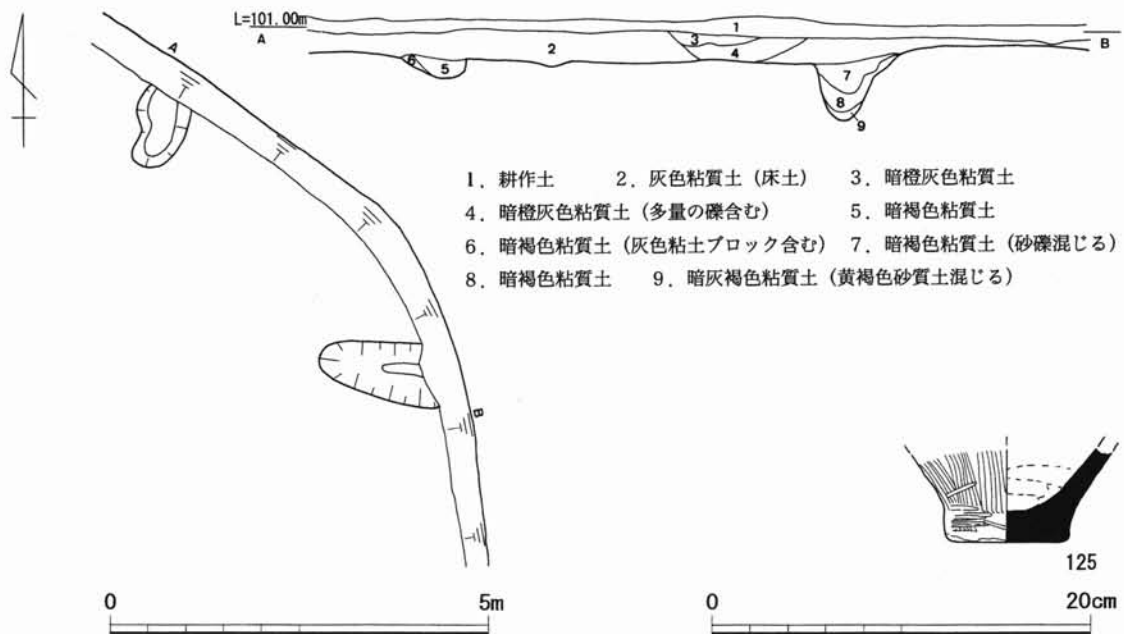
各溝は接続しておらず独立した土坑状を呈する。溝の規模は西溝が幅1.1m、長さ4.2m、深さ0.13m、北溝が幅1.1m、長さ2.7m以上、深さ0.7mを測る。これらの溝およびトレンチ壁面土層断面の落込み部分により区画される規模は東西3.5m以上、南北5mとなる。墳丘の主軸方向



第43図 E地区6号墓遺物出土状況および出土遺物実測図



第44図 E地区7号墓および出土遺物実測図



第45図 E地区8号墓および出土遺物実測図

はN28°Wを測る。

遺物は西溝南端から壺(第46図126)が底部を東に向けた状態で横位で出土した。また口縁は細片化して底部に載った状態で確認されている。溝底面より遊離して検出されていることから、方形周溝墓造成後、一定の期間を経た後に転落もしくは設置されたものとする。

出土遺物(第46図126) 図示しうるのは西溝出土の無頸壺1個体のみである。体部は最大径を中位よりわずかに下方にもち、底部は突出気味となる。また、底部外面はわずかに上げ底気味に整形される。頸部はわずかに外反気味に立ち上げられ、口縁部は外方向に屈曲することにより作り出され、端部を丸く収める。調整は体部外面下半に斜め方向のハケが、内面は体部下半に縦方向のハケを行い、頸部内面は横方向を主体とするユビによるナデにより調整を行っている。施文は頸部から体部上半にかけて行われており、頸部には3条の櫛描直線文、体部上半には1条の櫛描波状文が施される。また、口縁端部下半には刻目による加飾がなされている。

土壌墓 S K 61(第47図) 1号墓の南東、3号墓の西に位置する主軸を東西方向(N46°E)にとる土壌墓である。1号墓南溝と3号墓東溝とともに方形周溝墓を構成する溝である可能性も考えられたが東溝に相当する遺構が存在しないこと、仮に調査区外に存在すると仮定した場合規模がかなり巨大になること、土坑底面が幅広く平坦に作られていることなどから土壌墓であると判断した。

主軸方向が1・3号墓とほぼ一致することや、墓壙南辺が3号墓東溝南辺に、ほぼ一致することから1・3号墓に対して計画的に配置された土壌墓と考えられる。黒褐色粘質土層上面で墓壙の輪郭を確認している。

土坑は平面隅丸長方形プランを呈し、わずかに西側の方が幅が広い。規模は長軸1.8m、短軸1.2m、深さ0.4mを測る。埋土は2層に分かれ、上層(1層)が暗褐色粘質土層、下層(2層)が暗黄褐色粘質土層である。木棺墓である可能性も考慮しつつ掘削作業を実施したが、木棺の痕跡は断面からも平面からも確認することができず土壌墓であると判断した。

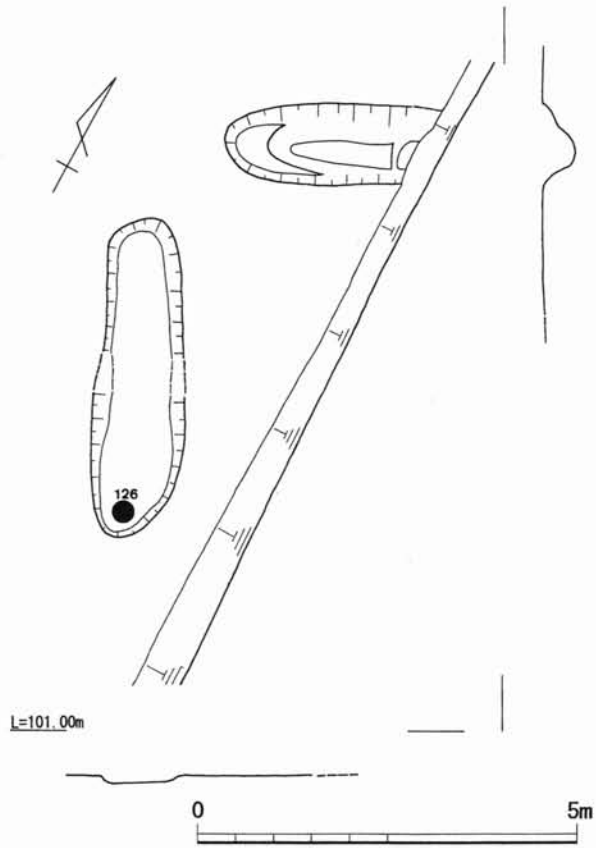
遺物は墓壙検出面で、壺・鉢・甕の破片がほぼ一定のレベルで検出された。また、埋土中からも小片ではあるが壺底部片(第47図131)が出土している。完形個体が含まれないことや、同一個体の破片が認められない。

出土遺物(第47図) 土壌墓 S K 61出土遺物には墓壙上面で検出した一群(127~130)と埋土中から検出されたもの(131)がある。

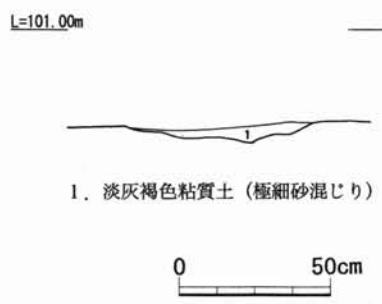
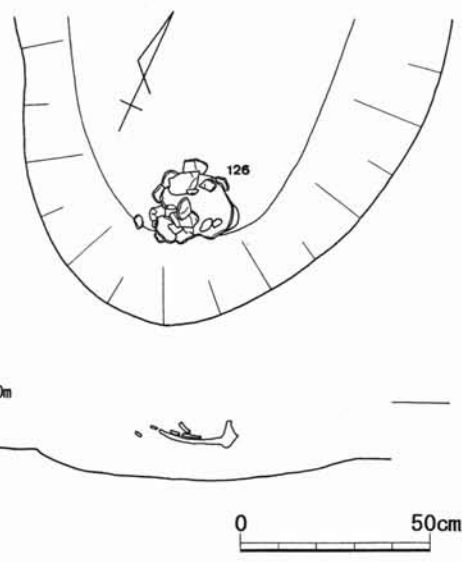
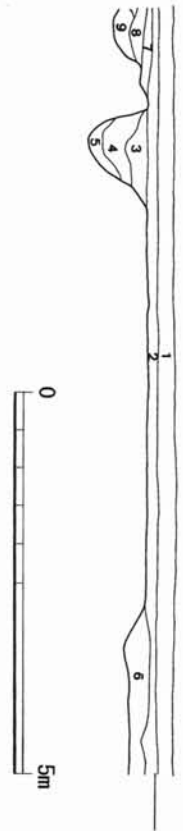
127は大形の広口壺口縁である。口縁は大きくゆるやかに外反し、端部は上下に肥厚させ、外側面に面をもつ。内面は微細な横方向のハケ、外面はナデにより調整を行っている。端部外面には2条の篋描き直線文を施した後、縦方向のヘラ状工具による刺突文により加飾する。

128は小形の広口壺の小片である。口縁は直線的にのび、口縁端部は面を構成する。外面に横方向のハケが観察される。

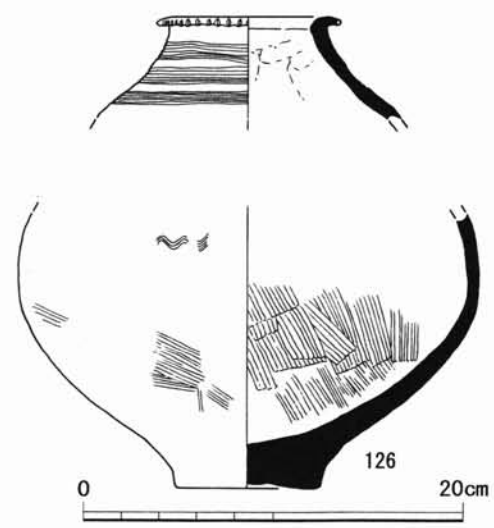
129は鉢である。口縁は短く外反気味に立ち上がり、端部はわずかに面をなす。頸部には横方向、体部には縦方向のハケが認められる。また、口縁内面も横方向のハケにより調整がなされ



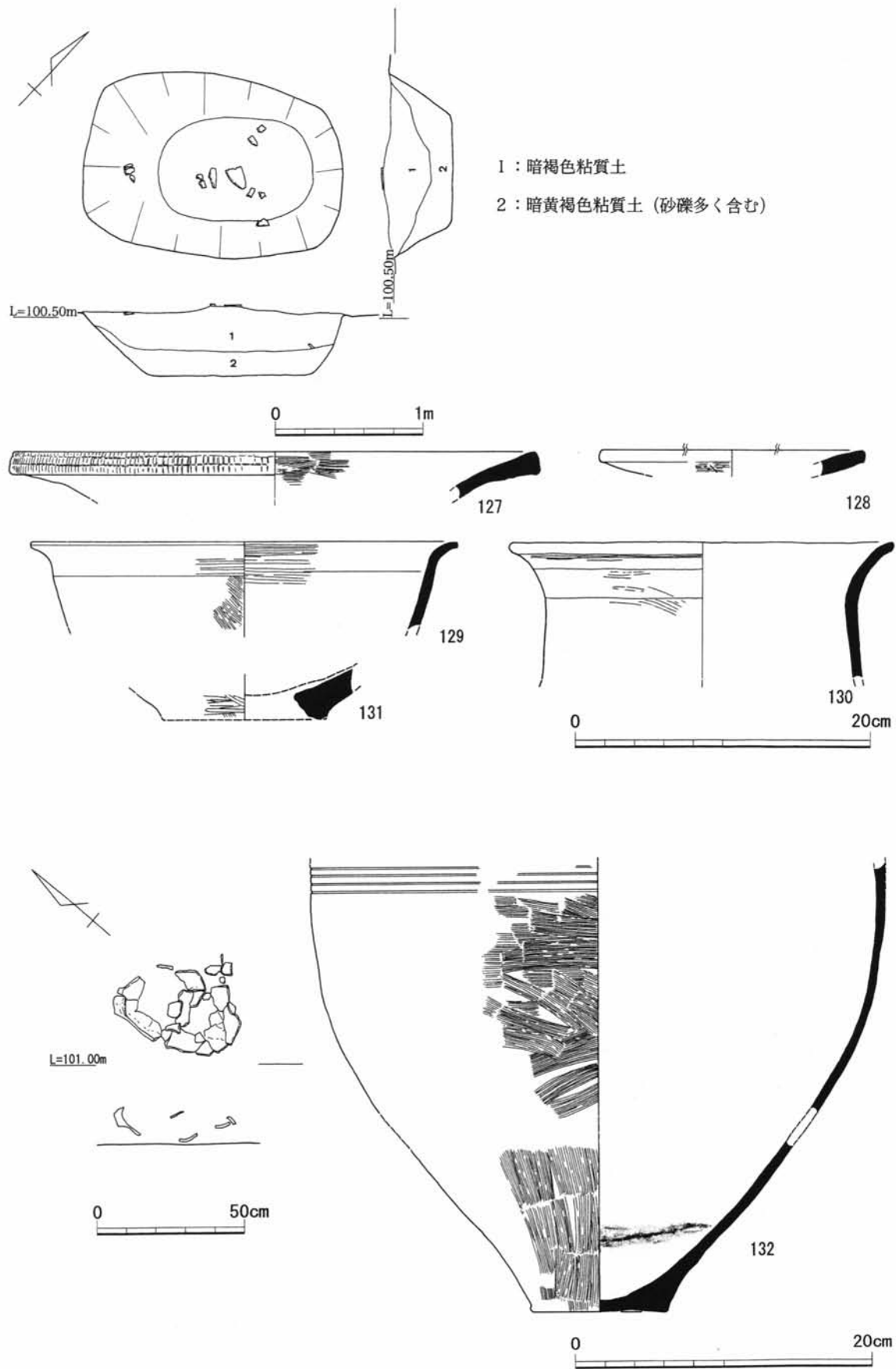
- 1. 耕作土
- 2. 灰色粘質土 (床土)
- 3. 暗黄褐色粘質土 (小礫混じり)
- 4. 暗褐色粘質土 (小礫混じり)
- 5. 暗黄灰色細砂
- 6. 暗黄褐色混礫粘質土 (遺物包含層)
- 7. 暗褐色粘質土 (小礫混じり)
- 8. 灰褐色粘質土 (小礫混じり)
- 9. 暗灰橙色砂質土



- 1. 淡灰褐色粘質土 (極細砂混じり)



第46図 E地区9号墓および出土遺物実測図



第47図 E地区土壙墓S K61・土器棺および出土遺物実測図

ている。

130は粗製の大型壺の口縁と考えられる。器壁は厚く、口縁はゆるやかに外反し、端部は丸く収める。外面はわずかに横方向のハケが観察される。

161は壺の底部小片である。外側面に横方向のヘラ状工具によるミガキがみられる。

土器棺墓(第47図) 3号墓南で検出された単体の大型土器片である。重機掘削作業中に検出され、周辺部分について精査を実施しながら掘り下げたが、掘形などを確認することはできなかった。しかしながら、他の包含層出土遺物にはこのような半完形に近い状況で出土したものがないことや、内面の器壁が荒れているなど、土器棺墓にみられる諸特徴を備えているため、土器棺墓と判断した。

土器棺には大型の甕を、口縁を南西に向け横位に用いている。上半はすでに削平され、残った部分も土圧などによる崩壊が進んでいたが、ほぼ水平に据え付けられていたものとみられる。主軸はN41°Wを測り、ほぼ3号墓と軸を揃える形となる。

出土遺物(第47図132) 遺物の劣化が進んでおり、細片化したものを一個体に復原することはできなかった。体部上端には4条の篋描き直線文を施し、体部外面は下半部を縦方向、中位から上半を横方向のハケにより調整する。内面は器壁の劣化が著しく調整に付いては不明である。また、内面底部付近には煮沸などの使用により形成されたとみられるススガリング状に付着しており、実際の煮沸具として使用されたものを転用したと考える。

2) その他の遺構群(ピット・土坑・溝など)(第48図)

これまで、弥生時代の方形周溝墓を中心に概観してきたが、これらの遺構以外にもピット土坑、溝などを検出した。本稿ではこれを上層遺構として簡潔に概観することとする。

ピット群は概ね、直径20~30cmの円形のもので主体である。現状では柵状に復原できるものがあるが、明確な掘立柱建物跡として復原しうるものはない。また、池尻遺跡7次D地区のように方形掘形をもつ大型掘立柱建物跡などは存在しない。

土坑はSK1やSK2のように不整形なものは人為的なものというよりは自然の凹凸に包含層中の遺物が入り込んだものと思われ、遺物こそ出土しているものの明確な遺構とは言い難い。

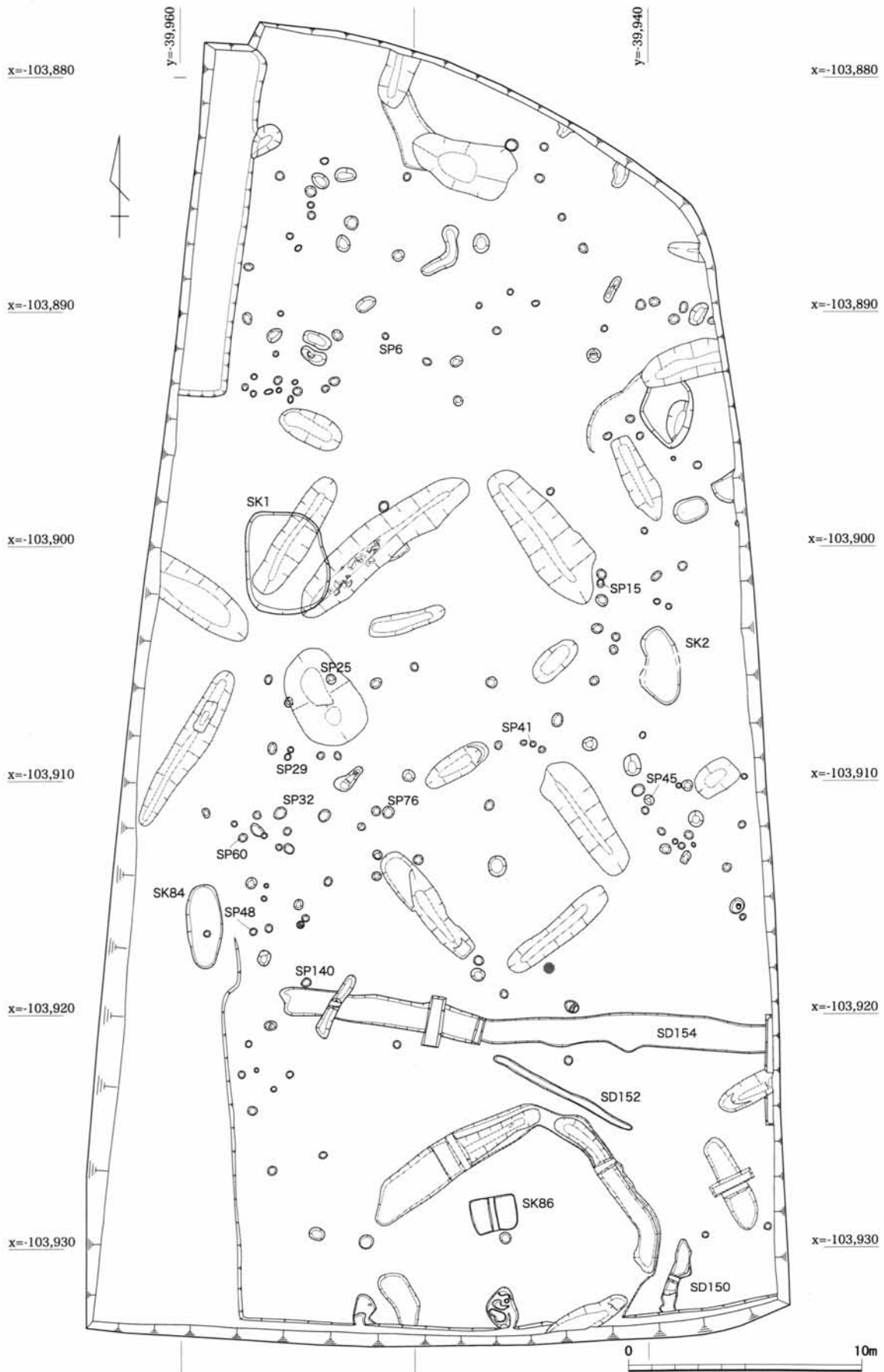
溝SD154は弥生土器片が少量出土したのみで時期の詳細は不明であるが、遺構自体は精査作業の初期から確認されていたため、弥生に遡るものではなく奈良時代以降のものと考えられる。

焼土坑SK86は長軸2m、短軸1.5m、深さ0.05mを測る長方形プランの土坑である。埋土中から焼土塊・炭・土師器小片が出土したが時期・性格などについて明らかにすることはできなかった。少なくとも弥生時代遺構のものであることは間違いない。

3) その他の遺構の出土遺物(第49図)

遺構出土遺物のうち、実測可能なものについてはほぼすべてについて実測作業を行った。

133~137は土坑SK1から出土している。133は須恵器椀である。底部に糸切り痕が認められる。134は灰釉陶器椀である。135は瓦器椀である。磨滅のため調整は不明である。136・137は土師器皿である。両者とも「て」の字状口縁をもつ。



第48図 E地区検出遺構(ピット・土坑など)実測図(空撮図化・1/250)

138はピットS P 6から出土した土師器皿である。やや厚手のつくり作りであるが「て」の字状口縁をもつ。

139はピットS P 32から出土した土師器皿である。やや厚手の作りであり、口縁を丸く収める。

140はピットS P 41から出土した土師器皿である。口縁を欠くが「て」の字状口縁をもつものと推測される。

141はピットS P 48から出土した土師器皿である。厚手のつくりであり、口径に比して器高の低い扁平なプロポーシオンを呈する。

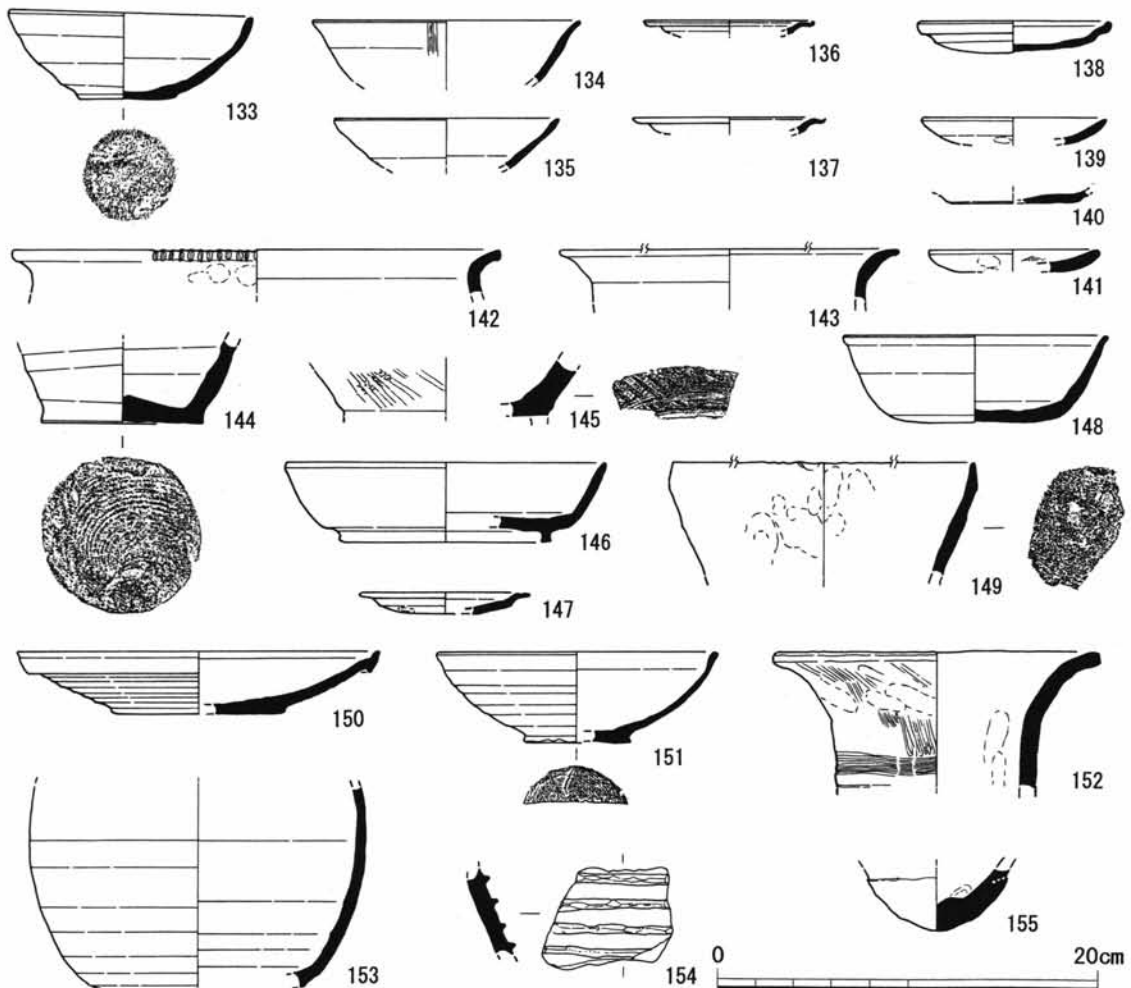
142・144はピットS P 25から出土した。142は口縁に刻目をもつ弥生土器甕口縁片であり混入品と考えられる。144は須恵器壺底部である。底部に糸切り痕が観察される。

143はピットS P 45から出土した土師器甕片である。わずかに外反する短い口縁をもつ。

145はピットS P 29から出土した須恵器甕底部片である。平行タタキがみられる。

146・147はピットS P 76から出土した。146は須恵器杯身である。体部はわずかに丸みを帯び、高台は底部のやや内側に付く、混入品であろう。147は「て」の字状口縁の土師器皿である。

148はピット48から出土した須恵器杯身である。高台を持たないタイプでありやや深手の作りである。



第49図 E地区ピット・土坑など出土遺物実測図

149はピットS P15から出土した縄文土器鉢である。無文の粗製品とみられる。

150・151はピットS P60から出土している。150は須恵器鉢である。浅いタイプであり体部外面には回転ナデによる凹凸が顕著にみられる。口縁は上下に拡張し面を構成する。151は須恵器碗である。口縁端部は外面を強く内面を肥厚させる。底部に糸切り痕が観察される。

152は溝S D150出土の弥生土器広口壺である。口縁は頸部からゆるやかに外反し、端部に面を作る。頸部には櫛描直線文が2条施文されている。

153はピットS P140から出土した須恵器壺体部片である。

154は土坑S K54掘削中に出土した弥生土器壺片である。4条の貼り付け突帯をもつ。

155は土坑S K84から出土した縄文土器鉢の底部と思われる破片である。

4) 包含層出土遺物(第50図)

第50図には包含層出土遺物を掲載した。

156は縄文土器鉢口縁の小片である、口縁外面をわずかに肥厚させ縄文を施す。

157は弥生土器甕である。口縁は短く屈曲し口縁端部に面を構成し刻目を施す。体部上半には5条の櫛描直線文を施文する。158～160は弥生土器壺の口縁である。158は厚手で無文である。159は刻目をもち甕の可能性もある。160は太頸の広口壺である。口縁は上下にわずかに拡張し、外側面に櫛描直線文、下端部に刻目で施文する。161は弥生土器高杯脚部である。今回の調査で出土した高杯はこの1点のみである。脚端部は上方につまみ上げている。162～167は弥生土器壺の底部、168～173は弥生土器甕の底部である。

174は須恵器蓋である。笠型の天井部に外側面に面を構成する端部が付く。175～181は須恵器杯身である。高台をもつものもたないものがあり、170は底部外側に高台が付く。181は直線的なプロポーシオンを呈する。182～184は須恵器碗である。185は須恵器碗の底部と思われ糸切り痕が観察される。186は須恵器皿である。187は須恵器鉢である口縁は短く外反する。188～196は土師器皿・杯類である。197は瓦器羽釜である。198は土錘である。199は手捏のミニチュア壺である。200は把手状の土製品である。201・202は瓦器碗である。両者とも内外面にミガキを施す。203は須恵器甕片である。外面は格子タタキ、内面には車輪状の当て具痕が観察される。204は磨製大型蛤歯石斧である。

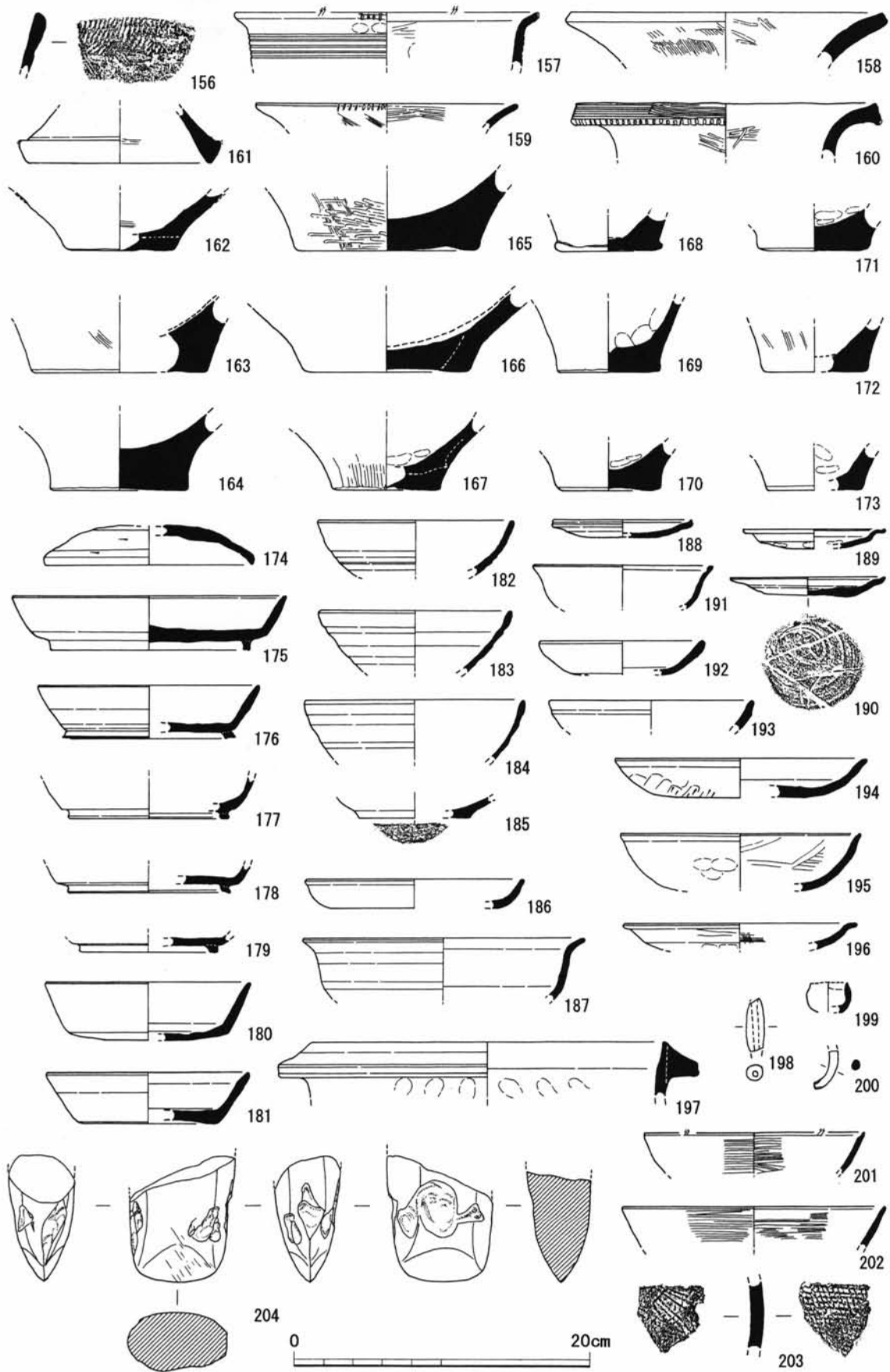
以上、包含層の土器には弥生中期後半から飛鳥時代の土器を除いてほぼ全期間の土器がみられ、さまざまな土地利用が継続的になされてきたことを示していると言えよう。

5. 小結

以上、池尻遺跡第7次の調査概要について概観してきた。大きく奈良時代と弥生時代に関して大きな調査成果が挙げられたものといえる。この2点に関して簡単にまとめておきたい。

(1) 奈良時代

今回の調査により奈良時代前半から中葉にかけての大形掘立柱建物跡群が溝・板塀により区画された中に整然と配置されている状況が明らかとなった。池尻遺跡第1次第3調査区で検出され



第50図 E地区包含層出土遺物実測図

た奈良時代初頭の土坑を切る大形掘立柱建物跡も位置関係から今回確認した区画内に存在した建物であると考えられる。区画の全体規模自体は不明であるが、こうした区画は今回の調査地の中で2か所が確認された。柵との位置関係から今回検出した建物群は区画の中心ではなく、西寄りに位置するものと判断され、中心的な施設はさらに東側に存在するものとする。また、建物の存続時期は長期にわたるものではなく、柱の大部分が抜き取られていることや出土遺物からみて短期間のうちに廃絶、移築がなされているものと判断される。

仮に北側の方形区画を方形区画1、南側のものを方形区画2とした場合、西辺の柵S A 04と柵S A 05を比較した場合、S A 05には方形掘形が採用されており、方形区画1の方がより整備で強固な区画施設を持っていた可能性が指摘できる。

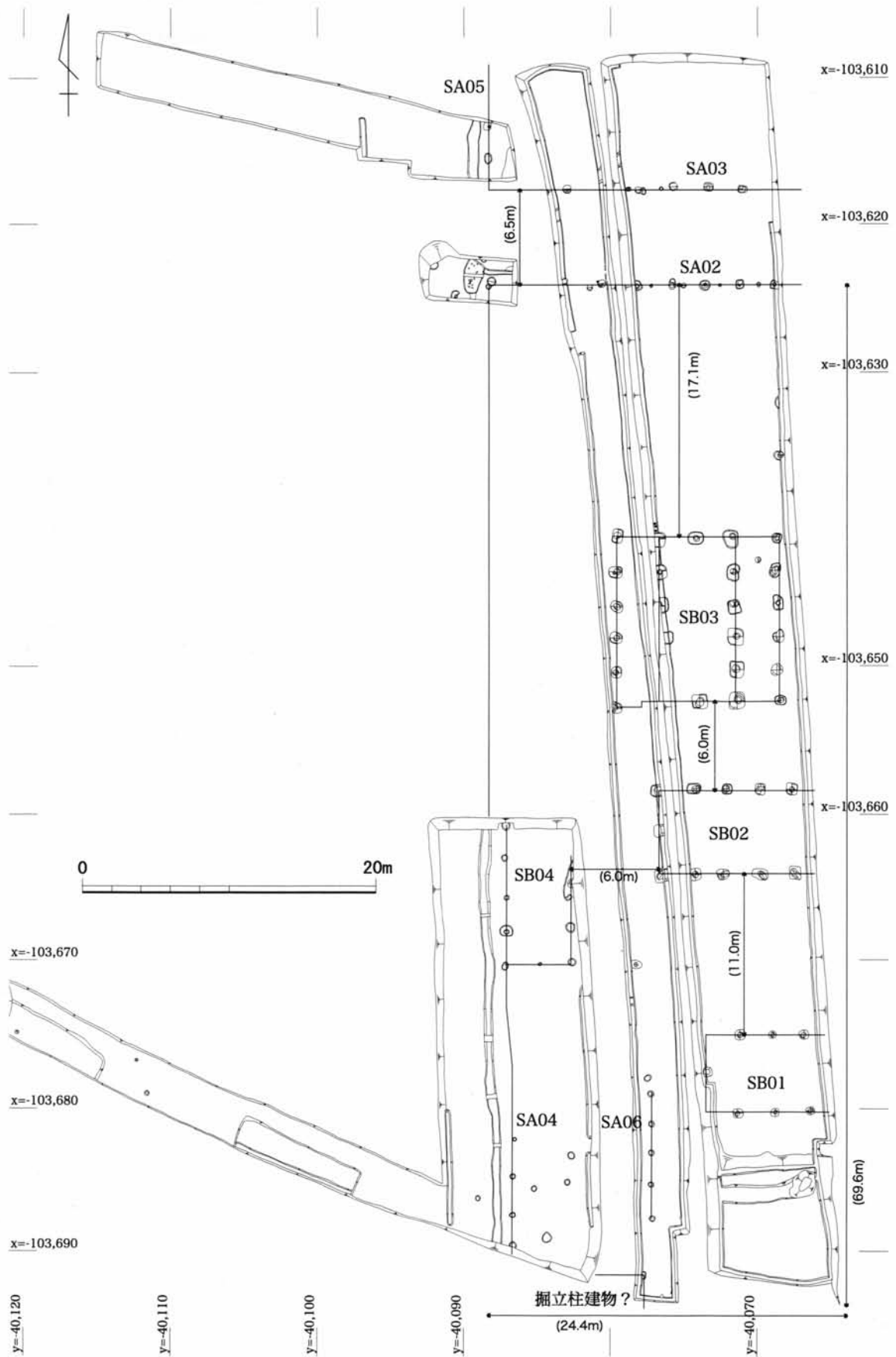
周辺で京都府教育委員会や亀岡市教育委員会が実施している発掘調査では、第52図に示す各地点からも一辺80cmから1mにおよぶ柱掘形をもつ掘立柱建物跡が検出されている。この調査成果からみて同様の区画と大形掘立柱建物跡群が更に広範に展開している可能性が高い。また、E地区の調査成果からはこの地区までは大形の掘立柱建物跡群が存在する可能性が低いことを物語っている。

また、この地区の条里制地割は若干東に方位を振って施行されているが、池尻廃寺南東隅で条里が乱れており、池尻廃寺寺域には少なくとも、条里施行段階で何らかの区画施設が残り、機能していたことが推測される。池尻廃寺出土瓦が白鳳期のものとされるのに対し、出土土器の主体的な時期は奈良時代前半から中葉に属することも興味深い点である。

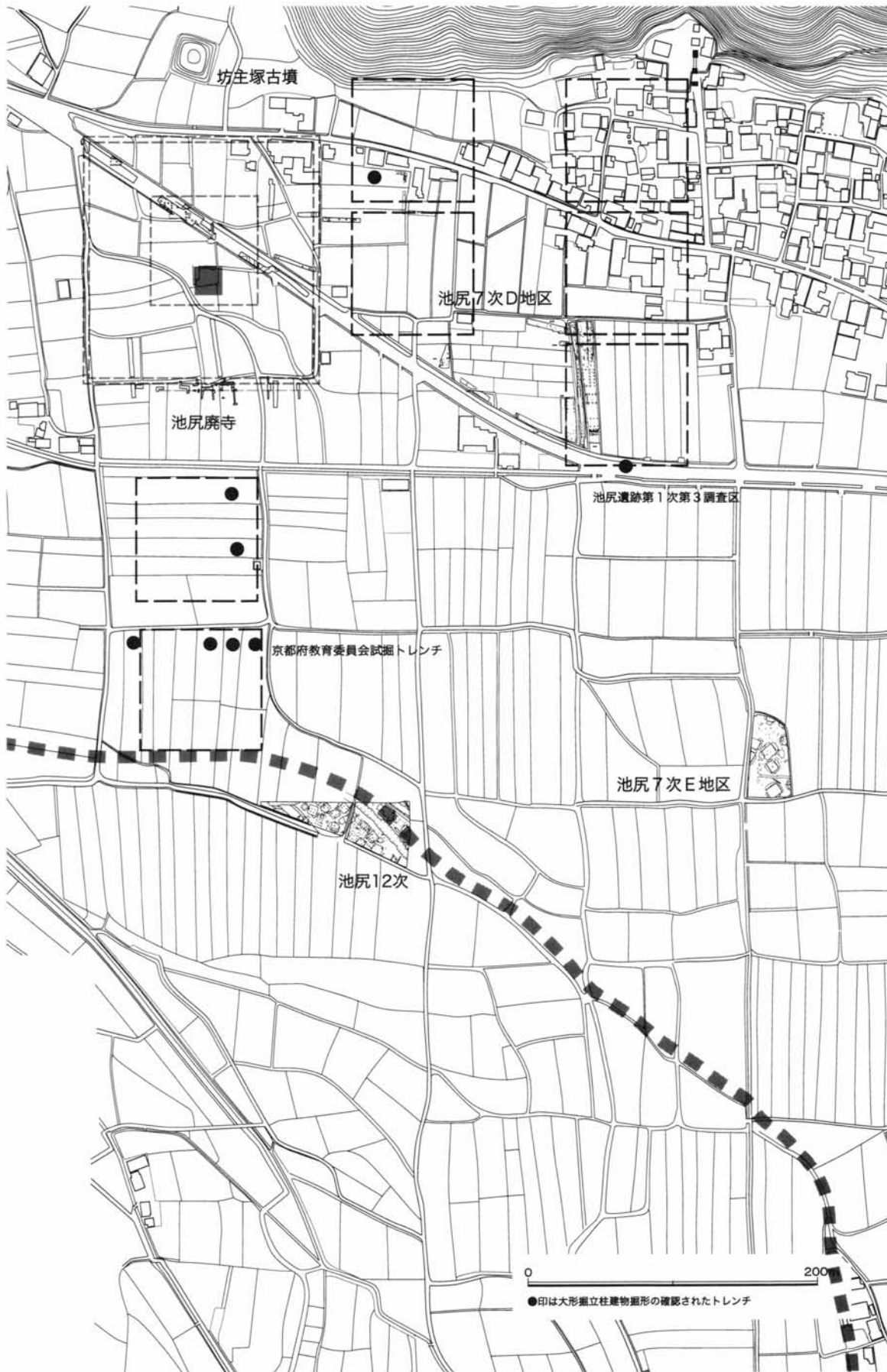
このように池尻遺跡では、大規模な区画内に配置された掘立柱建物跡群が複数存在しているものと判断することができる。大形建物の存在する地点に方形区画を想定した場合、第52図のようになると想定される。また、第52図の地形図にみられるように、呉弥山南裾部分は直線的に整形されている部分があり、区画群や建物群造営に際し大規模な造成作業が実施された可能性が考えられる。おそらくは方形区画群の造成に際し、計画的な設計がなされたものと考えられる。その際、池尻廃寺の中軸北に存在する坊主塚古墳が何らかの定点になっている可能性が地形図や、遺構配置図から読みとることができる。

以上の点から、今回検出した大形掘立柱建物跡群は少なくとも何らかの官衙的施設の一角を形成するものであるとみて間違いないと考える。官衙の性格としては丹波国府もしくは桑田郡衙の可能性を考えることができる。

国府であるか郡衙であるかについては、今回出土した遺物から検証することは困難であるが、掘立柱建物跡S B 03ですら中心的な建物ではないことや、池尻遺跡全体に展開する区画群や大形掘立柱建物跡群の存在を考えた場合、国府の一角である可能性が高いと考えたい。奈良時代には、丹波国分寺・国分尼寺が創建され、それに伴う瓦窯などが造営され、車塚遺跡第7次A地区においても官衙的建物群が検出されるなど、この地域には官衙的色彩の強い遺跡群が密集する。また、足利氏の想定された古山陰道がこの地域を通過する点なども国府の一角であることを傍証するものといえよう。近年の各地域における国府の調査成果から、国府は政庁を中心に配し、その周辺



第51図 D地区正方位遺構群配置図



第52図 池尻遺跡周辺方形区画推定復原図

に機能分化した官衙群(諸曹司)が配置されるものと考えられている^(注8)。今回検出した建物群も政庁ではなく、国府の一角を形成する官衙(曹司)であると考えたい。あるいは池尻廢寺自体が政庁である可能性もある。

これまで、有力な国府推定地として千代川遺跡があげられていたが、今回の調査成果は丹波国府所在地を検討する上で貴重な資料を提示することができたと考える。想像を逞しくすれば、丹波国分寺・国分尼寺造営という大規模事業を果たすとともに、国府の大きな役割は失われ別の地域に移転していったものではないかと考える。

以上、池尻遺跡第7次D地区では国府の一角の可能性のある建物群を確認することができた。近年の国営農地関係遺跡の発掘調査により、丹波地域の歴史は大きく書き換えられようとしている。今後、周辺地域の調査が実施されることにより、池尻遺跡を含め古代丹波におけるこの地域の位置付けがより明確になるものと期待される。

(2) 弥生時代

池尻遺跡第7次E地区では弥生時代中期初頭の方形周溝墓群を確認することができた。現在丹波で確認されるものとしては最古段階に相当し、弥生時代の墓制研究のうえで重要な資料を提示することができたものといえる。

亀岡盆地における方形周溝墓はこれまでⅡ様式～Ⅴ様式のもの確認されている。桂川東岸では時塚遺跡(Ⅲ・Ⅳ)、車塚遺跡(Ⅲ?)、池尻遺跡(Ⅱ・Ⅳ?)がこれまでに確認され、Ⅰ様式の墓としては池尻遺跡で土壙墓の可能性が指摘されるものがあるが、方形周溝墓のように区画墓として成立したものは未検出である。唯一、西岸の大田遺跡で環濠外に存在する溝が前期に属する方形周溝墓の可能性を示唆しているが、出土遺物がなく詳細な時期を決定することはできない。仮に方形周溝墓であればコーナー部分が途切れる形態を呈することとなる。余部遺跡(第3次調査)ではⅡ様式の方形周溝墓が確認されている。池尻遺跡と同様、コーナー部分が途切れる形態を呈している。

池尻遺跡で確認された中期初頭の方形周溝墓群の特徴としては、四辺の周溝は基本的に連結せず独立した土坑状の形態を示していることである。調査経過で述べたとおり本来の周溝掘り込み面である黒ボク層を更に掘削して遺構検出を行ったため本来、浅く完周する周溝の底部の深い部分だけを検出した可能性が高いが、少なくとも各溝の形態・深さが一定していないことが大きな特徴といえよう。また1号墓では周溝内に転落した角礫の存在から墳丘には何らかの石材を用いた構造物があったことが伺われ、これまでの方形周溝墓にない特徴を具える墳墓がこの地域に方形周溝墓を導入する段階に存在することが想定される。周溝は4・5号墓を除いて共有されることはなく各墳墓で独立している。

方形周溝墓の伝播に関しては藤井整氏が西日本の諸例についてまとめている^(注9)が本例は南丹波での導入期方形周溝墓を考える上で貴重な資料を提示したものといえる。

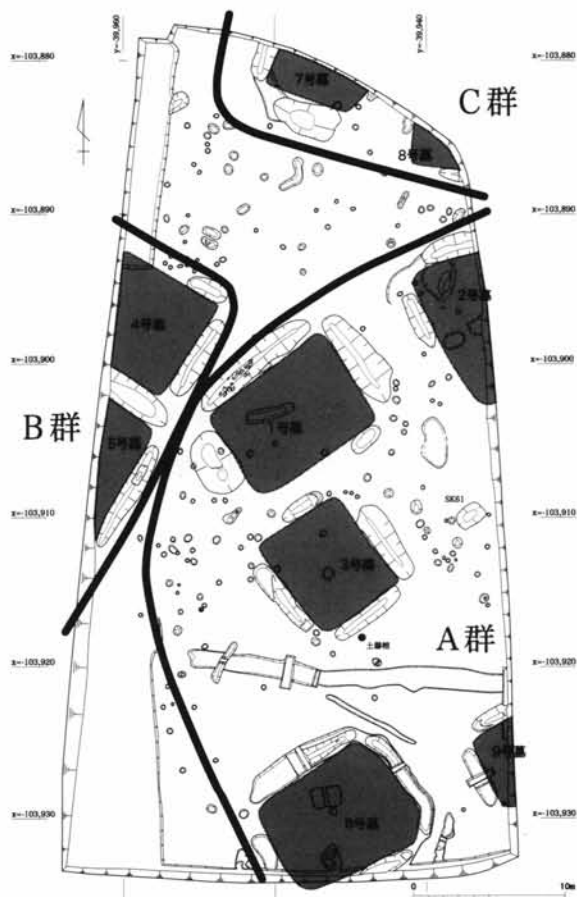
また、今回確認した方形周溝墓はその近接度および墳丘の主軸方位から大きくA～Cの3群に

分離して考えることが可能である(第53図)。この墓域ではいくつかの単位集団により造墓が行われたものと判断される。このような状況から、この方形周溝墓群は大規模な集落に伴うものである可能性が高く桂川西岸域に存在する拠点集落である余部遺跡に匹敵する中期初頭の拠点集落が近接して存在していることを示唆しているものといえる。

周溝からの遺物の出土状況を見ても、大型破片、もしくは半完形個体は概ね、周溝が一定程度埋没してから周溝内に入り込んだものとみられる。藤井整は大山崎町下上野南遺跡の方形周溝墓群土器出土状況を検討し、「供献」・「遺棄」・「投棄」の3つのパターンに分類し、様相の多様性について指摘している^(注10)。池尻遺跡第7次E地区の方形周溝墓では1号墓西溝や、3号墓南溝のように墳丘外からの転落もしくは「投棄」と考えられる遺物の出土状況を示すものや2号墓北溝にみられる細片化した1個体分の土器を「投棄」したような状態のものも認められる。また、平面的には周溝の端に半完形個体が出土する傾向にあることも注意される。6号墓を除いてほかの出土土器が方形周溝墓造成後、一定の期間をおいた後に溝内に存在するという点は、埋葬行為終了後の追善供養的な行為がなされている可能性を考慮する必要がある。少なくとも、弥生時代後期の今日丹後市赤坂今井墳丘墓や、古墳時代前期の木津川市平尾城山古墳などでも追善供養的な儀礼が行われている可能性が高く、こうした祭祀的な側面からも方形周溝墓の伝播経路を考察していく必要がある^(注11)。

そのほか、周溝から出土する土器には小片が多く含まれており、縄文土器やヘラ描直線文をもつものや粗製の壺などI様式新段階の土器も一定量含まれているため、これら、すべての土器が方形周溝墓に伴うものと判断することはできない。周辺から確認されているピット群に方形周溝墓に先行するものが含まれている可能性もあるが、出土遺物を検討する限りは方形周溝墓群に先行するのが確実なものではなく、やはり平安時代以降に掘削されたものであると思われる。遺物の量からみて弥生時代中期における継続的な人の活動があったものと思われるが、その行為の意味するところは推測の域をでない。

出土した土器のうち、甕には煤の付着するものや、火を受けて表面の剥離したものなど使用痕跡を留めるものが多く存在する点も注目される。今後、類例の増加を待って、方形周溝墓出土土器の性格について検討を行って



第53図 E地区方形周溝墓のグルーピング

いく必要がある。

方形周溝墓本体から主体部を検出することはできなかった。これは、周溝の深さからみて、周溝墓本体には相当量の盛土が施されており、盛土自体は削平で、また、遺構掘削面である黒ボク層は調査により除去してしまった結果であると考えられる。南丹市八木町池上遺跡では中期後半の方形周溝墓とそれに伴う主体部が多数確認されている^(注12)。これは、遺体を深く埋葬し、かつ盛土が少なかったためと考えられている。本例では、墓壙自体が浅く、なおかつ方形周溝墓の盛土内で墓壙が収められていたため検出できなかったものと推測される。今後のこの地域における方形周溝墓の調査に際しては一層の注意を払っていく必要があるものと考えられる。

方形周溝墓以外の埋葬施設として、土壙墓と考えられるSK61、土器棺墓と考えられる土器棺墓1がある。これらの主軸方位は1号墓を中心としたA群と同一であり、方形周溝墓に葬られない階層の人々がすでに存在していることが判明した。土器棺墓1は3号墓の南に近接して造られ、使用されている土器の主軸方位はこのグループとほぼ同一である。また、土壙墓SK61もこのグループと同一軸をとる。一定の方位を意識した造墓原理が存在した可能性を示唆している。

また5号墓東溝では溝内埋葬と考えられる土坑を検出している。きわめて小規模な土坑であり幅0.5m・全長1.2m程度である。土坑南側、周溝底には標石の可能性のある石材が置かれており、周溝埋没以前に掘削されたことが伺われる。

このように方形周溝墓に埋葬される人物群・溝内埋葬の人物・周溝墓外の土壙墓に埋葬される人物・土器棺に埋葬される人物に分化していることは、すでに社会的な階層が墓の形態に反映する形となっている点はこの時期の社会構造の復原を行っていく上でも貴重な資料を提示したといえる。

一方、池尻遺跡第7次D地区下層方形周溝墓群や、すぐ南に近接する馬路遺跡でも中期後半の方形周溝墓群が確認されており呉弥山南麓の微高地上を墓域が移動、拡大をしていっている可能性が高い。東の段丘上では時塚遺跡でやはり大規模な方形周溝墓群が集落跡とともに検出されているように、複数の造墓主体が各々の生活領域内で生産・造墓活動を行っている様相が明らかになってきつつある。今後、この地域では、各々の遺跡における墓域の確定とその変遷過程を明らかにする点、造墓主体の居住する集落の確定と墳墓との比較検討などが調査・研究の課題となっていくものと考えられる。

(石崎善久)

(2) 池尻^{いけじり}遺跡第12次

1. 調査経過

池尻遺跡は、亀岡市北東部の馬路町北側に広がり、東西約800m、南北約900mを測る、弥生前期～奈良時代の複合遺跡である。今回の調査地は、遺跡南西部の亀岡市馬路町八反田24番地ほかにあたる。当遺跡でセンターが調査した地点については、次数以外にアルファベットで地区名も付しており、G地区となる。

当地は、池尻古墳群が位置する呉弥山(標高160m)裾部から南側に広がる微高地の縁辺部にあたる。京都府教育委員会が事前に試掘調査(第11次)を行っており、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての竪穴式住居跡、柱穴群や溝などが確認された。その成果を受けて約2,500m²を対象に、当初は試掘調査で検出した住居跡の規模確認を目的に、約800m²の調査を実施した。その結果、新たな竪穴式住居跡や柱穴群と、これら住居跡を囲むかたちでの溝を検出した。このような状況から、豪族居館の一画でないかと考え、平成17年11月中旬に京都府・亀岡市教育委員会と現地協議を行い、対象地全面にあたる約2,130m²を、平成18年2月27日まで調査することになった。平成18年2月22日には空中写真撮影を実施し、同年2月26日に現地説明会を実施した。

2. 調査概要

調査地における基本層位は、約30cmの耕土層・床土下に10cmほどの暗茶褐色粘質土の遺物包含層があり、その下は黄褐色・黄灰色粘質土の地山となる。遺構は、遺物包含層下位から掘り込まれていた。

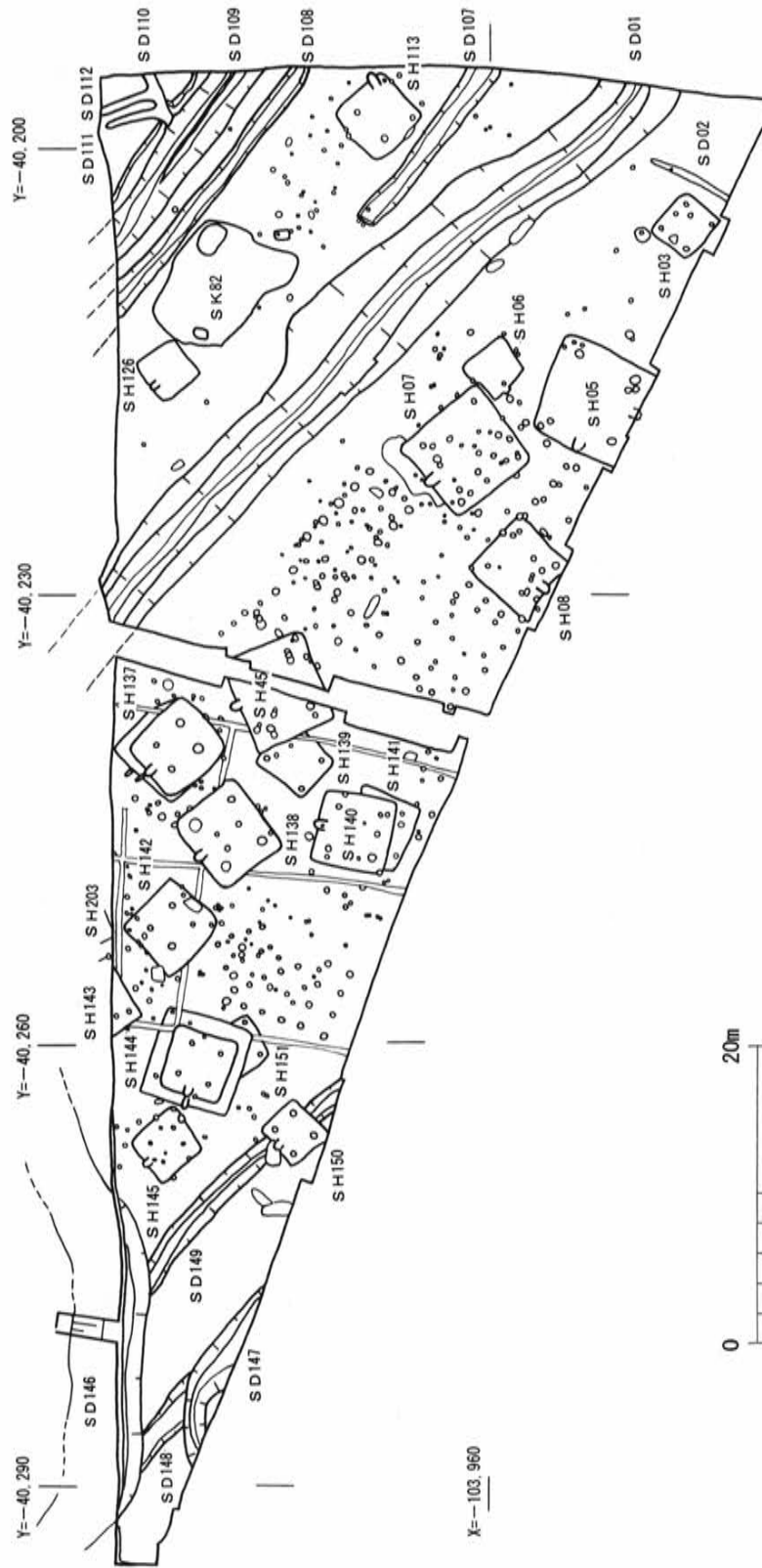
検出した主要遺構は、竪穴式住居跡20基(内、19基を調査、1基は調査地外)・掘立柱建物跡10棟・柵列2条・土坑5基・溝12条である。

(1) 竪穴式住居跡(第54図)

検出した竪穴式住居跡は19基であるが、調査地北側を土置き場にするため耕土を除去したところ、竪穴式住居跡1基を確認した。竪穴式住居跡の規模は、竈の付く辺×他辺で、主柱穴の柱間についても同様に記した。主軸方向については、竈の付く辺に直行する方向あるいは竈の中軸線を記した。主柱穴の番号については、住居番号の後ろに枝番を付した。

竪穴式住居跡SH03(第55図) 調査地の南東隅で検出した。住居跡の規模は、3.5m×3.6m、深さ約0.1m、主軸方位は、N50°Wで、小規模なものである。部分的に幅約0.2m、深さ約0.1mの周壁溝がめぐる。北西辺中央から0.7m×0.4mの範囲で赤色焼土を検出した。非常に残りが悪く、竈の形状をとどめていなかった。住居跡コーナー付近から径約0.3m、深さ約0.15mの主柱穴を4か所で確認した。主柱穴の柱間は、2.2m×2.4mである。

出土遺物 住居内埋土中より須恵器杯蓋1が出土した。平坦な天井部と下方を向く口縁部からなる。天井部外面は、ヘラ削りを施す。陶邑編年TK10並行期と考える。

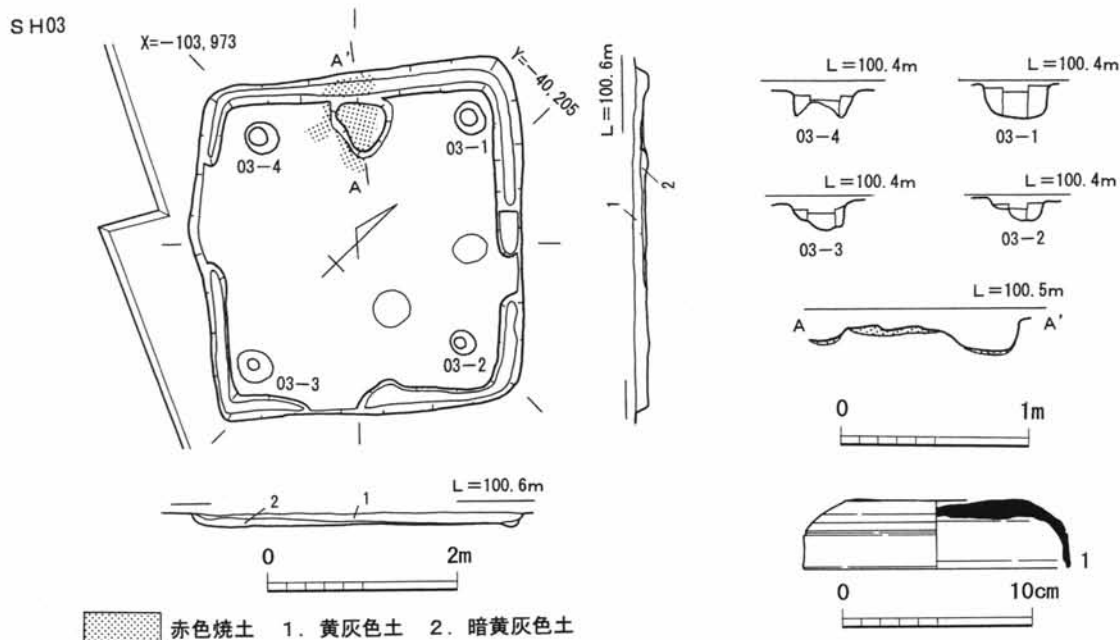


第54図 遺構配置図

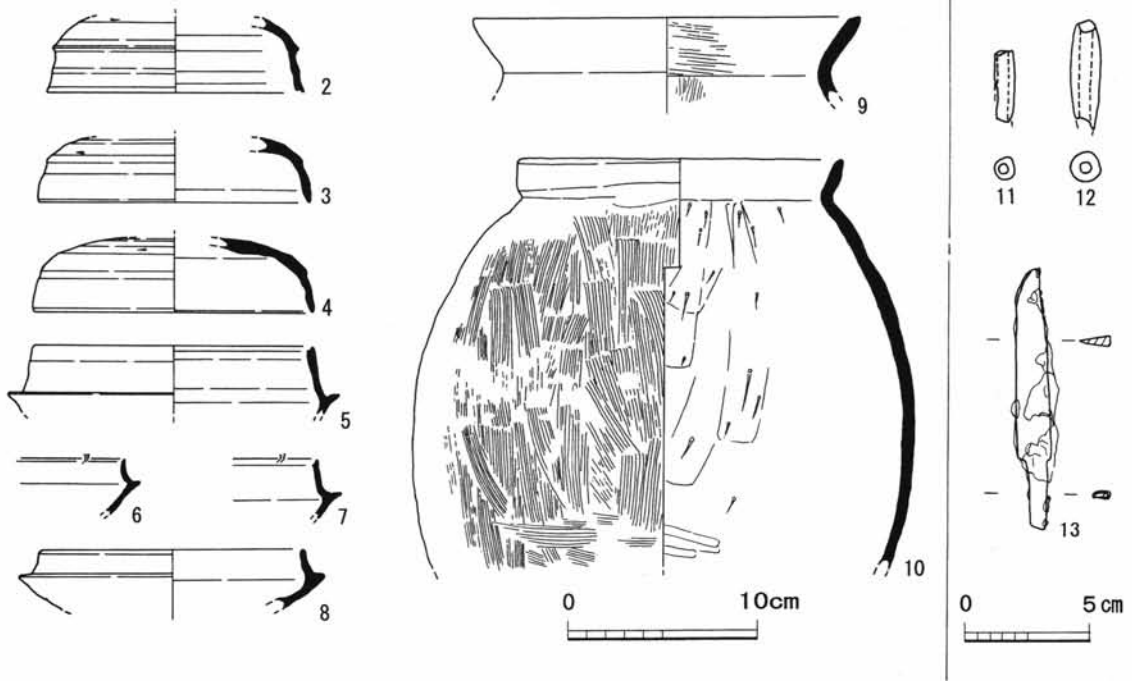
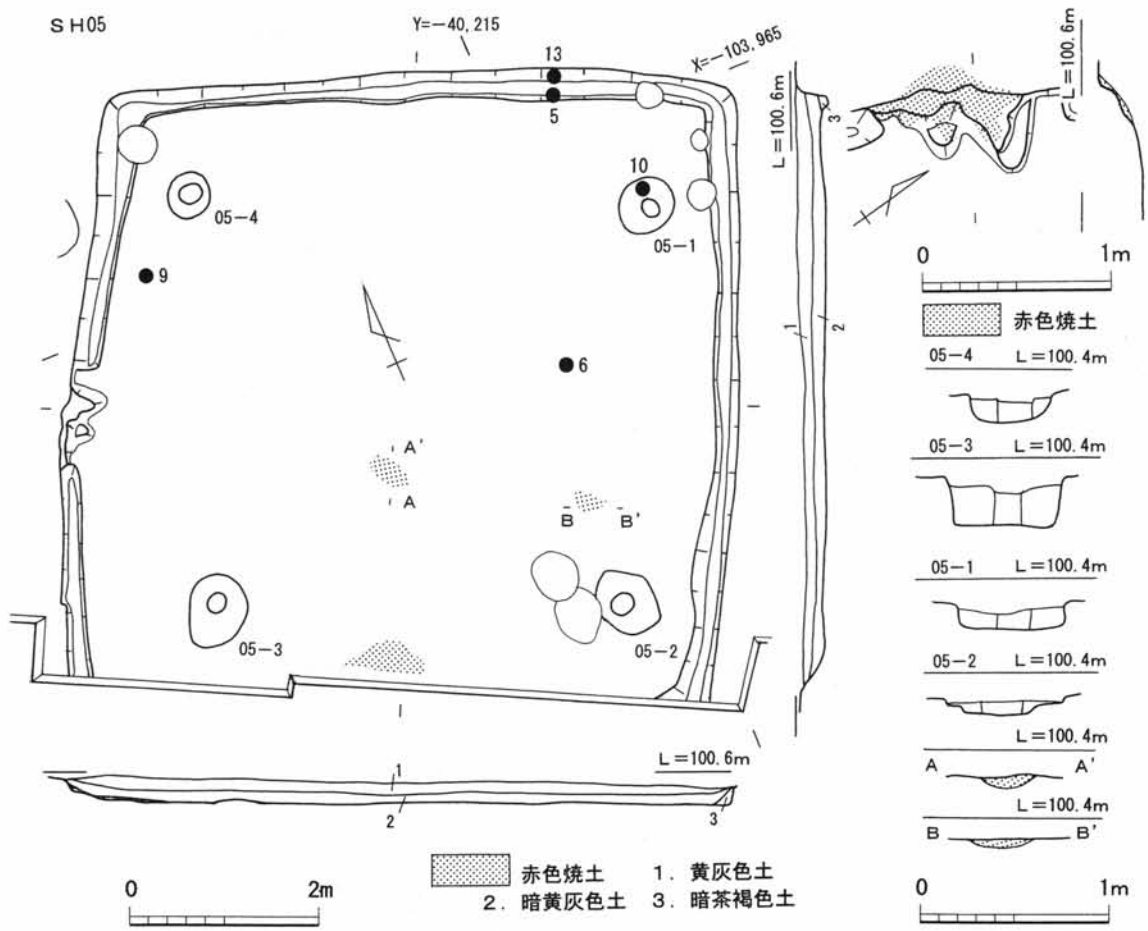
竪穴式住居跡 S H05(第56図) 調査地南東部で検出した、深さ約0.24mの住居跡である。南辺が調査地外となり、正確な規模は不明である。ほかの竪穴式住居跡の平面形がほぼ方形であることや、検出した周壁溝南東隅が屈曲し始めることから、概ね7.0m四方の大型住居で、住居の各辺に沿って幅約0.3m、深さ約0.1mの周壁溝がめぐる。南辺中央から非常に残りの悪い焼土を検出した。1m×0.5mの範囲が赤色に焼けており、竈の形状をとどめていなかった。また西辺中央からも焼土を検出した。0.6m×0.6mの範囲が赤色に焼けており、竈の裾部がわずかに残っていた。竈が造り替えられたと思われる。主軸方向はN65°Wである。床面中央付近や南東部からも焼土をわずかに認めた。厚さ約5cm比熱していた。住居コーナー付近から径約0.6m、深さ約0.1mの主柱穴を4か所で確認した。主柱穴の柱間は、3.8m×4.5mを測る。

出土遺物 住居跡床面から6・9が、主柱穴内から10が、周壁溝付近から5・13が出土した。2～4・7・8・11・12は住居内埋土中から出土した。上記遺物は、その形状から陶邑編年TK10～43並行期のものである。TK10並行期の2～5は埋土から出土したことから、混入遺物と考える。須恵器杯身6が床面から出土していることから、TK43並行期の住居と思われる。2～4は須恵器杯蓋で、平坦な天井部と下方を向く口縁部からなり、端部は平坦である。天井部外面をヘラ削りしている。5～8は須恵器杯身で、5は受け部から内上方に高く立ち上がる。6～8は受け部から内上方に短く立ち上がる。9・10は土師器甕である。やや縦長の体部からゆるやかに屈曲し、口縁部は短く立ち上がる。口縁部内面や体部外面には縦方向のハケ調整が施される。体部内面は磨滅のため調整不明である。また埋土中から土錘2点11・12も出土した。13は刀子である。刀部長約7.2cm、幅約1.4cmを測る。

竪穴式住居跡 S H06(第57図) S H07の東側で検出した住居跡である。住居跡の規模は、3.2m×3.6m、主軸方位はN40°Wである。ほかの住居とは異なり、焼土が3か所で認められた。最



第55図 竪穴式住居跡 S H03実測図および出土遺物実測図



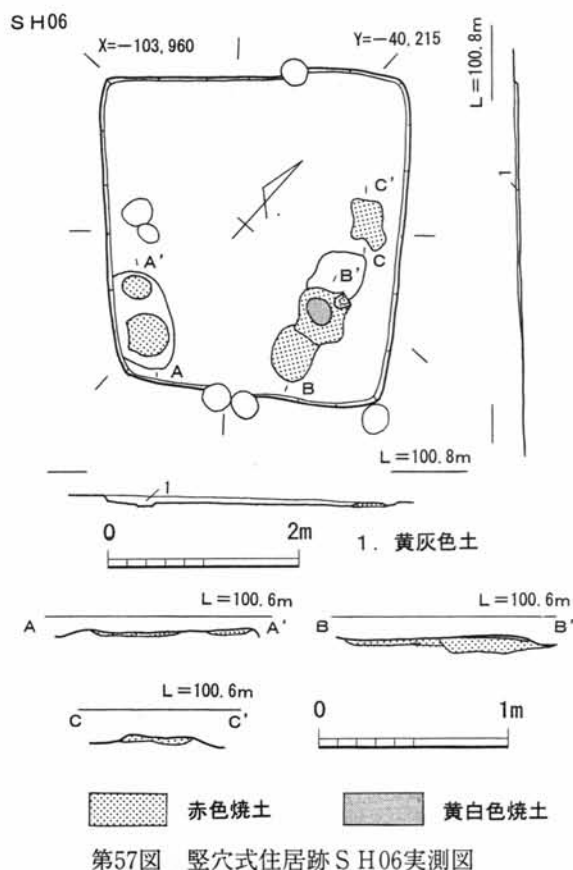
第56図 竪穴式住居跡 S H05実測図および出土遺物実測図

も良好に残っていた焼土の範囲は、南北約1m、東西約0.6mと細長い範囲で認められ、中央付近が堅固に焼けしまっていた。このような焼土が平坦な床面から盛り上がるようにあり、住居跡南側に片寄って認められた。焼土の検出状況から鍛冶段階の工房跡ではないかと考え、住居跡内を50cm方眼に区画し、区画ごとに埋土を取り上げた。洗浄した結果、鍛造剥片など鍛冶関係遺物は出土しなかった。しかし、隣接するSH07内から椀型滓1点(24)が出土していることやSH07と切り合い無く近接することから、両遺構は同時期で、当建物内で鍛冶工程を行っていた作業場と考えられる。

出土遺物 土師器の小破片が少量出土した程度で、時期を示すものはなかった。

竪穴式住居跡SH07(第58・59図) 調査地東側で検出した大型の住居跡である。住居跡の規模は、6.4m×6.6m、深さ約0.2m、主軸方向N38°Wであった。竈付近以外に部分的に途切れる周壁溝を巡らす。その規模は、幅0.3~0.4m、深さ約0.05mを測る。竈は北西辺中央に築かれていた。煙道部については不明である。両袖部間の内法は、約70cm、高さ約8cm、長さは約60cmを測る。燃焼部は、床面より8cmほど窪み、炭混じりの土が堆積していた。住居跡中央付近の床面直上から、2.5m×3.5mの範囲で炭が認められた。その炭は、藁のようなものが炭化し、繊維質が認められた。この住居は焼失家屋であったと思われる。主柱穴は、コーナー付近から4か所で認められた。主柱穴の柱間は、4.6m×5.0mである。柱穴の規模は、径0.4~0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。また、住居跡北西辺に沿う形で5.9m×2.1mの不定型な落ち込みを検出した。出土遺物がなく時期、当住居との関連については不明である。

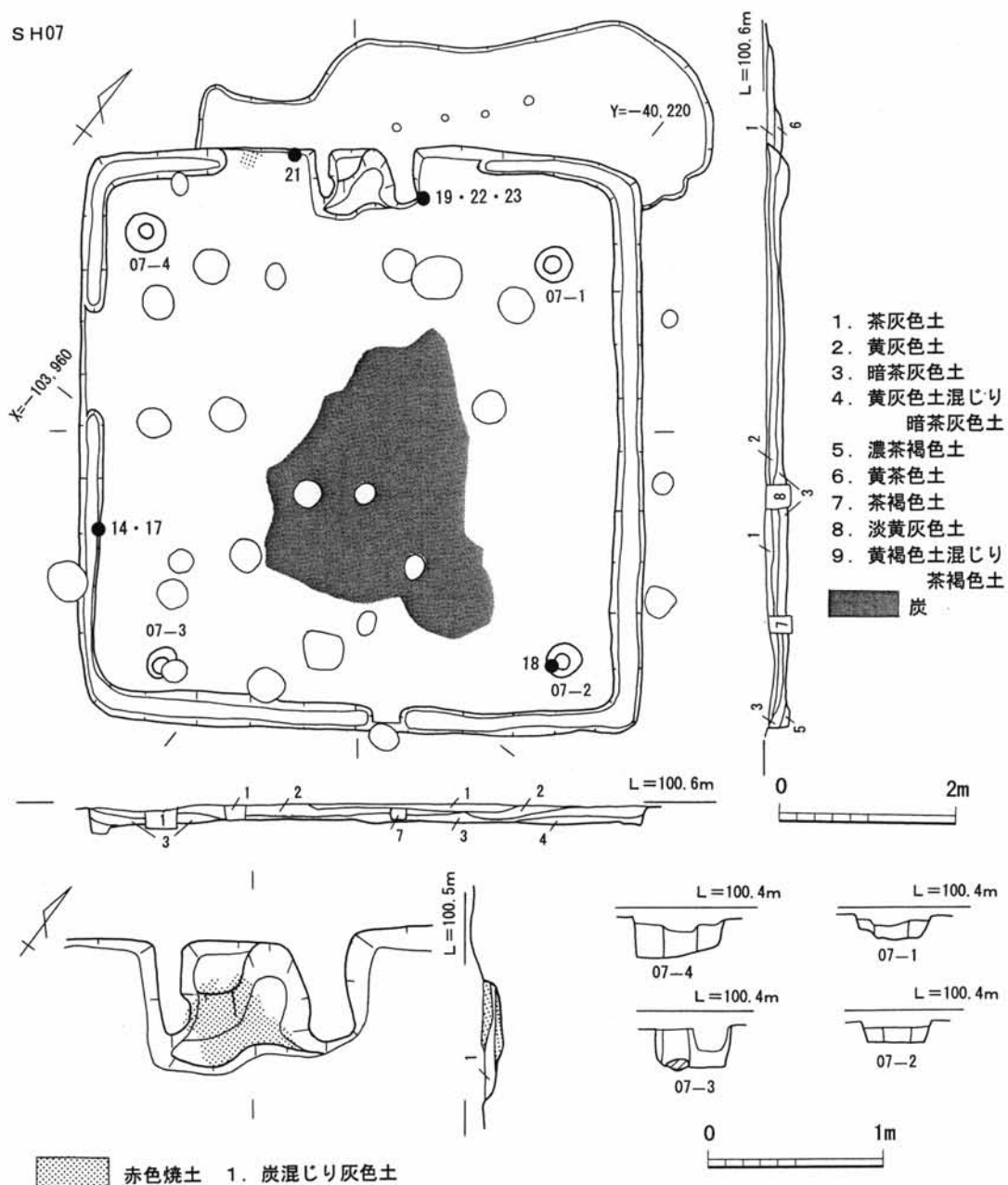
出土遺物 住居跡西辺の周壁溝の肩部から14・17が合わさる形で、主柱穴内から18が、19・21~23は竈付近から出土した。15・16・20・24は、住居内埋土中から出土した。須恵器杯蓋14・15と杯身17の天井部ならびに底部外面はヘラ切り後未調整である。その形状から陶邑編年TK217並行期のもと思われる、この住居の時期を示すものとする。16は杯身で混入遺物である。18は須恵器甕で、上方に肥厚する口縁部と頸部からなる。頸部外面にはカキ目が施される。19・21~23は土師器甕で、全体に磨滅しており、調整のわかる甕については、ハケ調整を主体としており部分的にナデ仕上げしている。24は椀型滓で、6cm×7cmを測り、底が椀状を呈す。SH07には鍛冶炉のような焼土が認められず、近接するSH06に存在することから、SH06からの混入遺物



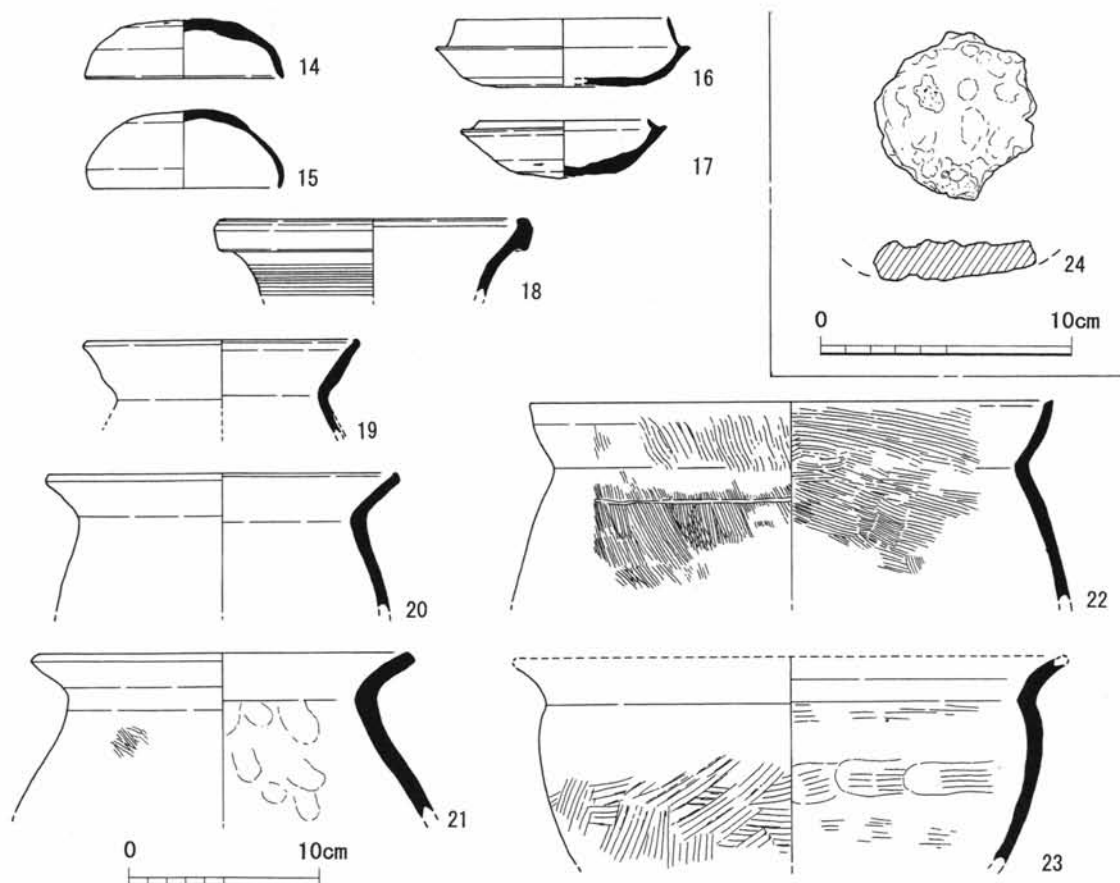
と考え、両住居は母屋と作業場であったと思われる。

竪穴式住居跡 S H08 (第60図) 調査地南東部で検出した。住居跡の規模は、5.1m×5.1m、深さ約0.15m、主軸方向N138°Wを測る。竈の付く南西辺以外を周壁溝が巡り、幅0.2~0.4m、深さ約0.1mを測る。竈は非常に残りが良く、本体の規模は、両裾部間の内法が35cmを測り、高さ約10cm、長さ約80cm残っていた。燃烧部は平坦で、中央やや煙道部寄りに石製の支脚を設ける。煙道部は不明である。主柱穴は竈付近のものが不明確である。ほかの主柱穴については住居コーナー付近から検出した。径約0.3m、深さ約0.1mを測る。主柱穴の柱間は3.1m×3.0mである。

出土遺物 周壁溝から25・27が、竈付近から26が出土した。25は須恵器杯身で、口縁部は欠損しているため、立ち上がりは不明である。底部外面をヘラ削りしていることから、陶邑編年TK



第58図 竪穴式住居跡 S H07実測図



第59図 竪穴式住居跡SH07出土遺物実測図

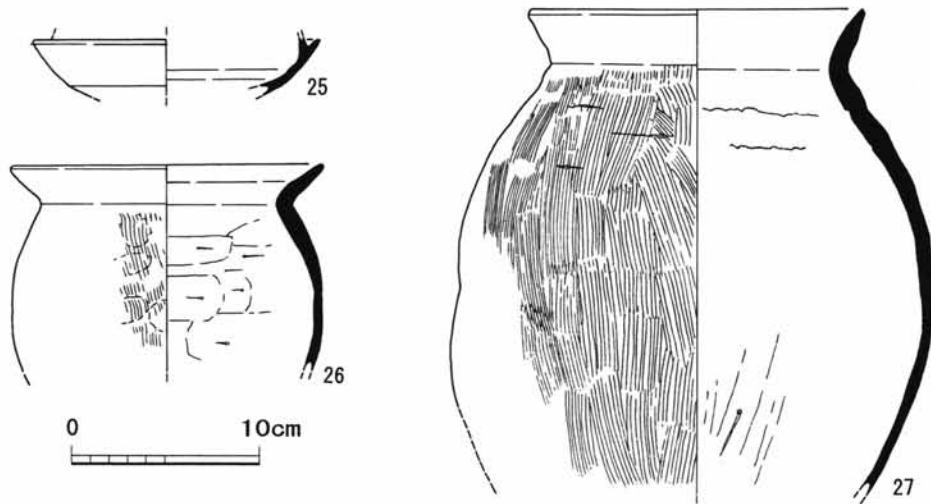
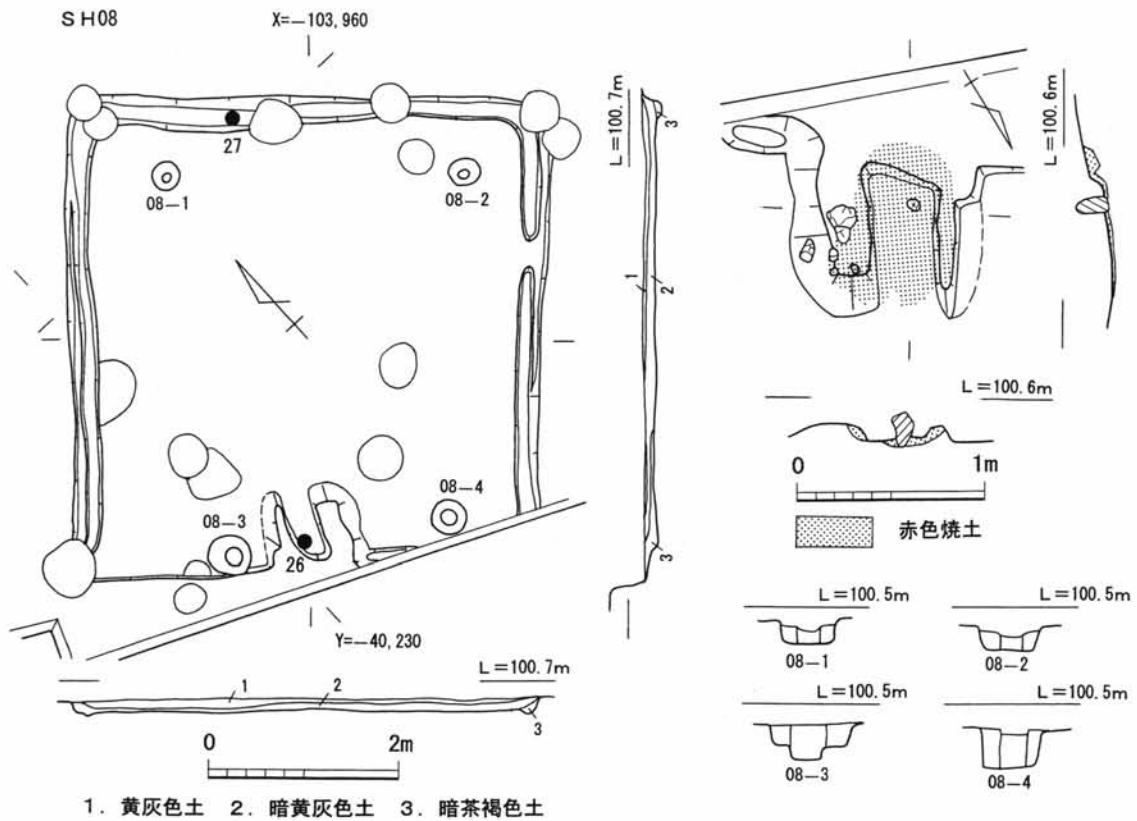
209並行期のものと考え。26は土師器甕で、竈燃烧部内から出土した。球形の体部と大きく「く」字状に屈曲する口縁部からなる。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はヘラ削りを施す。27は土師器甕で、口縁端部と体部外面には縦方向のハケ調整が施され、内面は部分的にヘラ削りの痕跡が残る。

竪穴式住居跡SH113(第61・62図) 調査地北東隅で検出した竪穴式住居跡である。住居跡の規模は、4.6m×4.7m、深さ約0.4m、主軸方向N60°Eを測る。竈を北東コーナー付近に設け、住居跡北西側に「L」字状の柵列を併設する形で検出した。この地域では、冬場北西風が強く、柵列はその防風対策に因るものと考え、竈は、柵列に規制され住居の一辺の端に設けている。竈本体の規模は、両袖部間の内法が約45cm、高さ約14cmを測る。燃烧部は平坦で、その奥はゆるやかに傾斜し、幅約60cm、長さ約50cmの煙道部が付く。竈周囲から多量の土器片が出土した。周壁溝は部分的に認められ、幅約0.2m、深さ約0.05mであった。主柱穴は、竈付近のものがやや南に設けられていた。径約0.3m、深さ0.1～0.2mである。主柱穴の柱間は、竈寄りの柱穴以外は2.5m×2.5mである。今回検出した住居跡の大半はSD01の南側に存在するが、溝の反対側である北側からこの住居が認められたことから、調査地北西側にも竪穴式住居跡が存在するものと思われた。

出土遺物 竈付近から28～32・34～36が、住居内埋土中から33が出土した。28は須恵器杯蓋で、29～31は杯身である。天井部ならびに底部外面を、ヘラ切り後雑なナデ整形を施す。器高が浅く、

立ち上がりは短く内上方を向く。33は須恵器甕で、頸部外面に波状文を施す。端部は、平坦である。32・34・35は土師器甕である。32・35体部外面を縦方向のハケ調整し、内面はヘラ削りを行う。34は、外面はハケ調整するが、内面は削りの痕跡は見られなかった。36は横瓶で、長楕円形の体部と短く立ち上がる口縁部からなる。体部内外面にはタタキ痕が残る。杯蓋・杯身の形状から、この住居の時期は陶邑編年TK209並行期と考える。

竪穴式住居跡SH126(第63図) 調査地北東部で検出した住居跡である。住居跡の規模は、3.3m×3.1m、深さ約0.4m、主軸方向N44°Wを測る。当初南東部に隣接する形で検出した土坑の

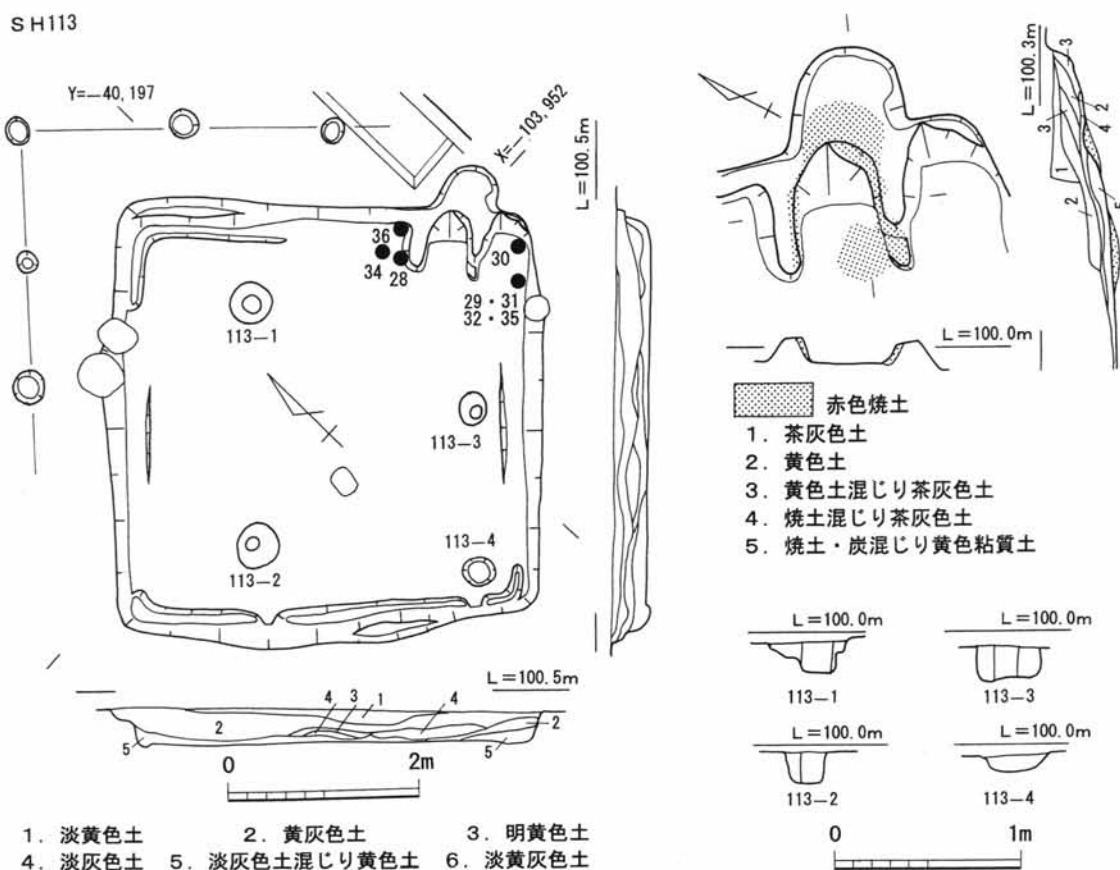


第60図 竪穴式住居跡SH08実測図および出土遺物実測図

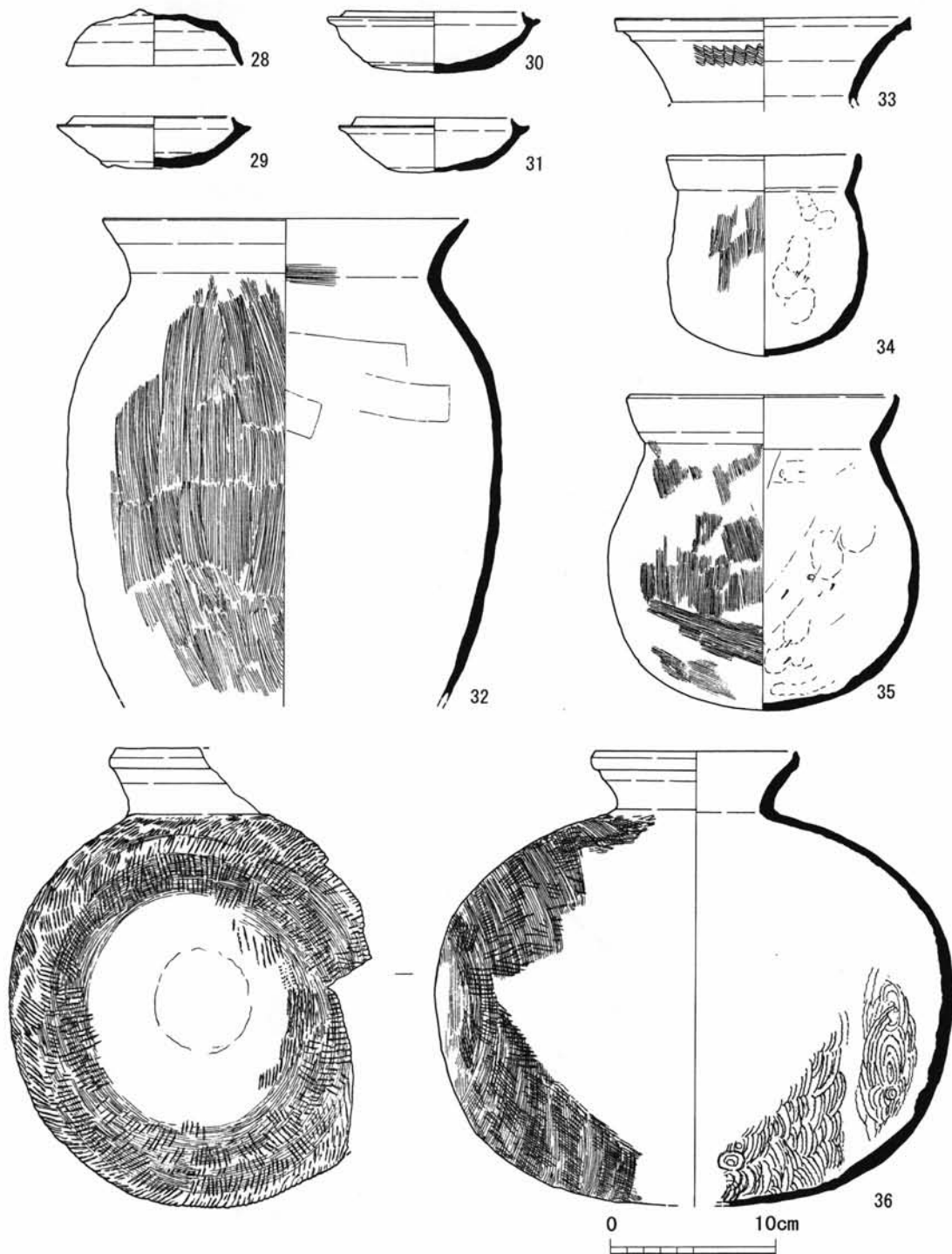
一部と見られたが、掘削するにしたがって方形の輪郭となり、北西辺中央で竈を検出したことから竪穴式住居跡とした。今回検出した住居の中でも時期の古いものであり、出土遺物から6世紀前半～中頃の遺構と思われる。住居内埋土中からも径20～30cmの範囲で赤色の焼土が認められたことから、2～3回の床面が存在し、最終床面時の住居規模をわずかに拡張しているため、周壁が「S」字状に屈曲し、半ば付近で段を有す。周壁溝については、築造時には築かれず、最終床面から部分的に認められた。支柱穴は、認められなかった。竈は非常に残りが良く、本体の規模は両袖部間の内法が40cm、高さ約20cmを測る。燃焼部付近には炭が堆積し、石製の支脚が立つ。煙道部は、幅約20cm、長さ約30cmを測る。

出土遺物 竈付近から37・39・42が、住居内埋土中から38・40・41・44～46が、43は南東辺の壁沿いで出土した。37～39は須恵器杯蓋で、丸みを帯びた天井部と下方にのびる口縁部からなる。口縁端部は平坦である。天井部外面は、ていねいなヘラ削りを施す。40～44は杯身で、丸みを帯びた底部と内上方に立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は、平坦である。底部外面は、ヘラ削りを施す。これら杯蓋・杯身の形態から、陶邑編年MT15ないしTK10並行期と考え、住居の時期とする。45は高杯で、4か所に長方形の透かしが施される。46は土師器甕でミニチュア製品である。体部内外面を指押さえて整形している。外面底部には煤が付着していた。

竪穴式住居跡SH45(第64図) 調査地中央で検出した。住居跡の規模は、6.5m×5.8m、深さ約0.15m、主軸方向N24°Wを測る。住居跡を横切る形で水路・畦が存在したため、支柱穴1か

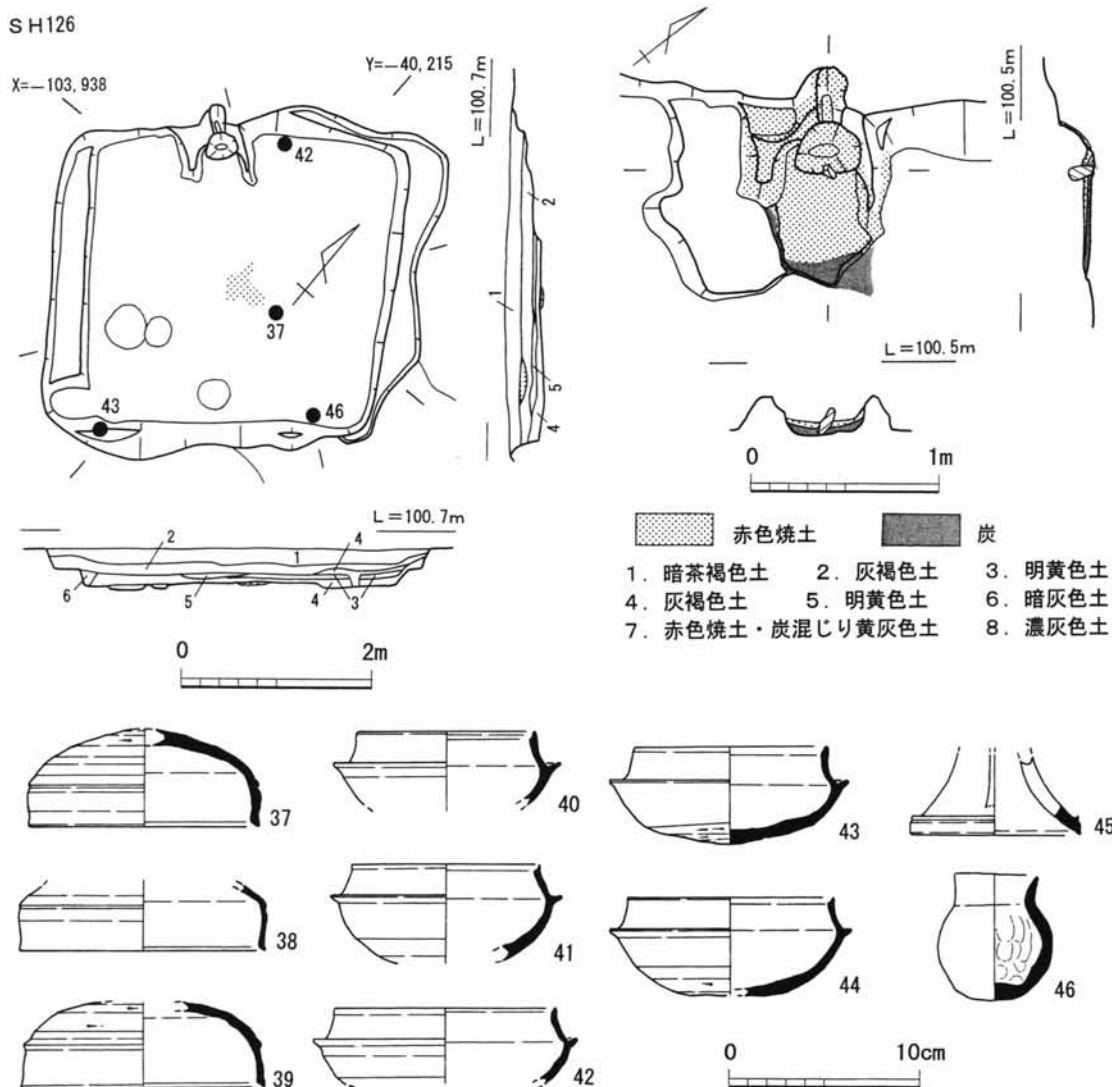


第61図 竪穴式住居跡SH113実測図



第62図 竪穴式住居跡 S H113出土遺物実測図

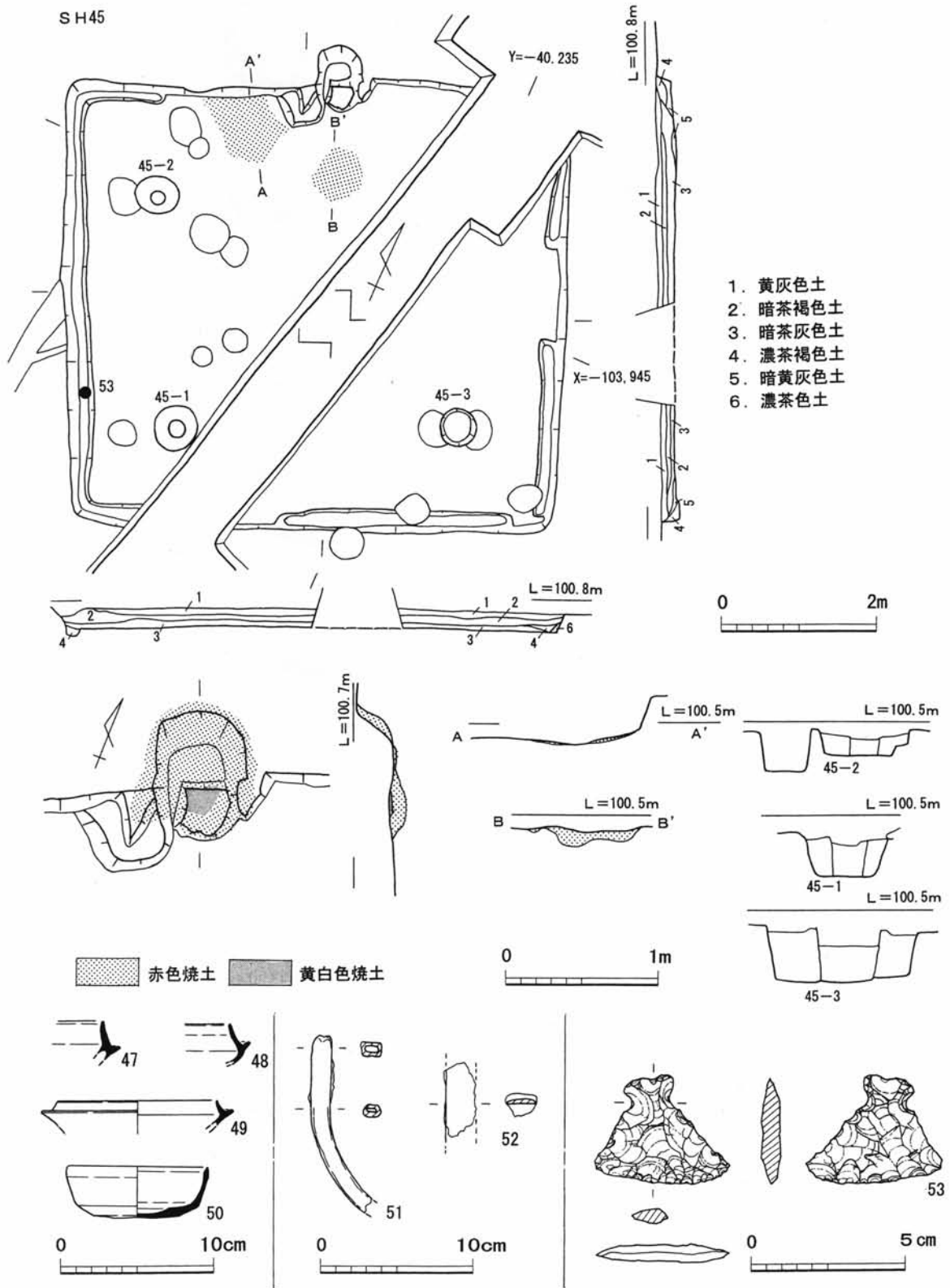
所が不明である。主柱穴の規模は、径0.4～0.6m、深さ0.15～0.35mを測る。主柱穴の柱間は3.7m×3.1mである。周壁溝は、竈付近以外で認められ、幅0.1～0.2m、深さ約0.1mを測る。竈は、北西辺中央に設けられ、本体の半分が竪穴部の外側に突出する形で検出した。両袖部の残りは悪く、煙道部も削平され不明である。両袖部間の内法が約50cm、高さ約20cm、長さ1mを測る。また竈の西側と南側からも焼土が認められた。その範囲は、西側の焼土が1m×0.8m、南側の焼土が0.6m×0.6mである。竈を使用した際に比熱したと思われる。



第63図 竪穴式住居跡SH126実測図および出土遺物実測図

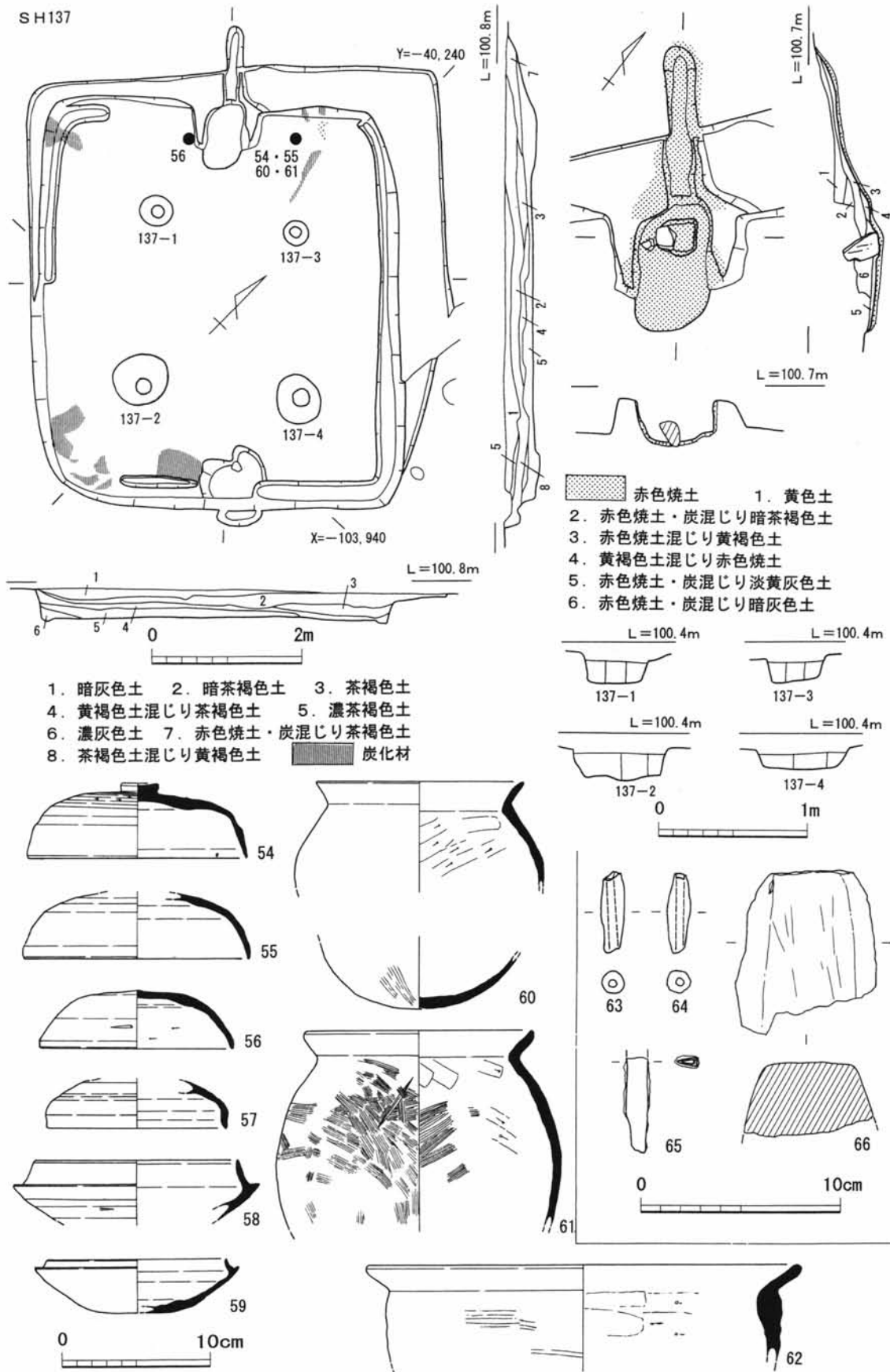
出土遺物 埋土中から47~52が出土した。53は、遺構検出時に住居南コーナー付近から出土した。47・48は須恵器杯身で小破片であり、混入遺物と考える。口縁部は、内上方に立ち上がる。49は杯身で、短く内上方に立ち上がる。50は杯身で、平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面はヘラ削り後ナデ仕上げを施す。その形状からTK217並行期と考え、住居の時期とする。51は鉄製品で、断面方形でゆるやかに屈曲する不明鉄製品である。52は、形状から刀子と思われる。石製品53は、住居内埋土に混入していた石匙である。

竪穴式住居跡SH137(第65図) 調査地西側北で検出した住居跡である。住居跡の規模は、5.8m×5.3m、深さ約0.35m、主軸方向N44°Wを測る。竈が良好な状態で検出できた。北西辺中央に設けられた竈本体の規模は、両袖部間の内法が幅約50cm、高さ約24cm、長さ約1mを測る。竈中央に石製の支脚を立てており、燃烧部はやや窪む。煙道部は、幅約20cm、長さ約1mを測る。支柱穴は、住居中央寄りから4か所で検出した。径0.4~0.6m、深さ約0.15mを測る。支柱穴の柱間は1.8m×2.3mである。周壁溝は部分的に存在し、幅約0.2m、深さ約0.1mである。また住居南と西側のコーナー、竈東側から炭・炭化材が認められ、焼失家屋である。住居南東辺中央床



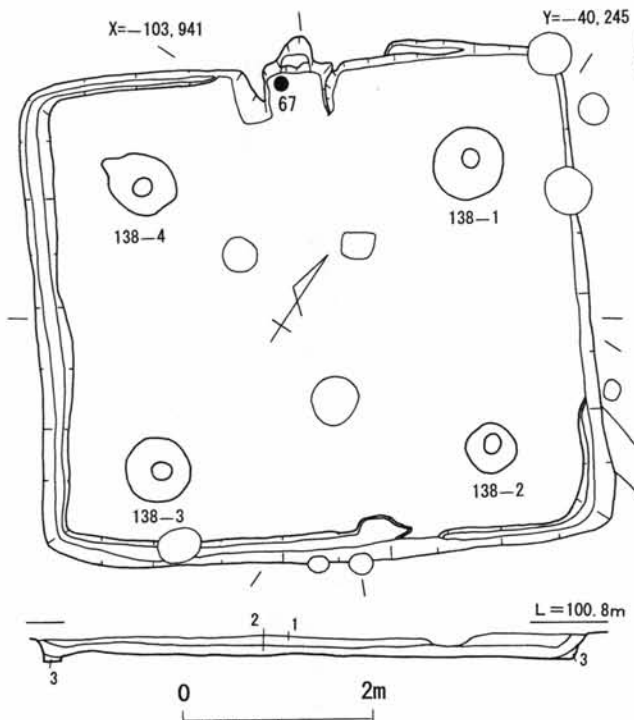
第64図 竪穴式住居跡SH45実測図および出土遺物実測図

SH137

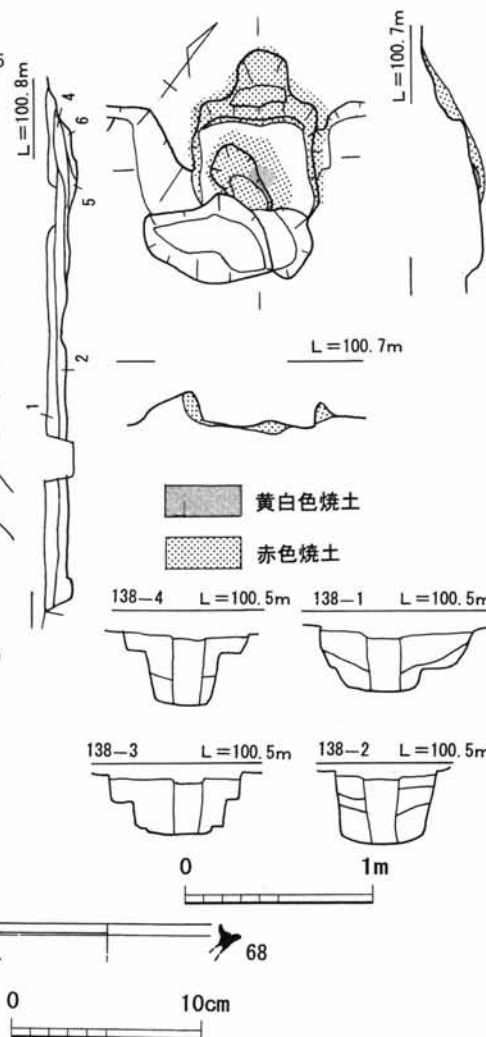
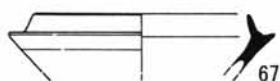


第65図 竪穴式住居跡SH137実測図および出土遺物実測図

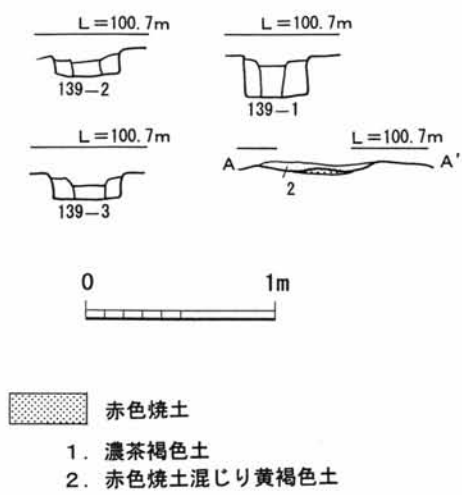
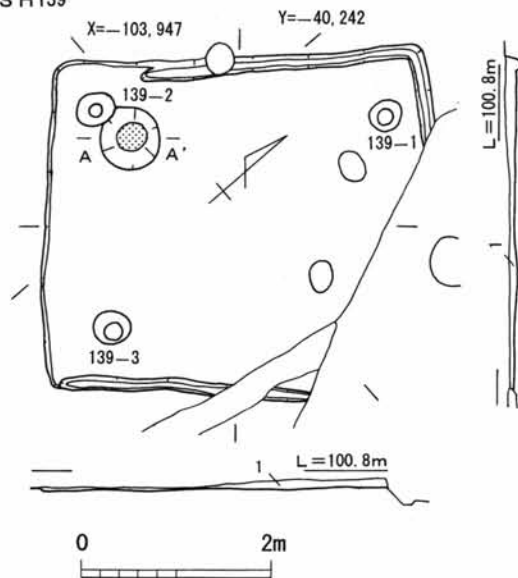
SH138



1. 茶灰色土
2. 黄褐色土混じり茶褐色土
3. 茶黄色土
4. 茶褐色土
5. 暗茶褐色土
6. 赤色焼土混じり暗茶褐色土

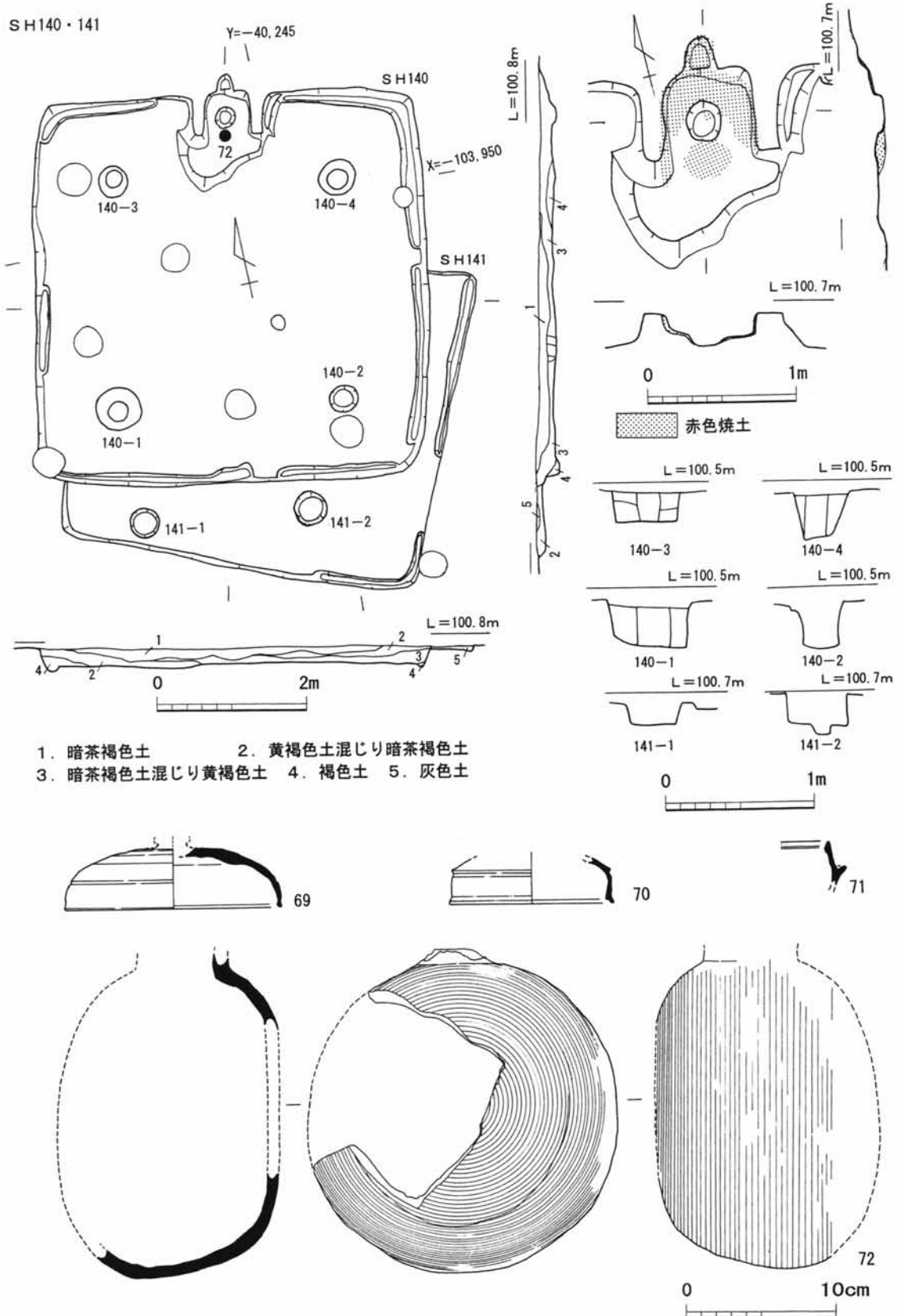


SH139



1. 濃茶褐色土
2. 赤色焼土混じり黄褐色土

第66図 竪穴式住居跡 SH138・139実測図および出土遺物実測図



第67図 竪穴式住居跡SH140・141実測図および出土遺物実測図

面が、80cm×50cm、深さ約10cmの範囲で窪んでいた。この窪みの一辺である竪穴部が幅約60cmの階段状を呈していたことから、住居への出入り口にあたると思われた。

出土遺物 竈付近から54・56・58・60・61が、埋土中から57・59・62～66が出土した。54は須恵器杯蓋で、有蓋高杯の蓋である。天井部外面はヘラ削りをおこない、扁平なつまみが付く。55・56は杯蓋で、天井部から口縁部にかけて丸みを帯びる。55はヘラ削りをし、56はヘラ切り後ナデ仕上げしている。57は杯蓋で、口縁部が下方を向く。天井部外面はヘラ削りする。58・59は杯身で、その形状から時期差が認められた。58は外面をヘラ削りし、59はヘラ切りを行う。60・61は土師器甕で、球形の体部と外上方を向く口縁部からなる。外面はハケ調整し、内面はハケ調整とヘラ削りを施す。63・64は土錘である。65は、鉄製品刀子である。66は、砥石である。この住居跡から出土した遺物は、陶邑編年TK43～209にかけてのもので、この住居については長期にわたって営まれたと思われる。

竪穴式住居跡SH138(第66図) 調査地西側で検出した住居跡である。住居跡の規模は、5.8m×5.3m、深さ約0.2m、主軸方向N35°Wを測る。北西辺中央に設けられた竈本体の規模は、両袖部間の内法が約60cm、高さ約16cm、長さ約60cmを測る。燃烧部は、わずかに窪み、平坦である。煙道部は、幅約25cm、長さ約25cmを測る。主柱穴は、コーナー寄りの4か所で検出した。柱穴の規模は、径0.4～0.8m、深さ0.3～0.4mを測る。主柱穴の柱間は3.4m×3.0mである。周壁溝は、南東辺と南西辺のみに設けられていた。幅約0.2m、深さ約0.05mである。

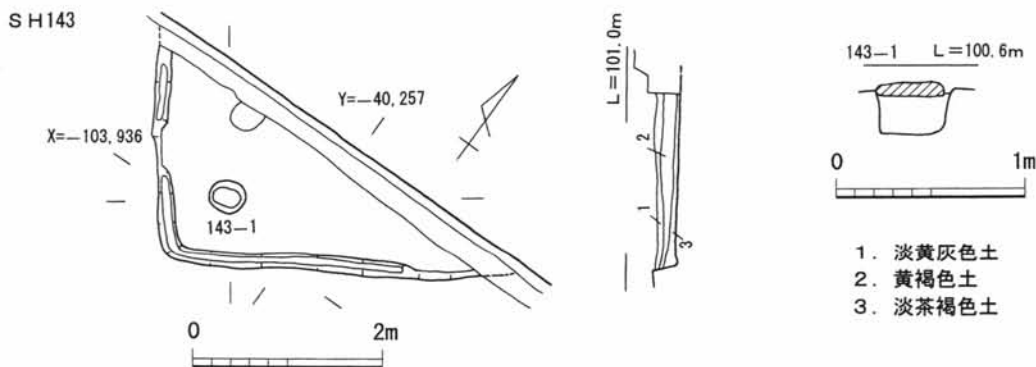
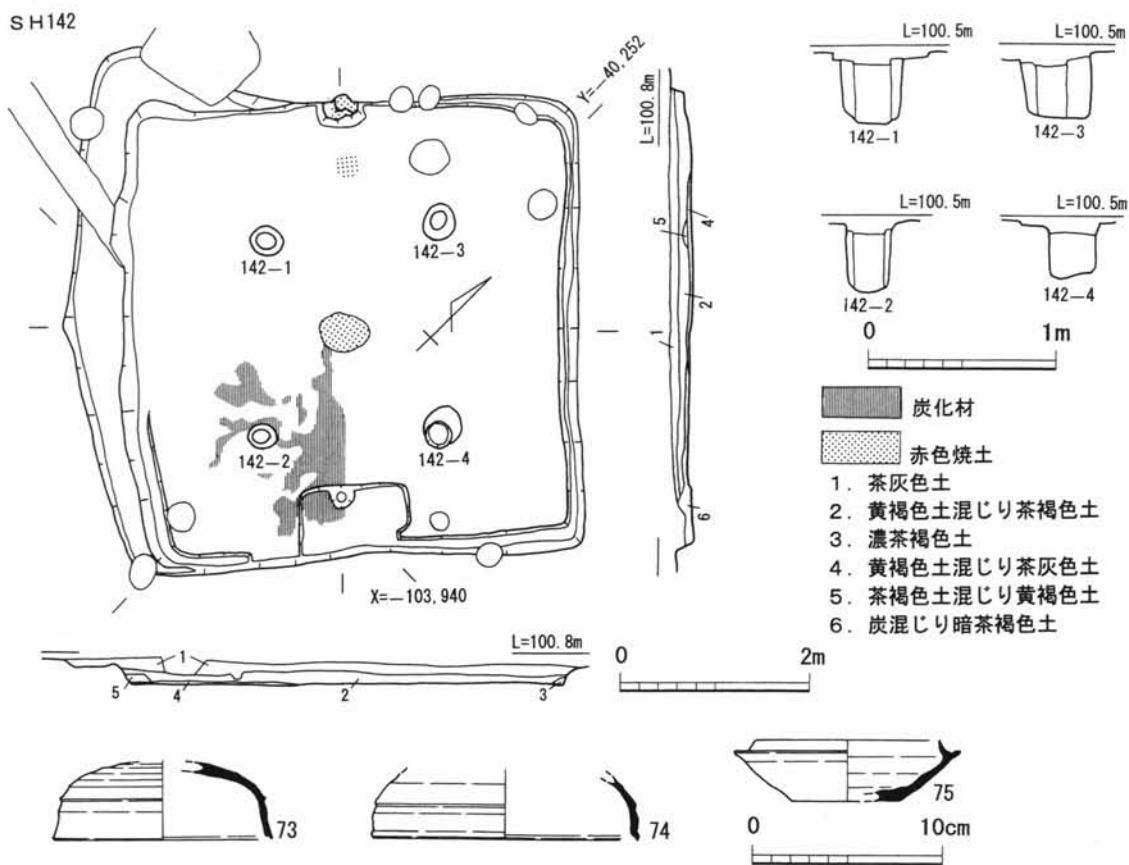
出土遺物 住居内埋土中から67・68が出土した。67・68は須恵器杯身で、口縁部が短く立ち上がるもので、陶邑編年TK209並行期のものと思われる。

竪穴式住居跡SH139(第66図) 調査地西側で検出した住居跡である。住居跡の規模は、4.0m×3.7m、主軸方向N49°W、SH45に切られた形で認められ、深さ約0.1mと非常に残りが悪い。主柱穴は、コーナー付近3か所で検出した。径約0.4m、深さ0.15～0.2mである。主柱穴の柱間は、3.0m×2.4mである。周壁溝は部分的に検出でき、幅約0.1m、深さ約0.05mとわずかに窪む程度であった。竈は無く、西側主柱穴付近から焼土を検出した。わずかに窪んだ底に赤色の焼土が、径約30cmの範囲で認められたが、固く焼けしまったものでなかった。柱穴に近いことから、その性格については不明である。出土遺物もなく住居の時期については不明であるが、切り合い関係からSH45以前である。

竪穴式住居跡SH140(第67図) 調査地西側南で検出した住居跡である。住居跡の規模は、5.2m×5.1m、深さ約0.25m、主軸方向N13°Eであった。竈は地山を掘り込む形で築かれており、住居内や竈内の埋土と地山の土色の違いから、検出時には、馬蹄形に竈の袖部がめぐるのが明確に認められた。主柱穴は、住居コーナー付近の4か所から検出でき、その規模は径0.3～0.5m、深さ0.2～0.3mを測る。主柱穴の柱間は、3.0m×3.0mである。竈付近と部分的に途切れる形で周壁溝がめぐり、幅約0.2m、深さ約0.1mである。竈本体は、両袖部間の内法が約55cm、高さ約24cm、長さ約60cmを測る。中央部が径約20cm、深さ5cmほど円形に窪み、燃烧部は住居床面よりわずかに高くなっていた。煙道部は幅約20cm、長さ約20cm残っていた。

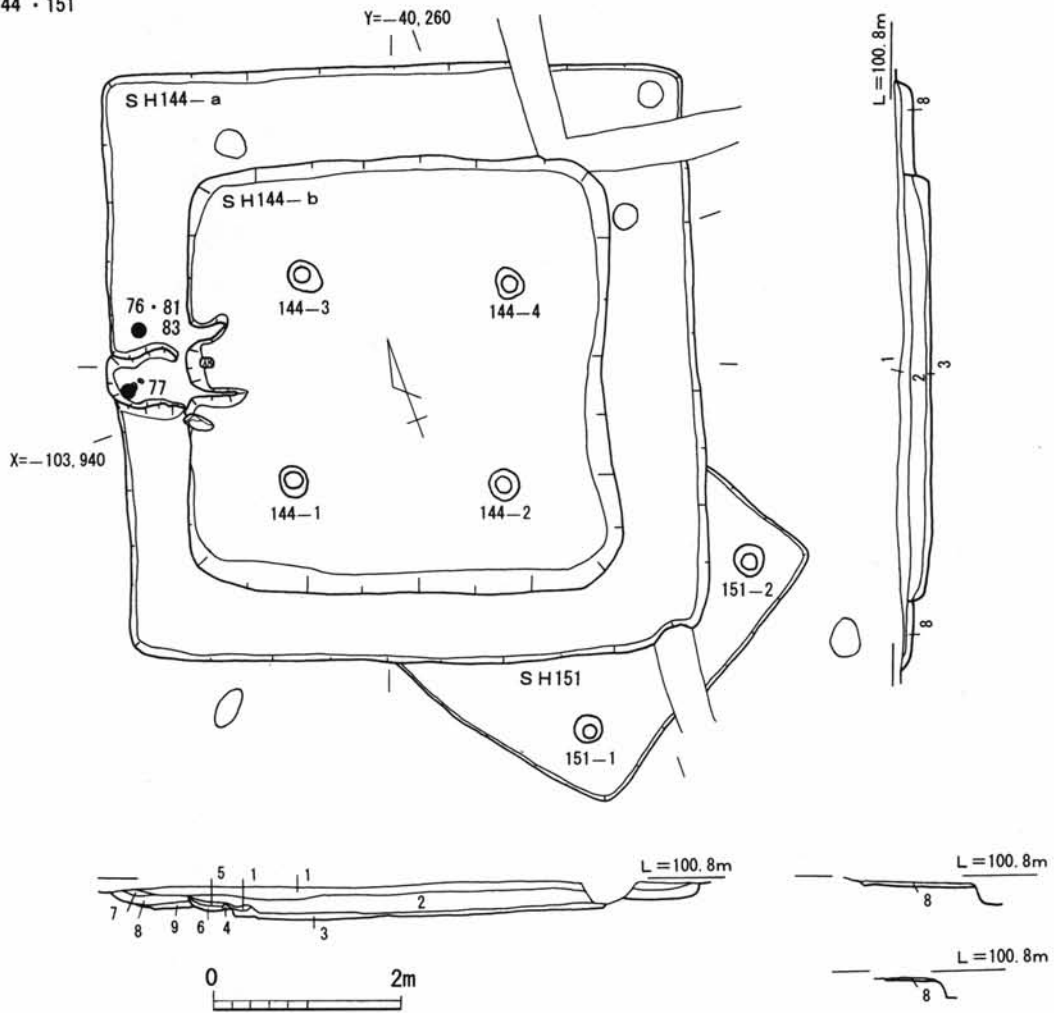
出土遺物 埋土中から69～71が、竈内から72が出土した。69・70は、須恵器杯蓋である。70は、丸みを帯びた天井部と下方を向く口縁部からなる。小破片であるがTK10並行期の様相を呈し、69の形状とは時期差があると思われる。69は、天井部から口縁部にかけて丸みを帯びる。天井部外面はヘラ削りする。天井部中央には、つまみが貼り付いていた痕跡が残る。71は杯身で、口縁部が内上方に立ち上がる。端部は平坦である。72は提瓶で、その残存から他の場所で割った破片数点を竈内に投じたものと思われる。体部のみで口縁部は欠損する。体部外面は、カキ目が残る。70・71は、混入遺物と考え、69の陶邑編年TK43並行期をもって住居の時期と考える。

竪穴式住居跡SH141(第67図) SH140に切られた住居跡である。住居跡の規模は、4.8m×4.3m、深さ約0.1mと非常に残りが悪い。主軸方向はN24°Eである。北側の支柱穴2か所と、

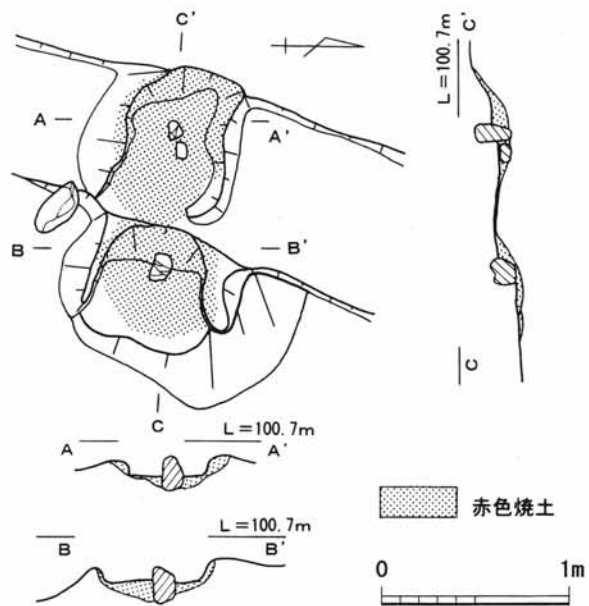
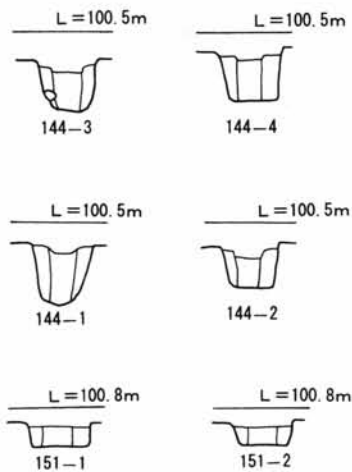


第68図 竪穴式住居跡SH142・143実測図および出土遺物実測図

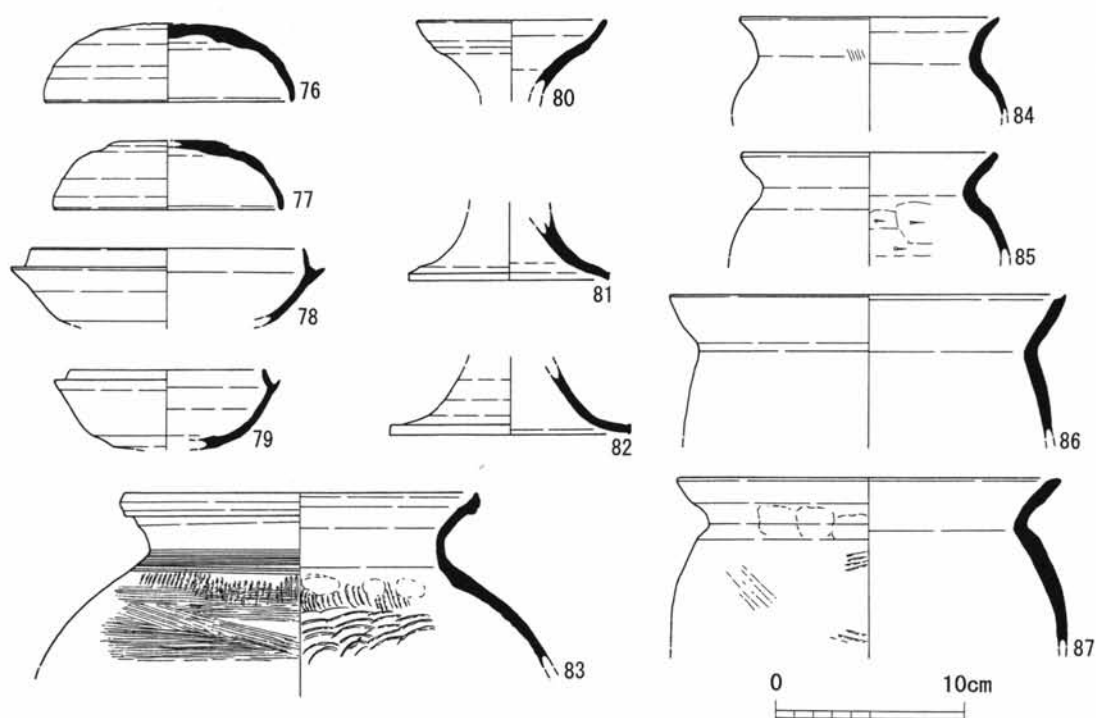
SH144・151



1. 淡黄灰色土 2. 暗茶褐色土 3. 黄褐色土
4. 赤色焼土混じり淡黄灰色土 5. 黄白色土
6. 淡黄白色土 7. 黄灰色土 8. 明黄褐色土
9. 赤色焼土混じり黄灰色土



第69図 竪穴式住居跡SH144・151実測図



第70図 竪穴式住居跡SH144出土遺物実測図

竈もSH140によって削平を受けてしまっていたため不明である。住居南側から2か所で柱穴を確認したが南辺と平行関係にない。部分的に周壁溝を検出した。幅約0.1m、深さ約0.05mである。出土遺物もなく住居の時期については不明であるが、切り合い関係からSH140以前とする。

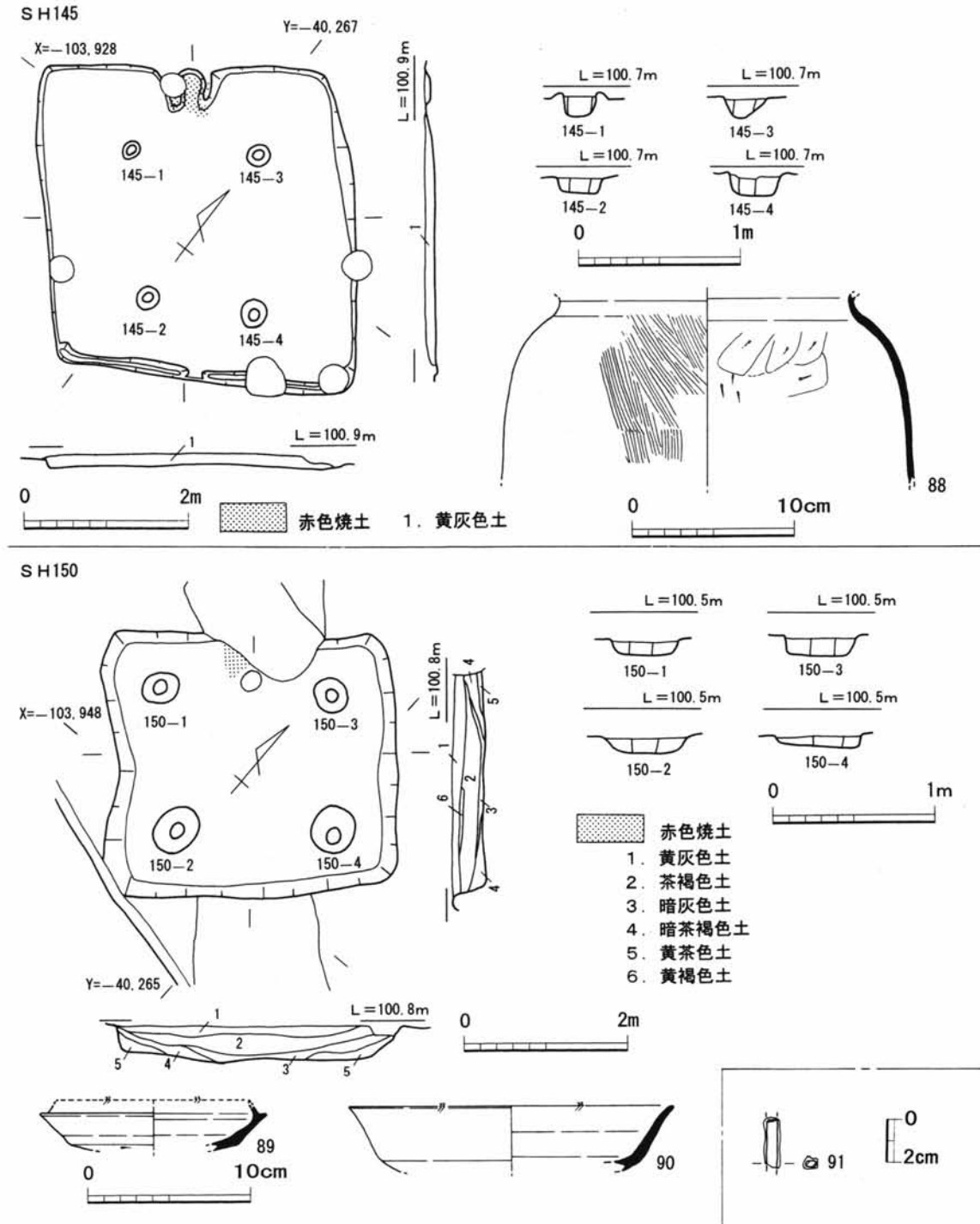
竪穴式住居跡SH142(第68図) 調査地西側北で検出した住居跡である。住居跡の規模は、4.9m×4.8m、深さ約0.2m、主軸方向N45°Wである。床面中央寄りの4か所から主柱穴を検出した。径0.25~0.4m、深さ約0.3mを測る。主柱穴の柱間は、1.8m×2.1mである。北西辺中央からわずかな焼土を検出した。北西辺中央の床面と壁面、竪穴部外まで赤色に焼けていたことから、ここに竈が存在したと考える。向かいの南東辺中央の床面が、1.2m×0.6mの範囲が約5cm窪む。SH137で見られた土坑状の遺構と類似することから、この付近に出入り口があったと考える。住居南側の床面直上から、炭化材や炭が認められ、焼失家屋と考える。

出土遺物 住居内埋土中から73~75が出土した。73・74は須恵器杯蓋で、丸みを帯びた天井部と下方を向く口縁部からなる。口縁端部は、平坦である。天井部外面は、ヘラ削りする。75は杯身で、平坦な底部から外上方に立ち上がり、口縁部となる。口縁部は、内上方に短く立ち上がる。底部外面はヘラ切り後未調整である。75は、TK217並行期のものと思われ、住居の時期と考えた。73・74は、その出土状況から混入遺物とした。

竪穴式住居跡SH143(第68図) 調査地西側北で検出した住居跡である。その大半は調査地外に続いたため、規模については不明である。調査地北側を掘削土の置き場として、耕土を除去した際に住居南東のコーナー部が認められたことから、住居南東辺は約4.5mであった。主軸方向は、N35°Wである。深さ約0.2mで床面となり、コーナー付近から主柱穴1か所を検出した。柱穴上には扁平な石があった。柱穴の規模は、幅0.4m、深さ約0.2mである。周壁溝も認められ、その

規模は幅約0.1m、深さ約0.05mであった。出土遺物はなく、時期については不明である。

竪穴式住居跡 S H144(第69・70図) 調査地西側で検出した住居跡である。住居の輪郭は二重であるが、支柱穴は4か所の検出であった。住居内の堆積状況ならびに竈の切り合い関係をみると、大きな住居(S H144-a)から小さな住居(S H144-b)へと、建て替えが行われたことがわかった。その際に支柱穴は再利用したようで、住居のコーナー部を結んだ対角線上に支柱穴が存在する。S H144-aの規模は、6.1m×6.1m、深さは約15cm、主軸方向N71°Wで、S H144-



第71図 竪穴式住居跡 S H145・150実測図および出土遺物実測図

bの規模は、4.6m×4.5m、深さ約0.35m、主軸方向N71°Wであった。主柱穴は、径0.35m、深さ約0.3mで、柱間は2.1m×2.2mである。各住居の北西辺中央から、連なる形で竈を検出した。SH144-aの竈本体は、両袖部間の内法が約50cm、高さ10cm、長さ約80cmを測る。中央に支脚が1石立つ。竈内や北側から須恵器杯蓋76・77や高杯脚部81や甕83などが出土した。SH144-bの竈本体は、両袖部間の内法が約55cm、高さ約15cm、長さ約50cmを測る。中央に支脚が1石立つ。SH144-aの竈の煙道部については削平されており、不明である。SH144-bの竈の煙道部は、SH144-aの竈を利用していたものと思われる。両住居に周壁溝は存在しない。

出土遺物 竈付近から76・77・81・83が、埋土中から78～80・82・84～87が出土した。76・77は須恵器杯蓋で、天井部から丸みを帯びて口縁部に至る。端部は丸い。天井部外面はヘラ切り後ナデ調整する。78・79は杯身で、口縁部が短く内上方に立ち上がる。杯蓋とセット関係になく、住居の時期は76・77の陶邑編年TK209並行期の頃と思われる。84～87は土師器甕で、大半が磨滅しており調整不明なものが多いが、部分的に体部外面にハケ目が、内面にヘラ削りが残る。

竪穴式住居跡SH151(第69図) SH144に切られた形で住居跡の一角を検出した。深さ約0.05mと非常に残りが悪い。住居跡の規模は、3.5m×2.8m以上、主軸方向N39°Wであった。コーナー付近の2か所で主柱穴を検出した。幅約0.3m、深さ約0.1mで、柱間は2.4mである。出土遺物がなく、時期は不明である。

竪穴式住居跡SH145(第71図) 調査地西側で検出した住居跡である。住居跡の規模は、3.7m×3.6m、床面までの深さが約0.15m、主軸方向N39°Wである。竈も後世の柱穴で削平され、わずかに焼土が残る程度と、非常に残りの悪いものであった。南東辺のみ周壁溝が存在し、幅約0.1m、深さ約0.04mであった。主柱穴は、中央よりの4か所で検出した。径0.2～0.3m、深さ約0.15mで、柱間は1.5m×1.8mであった。

出土遺物 埋土中から88が出土した。88は土師器甕で、体部のみで全体の形状については不明である。体部外面はハケ調整し、内面はヘラ削りする。明確に時期が判るものが無く、住居の時期については不明である。

竪穴式住居跡SH150(第71図) 調査地西側の、SD149を切る形で検出した。住居跡の規模は、3.6m×3.3m、深さ約0.4m、主軸方向N40°Wである。周壁溝はなく、中央よりの4か所から主柱穴を検出した。径0.4～0.5m、深さ約0.1mで、柱間は2.1m×1.8mである。北西辺中央で赤色の焼土がわずかに認められ竈と思われたが、後世の攪乱によってその大半が消失していた。

出土遺物 埋土中から89～91が出土した。89は須恵器杯身で、口縁端部が欠損していたが、短く内上方に立ち上がるものである。底部外面はヘラ削りする。TK209並行期のものとする。90は、高杯の杯部である。91は、鉄鏝の一部と思われる。

竪穴式住居跡SH203(第54図) 発掘調査で検出した竪穴式住居跡は以上であるが、調査地北側に掘削土の置き場として耕土を除去した際に、SH143の東側でSD01までの間、SH142の北側でSD146までの間にあたる所から竪穴式住居跡の一角が検出できた。調査対象地外であるため、その位置を図示した。住居跡の規模については不明であり、時期についても不明である。

(2) 掘立柱建物跡(第72図)

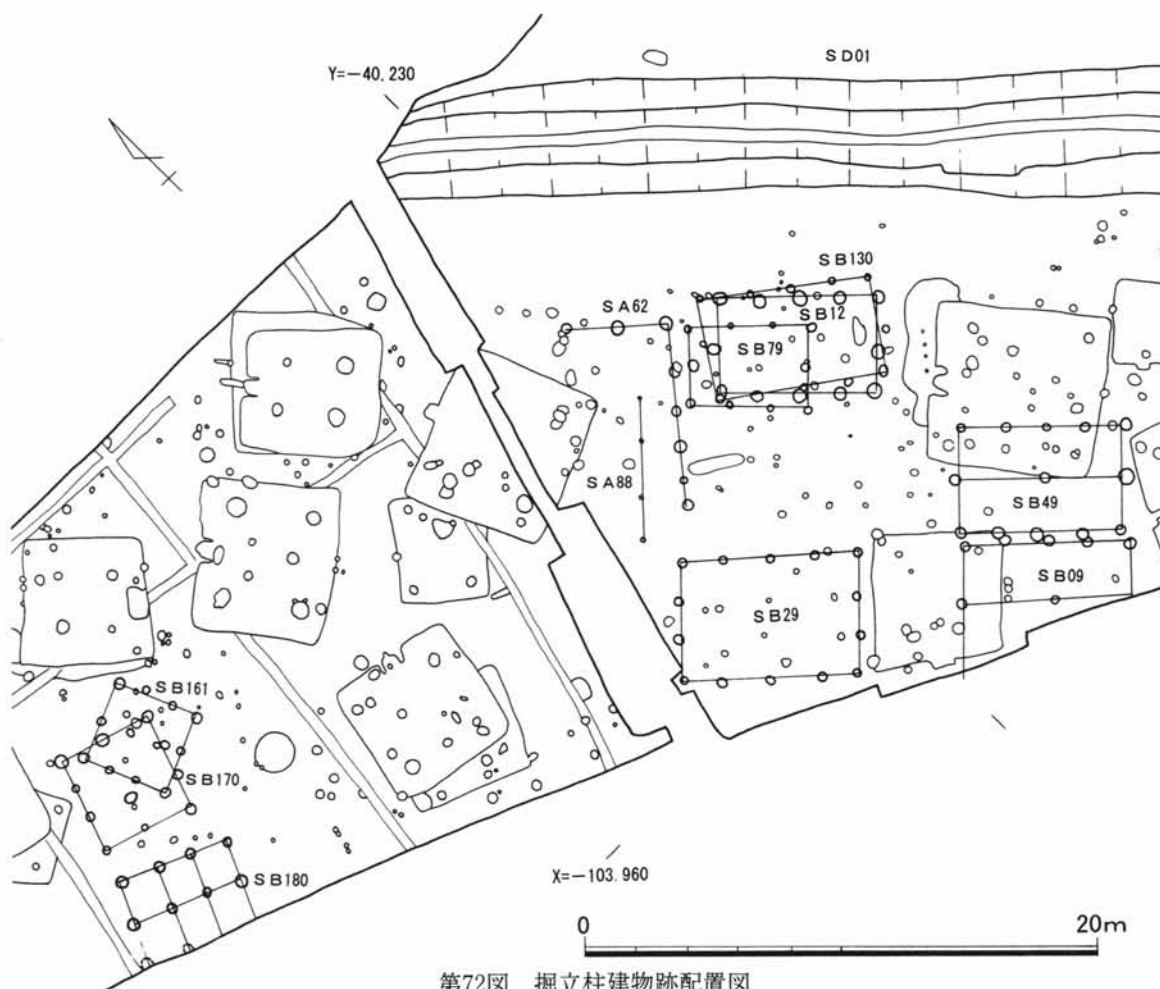
掘立柱建物跡については、一つの柱穴番号をもって、遺構番号とした。今回検出した掘立柱建物跡は、S B 49・09・29・12・79・130とS B 161・170・180とS B 194の、10棟である。S B 194は、1棟単独で存在し、ほかは6棟や3棟と複数の建物が並行関係あるいは切り合いを持っていた。S B 194以外の掘立柱建物跡は、段丘と「L」字状に屈曲するS D 01で区画された平坦地に築かれ、竪穴式住居跡が希薄な所を中心に、竪穴式住居跡に一部重複する形で存在した。

掘立柱建物跡 S B 49(第73図) 調査地東側中央に位置するS H 07を切る形で検出した。桁行4間(6.5m)×梁間2間(4.2m)、床面積約27.3m²、主軸方向N44°Wを測る、側柱建物である。柱間は、桁行が1.5~1.8m、梁間が2.0~2.2mである。柱掘形は、径0.4~0.5m、深さ0.3~0.4mで、柱痕は径約0.2mであった。関係する柱穴内からの出土遺物としては、S P 84・50から陶邑編年T K 43並行期の須恵器杯蓋の破片が出土した。遺構の切り合い関係から、T K 209並行期とするS H 07埋没後に建てられていたことから、出土遺物は流れ込みによるもので、建物の時期を示すものでないとした。

掘立柱建物跡 S B 09(第73図) 調査地東側中央に位置し、S H 08を切る形で検出した。S B 49と並行関係にあり、S B 49南側の桁とS B 09の北側の桁間が約0.5mと非常に接近しており、S B 49のS P 54・52とS B 09のS P 56・58の切り合いから、S B 09→S B 49の順に建てられた。両建物は、同規模であり、構造が類似することから、建て替えられたと思われる。桁行4間(6.3m)×梁間1間(2.1m)以上、主軸方向N42°Wを測る、側柱建物である。柱間は、桁行が1.5~1.6m、梁間が2.1mである。柱掘形は、径0.3~0.4m、深さ0.2~0.4mで、柱痕は径約0.2mであった。関係する柱穴から遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡 S B 29(第73図) 調査地東側のS H 08西隣から検出した。桁行4間(6.9m)×梁間3間(4.6m)、床面積約31.7m²、主軸方向N43°Wを測る、側柱建物である。柱間は、桁行が1.6~1.8m、梁間が1.4~1.7mである。柱掘形は、径0.3~0.4m、深さ0.2~0.3mで、柱痕は径約0.2mであった。西側梁間中央のS P 43・44間から柱穴が認められた。その規模は、径約0.4m、深さ約0.35mを測る。棟持柱でないかと思われたが、東側梁間中央付近からは柱穴が存在しなかった。柱穴内からの出土遺物としては、S P 31・32・44から須恵器甕の破片が、S P 34から高杯の脚が、S P 41から陶邑編年T K 43並行期かと思われる杯身が出土した。図示することのできない破片であり、それでもって建物の時期にするには困難であった。

掘立柱建物跡 S B 12(第74図) 調査地東側のS H 07西隣から検出した。桁行4間(6.2m)×梁間2間(3.8m)、床面積約23.6m²、主軸方向N45°Wを測る、側柱建物である。柱間は、桁行が1.5~1.6m、梁間が1.8~2.1mである。柱掘形は、径0.4~0.5m、深さ0.1~0.2mで、柱痕は径0.15~0.2mであった。一部S B 130の柱穴と切り合っており、その状況からS B 130より古い建物であった。柱穴内からの出土遺物としては、S P 16からはその破片が、S P 18・22から須恵器甕の破片が、S P 23から杯身と思われる底部が出土した。杯身は浅く、ていねいなヘラ削りを施すことから、陶邑編年T K 209並行期と考え、建物時期を示すと考える。

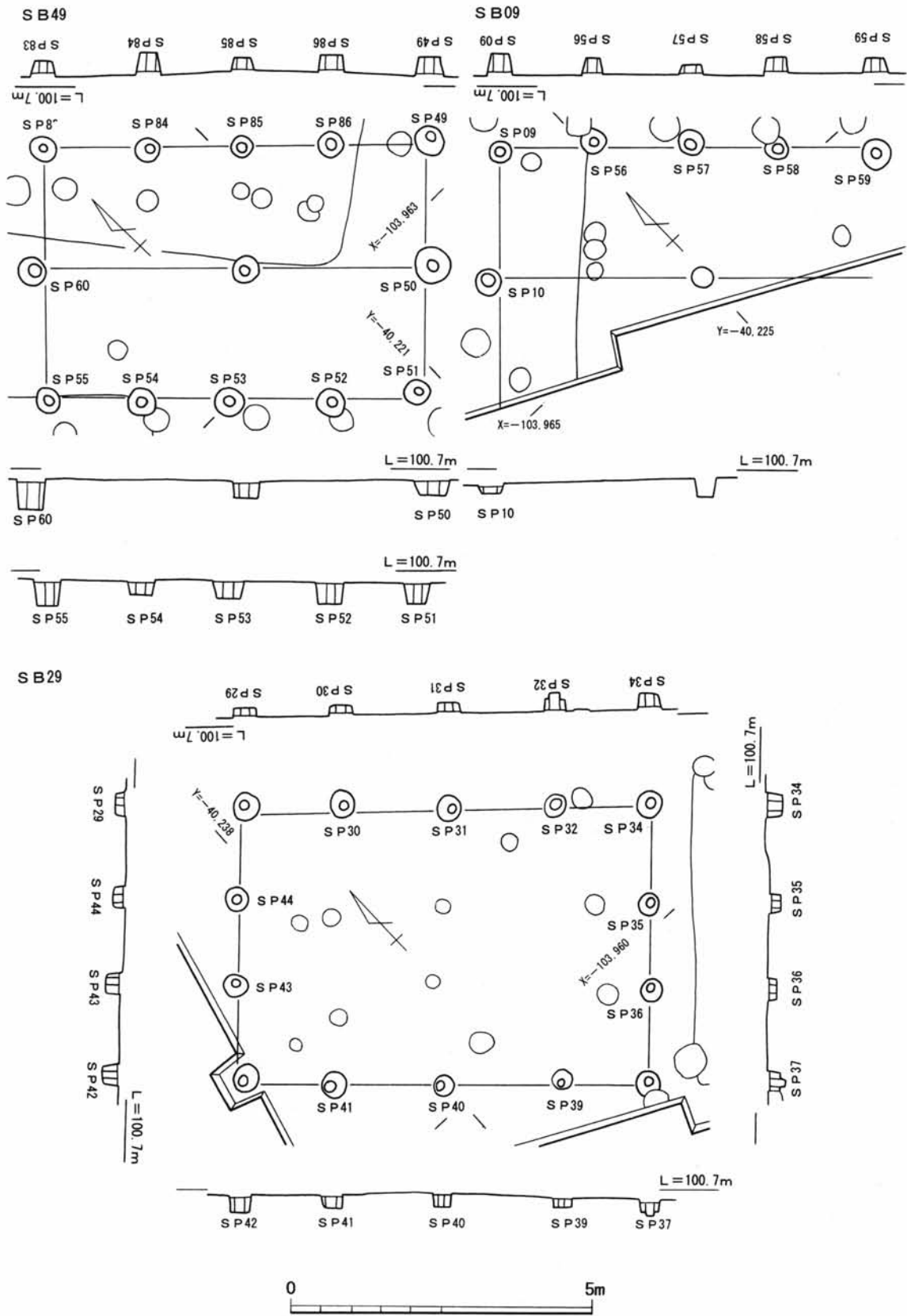


第72図 掘立柱建物跡配置図

掘立柱建物跡SB79(第74図) 調査地東側のSH07西隣から検出した。桁行3間(4.7m)×梁間2間(3.3m)、床面積約15.5㎡、主軸方向N47°Wを測る、側柱建物である。柱間は、桁行が1.5~1.7m、梁間が1.5~1.7mである。柱掘形は、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.5mであった。柱穴内出土遺物としては、SP78から陶邑編年MT15~TK10並行期の杯蓋の破片(94)が出土した。混入遺物と考える。またSB12・130と重複する形にあるが、柱穴の切り合いがないため、建物の創建順についても不明である。

掘立柱建物跡SB130(第74図) 調査地東側のSH07西隣から検出した。桁行4間(6.7m)×梁間2間(3.8m)、床面積約25.5㎡、主軸方向N54°Wを測る、側柱建物である。柱間は、桁行が1.4~1.8m、梁間が1.7~2.0mである。柱掘形は、径0.2~0.4m、深さ約0.2mであった。柱穴内からの出土遺物はなく、時期不明である。SB12と切り合っており、SB12→SB130の順に築かれていた。

掘立柱建物跡SB170(第75図) 調査地西側のSH144東隣から検出した。桁行3間(4.1m)×梁間2間(3.8m)、床面積約15.6㎡、主軸方向N19°Eを測る、側柱建物である。柱間は、桁行が1.2~1.5m、梁間が1.8~2.0mである。柱掘形は、径0.3~0.4m、深さ0.2~0.4mで、柱痕は径0.15~0.2mであった。出土遺物はなく、時期不明である。SB161と重複していたが、柱穴の切

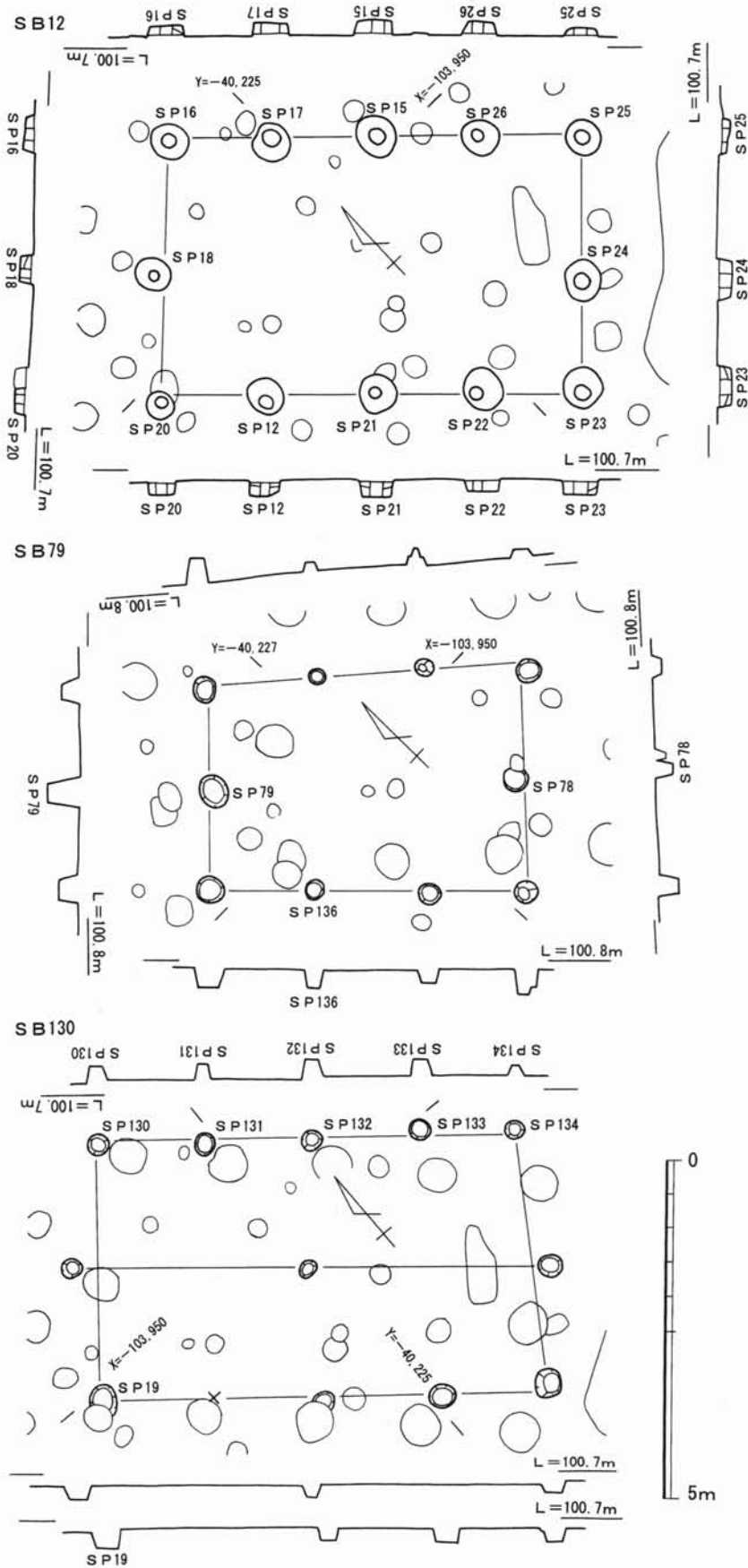


第73図 掘立柱建物跡 SB 49・09・29実測図

り合いが見られず、前後関係についても不明である。

掘立柱建物跡 S B 161(第75図) 調査地西側の S H144東隣から検出した。桁行3間(3.3m)×梁間2間(3.2m)、床面積約10.6㎡、主軸方向N21°Wを測る、ほぼ正方形の総柱建物である。倉庫と思われる。柱間は、桁行が1.0~1.2m 梁間が1.5~1.7mである。柱掘形は、径0.3~0.5m、深さ0.2~0.4mで、柱痕は径0.1~0.2mであった。出土遺物はなく、時期不明である。S B170と重複していたが、柱穴の切り合いが見られず、前後関係についても不明である。

掘立柱建物跡 S B 180(第75図) 調査地西側の S B170南側から検出した。桁行3間(4.6m)×梁間2間(3.4m)以上、床面積15.6㎡以上、主軸方向N67°Wを測る、総柱建物である。倉庫と考える。柱間は、桁行が1.3~1.6m、梁間が1.6~1.7mである。柱掘形は、径0.4~0.5m、深さ



第74図 掘立柱建物跡 S B 12・79・130実測図

0.1~0.2mで、柱痕は0.15~0.2mである。出土遺物はなく、時期不明である。

掘立柱建物跡 S B 194(第75図) 調査地東側の S H 113西隣から検出した。建物南隅の柱穴は不明である。桁行3間(4.0m)×梁間2間(3.3m)、床面積約13.2m²、主軸方向N45°Wを測る、側柱建物である。柱間は、桁行が1.3~1.4m、梁間が1.6~1.7mである。柱穴は、径0.2~0.4m、深さ0.2~0.3mである。出土遺物はなく、時期不明である。

(3) 柵列

柵列については、一番若い柱穴番号をもって、遺構番号とした。

柵列 S A 62(第75図) 調査地東側の S B 79西隣で検出した、「L」字状に屈曲する柵列である。柱穴掘形は、径0.3~0.5m、深さ0.1~0.2mで、柱痕は径0.1~0.2であった。主軸方向は、短辺がN52°W、長辺がN37°Eで、ほぼ直角に屈曲する。出土遺物がなく、時期は不明である。

柵列 S A 88(第75図) 調査地東側の S B 79西隣で検出した柵列である。柱穴は、径0.1~0.2m、深さ約0.1mである。主軸方向は、短辺がN44°E W、長辺がN37°Eで、出土遺物がなく、時期は不明である。

柱穴内出土遺物(第76図) 掘立柱建物跡に伴う柱穴から出土したものとしては、S B 79の S P 78から出土した須恵器杯蓋94が、唯一図示できた。そのほかの92・93・95~101は、そのほかの柱穴から出土したものである。92~94は須恵器杯蓋で、陶邑編年MT15~TK10並行期のものである。95は杯身で、口縁部が短く立ち上がる。96・97は輪状の高台を貼り付けた杯で、8世紀末ないし9世紀前半と思われる。99~101は、土錘である。柱穴から出土した遺物量は少量で、その大半は破片であった。出土遺物の時期も6世紀前半~9世紀前半とさまざまであった。

(4) 土坑

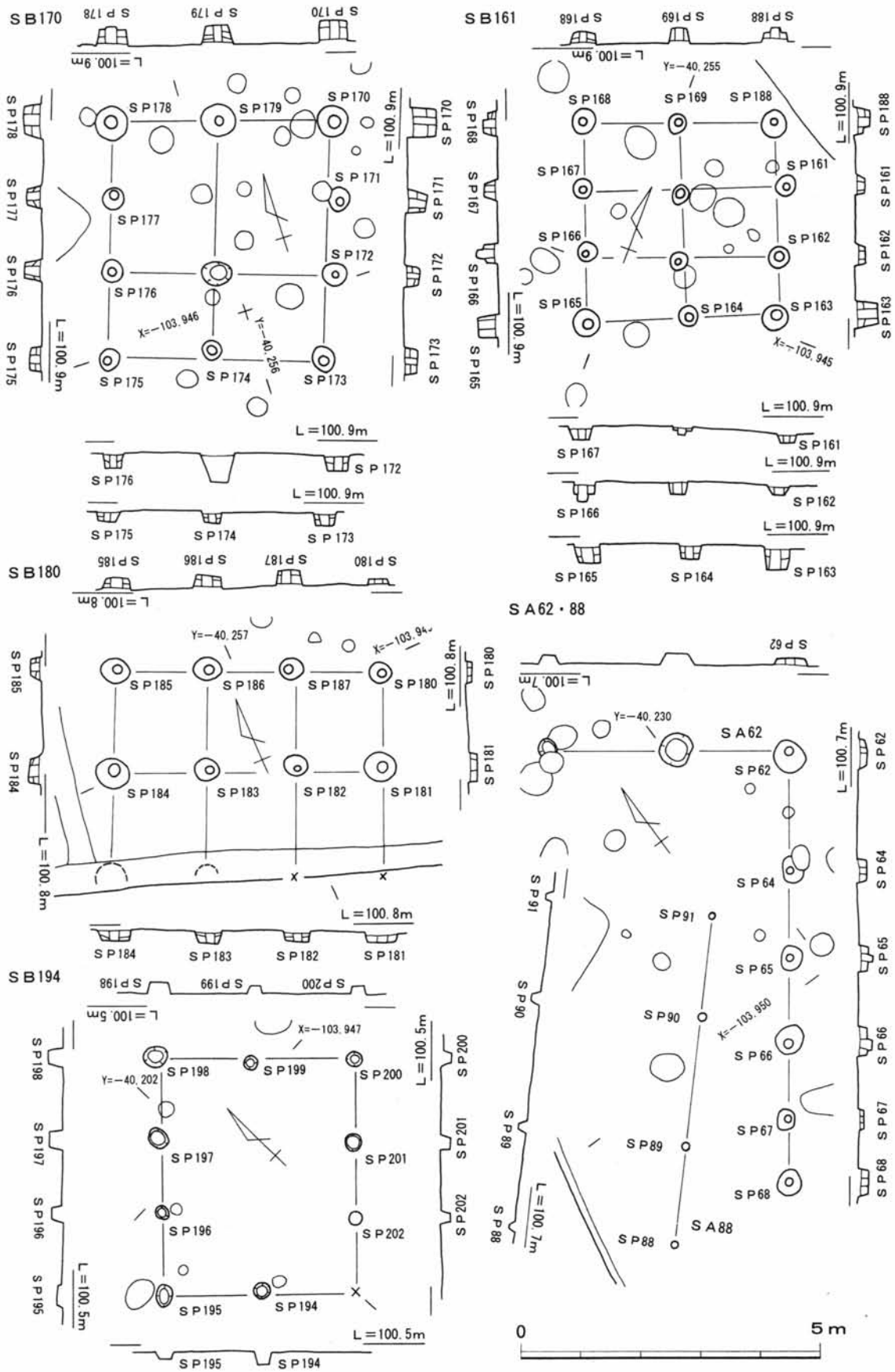
検出した土坑は5基である。

土坑 S K 82(第77・78図) 調査地東側の S H 126東に隣接する不定型な土坑である。その規模は、8.8m×7.3m、深さ0.4mを測り、床面は平坦でなく、かなり凹凸がみられた。土坑近辺が粘土質という状況でもなく、性格については不明である。

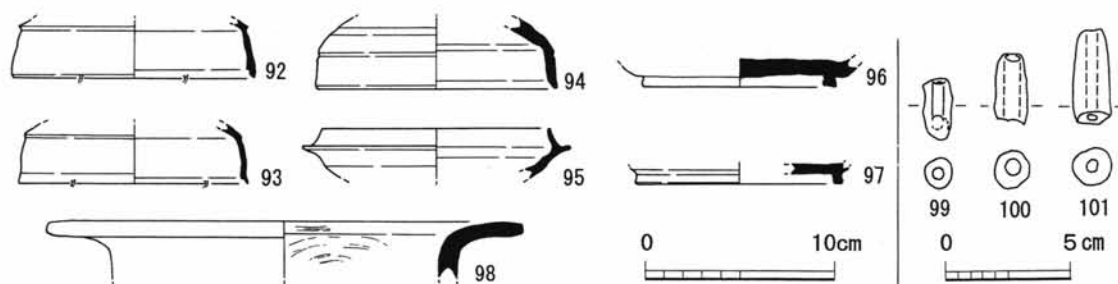
出土遺物 102~105は杯蓋である。口縁端部は平坦で、天井部外面をヘラ削りする。106~110は杯身で、口縁部は内上方に高く立ち上がる。底部外面をヘラ削りする。113は無蓋高杯で、体部外面に波状文を施す。外面杯部半ばに粘土の貼り付けた痕跡が認められ、取っ手が欠損したものであると思われる。114は有蓋高杯で、4か所に透かしを施す。112は、小型の短頸壺である。111は、杯身であるが、底部外面をヘラ切りしており、ほかの遺物と時期が異なる。上面での出土であった。115は、甕である。111を除いて陶邑編年MT15~TK10並行期に収まることから、土坑の時期とする。

土坑 S K 159(第77図) S K 82西側で床面を掘り込む形で検出した。規模は0.5m×0.8m、深さ約0.3mである。壁が部分的に赤く焼けており、床の上には炭が厚さ6cm堆積していた。炭窯と思われる。出土遺物はなく、S K 82床面を掘り込む形で検出したことから同時期と思われる。

土坑 S K 160 S K 82東側で、床面を掘り込む形で検出した。規模は、2.3m×1.5m、深さ約



第75図 掘立柱建物跡SB161・170・180・194、柵列SA62・88実測図



第76図 柱穴出土遺物実測図

0.2mである。底は平坦で、焼けた所はない。埋土は暗灰色粘質土で、壁は底に近づくほど粘土状になることから、粘土採掘坑と考え、炭窯と思われるS K159・125に使用したものと考える。

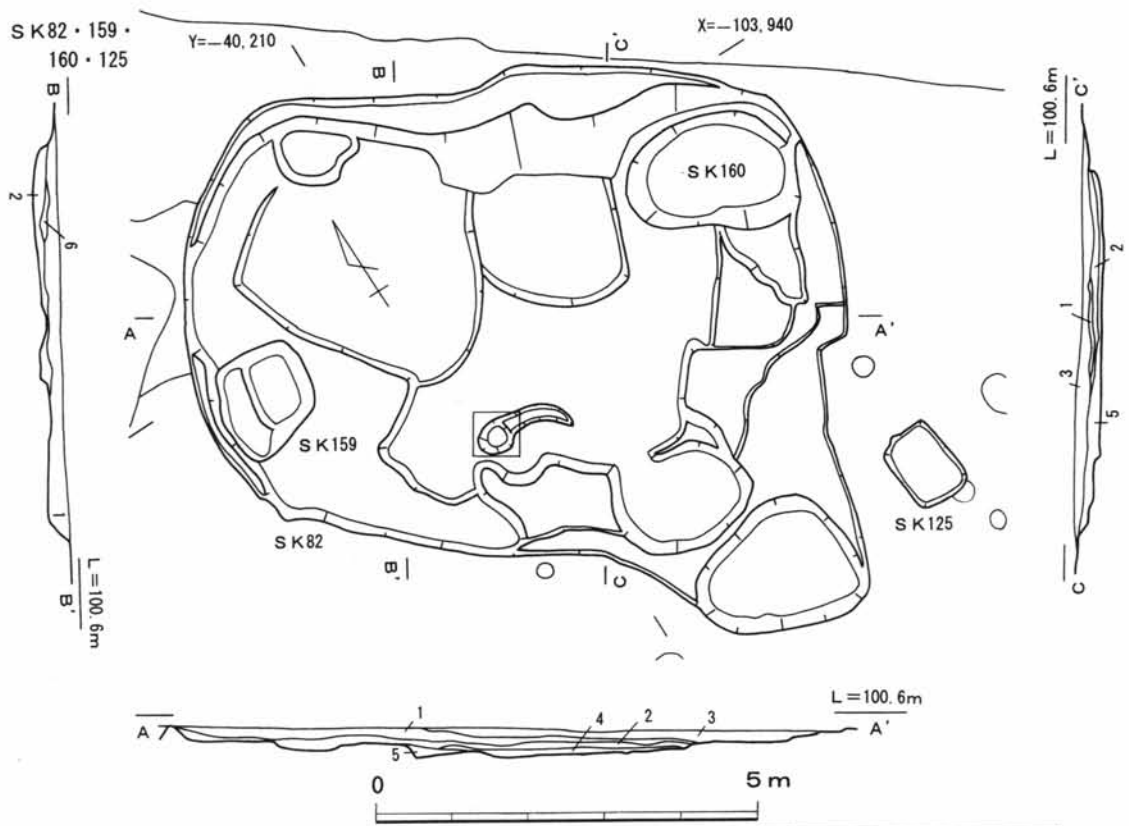
土坑S K125(第77図) S K82の東側で検出した。規模は、0.7m×0.9m、深さ約0.2mである。壁が部分的に赤く焼けており、床の上には炭が厚さ5cm堆積していた。炭窯と思われる。出土遺物はない。S K159と同方向を向くことから、同時期の遺構と考える。

(5) 溝(第79図)

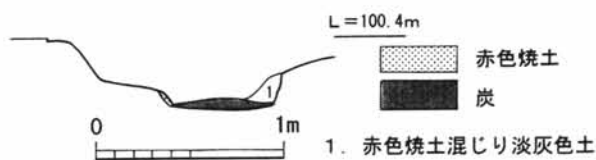
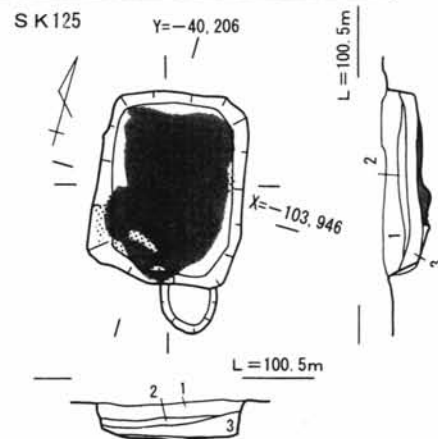
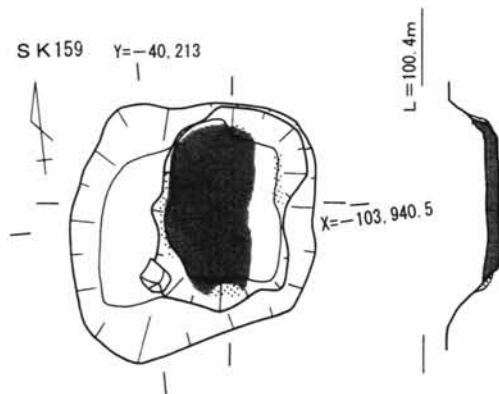
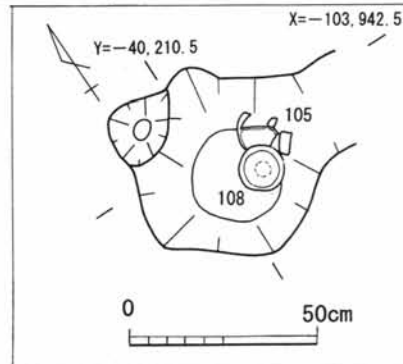
断面図作成場所を第79図に、堆積状況図を第80・81図に示した。

溝S D01(第80図) 調査地東側の南東隅から北西隅にかけて、わずかに北に湾曲する形で検出した。検出長約52mである。溝の東端・中央・西端で試掘し、断面図を作成した。堆積状況から、上・中・下・最下層の4層に分けた。上層には磨滅した土器の小破片が少量混入していた。中層からは奈良～平安時代の土器が出土した。下層からは主に飛鳥時代の土器が出土した。最下層からはほとんど土器が出土せず、子持ち勾玉が1点出土した(図版第44-(2))。断面観察の結果、S D01は掘り直しがおこなわれていた。下層までを掘り直しており、断面形は逆台形を呈す。溝底の幅は0.5～0.7m、検出した幅は4～6m、深さ1～1.3m、主軸方向N46°Wである。当初掘られた溝は、下層の下に「V」字あるいは逆台形に掘り込まれていた。溝の中央以東は「V」字形に、西は逆台形に掘られていた。逆台形に掘られた所については、両壁がほぼ真っ直ぐに下がることから、板でもって補強されていたと思われる。掘り直された溝が、当初の溝よりも幅広いため、当初の溝の規模は、深さ約2m、最下層の溝の立ち上がりから推測して溝の幅は2～3mであったと思われる。最下層には、暗灰色粘質土あるいは粘土が約0.7m堆積しており、かなり長期にわたって水が流れていたことに因るものと思われた。構築時期については、最下層から土器の出土が見られなかったことから、下層から出土する陶器編年T K209～217並行期の土器に混じって、MT15・T K10並行期の土器片が少量出土したことから、この土器をもってS D01の構築時期とし、再掘削の時期はT K209並行期とした。中・下層の堆積土は礫混じりの土となり、最下層とは大きく異なる。また、下層からは土器がまとまって出土した(図版第44-(3))。これは、今回の調査で検出した飛鳥時代の堅穴式住居跡群が営まれ、廃品となった日用雑器が投棄されたことに因るものと考えられる。中層から、灰釉陶器壺181が出土していることから、平安時代にも深さ約0.8mの溝として可動していたことがわかった。

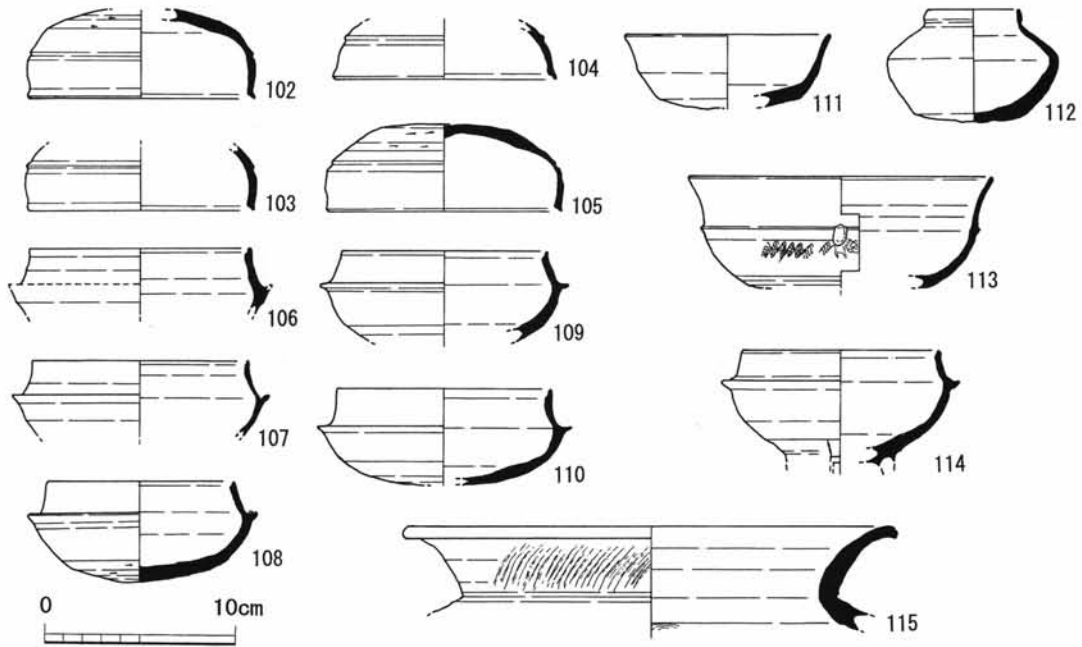
出土遺物 116～173は、下層出土のもので、溝の掘り直しが行われた溝底に混入した遺物であ



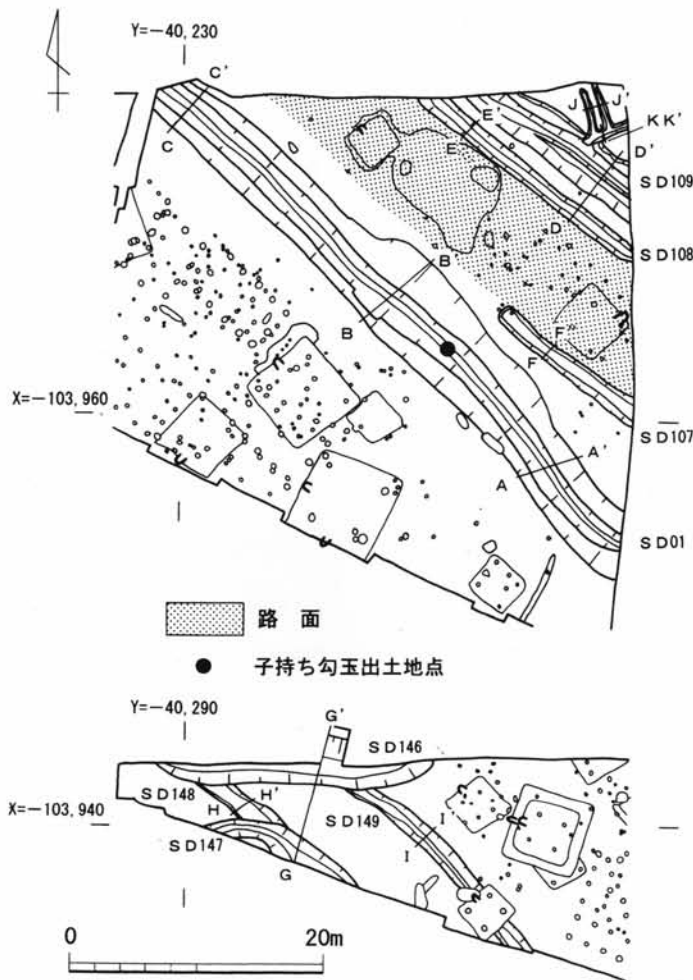
- 1. 暗茶褐色土
- 2. 灰褐色土
- 3. 濃灰褐色土
- 4. 黄褐色土混じり暗茶褐色土
- 5. 黄褐色土混じり灰褐色土
- 6. 黄褐色土混じり淡茶褐色土



第77図 土坑S K82・125・159・160実測図

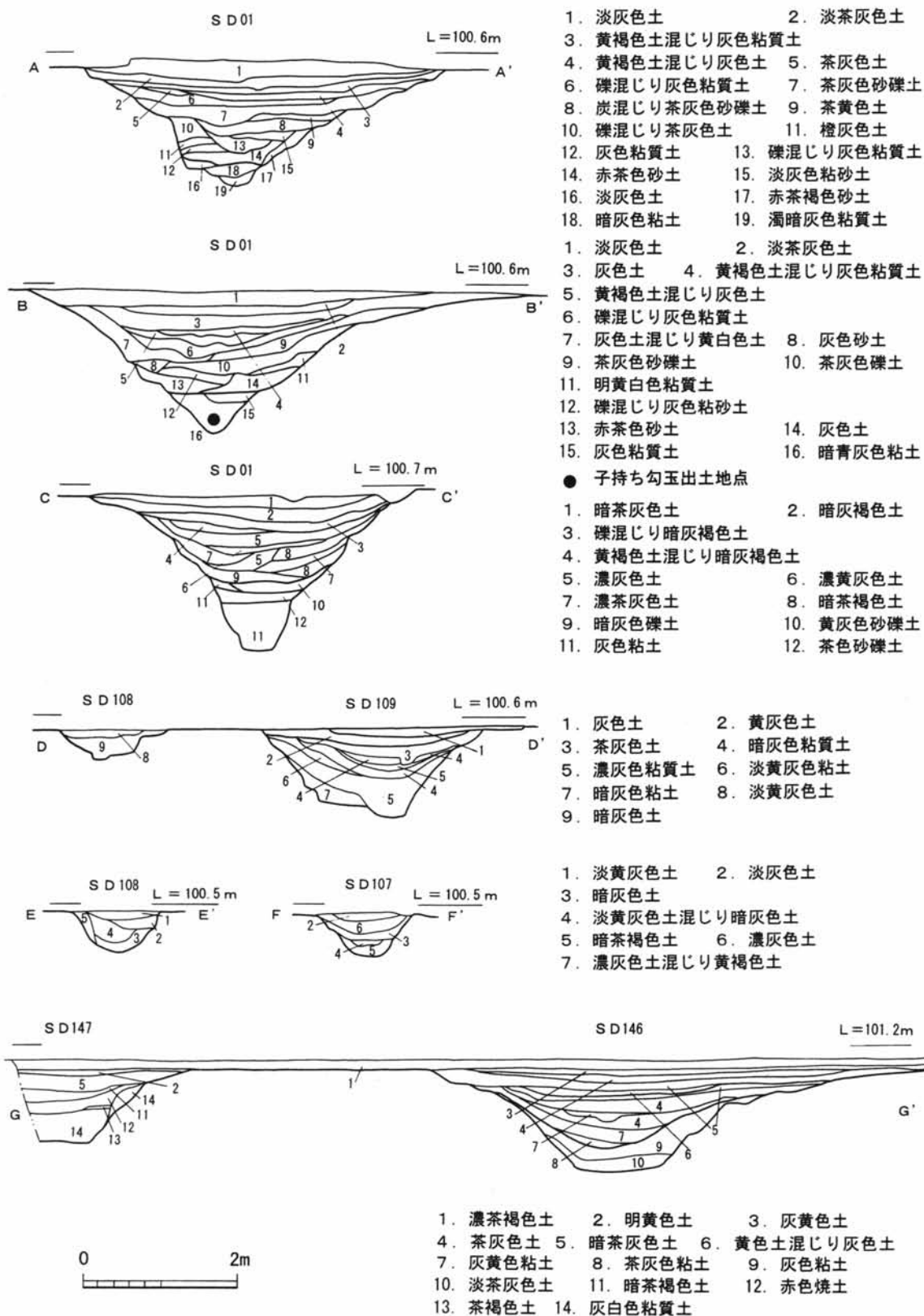


第78図 土坑S K 82出土遺物実測図

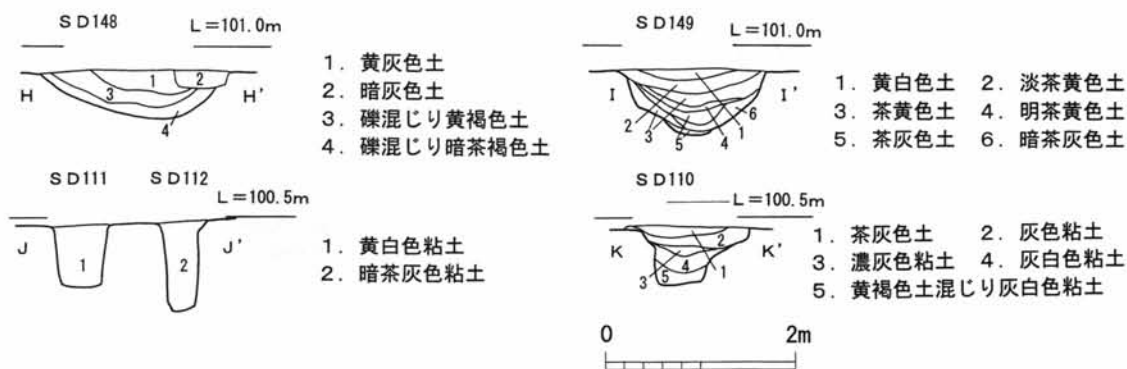


第79図 溝セクション位置図

る。116は杯蓋である。天井部外面をヘラ削りする。117~124は杯蓋である。天井部外面はヘラ切りしており、一部ナデ仕上げする。125~127はかえりをもつ蓋である。形状から陶邑編年TK209~217と思われる。128は受け部の付く杯身である。口縁部は内上方を向く。TK43並行期のものである。129~139は底部外面をヘラ削りする杯身である。TK209~217と思われる。140・141は、はそうである。140の底部外面は、ていねいなナデを施す。141底部外面にはタタキを施す。142は、長頸壺である。口縁端部は大きく外反し、丸く収める。143・144高杯の脚部である。147・148は甕である。149~154・157~162は、土師器皿である。口縁端部が尖るものや丸



第80図 溝内堆積状況図(1)

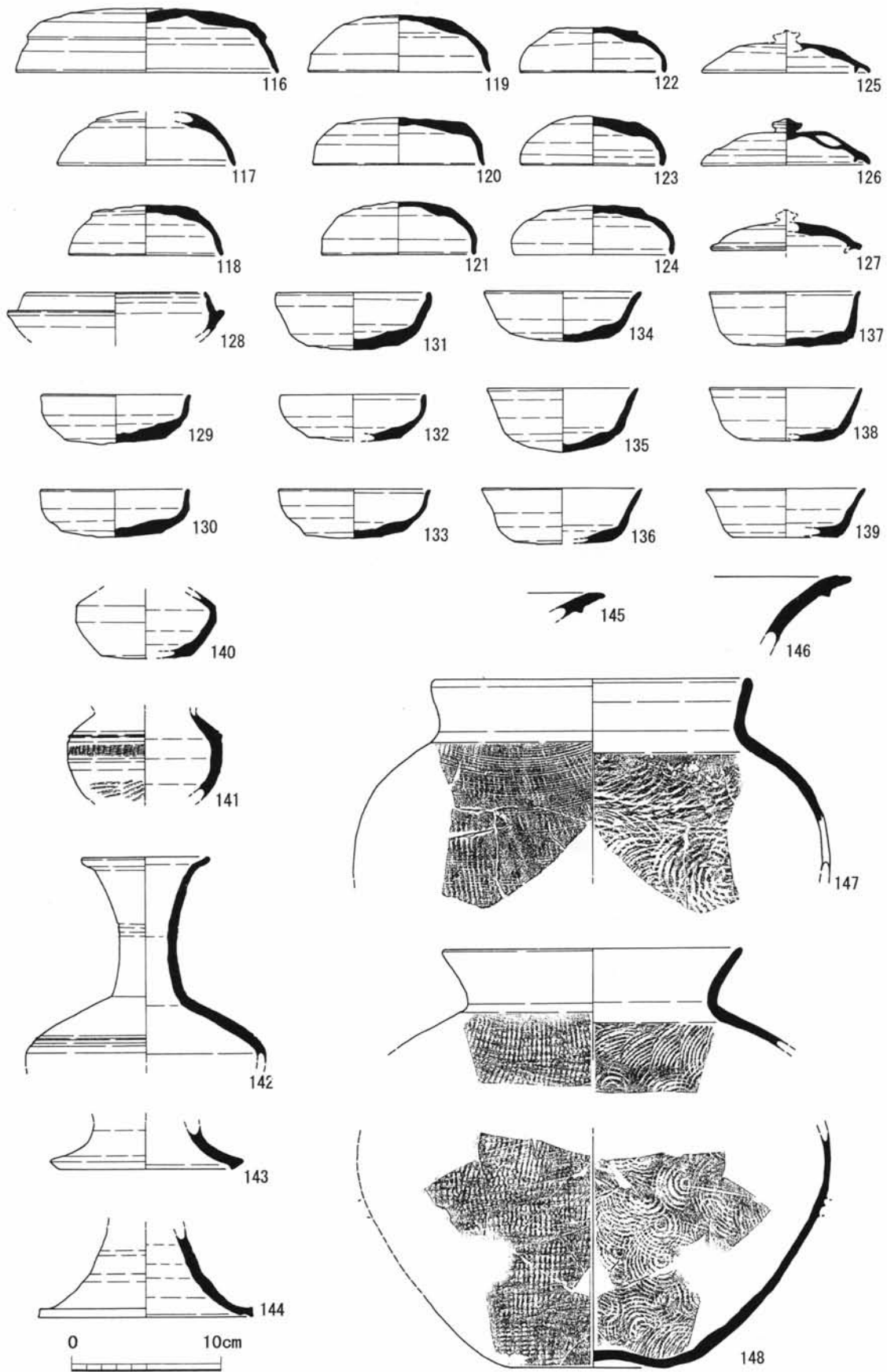


第81図 溝内堆積状況図(2)

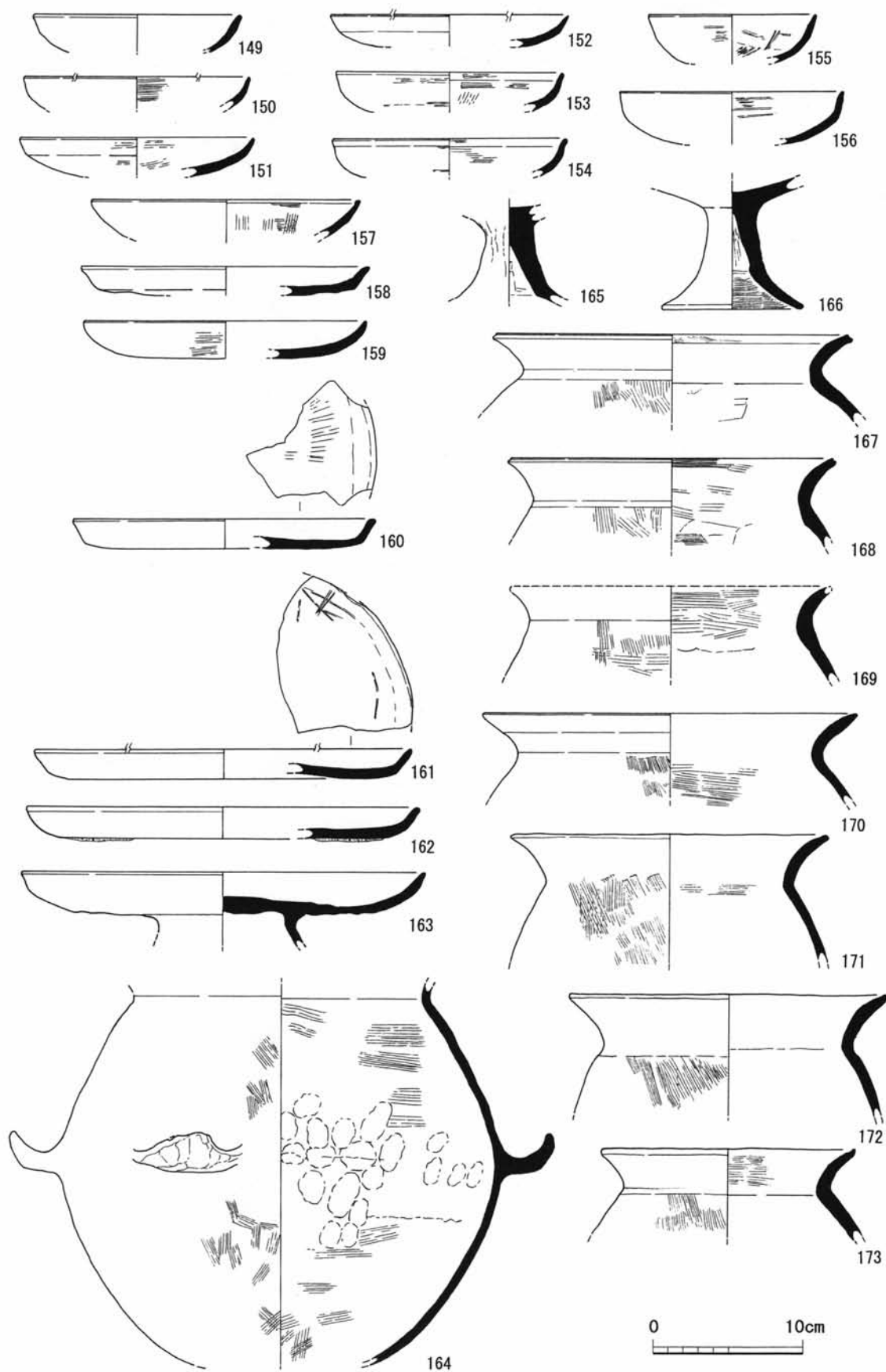
いもの、内側に屈曲するものや平坦なものがある。内外面を横方向にヘラ磨きするものが多い中、160のように内面底部は放射状に施すものもあった。155・156は土師器杯である。体部半ばでゆるやかに「く」字状に屈曲する。内外面をヘラ磨きする。163は台杯皿である。27cmと大型のものである。165・166は高杯の脚部である。脚端部内面はハケ調整を施す。167～173は、土師器甕である。口縁端部が丸いものや平坦なものがある。外面は縦方向のハケ調整を、内面は横方向のハケ調整を行う。174～182は、中層出土のものである。175・176・177は杯である。底部端に高台を貼り付ける。178は椀である。切り離しは、糸切りである。174・179・180は、174・179は体部が球形で、180は肩部の張るものである。181は、灰釉陶器の壺で、体部半ばを円形に打ち欠いている。182は甕である。

溝SD146(第80図) 調査地西側で検出した溝である。溝の肩部が見つかったため、一部その規模確認のため試掘を行った。溝の規模は幅約5m、深さ約1.4mを測る。SD01と同様の堆積状況で、最下層は暗灰色粘質土・粘土が堆積し、その上には礫混じりの土が堆積していた。その境をもって掘り直しが認められたことから、SD146の続きがSD01であると思われた。周辺の地形から想定すると、溝は調査地北西方向の多国山(190m)から池尻廃寺の西側を通り、微高地縁辺部に沿う形で流れ、SD146となる。調査地中央北約10m付近で直角に屈曲した溝はSD01となって、南東方向に流れる。屈曲すると思われる地点が調査地外であるため、「L」字状に屈曲するか、他の溝と合流してSD01となるかについては不明である。また、上記溝の想定ラインのどの部分を人力掘削したかについては不明であるが、溝が段丘縁辺部を意識して築かれていることから、微高地部の溝については人力掘削していると考ええる。SD146・01によって、2回大きく屈曲する溝で画された面積は、30m×86mの三角地で、およそ1,300m²であった。

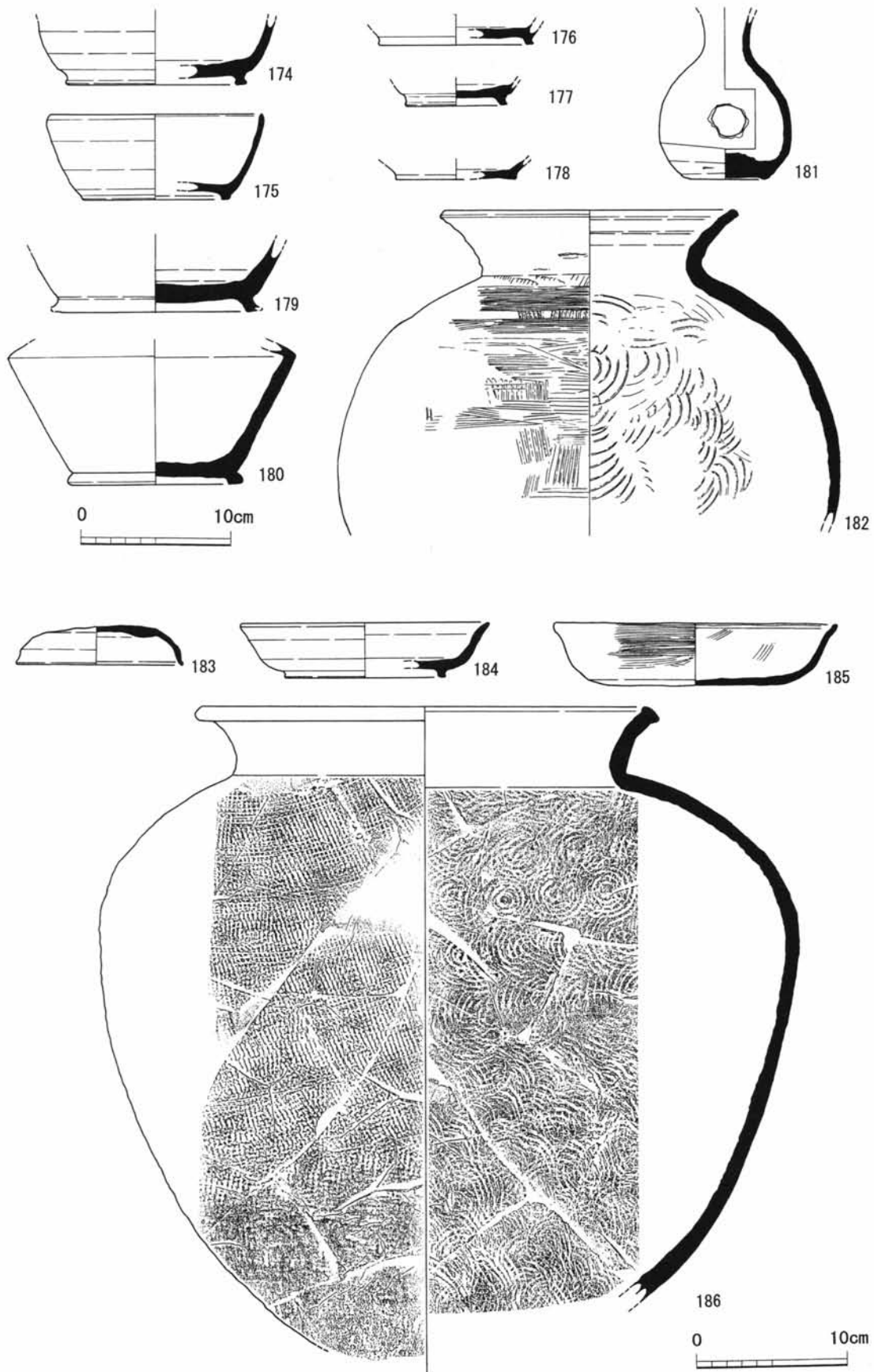
溝SD109(第80図) 調査地北東隅で検出した。規模は、幅約2.7m、深さ約1.2m、主軸方向はN46°W、断面形は逆台形である。堆積状況から2～3回の掘り直しがあったと思われた。溝底北側半分を幅0.7m、深さ約0.3m掘り直した時期があり、甕(186)はその埋土中から出土した。溝の北側斜面は急傾斜であるに対し、南斜面はゆるやかであった。溝の下層は南側からの流れ込みで、溝肩部から底にかけて厚く灰色粘質土・粘土が堆積する。このような粘土層は溝底を水が流れてできるもので、肩部から堆積していることは、溝底に堆積していた土を掘り直しなどによ



第82図 溝S D01出土遺物実測図(1)



第83図 溝S D01出土遺物実測図(2)



第84図 溝S D01・107・108・109出土遺物実測図

って一時溝周辺に盛られ、それが流れ込んだためと考える。この溝の掘削土とともに、相前後する時期に築かれたS D01の掘削土や掘り直した際の土を両溝間に置き、その土が溝に流れ込んだために、灰色粘質土・粘土が肩部から溝底にかけて堆積したと思われる。溝の半ばから上は細かい土層となり、長期にわたって堆積したと思われる。出土遺物は、須恵器杯蓋(183)・杯(184)・甕186と非常に少ないことから、掘り直しの時期については不明である。甕が6世紀代、杯が8世紀中頃であることことから、その時期の溝と考え、S D109は、S D01とほぼ同時期に築かれ、8世紀代まで存続することがわかった。

出土遺物 183は須恵器杯蓋である。天井部外面をヘラ切りする。184は、高台を巡らす杯である。口縁端部は尖る。186は甕である。下層から出土した。

溝S D107・108(第80図) S D01・109間で検出した溝である。2条の溝は平行しており、S D107は途切れる。各溝の規模は、S D107が幅約1.2m、深さ約0.6m、検出長約14m、S D108が幅約1.1m、深さ約0.6m、検出長約22mである。両溝の主軸方向はN52°Wである。S D107から土師器杯185が出土した。両溝は、同規模で溝間の距離が約9mであることから、奈良時代の古道に伴う側溝であったと考える。調査地北側でも、京都府教育委員会の試掘調査で、その延長線上から同様の溝を検出している。S D107が途切れるのは、両溝が築かれた奈良時代に、S D01が深さ約0.8mの溝として機能していたためではないかと考える。

出土遺物 S D108からの出土遺物はなかった。185はS D107から出土しており、この遺物をもって、平行する両溝の時期を平城宮Ⅱ並行期と判断した。体部外面は横方向のヘラ磨きをし、内面は部分で斜め方向のヘラ磨きを施す。口縁端部内面に1条の凹線がめぐる。

溝S D02 S H03東側で検出した。幅約0.6m、深さ約0.15m、検出長約6mである。この溝は、S D01に直行するように設けられていた。出土遺物はなく、時期不明である。S H03と同方向であることから、T K10並行期のものと想定する。

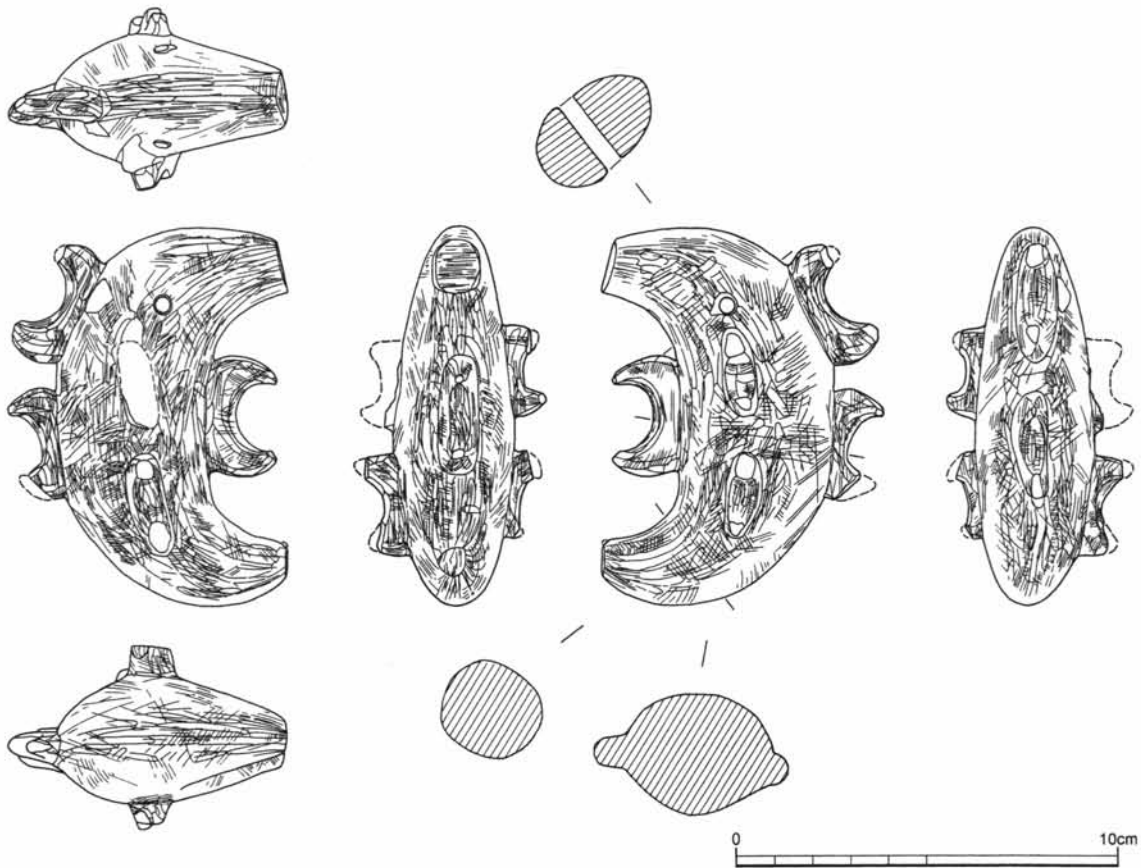
溝S D147(第81図) 調査地西端で検出した。「く」字に屈曲する。規模は、検出幅約2.2m、深さ約1.1mを測る。出土遺物がなく、時期不明である。

溝S D148(第81図) 調査地西端で検出した。規模は、幅約2m、深さ約0.5mを測る。出土遺物がなく、時期不明である。切り合い関係から、S D146・147より古い。

溝S D149(第81図) 調査地西端で検出した。規模は、幅約1.4m、深さ約0.6mを測る。出土遺物がなく、時期不明である。切り合い関係から、S D146・S H150よりも古い。

溝S D110・111・112(第81図) 調査地北東隅で検出した。S D109に流れる形でS D110を、S D110に流れる形でS D111・112を検出した。各溝の規模は、S D110が幅約1.2m、深さ約0.6m、断面逆台形、S D111が幅約50cm、深さ約0.6m、断面逆台形、S D112が幅約0.4m、深さ約0.9m、断面逆台形である。出土遺物はなく、時期不明であるが、S D109検出時に切り合わずに見つまっていることから、同時期と思われる。S D112が長さ約3mで途切れるなど、その性格については不明である。

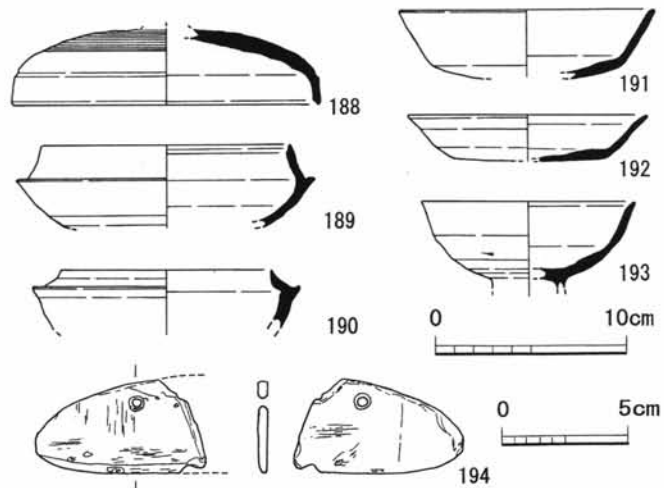
子持ち勾玉(第85図、巻頭図版3-(2)) S D01最下層から出土した。長さ10cm、幅7.3cm、厚



第85図 子持ち勾玉実測図

長さ4.8cm、重さ260グラムを測る。石材は、滑石である。勾玉の両側面に2個ずつ、腹部に1個、背部に2個の計7個の勾玉が付く。1つの勾玉が、およそ長さ3cm、幅1.5~2.0cm、厚さ1cmである。当初背部に3個の勾玉を配していたが、欠損したためか2個にし、背部尾近くをていねいに研いだ痕跡が残る。形状から5世紀後半に作られたものと思われる。子持ち勾玉の出土例としては、今回のものが京都府内5例目となる。京都市の山ノ内遺跡、加茂町の恭仁宮関連遺跡、舞鶴市女布遺跡、向日市の山開古墳に次ぐ出土である。近畿では、大阪府が32遺跡、兵庫県が15遺跡、奈良県31遺跡、和歌山県3遺跡、

滋賀県12遺跡、京都府5遺跡からの出土が知られている。その大半は集落遺跡である。^(注14)古墳時代中期に築造された山開古墳出土のものは良好なもので、蛇紋岩製で長さ9.3cm、嘴と目を陰刻し、鳥を表現する。腹部に1個、両側面に2個ずつ、背部に3個の計8個の勾玉が付く。今回出土した子持ち勾玉は、山開古墳のそれと並ぶもので、S D01最下層から単独出土であった。祭



第86図 包含層出土遺物

祀遺物と考える。

包含層出土遺物(第86図) 188は杯蓋である。天井部外面にカキ目を施す。189・190は杯身である。191・192杯である。193は高杯である。194は石包丁である。弥生時代に段丘下に水田が広がっていたと思われる。

3. まとめ

今回の調査の結果、また周辺の調査成果を含めて幾つかの成果を得ることができた。

①変遷と低位段丘上の景観 大規模な溝によって北辺から東辺を区画された、6世紀前半～7世紀中頃にかけての集落跡の一角を確認した。6世紀前半に溝や住居を築き始めるが、集落として大規模に営まれるのは、7世紀前半～中頃である。^(注15)今回検出した遺構を時期別に概観する。

I期(MT15～TK10並行期) 調査地近辺で土地利用が開始される。SD01・109が掘削され、SH126・03・SK82が築かれる。

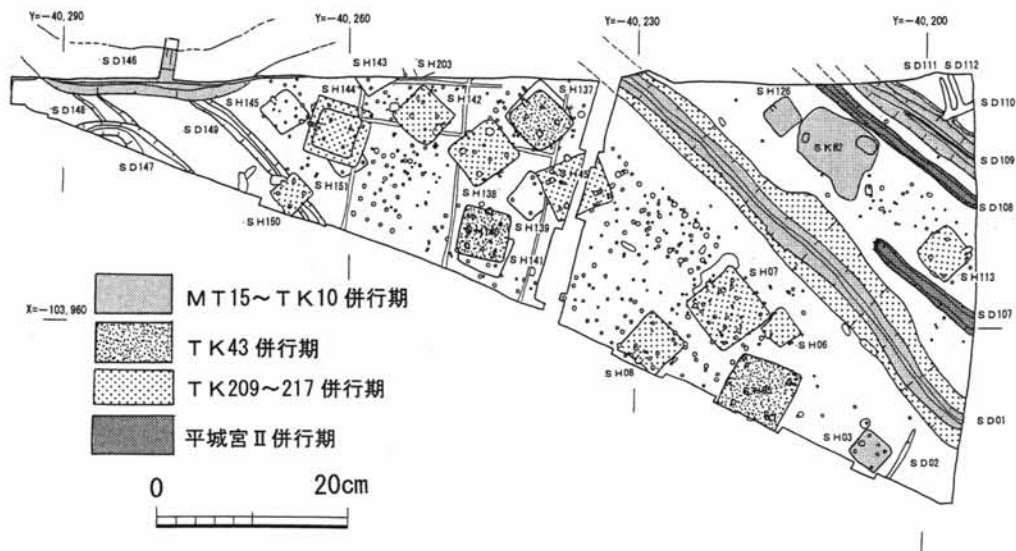
II期(TK43並行期) SH05・137・140が築かれる。

III期(TK209～TK217並行期) 数多くの住居が築かれる。この時期の竪穴式住居跡の希薄な所に掘立柱建物跡が存在し、一部切り合い関係をもつものもあることから、竪穴式住居跡から掘立柱建物跡への移行期と考える。この時期にはSD01の再掘削が行われ、竪穴式住居跡とともに、掘立柱建物跡の中心施設ならびに倉庫群が営まれる。

IV期(平城宮II並行期) SD107・108が掘られ、その間が古道として使用される。

集落としてはIII期をもって終焉をむかえ、IV期までの間には100年ほどの空白時期が存在する。

周辺の調査成果を見ると、SD01に類似した遺構が存在した。それは、SD01と同時期の遺物が出土し、掘り直しが行われた溝として、馬路遺跡のSD02・04がある。SD02からは陶邑編年MT15・TK10並行期～奈良時代にかけての土器が、SD04からはTK209並行期～平安時代にかけての土器が出土し、前者を奈良時代、後者を平安時代として報告した。^(注16)しかし、SD02・04



第87図 遺構変遷図

が段丘縁辺部を通り、規模においてもS D02が幅約2.4m、深さ約0.65m、S D04が幅約1.7m、深さ約0.6mと、周辺調査で検出した溝の中では大規模なものであること、溝底の標高がほぼ同じであることや、出土遺物の時期が池尻遺跡のS D01に類似することから、同一の溝である可能性が高いと考える。また、その周辺から飛鳥時代の竪穴式住居跡群も見つかっている。

周辺の地形を見てみると、整然とした方形区画が見て取れる。これは近代には場整備が行われたためである。その中でイーロは、調査前にも見られた段丘で1m前後の段差が続く。その付近にはイーハやニーホのような方形区画とは異なった畦が存在した。池尻遺跡で検出したS D01が馬路遺跡のC地区のS D02・04に続く溝とすると、イーロの畦に沿うように築かれたと思われる。また、古道の側溝ではないかと考えたS D107・108は、イーハとニーホの間を通る形となり、馬路遺跡のA地区S D501やH地区で検出した溝に続くものと思われる^(注18)。馬路遺跡A地区には、平安時代の2間×2間や2間×4間の総柱建物や1間×4間や1間×5間の側柱建物が、整然と集中する。古道の想定ラインの隣接地にあたることから、この時期まで古道として使用されていた



第88図 池尻遺跡・馬路遺跡主要調査地配置図

と思われる。

池尻廃寺の南側付近からは、大型の掘立柱建物跡が東西・南北方向に整然と並ぶことが試掘調査で明らかになっている。一方、北東約300mのD地区からも大型の掘立柱建物跡(第7次D地区)が見つかり、官衙的な施設と考えられている^(注19)。その隣接地からは、漆の付着した須恵器が出土し、池尻廃寺からは「官」と書かれた墨書土器も出土しており^(注20)、丹波国府の有力な候補地とされている^(注21)。

以上のような調査成果から、SD107・108を両側溝とする古道は、これら掘立柱建物跡が整然と群をなしてブロック状に存在する地域の南側を、北西方向に通じていたことになる。

②遺跡の性格 今回検出した竪穴式住居跡や掘立柱建物跡に伴って、鍛冶関係の工房跡も存在した。また、6世紀前半に築かれたSD01に、伝世品である子持ち勾玉を祭祀遺物として使用されたことから、この地域での有力者が営んだ集落であったと思われる。掘立柱建物跡については、側柱建物と総柱建物を検出した。特に、調査地西側で検出した掘立柱建物跡群については、総柱建物とともに同規模の側柱建物が存在した。これらは倉庫群と考える。東側で検出した建物群については比較的大型であったものの、有庇建物は存在しなかった。また、集落域を溝や柵で区画するという状況でなく、祭祀遺構も存在しないことから、豪族居館として捉えることはできないと考えた。

今回検出した濠と言うべき大規模な溝SD01は、段丘縁辺部を南流するもので、現在の馬路・池尻集落間の段丘上を耕作地拡大ならびに集落域確保の本格的な開発に関係する、灌漑用水路と考える。また溝掘削時期は、丹波最大の千歳車塚古墳築造時あるいはその直後にあたることから、6世紀前半には千歳車塚古墳の築造に止まらず、この付近の微高地上を開発する上で根幹となる溝についても計画されたと考えられる。飛鳥時代には、このような開発を土台にして、溝の再掘削を行いつつ、その付近に集落を計画配置したものと考えられる。

③竪穴式住居跡と竈 この地域では、河原尻遺跡で8世紀前半の竪穴式住居跡が見つかることから、そのころまで存続することが判っている。今回検出した竪穴式住居跡は、一辺7～3mと大型から小型のものまでが存在した。平面形は正方形に近く、地山を掘り込んで竈を設けていることから、竈の位置についても住居構築時に計画されていた。住居の支柱穴は、おおむね対角線上にあり、コーナー付近に設けるものやコーナーから中心までの中間付近に設けるものがある。竈は大半が住居の北西辺中央に設けられていた。今でも冬場北西風が強く、風を凌ぐための対策と思われる。SH07床面からは藁状のものが炭化し、SH137・142から炭化材が見つかることから、蒸し焼き状態で焼失したとみられる。これは、竪穴式住居跡の屋根が土葺きであったためではないかと考える。

竈については、その形状から大きく3タイプに分けられた。竪穴部の壁面までに竈本体を構築するものや、竪穴部の壁面から煙道部がわずかに突出するもの(I類)、竈本体は竪穴部の壁面までに構築するが、煙道部が長く突出するもの(II類)、竈本体が壁面を突出する形で築かれたもの(III類)である。I類の竈をもつ住居については、竪穴部の面積が機能面となり、竪穴式住居跡の

占有面積に相当する。Ⅱ類の竈をもつ住居としてはSH137の1基であるが、浅く面的に掘り込まれたか所が竪穴部の二辺に存在する。この住居は、竪穴部に浅く掘り込まれたか所を加えたものが機能面となり、占有面積になると考える。Ⅲ類については、竈本体が竪穴部を突出する形にあることから、竈本体先端までが機能面となり、占有面積になると考える。支脚については、Ⅰ類の竈にはあるものと無いものが存在するが、大半が支脚を有す。Ⅱ類の竈には支脚を有す。Ⅲ類の竈には、支脚が無い。

時期ごとに見ると、6世紀前半～7世紀中頃にかけてⅠ類の竈が主流を占めるが、6世紀後半～7世紀中頃には一部Ⅱ・Ⅲ類の竈がみられる。竪穴部の規模については、6世紀前半は10㎡強と小型で、6世紀後半には27～47㎡と中～大型になる。7世紀になると10～43㎡と小～大型とさまざまになる。河原尻遺跡においてもⅠ・Ⅱ類の竈をもつ竪穴式住居跡が見つかっており、いずれも奈良時代前半まで続くようである。傾向としては、Ⅰ類は主に古墳時代後期までで、それ以降は消滅傾向となる。Ⅱ類は古墳時代後期に出現し、奈良時代前半までみられる。当遺跡でも同様の傾向が見て取れた。

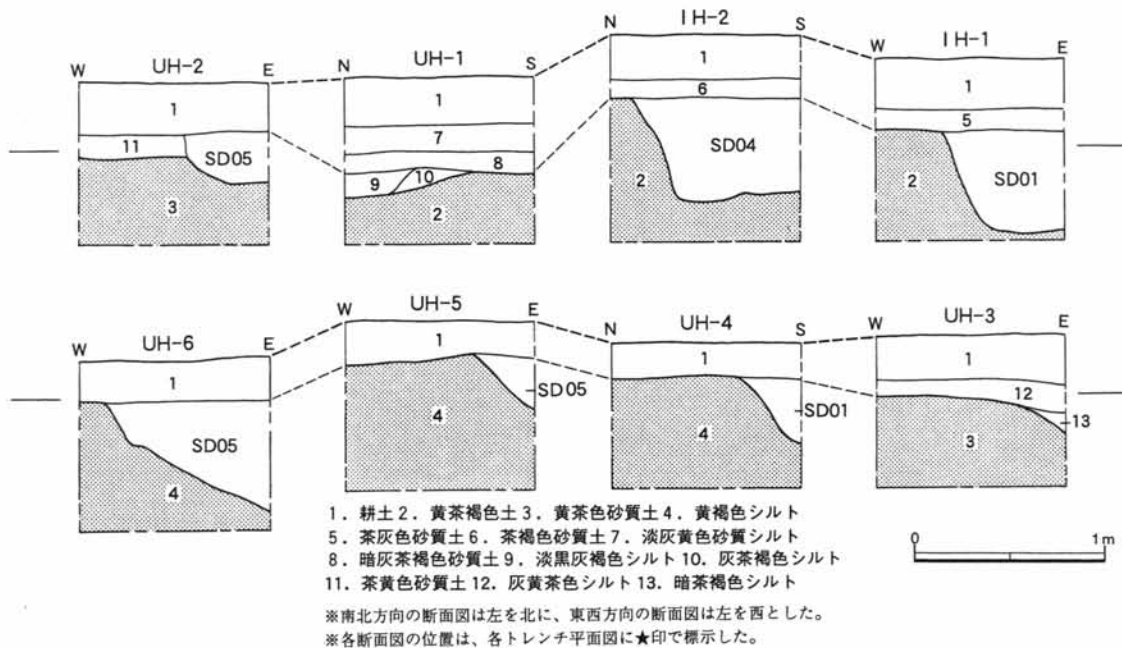
以上、今回検出した遺構は、これまでの調査成果をふまえて、この地域の土地利用を考える上で重要な意味を有していると考え、今後この付近の調査に期待される。

(岡崎研一)

(3) いけじり 池尻遺跡第14次・うまじ 馬路遺跡第6次

1. はじめに

調査地は、亀岡市馬路町六反田、壁木他に位置する。この調査は、パイプライン敷設に伴う調



第89図 調査トレンチ柱状断面図

査で、対象地は、池尻遺跡と馬路遺跡にまたがっている。線的にのびる予定地のうち、これまでの調査結果などから遺構・遺物が残存している可能性が高い地点を、池尻遺跡内で2か所、馬路遺跡内で6か所のあわせて計8か所のトレンチ約1,300㎡にわたって調査を行った。

池尻遺跡は、馬路町の北部に位置する。これまでの調査の成果から、遺跡北半部には弥生時代中期初頭の方形周溝墓群や古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴式住居跡、奈良時代前半の官衙と考えられる遺構などが存在することが判明している。今回の調査地は、遺跡の南東部にあたる。

馬路遺跡は、池尻遺跡の南側に位置し、馬路の集落を中心に広がる。これまでの調査により、



第90図 調査地区位置図

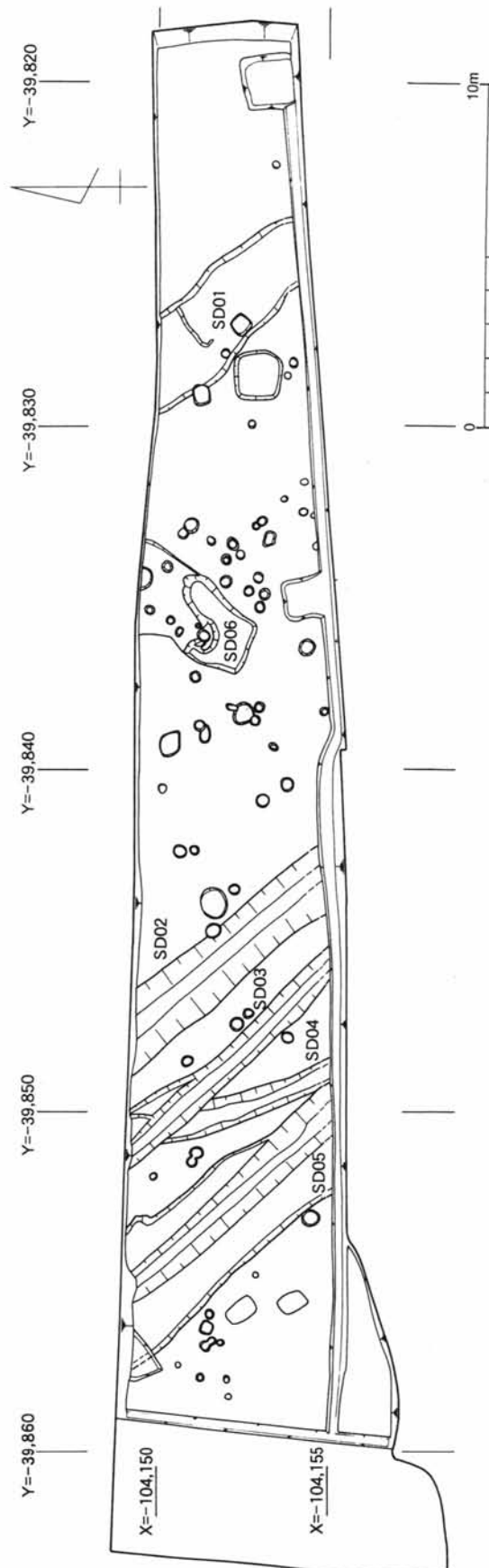
弥生時代中期後半の方形周溝墓群や古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴式住居跡、平安時代の溝・掘立柱建物跡などが検出されている。今回の調査地は、遺跡の北部にあたる。

現地調査は、平成17年12月19日から開始した。重機掘削を先行して行い、平成18年1月5日からは作業員による人力掘削も並行して開始した。記録作業も順次行い、3月3日に現地調査を終了した。この間、2月26日に池尻遺跡第12次調査とともに現地説明会を実施した。

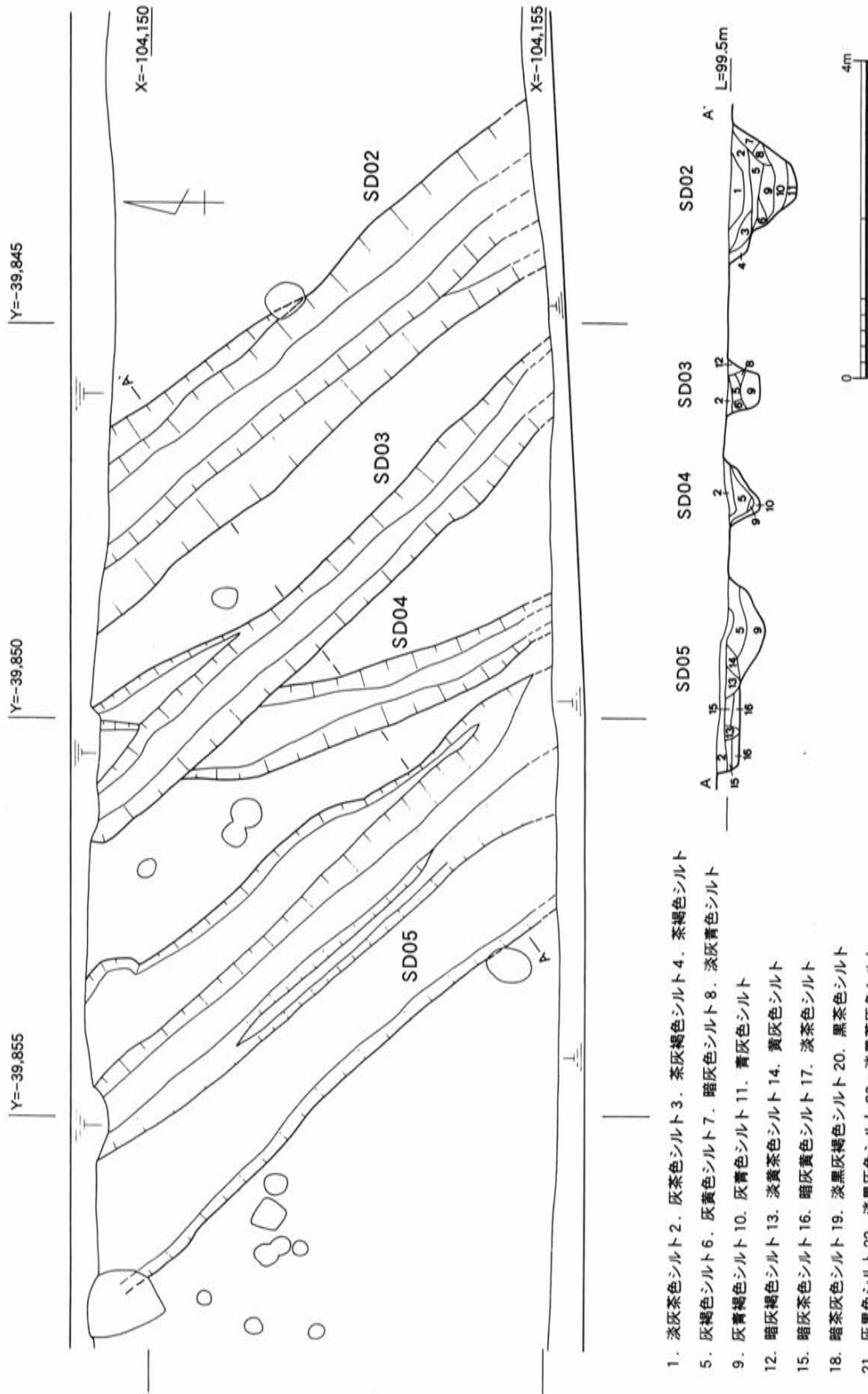
なお、今回の調査トレンチ表記については、池尻遺跡については頭文字のIと、過去の調査から順次アルファベットで表記される地区名が今回はH地区となるため、IHを冠してトレンチ番号を続けることとする。馬路遺跡についても同様に、頭文字のUと、今回の地区名がH地区となるため、UHを冠してトレンチ番号を続けて表記することとしたい。

2. 調査概要

今回の調査は、上記のとおり、パイプライン敷設に伴うもので、その工事による掘削予定幅に限って調査を行った。したがって、小規模な土坑など以外では、遺構の全容を検出したものはすくない。調査にあたっては、まず、調査トレンチ以外に掘削排土置き場までを含んだ範囲の耕作土を重機によって除去し、さらに、調査トレンチを遺構検出面付近まで再度重機掘削した。その後、人力によって精査、遺構掘削などを行った。今回の調査では、弥生時代中期頃から中世頃にかけて



第91図 IH-1 トレンチ平面図



- 1. 淡灰茶色シルト 2. 灰茶色シルト 3. 茶灰褐色シルト 4. 茶褐色シルト
- 5. 灰褐色シルト 6. 灰黄色シルト 7. 暗灰色シルト 8. 淡灰青色シルト
- 9. 灰青褐色シルト 10. 灰青色シルト 11. 青灰色シルト
- 12. 暗灰褐色シルト 13. 淡黄茶色シルト 14. 黄灰色シルト
- 15. 暗灰茶色シルト 16. 暗灰黄色シルト 17. 淡茶色シルト
- 18. 暗茶灰色シルト 19. 淡黒灰褐色シルト 20. 黒茶色シルト
- 21. 灰黒色シルト 22. 淡黒灰色シルト 23. 淡黒茶灰色シルト

第92図 I H-1 トレンチ溝群実測図

での遺構を検出した。以下、各トレンチの概要を記述する。

(1) IH-1 トレンチ

今回の調査範囲の北東側に設けた東西方向のトレンチである。このトレンチで検出した

主な遺構は、弥生時代と奈良～平安時代頃と考えられる溝である。基本的な層序は、現耕作土下に若干の遺物を含む茶灰色砂質土をはさみ、黄色系の地山となる。なお、このトレンチの東端部には礫層が広がっており、顕著な遺構は検出しなかった。

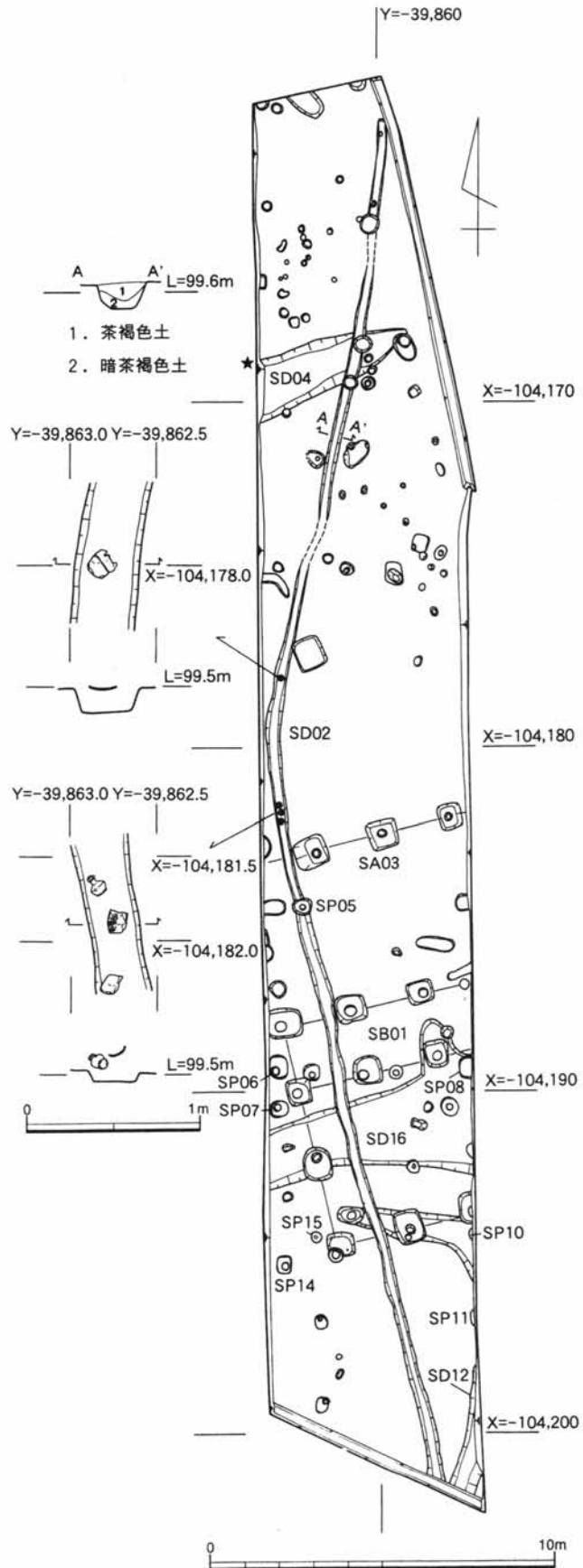
溝SD02 調査地西半部で検出した、北西から南東にのびる溝である。幅約1.8m、深さ約0.9mを測る。断面逆台形状の溝である。8世紀末～9世紀初頭頃の遺物が出土した。

溝SD03 SD02の西側に1.2mの間隔をおいてほぼ平行する。幅0.8m、深さ0.5mを測り、断面逆台形状を呈する。

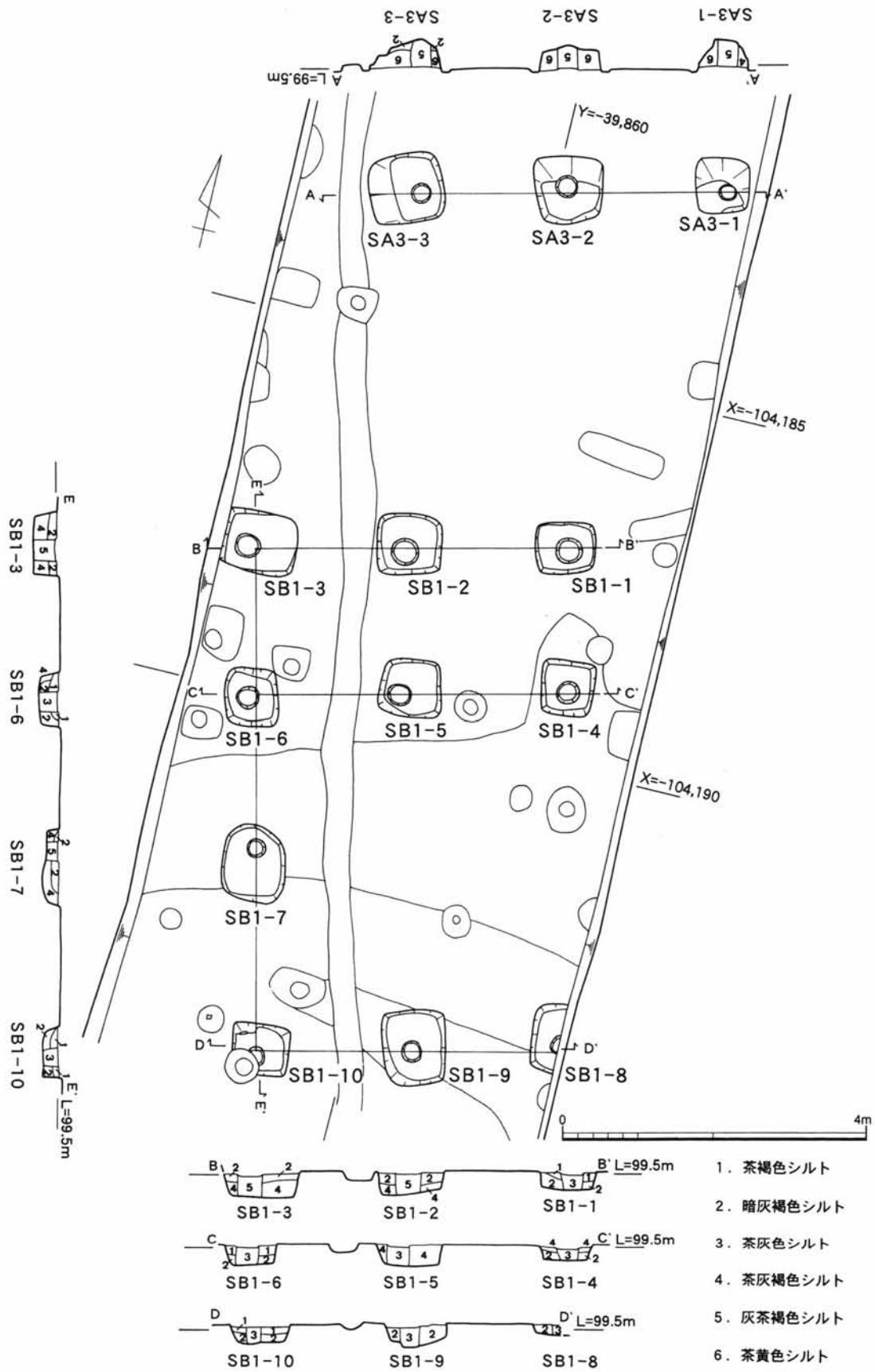
溝SD05 SD03の西側に2mの間隔をおいてほぼ平行する。幅2.8m、深さ0.6mを測る。掘り直しされている可能性もある。

溝SD04 SD03とSD05の間に位置する。両方の溝に切られており、先行する溝と考えられる。方向もやや南北方向に近くなる。幅0.8m、深さ0.5mを測り、断面「V」字状を呈する。

溝SD01 トレンチ東側で検出した、北西から南東方向の溝である。幅約2m、深さ約0.9mを測り、断面は逆台形状を呈する。顕著な出土遺物はない。



第93図 IH-2 トレンチ平面図



第94図 IH-2 トレンチ掘立柱建物跡SB01、柵列跡SA03実測図

溝SD06 SD01の西側で検出した、北東から南西側にのびる溝である。幅約2m、深さ0.2~0.6mを測り、断面は逆台形状を呈する。弥生土器とみられる土器の小片が出土した。埋土はSD01と同様の暗茶褐色土である。SD01は顕著な出土遺物がないが、あるいは、これらの溝が方形周溝墓の周溝である可能性も考えられる。

(2) IH-2 トレンチ

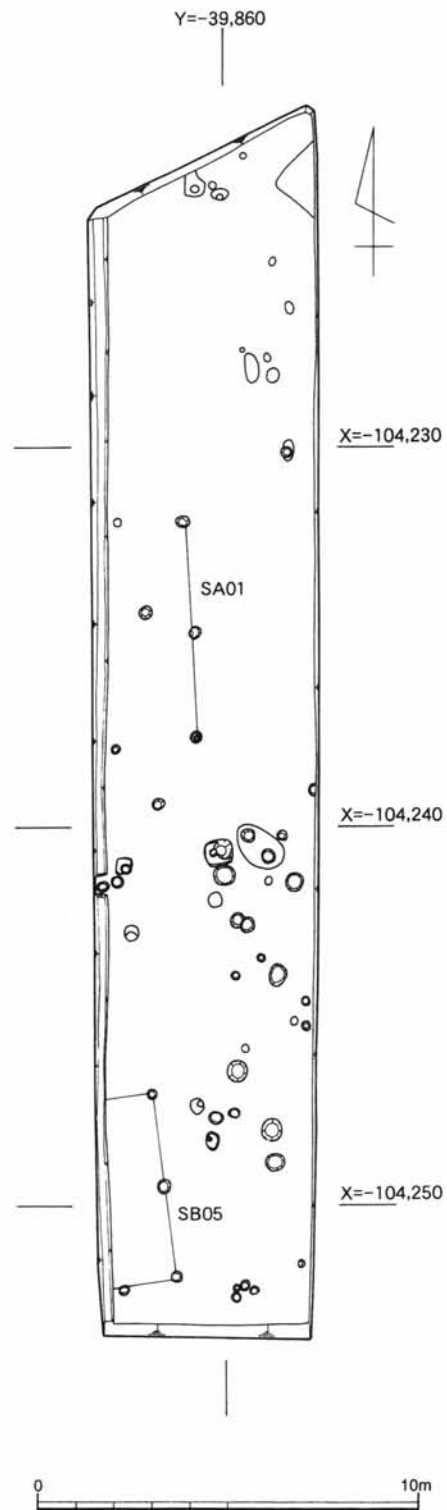
IH-1 トレンチの西端から農道をはさんで直行するように設けた南北方向のトレンチである。南端は、馬路遺跡第4次調査のF-1地区と隣接する。基本的な層序は、現耕土下に茶褐色砂質土をはさんで、黄色系の地山となる。南側では、茶褐色砂質土がなくなる。

掘立柱建物跡SB01 北側に庇をもつ東西棟の建物跡で、建物全体の大きさについては確認できなかったが、母屋部は梁間2間、桁行2間以上とみられる。柱穴は一辺約0.8~1mの方形で、これまで周辺で検出した建物跡に比べると大きいものである。柱間は約2.1mである。柱穴出土遺物からみて、9世紀頃の建物跡と考えられる。柵列跡SA03・掘立柱建物跡SB01の北側で検出した。SB01と、柱穴の規模、方向や柱間が揃っており、同時に存在したものと考えられる。SB01の北庇部分の柱列と組合わせて建物となる可能性も考えられるが、そのようにみるとSB01との間隔が狭くなるので、東西方向の柵列跡とみておきたい。

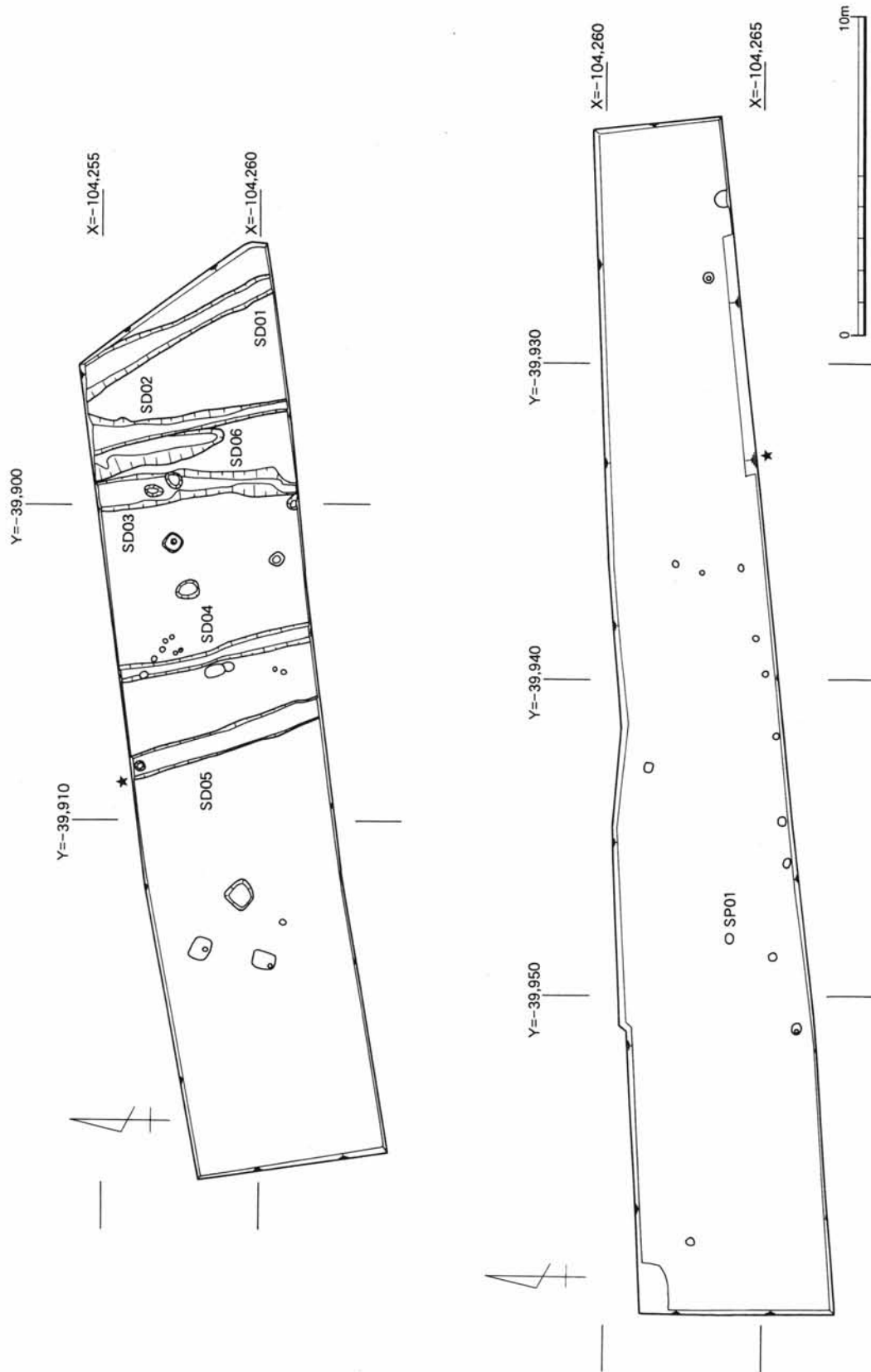
溝SD02 南北方向に「く」の字状にのびる溝である。幅約0.3m、深さ約0.16mを測る。遺構の重なりからみて、SB01に先行する遺構とみられる。出土遺物から、8世紀頃の溝と考えられる。

溝SD04 トレンチ北側で検出した。東西方向にのびる溝で、幅1.6m、深さ0.5mを測る。断面逆台形状を呈する。SD02に先行する溝で、弥生土器の小片が出土している。周辺の遺構状況からみて、方形周溝墓に関連する溝と考えられる。

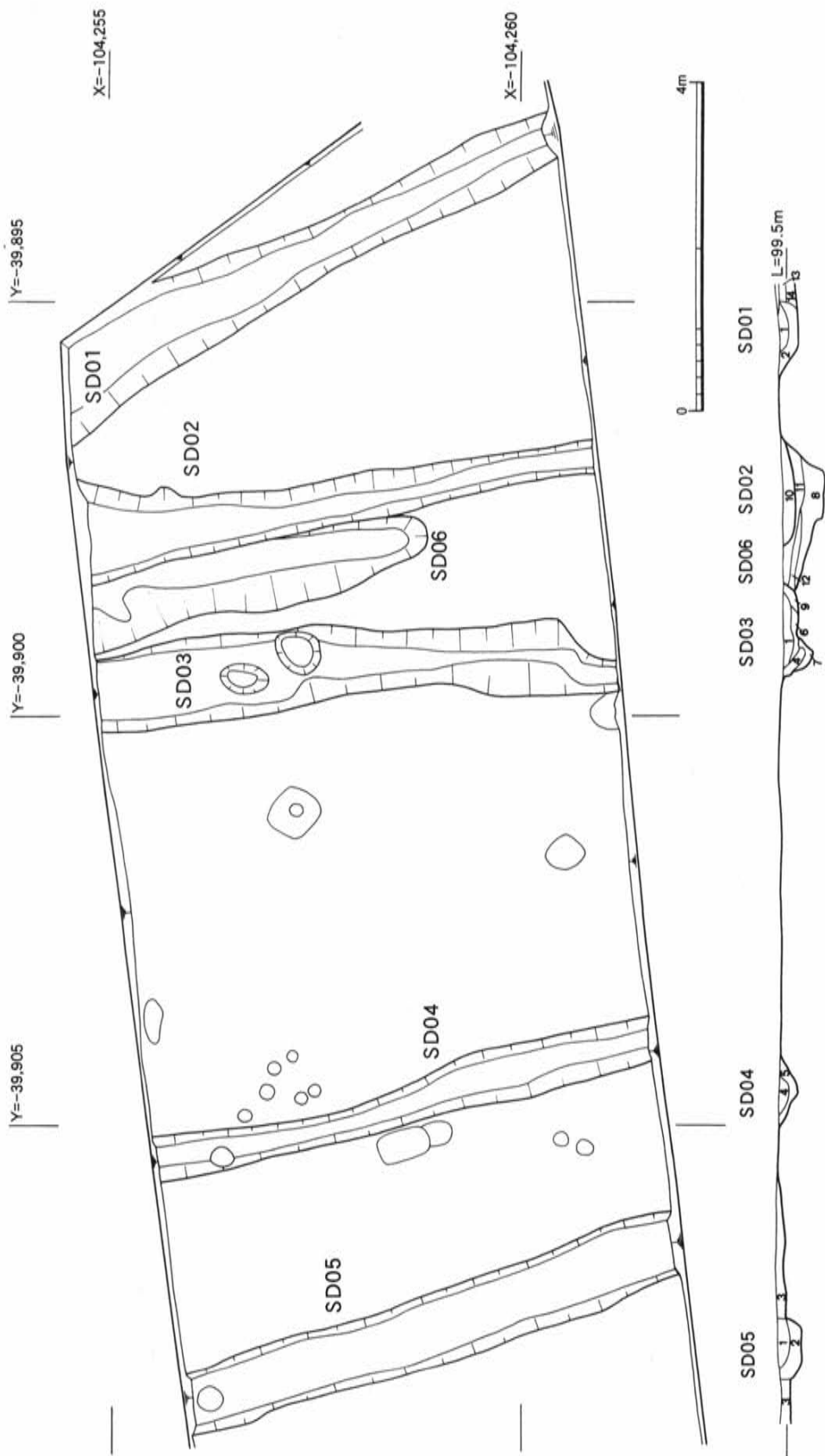
溝SD12 トレンチ南側で検出した。「L」字状に屈曲する溝で、幅0.8m、深さ0.3mを測る、断面逆台形状



第95図 IH-1 トレンチ平面図



第96図 UH-2・3トレンチ平面図



1. 灰褐色砂質土 2. 淡茶灰褐色砂質土 3. 黄茶色砂質土 4. 灰茶色砂質土 5. 淡灰褐色砂質土 6. 淡灰色シルト 7. 淡灰黄色砂質土
8. 灰褐色 9. 茶灰褐色砂質土 10. 暗茶灰褐色砂質土 11. 暗茶褐色砂質土 12. 暗黄茶褐色砂質土 13. 淡橙灰色砂質土 14. 灰褐色シルト

第97図 UH-2 溝群実測図

の溝である。S B01やS D02に先行する遺構である。馬路遺跡第4次調査F-1地区で検出した方形周溝墓ST05の東側および北側周溝にあたるものとみられる。

溝S D16 S D12の北側で検出した。東西方向にのびる溝で、幅1.6~3.4m、深さ0.3mを測る。断面「U」字状を呈する。顕著な出土遺物はないが、S B01やS D02に先行する溝であり、方形周溝墓に関連する溝の可能性が考えられる。

(3) UH-1 トレンチ

I H-2 トレンチの南側延長部分に接待したトレンチで、北端は馬路遺跡第4次調査F-1地区に隣接する。基本的な層序は、現耕作土下にシルト層や砂質土層をはさんで、黄色系の地山となる。トレンチ北半部に皿状に堆積した灰褐色系のシルト層がみられたが、遺物は含まれず、遺構とは認められなかった。検出遺構は柱穴とみられるピットが主であり、分布も疎である。

柵列跡S A01 トレンチほぼ中央北寄りで検出した。南北方向に3個の柱穴が並ぶ、2間分の柵列である。柱間はほぼ2.9mを測る。柱穴は円形を呈し、直径0.3mを測る。顕著な出土遺物がなく、その時期は不明である。

掘立柱建物跡S B05 トレンチ南側で検出した。2間×1間以上の東西棟の建物とみられる。南北方向の柱間はほぼ2.5m、東西は1.5mを測る。柱穴は円形を呈し、直径0.2~0.3mを測る。この建物跡も、顕著な出土遺物がなく、その時期は不明である。

(4) UH-2 トレンチ

馬路遺跡第3次調査B地区の農道を隔てた西側に設定した東西方向のトレンチである。基本的な層序は、現耕作土下に茶黄色砂質土をはさんで黄色系の地山となる。歴史時代の遺構は、茶黄色砂質土上から掘り込まれている。このトレンチでは、ほぼ東半部に溝などの遺構が分布しており、西半部は疎である。

溝S D01 トレンチ東端で検出した。北西から南東方向にのびる溝で、幅1m、深さ0.25mを測り、断面逆台形状を呈する。出土遺物から、8世紀末~9世紀初頭頃の溝とみられる。

溝S D02 S D01の東側から検出した。南北方位からやや西に振る方向にのびる溝である。幅0.4~1.2m、深さ0.16mを測る溝で、断面浅い「U」字形状を呈する。

溝S D03 S D02の東側で検出した。方向はS D02とほぼ同じである。幅0.4~1m、深さ0.2mを測る。

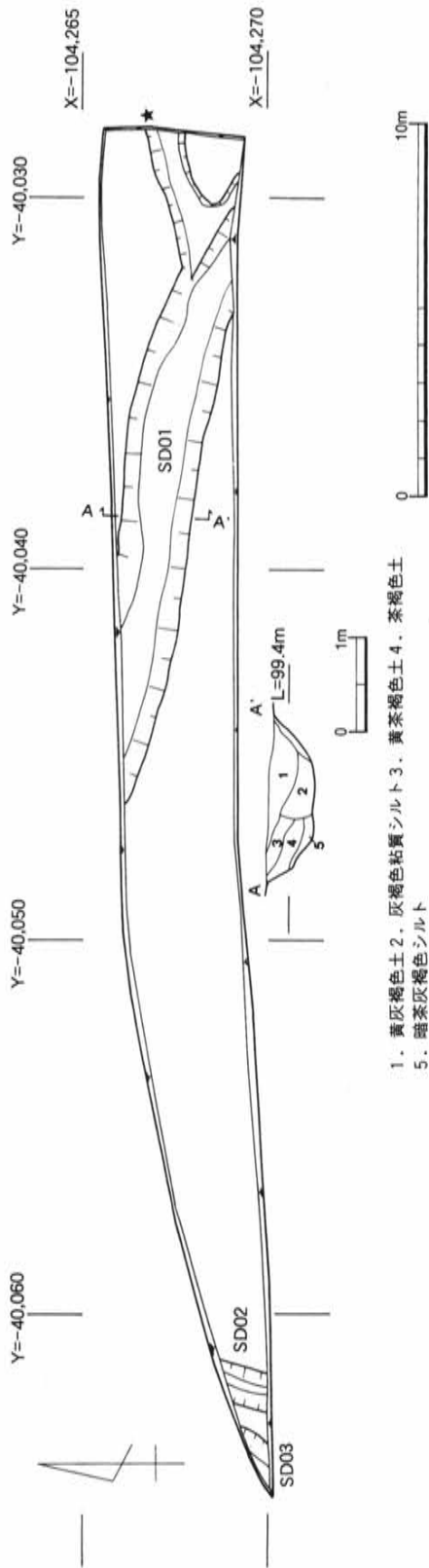
溝S D04 S D03の東側で検出した溝で、S D03よりやや西に振る方向にのびる。幅0.65m、深さ0.25mを測る。断面ゆるい「V」字状を呈する。

溝S D05 S D04の東側で検出した。S D01とほぼ同様の方向にのびる。幅0.85m、深さ0.35mを測る。茶黄色砂質土から掘り込まれる。

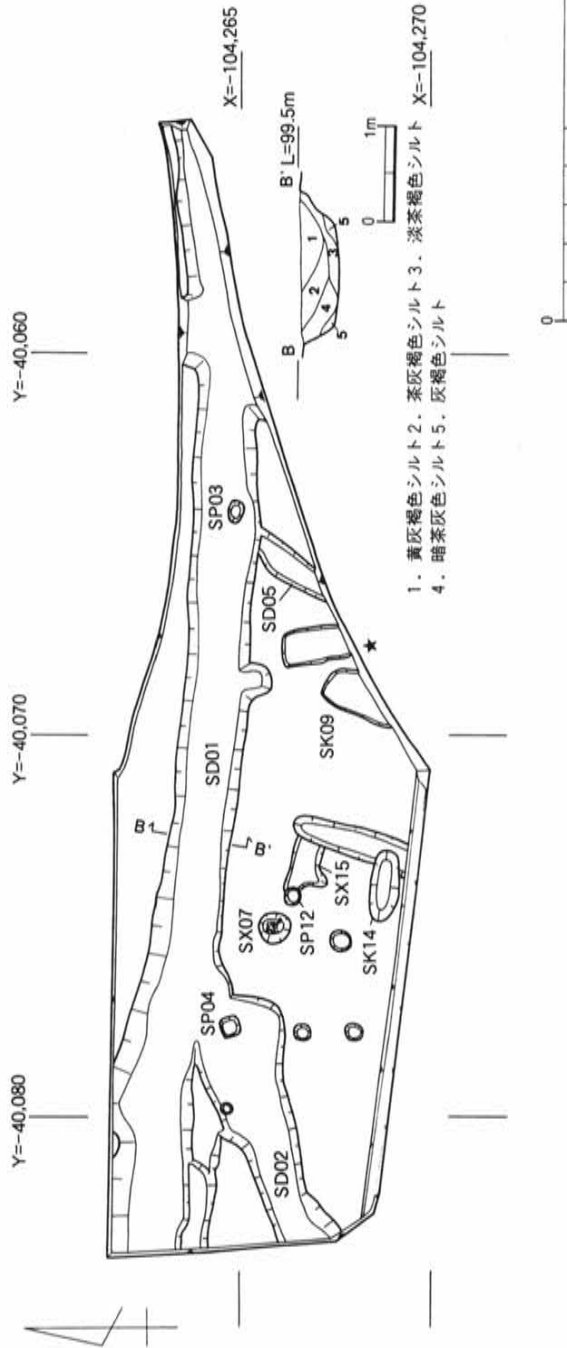
溝S D06 S D02と重なって検出した。南北方向の溝で、最大幅1.9m、深さ0.5mを測る。弥生土器片が出土しており、付近の遺構の分布状況から、方形周溝墓関連の溝と考えられる。

(5) UH-3 トレンチ

UH-2 トレンチから農道と側溝を隔てた西側に設定した東西方向のトレンチである。基本的

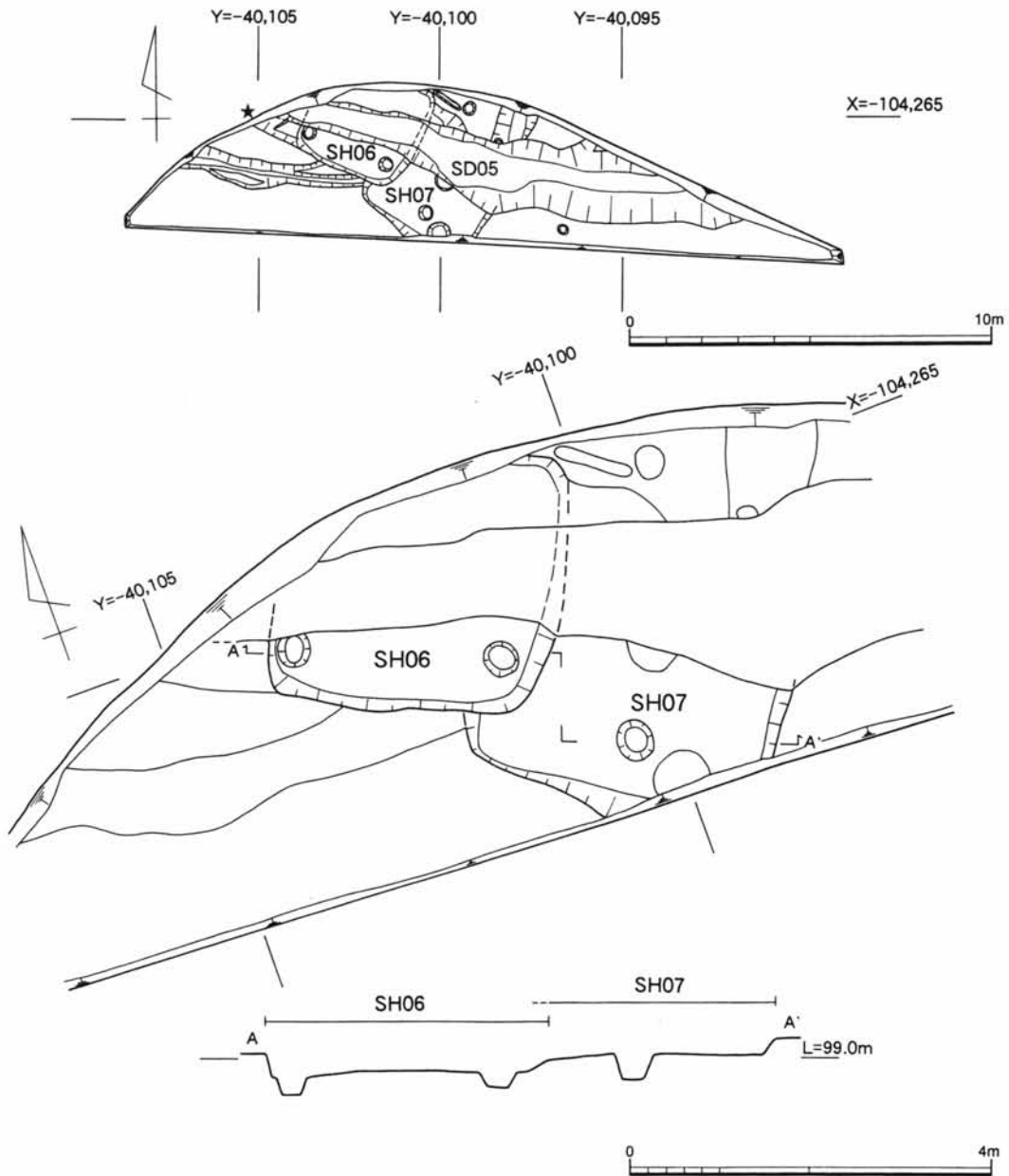


1. 黄灰褐色土 2. 灰褐色粘質シルト 3. 黄茶褐色土 4. 茶褐色土
5. 暗茶灰褐色シルト



1. 黄灰褐色シルト 2. 茶灰褐色シルト 3. 淡茶褐色シルト
4. 暗茶灰色シルト 5. 灰褐色シルト

第98図 UH-4・5トレンチ平面図



第99図 UH-6 トレンチ平面および検出遺構実測図

な層序はUH-2 トレンチとほぼ同様である。東側に暗茶褐色シルトが皿状に堆積している部分があったが、断ち割りの結果、遺物などは出土せず、遺構とは認められなかった。

検出遺構はピットが主なものである。遺構の分布は非常にまばらである。トレンチ東半部で検出したピットSP01から、土師器甕片が出土した。

(6) UH-4 トレンチ

UH-3 トレンチの西側延長上で、馬路遺跡第3次調査C地区の西側に設定した東西方向のトレンチである。このトレンチの基本的な層序は、現耕作土下が黄色系の地山となる。

溝SD01 トレンチ東半部で検出した。この溝は、ほぼ東西方向にのびるが、東端で東西方向の浅い溝と南東方向に屈曲する深い溝とに分岐する。幅1.7m、深さ0.5mを測る断面逆台形状の溝である。主な出土遺物から、8世紀頃から10世紀頃まで存続した溝とみられる。東西方向の浅

い溝は、馬路遺跡第3次調査C地区で検出したSD01に続くものとみられ、南東に屈曲する溝は、同地区で検出したSD02・04に続くものとみられる。その結果とも考え合わせると、平安時代頃に掘り直された可能性も考えられる。

(7) UH-5 トレンチ

農道をはさんでUH-4 トレンチの北西側に設定した東西方向のトレンチである。基本的な層序は、現耕作土下が地山となる。

溝SD01 ほぼ東西方向にのびる溝で、幅1.5m、深さ0.5mを測る、断面逆台形状の溝である。UH-4 トレンチ検出のSD01の西側延長とみられる。

溝SD02 SD01の西側で、南西側に分岐する溝である。幅1.5m、深さ0.5mを測る断面逆台形状の溝である。

焼土坑SX12 トレンチ西半部で検出した。径0.8m、深さ0.2mの円形土坑状である。内壁が被熱して赤変している。

土坑SK14 トレンチ西半南側で検出した。長さ1.8m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。長楕円形土坑である。布留式の甕などが出土した。

(8) UH-6 トレンチ

UH-5 トレンチの農道をはさんだ東側、馬路遺跡第3次調査D地区の北側未調査部分に設定したトレンチである。基本的な層序は、現耕作土下が地山となる。

溝SD05 UH-5 トレンチで検出したSD02の西側延長にあたりとみられる。幅2m、深さ0.6mを測る、断面逆台形状の溝である。

竪穴式住居跡SH06 一辺3mの方形を呈する。中央をSD05によって削平されている。柱穴とみられるピットが2か所ある。出土遺物はない。

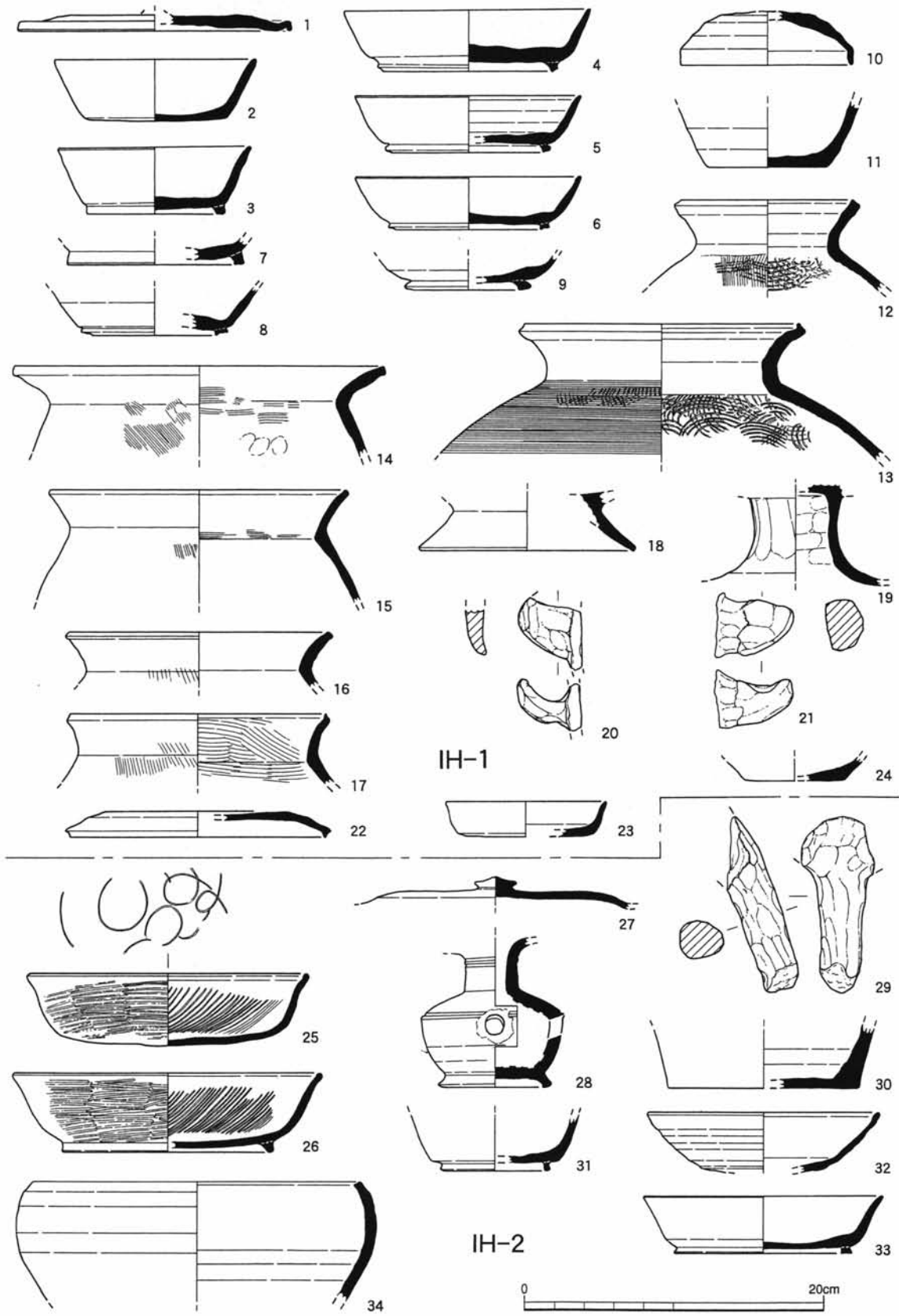
竪穴式住居跡SH07 SH06とほぼ同規模の住居跡であり、SH06に先行する住居跡とみられる。北半部をSD05によって削平されている。柱穴とみられるピットが1か所ある。

3. 出土遺物

今回の調査地は、調査地の制約上、線のかつ部分的にならざるを得ないところがある。したがって、検出遺構も断片的なものが多く、出土遺物も量的には少ない。内容としては、弥生時代中期後半頃から近世にかけての土器、陶磁器などのほかに、少数の石器や金属製品が含まれる。以下、土器については各トレンチ毎に、石器、金属製品については後にまとめて記述する。なお、UH-1 トレンチについては、図化可能な遺物が無いため、記述を省略する。

(1) IH-1 トレンチ

須恵器蓋(1)は、口縁端部が屈曲するもので、口径18cmを測る。須恵器杯(2)は、無高台で、底部から口縁部が明瞭に屈曲して立ち上がる。口径13.4cm、器高4.1cmを測る。8世紀末～9世紀初頭頃のものか。須恵器杯(3)は、底部から口縁部が明瞭に屈曲して立ち上がり、底部と口縁部の境付近に高台を貼り付ける。口径12.7cm、器高4.6cmを測る。2とほぼ同時期とみられる。須



第100図 出土遺物実測図(1)

恵器杯(4~6)は、貼付高台を有するものである。須恵器(7~9)は、貼付高台付の杯とみられる。9は、底部外周よりやや内側に高台を貼り付ける。杯蓋(10)は、口径11.4cmを測る小形のもので、陶邑編年のTK217併行期のものとみられる。須恵器(11)は、瓶の底部とみられ、底径8cmを測る。須恵器甕(12)は、口径11.4cmを測る。外面はタタキのちカキ目調整、内面には同心円タタキがみられる。横瓶の可能性も考えられる。須恵器甕13は、外面タタキのちカキ目調整、内面同心円タタキである。口縁端部を上方につまみ上げる。口径18.5cmを測る。

土師器甕(14~16)は、口縁部が「く」の字状に屈曲するもので、ハケ目調整が残る。14は口径24.6cm、15は口径19.8cm、16は口径17.2cmを測る。土師器甕(17)は、内外面ともやや粗いハケ目調整で、口縁端部を上方につまみ上げる。口径17cmを測る。土師器(18)は、高杯などの脚部とみられ、内外面ともナデ調整される。径14.2cmを測る。土師器(19)は、高杯の脚部とみられる。脚柱部は面取状に調整される。土師器(20)は、甕などの把手である。扁平な三角形状を呈する。土師器(21)も甕などの把手である。以上、1~21までは、溝SD02出土である。

須恵器蓋(22)は、端部が屈曲しない。口径17cmを測る。内面に墨が付着しており、転用硯か。溝SD05出土である。土師器皿(23)は、口径10.6cm、器高2.3cmを測る。溝SD03出土である。土師器皿(24)は、底部糸切とみられる。底部径6.6cmを測る。包含層出土である。

(2) IH-2トレンチ

土師器杯(25)は、内面底部に螺旋状の、立上り部に放射状の暗文を施す。外面にも横方向のミガキがみられる。口径18.5cm、器高4.8cmを測る。土師器杯(26)は、貼付高台を有するもので、内面立上り部に放射状の暗文を施す。外面にも横方向のミガキがみられる。口径20.4cm、器高5.3cmを測る。25・26は、高台の有無はあるが、形状、調整に共通性があり、時期的には8世紀前半頃のものともみられる。須恵器蓋(27)は、扁平な宝珠形つまみを有する。

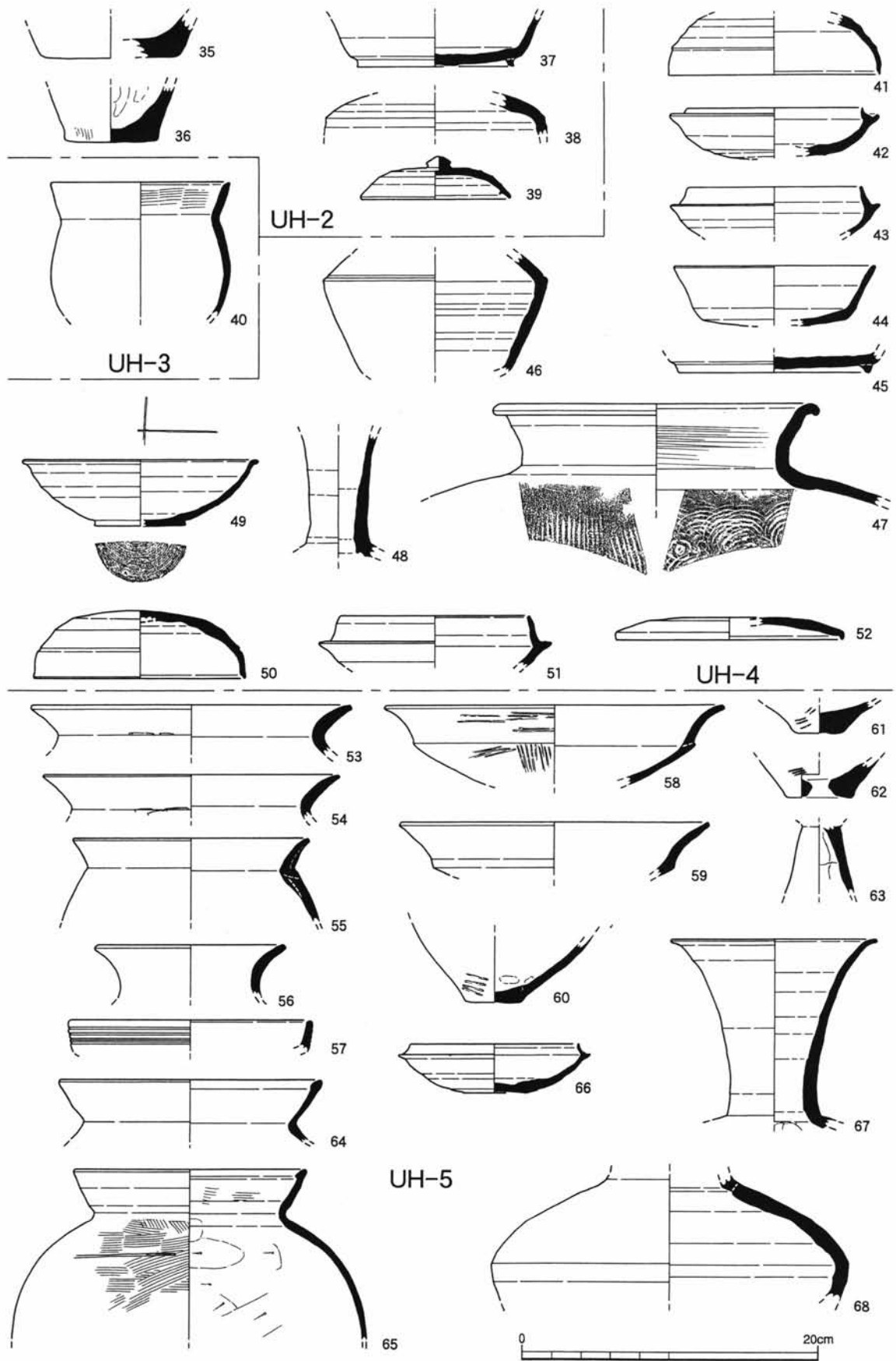
須恵器甕28は、「ハ」の字状に開く貼付高台を有する。体部には注口が付けられていたものと考えられるが、欠失している。口縁部も欠失しておりその形状は不明である。注口部、口縁部ともに、故意に欠いた可能性も考えられる。高台径6.4cm、残存高9.9cmを測る。丹波地域では類例を見ない特殊な形状である。

土製品(29)は、土師質の棒状を呈し、残存長12.1cm、径3cmを測る。土馬の脚部とも考えられる。以上の遺物は、溝SD02から出土した。

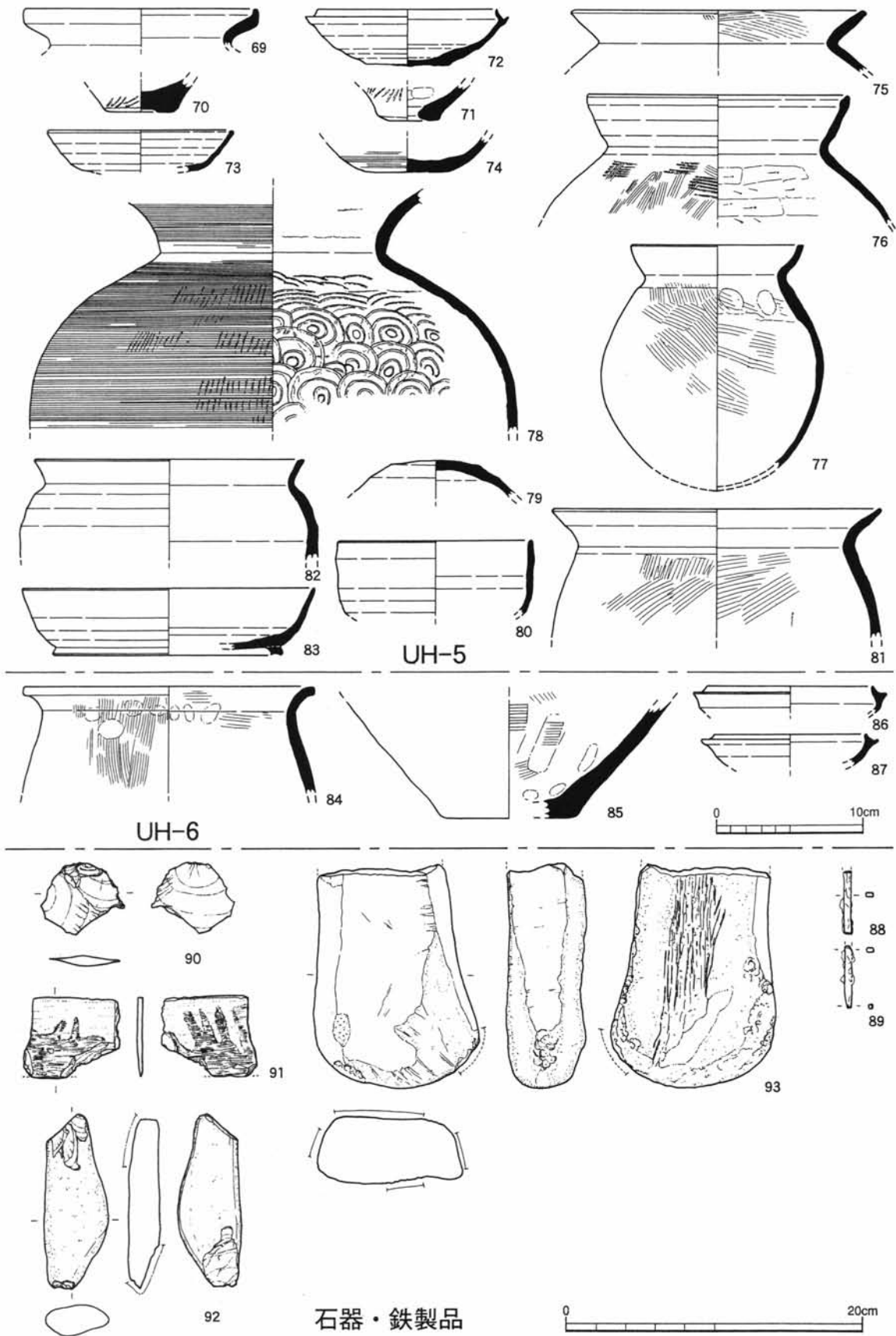
須恵器杯(31)は、底部外周よりやや内側に高台を貼り付けている。高台径7.3cmを測る。須恵器杯(32)は、口縁部が内湾気味かつ外開き気味に立ち上がる。口縁端部は、やや肥厚する。外面には、水挽き成形のロクロ目痕が残る。口径15.4cmを測る。9世紀後半~10世紀にかけての頃のものか。31・32は、掘立柱建物跡SB01を構成する柱穴から出土した。

須恵器瓶(30)は、底部のみの残存で、底径12.6cmを測る。柱穴とみられるピットから出土した。須恵器杯(33)は、貼付高台を有するもので、口径16cm、器高3.9cmを測る。包含層から出土した。須恵器鉢(34)は、鉄鉢形を呈し、口径21.8cmを測る。耕作用暗渠出土である。

(3) UH-2トレンチ



第101図 出土遺物実測図(2)



石器・鉄製品

第102図 出土遺物実測図(3)

弥生土器(35・36)は、甕もしくは壺の底部である。残存状況が悪く調整の詳細は不明であるが、36の外面にハケ目調整が認められる。35は底径8.8cm、36は底径6.3cmを測る。これらの弥生土器は、溝SD06から出土した。

須恵器杯(37)は、貼付高台をもつ杯で、底部の外周付近に高台を貼り付ける。高台径10.5cmを測る。須恵器壺(38)は、肩部が張り気味の器形を呈する。残存最大系15cmを測る。肩部と胴部の境を浅く窪ませる。37・38は、溝SD01出土である。

須恵器杯蓋(39)は、宝珠形つまみを有し、口縁端部内面にかえりをもつ。口径10cm、器高2.9cmを測る。包含層出土である。

(4) UH-3 トレンチ

土師器甕(40)は、体部から口縁部がゆるやかに「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口縁部内面に粗い横方向のハケ目調整がみられる。口径12cmを測る。ピットSP01出土である。

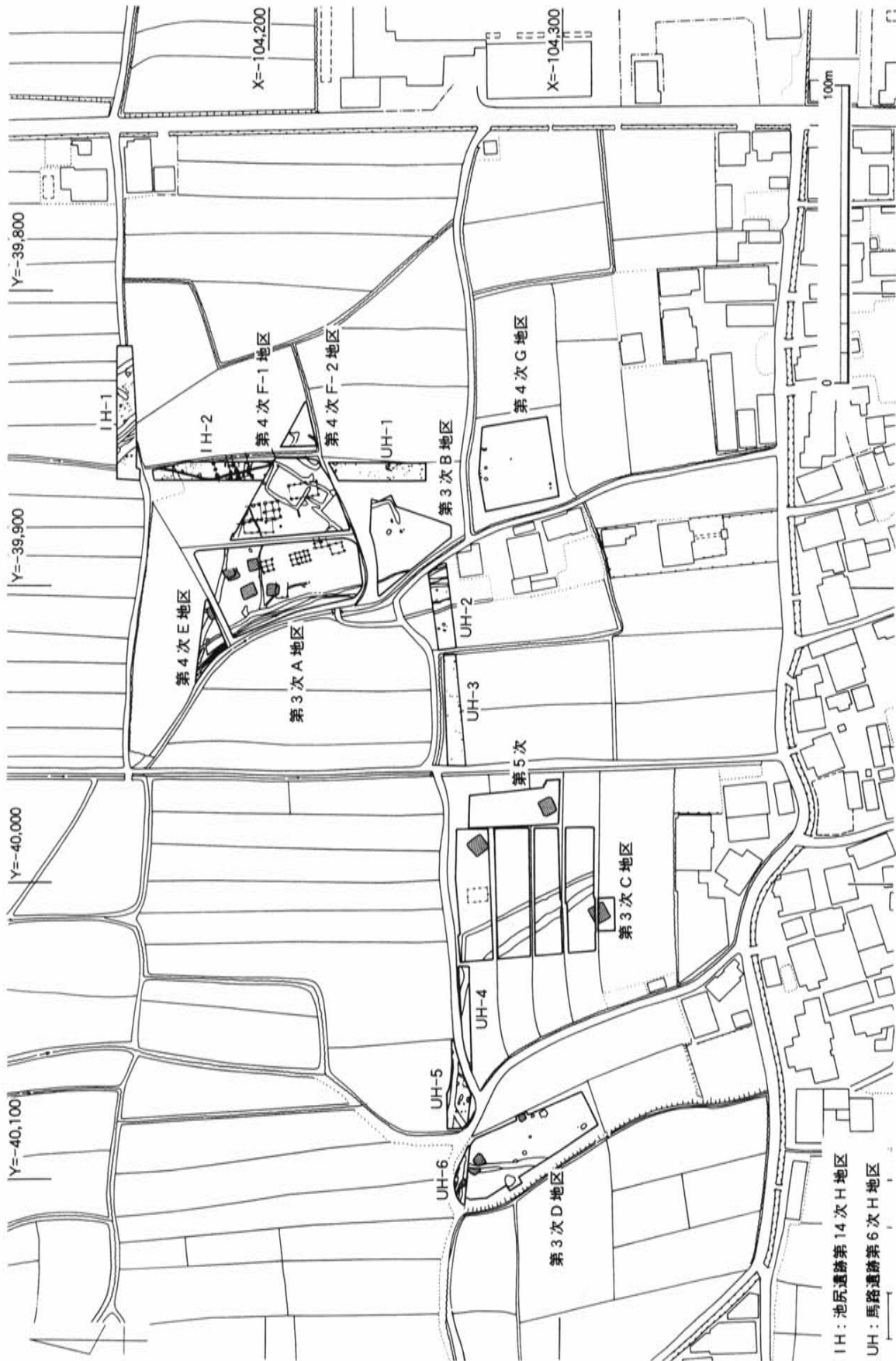
(5) UH-4 トレンチ

須恵器杯蓋(41)は、外面の天井部と口縁部の境に形骸化した稜をもち、内面口縁端部に段を有する。口径14.2cmを測る。陶邑編年のTK10併行期とみられる。須恵器杯身(42)は、口縁部が低く立ち上がり、器形もやや扁平である。口径11.8cmを測る。陶邑編年のTK209併行期か。須恵器杯身43は、口縁部が内傾して立ち上がる。口径11.8cmを測る。陶邑編年のTK10もしくはTK43併行期とみられる。須恵器杯(44)は、底部から口縁部が明瞭に屈曲して立ち上がる。口縁部はやや外反する。口径13.5cm、器高4.1cmを測る。須恵器杯(45)は、底部外縁付近に貼付高台を有するものとみられる。高台径11.8cmを測る。須恵器壺(46)は、肩部と胴部の境に沈線を廻らす。最大胴径15.2cmを測る。須恵器甕(47)は、外面格子タタキ、内面同心円タタキで、口径22.2cmを測る。須恵器(48)は、長頸壺の頸部で、胎土は粗く、いわゆる壺Gと考えられる。須恵器碗(49)は、低い糸切高台を持ち、口縁端部は外反する。水挽き成形によるロクロ目がみとめられる。見込みに「十」字状のへら描き沈線がある。口径16cm、器高4.6cm、高台径6.1cmを測る。10世紀頃のものか。以上の遺物は、溝SD01出土である。

須恵器杯蓋(50)は、天井部と口縁部の境に形骸化した稜をもつ。口縁端部には段を有する。口径14.2cm、器高2.1cmを測る。陶邑編年のTK43併行期か。溝SD02から出土した。須恵器杯身(51)は、口縁部が内傾して立ち上がる。口径12.8cmを測る。陶邑編年のTK10もしくはTK43併行期か。須恵器蓋(52)は、天井部から口縁部がなだらかに降るもので、口径12.8cmを測る。宝珠形つまみをもつものか。口径15.3cmを測る。以上2点は精査中出土である。

(6) UH-5 トレンチ

弥生土器(53~55)は、甕の口縁部である。口縁部が体部から「く」の字状に屈曲する。弥生土器(56)は、壺の口縁部である。口径12.6cmを測る。弥生土器(57)は、甕などの口縁部とみられる。外面に擬横線文を施す。口径16.2cmを測る。弥生土器(58・59)は、二重口縁状の器形である。58は高杯とみられ、口径22.8cmを測る。59は、高杯もしくは壺の口縁部と考えられ、口径20.8cmを測る。弥生土器(60~62)は、甕などの底部である。外面にタタキ痕がみとめられる。62は、底部



第103図 調査地周辺遺構分布図

穿孔している。63は、土師質の高杯の脚部である。土師器甕(64・65)は、口縁端部を折り返して肥厚させる布留式の甕である。

須恵器杯身(66)は、口縁部が内傾して低く立ち上がる。口径11.3cm、器高3.2cmを測る。陶邑編年のTK209併行期か。須恵器長頸壺(67)は、頸部から口縁部にかけてラップ状に開く。口径13.7cmを測る。須恵器壺(68)は、やや肩が張った形状で、平瓶の可能性もある。以上の遺物は、溝SD01から出土した。

弥生土器(69)は、受け口状の口縁部をもつ甕で、口径15.6cmを測る。弥生土器(70)は、甕の底部とみられ、外面にタタキ痕がみとめられる。弥生土器(71)は、底部穿孔されており、甑の底部とみられる。須恵器杯身(72)は、口縁部が内傾して低く立ち上がる。口径12cm、器高3.9cmを測る。陶邑編年のTK209併行期のものか。須恵器(74)は、壺などの底部か。体部カキ目調整で、底部は扁平気味である。以上の遺物は、溝SD02から出土した。

須恵器(79)は、杯蓋の天井部とみられる。須恵器(80)は、椀状の器形で、口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。口径12.8cmを測る。この2点は、柱穴SP03出土である。土師器甕(77)は、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口径11.6cmを測る。須恵器甕(78)は、体部外面タタキのちカキ目調整、内面は同心円タタキが残る。口縁部外面もカキ目調整する。これら2点は焼土坑SX07出土である。

土師器甕(81)は、体部内外面ハケ目調整である。口径21.9cmを測る。SK09から出土した。

弥生土器甕(75)は、口縁部が体部から「く」の字形に屈曲する。口径19.4cmを測る。土師器甕(76)は、口縁端部を折り返して肥厚させる布留式の甕である。体部外面ハケ目調整、内部はヘラケズリである。口径17.5cmを測る。これら2点はSK14出土である。

須恵器杯(73)は、内外面に水挽き成形のロクロ目が残る。口径12.4cm、器高2.8cmを測る。9世紀頃のものか。須恵器(82)は、鉢ないし甕と考えられる。口径18cmを測る。須恵器杯(83)は、底部外縁付近に高台を貼付る。口径19.6cm、器高4.5cmを測る。精査中出土である。

(7) UH-6 トレンチ

弥生土器甕(84)は、体部外面に縦方向のハケ目調整を施す。口径13.2cmを測る。弥生土器(85)は、壺底部で、内面にハケ目調整の痕跡が残る。底径8cmを測る。溝SD05から出土した。

須恵器杯身(86)は、口縁部の立ち上がりが高いもので、陶邑編年のTK217併行期のものか。口径11.2cmを測る。柱穴とみられるピットから出土した。須恵器杯身(87)は、86とほぼ同様の形状で、時期的にもほぼ同時期とみられる。精査中出土である。

(8) 石器・鉄製品

90は、横長不定形剥片で、石材はサヌカイトである。表面上部に調整剥離がみられ、狭小な打面をのこしている。重さは、15gである。UH-2 トレンチSD06から出土した。91は、磨製石器の断片である。石庖丁の製作途中のものとみられる。研磨作業は、下端の刃部は完了しているが、表裏面については未完である。横方向の研磨による細かな擦痕が、明瞭に観察される。石材は、粘板岩で、重さは22gである。UH-5 トレンチSX07から出土した。92は、槌石(ハンマ

ーストーン)とみられ、細長い自然礫の両先端部に強い打撃による剥離が形成されている。石器作りに伴う調整剥離用のハンマーであろう。石材は頁岩で、重さは142gを測る。IH-1トレンチSD02埋土から出土した。93は、砥石である。上半部を欠損しているが、大きさから、手持ちではなく据え置きで用いられたものであろう。表裏面と側縁部に滑らかな磨面をとどめる。裏面中央に、鋭利で硬いものをこすりつけたすじ状の擦過痕があり、浅く窪んでいる。石材は砂岩で、重さは1,250gを測る。IH-2トレンチSD02から出土した。

鉄製品88・89は、断面5mm×3mmの長方形状で、棒状を呈する。同一個体の可能性がある。89は先端が尖り気味で、鉄鏝の茎部か鉄釘とみられる。UH-5トレンチSK09から出土した。

4. まとめ

今回の調査は、線的かつ部分的であったが、弥生時代から平安時代頃にかけての遺構を検出した。これまでの調査成果を補完し、新たな知見も追加することができた。

弥生時代の遺構では、IH-1トレンチ東側で方形周溝墓の一部の可能性のある溝を検出した。方形周溝墓の分布は、これまで確認されていた範囲より北東側に広がることが予想される。

今回IH-2トレンチで検出した掘立柱建物跡は、東西棟の庇を有する建物である。これまでの調査で検出した掘立柱建物跡群は、やや規模の小さい南北棟の側柱建物や総柱建物である。柱穴の規模も考え合わせると、今回検出した建物跡は、中心的な建物の一つであった可能性がある。これまでの調査で検出した建物群は、付属建物や倉庫などであったと考えられる。

調査地周辺には、東西南北の方位に沿った条理地割がみとめられる。この地割を仔細に観察すると、やや西側に振った畦などが処々にみられる。今回東半部で検出した奈良時代頃と考えられる溝群はほぼこの方向の畦などに沿う。また、この溝などの方向は、調査地西側にある段丘崖の方向に一致する。やや時期の降る掘立柱建物跡の主軸もやや西に振る。これらのことから、中世頃に条理地割を施行したが、水まわりなどに不都合があったためか、部分的に古代の地形に沿った地割が復原されたものとも考えられよう。ただ、今回の溝検出地点と現状で西側に振る畦などがみとめられる地点がほぼ一致しているということについては、さらに検討する必要がある。今後の調査に期したい。

(引原茂治)

(4) ^{くるまづか}車塚遺跡 第7次

1. 調査の経過

車塚遺跡は、亀岡市千歳町に所在する国指定史跡千歳車塚古墳を中心に、亀岡市馬路町から千歳町にかけて南北約700m、東西約700mの範囲に広がる集落遺跡である。土師器、須恵器の散布地として遺跡地図に記載されている。今回の調査地は、遺跡範囲の東側にあたる亀岡市馬路町小弥ヶ谷、吉備の2か所である。調査地区整理の都合上、小弥ヶ谷をA地区、吉備をB地区とする。調査面積は、A地区が1,090㎡、B地区が480㎡、合計1,570㎡である。

車塚遺跡の調査は、平成16年12月13日から開始した。まず、A地区から重機によって耕作土、堆積土などを除去し、その後、人力で精査、遺構掘削を行った。B地区についても同様に重機、人力による掘削、精査を行った。

A地区では弥生～平安時代にかけての遺構、遺物を検出した。B地区では縄文土器が良好な状態で多数出土し、年度内での調査終了が困難と考えられたため協議を行い、平成17年度にも調査を継続することとなった。A地区については、平成17年2月27日に現地説明会を実施した。その後、最終確認、図面作成などを行い、平成17年3月7日に調査を終了した。

B地区は、平成17年4月7日に調査を再開し、縄文土器を含む層の掘削などを行った。また、古墳時代から中世頃の遺構を検出した。平成17年5月20日に現地説明会を実施し、排土置き場を使用していた水田部の復旧などを行い、平成17年5月30日に調査を終了した。

(引原茂治)

2. A地区の調査

車塚遺跡A地区は、桂川左岸の断層に伴うとされる河岸段丘が西へ突出する部分に立地し、全長約80mの前方後円墳である千歳車塚古墳の北西約200mに位置する。



第104図 調査地位置図

調査は切り土になる水田について、切り土の範囲に2か所のトレンチを設け、東側をA-1トレンチ、西側をA-2トレンチとして調査を行った。なお、Aトレンチの北西部については、遺構検出面が黒褐色粘質土と砂混じり黒褐色粘質土により形成されており、方形周溝墓S T01の溝の埋土との識別が困難であったため一部において掘り下げた段階で輪郭を確認した部分がある。

調査地の北東側は遺構の密度が薄く、南西側に遺構が集中する。調査区の東端は遺構の存在しない範囲が

あるが、これは段丘の高位側は水田開発に伴い削平された結果であると考えられる。したがって西側は黒ボク土の再堆積層が遺物包含層として存在していたが、トレンチ東部は水田の床土直下に洪積礫層による地山面が露出していた。

(1) 検出遺構

A地区では、弥生時代の方形周溝墓2基、古墳時代の古墳1基、飛鳥時代の竪穴式住居跡1基、奈良時代の掘立柱建物跡3棟、平安時代の掘立柱建物跡1棟のほか、溝、柱穴などを検出した。以下にその概要を述べる。

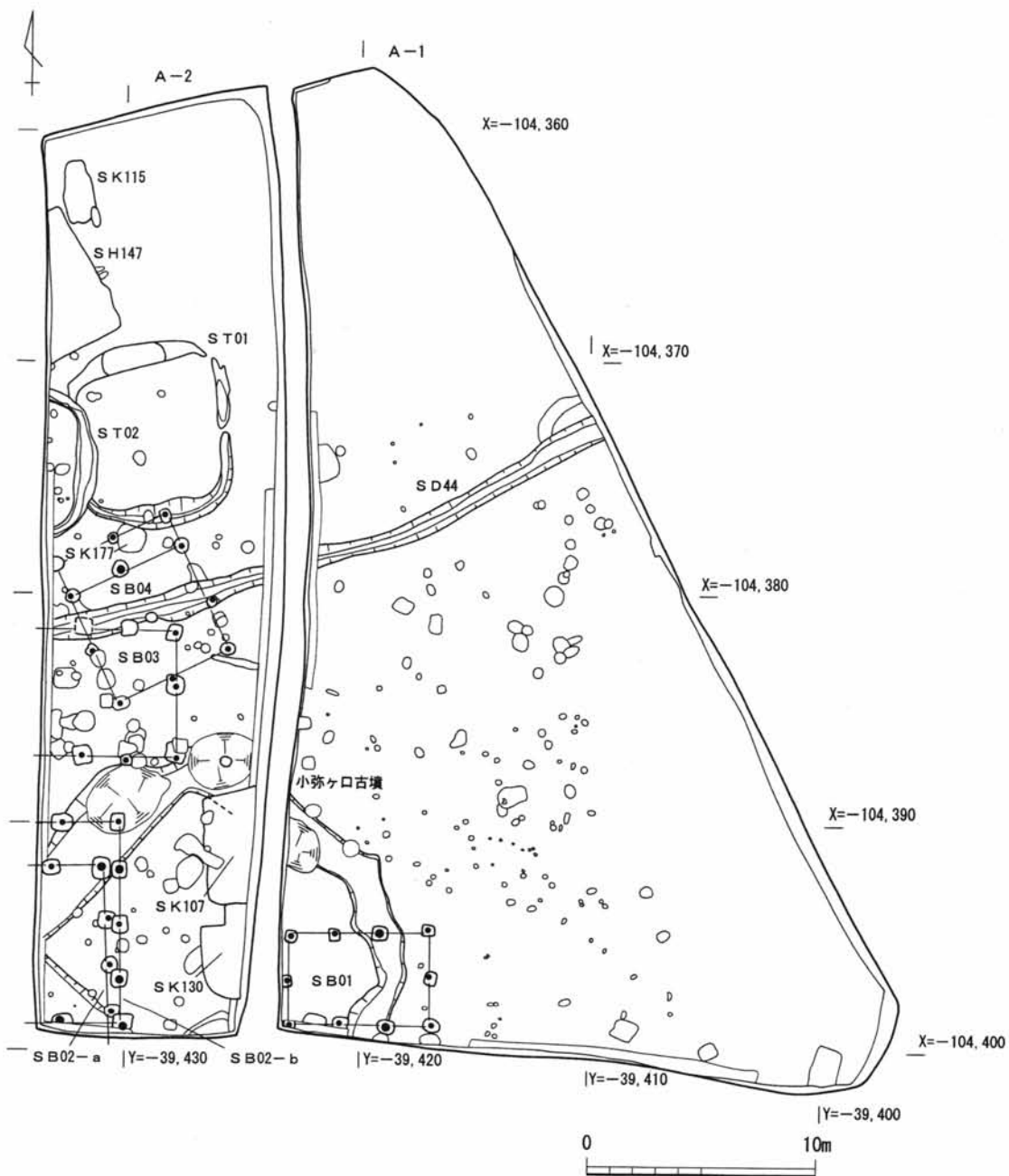
方形周溝墓S T01(第106図) A-2トレンチ北部で検出した。北を溝S D152、東をS D190、南を溝S D244によって区画され、西を方形周溝墓S T02のS D193によって切られる方形周溝墓である。一辺6.5m、周溝の幅は0.5~1.0m、周溝の検出面からの深さは0.32mを測る。周溝は北東隅が途切れるように見えるが、前述の遺構面の掘り下げによって輪郭を確認したことによるもので、本来は途切れていないと考えられる。しかし、東溝のS D190は中央部で明らかに掘り残しが行われており、この部分が陸橋部となると考えられる。周溝内の埋土は主に黒ボク土である。墳丘は既に削平されており、盛土は残存していなかった。また、墳丘内の埋葬施設は既に削平されていたが、S D152の中央部が広がっており、ここに周溝内埋葬S X243(第107図)を検出した。S X243は長軸2.89m、短軸1.15mを測る隅丸長方形の墓壇を掘り、この墓壇内に「H」形の組合せ式箱形木棺を据え、黒ボク土を主体とする裏込め土で棺側および小口部を押さえていた。棺内に棺床から遊離した拳大の垂角礫を検出したが、木棺の蓋の上に標石を載せていたとみられる。棺内からは土器は出土しなかったが、S X243の東側のS D152の下層から弥生土器壺・体部片(第118図1・2)が出土した。これらの出土土器から方形周溝墓S T01の築造年代は弥生時代中期であると考えられる。

方形周溝墓S T02(第106図) 方形周溝墓S T01の西に隣接し、方形周溝墓S T01を切る方形周溝墓である。周溝墓の大半はトレンチ外にのびる。南北の一辺は6.4mを測る。周溝の幅は0.5~1.0m、周溝の検出面からの深さは0.57mを測る。周溝S D193は中央部が広く、深くなっていたが、周溝内埋葬は認められなかった。周溝S D193の底に板状の石材が置かれていたが、その用途は不明である。墳丘部は既に削平を受けており、盛土は確認できなかった。この周溝墓に伴う土器は出土しなかった。

小弥ヶ口古墳(第108図) A-2トレンチ南西隅で検出した方墳で、墳丘の一辺は北東-南西が9.9m、北西-南東が10.5mを測る。墳丘主軸は座標北に対して42°東に振っている。周溝の幅は2.8~3.3m、周溝の検出面からの深さは0.41mを測る。この古墳は削平が著しく、東側の周溝の残存状況は非常に悪い。周溝内からは飛鳥~奈良時代にかけての須恵器・土師器が出土した(第118図3~20)が、南丹地域の古墳は5世紀末から6世紀初頭にかけて円墳化するので、この古墳に直接的に伴う遺物とは考えにくい。トレンチ中央部の包含層から出土した須恵器杯蓋に6世紀前葉のものがある(第120図65・66)が、この遺物が小弥ヶ口古墳に属するものである可能性はある。また、後述する掘立柱建物を建てる際に周溝を埋めて整地しており、この整地土からも

飛鳥時代～奈良時代の土器が出土している。削平によって主体部は完全に失われており、周溝を含めて副葬品と考えられる遺物も出土しなかった。

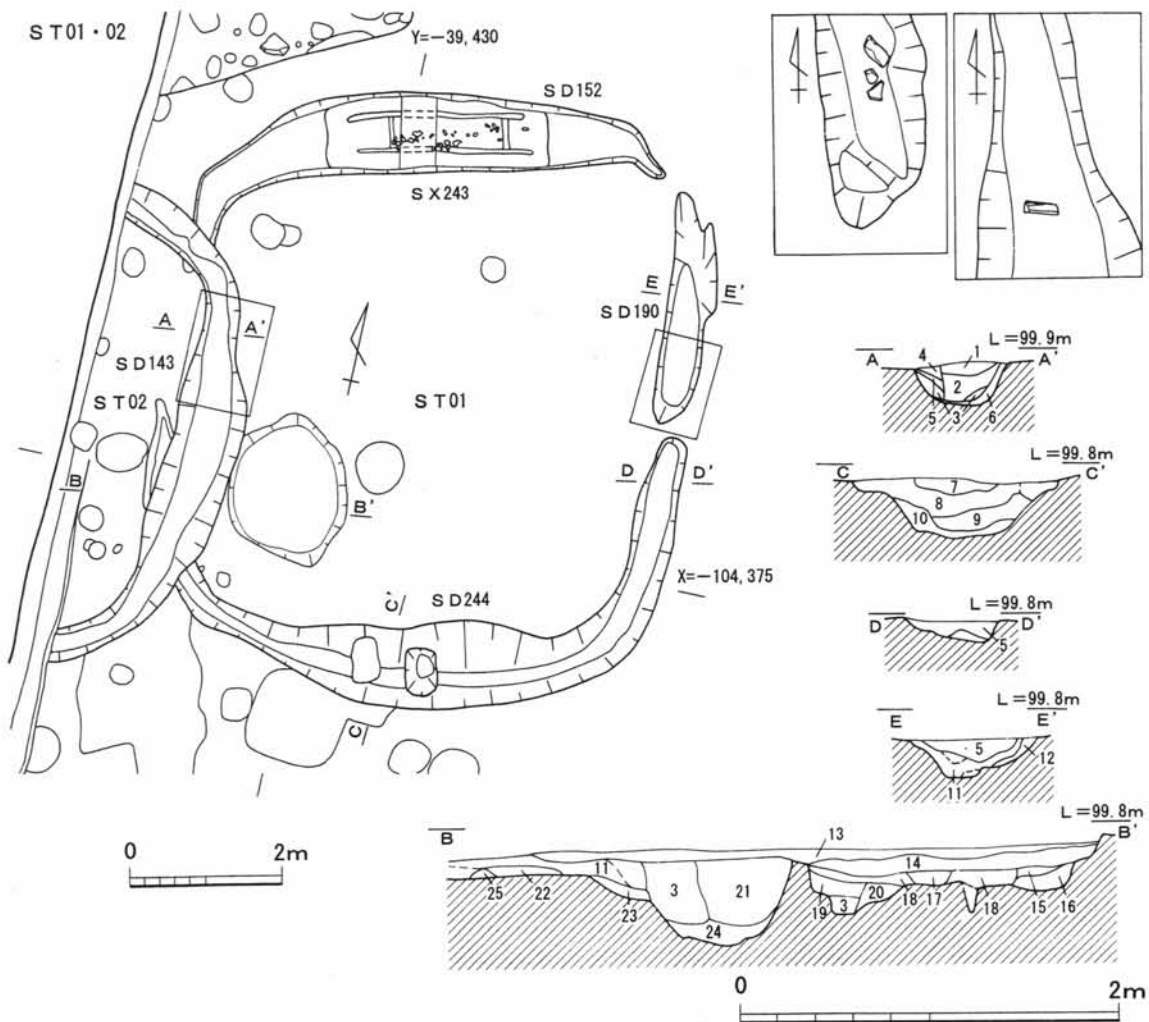
竪穴式住居跡 S H147(第110図) トレンチ北西隅で検出した方形の竪穴式住居跡である。一辺6.8mを測る。また、東の周壁は座標北に対して30°西に振っている。住居の約2/3がトレンチ外にあるため、調査は残りの部分にとどまった。東壁の中央部に S K149が取り付いており、この住居に伴う竈である可能性がある。南辺付近に板石が置かれており、この部分が入り口であった可能性を示唆する。床面には貼床が施されており、これを除去すると、直径0.8mの円形の土坑が穿たれていた。この土坑の床面には壁沿いに杭孔がめぐらされていた。住居の埋土から出土した遺物はわずかであり、飛鳥時代かと思われる須恵器の小片が出土したのみである。



第105図 A地区遺構配置図

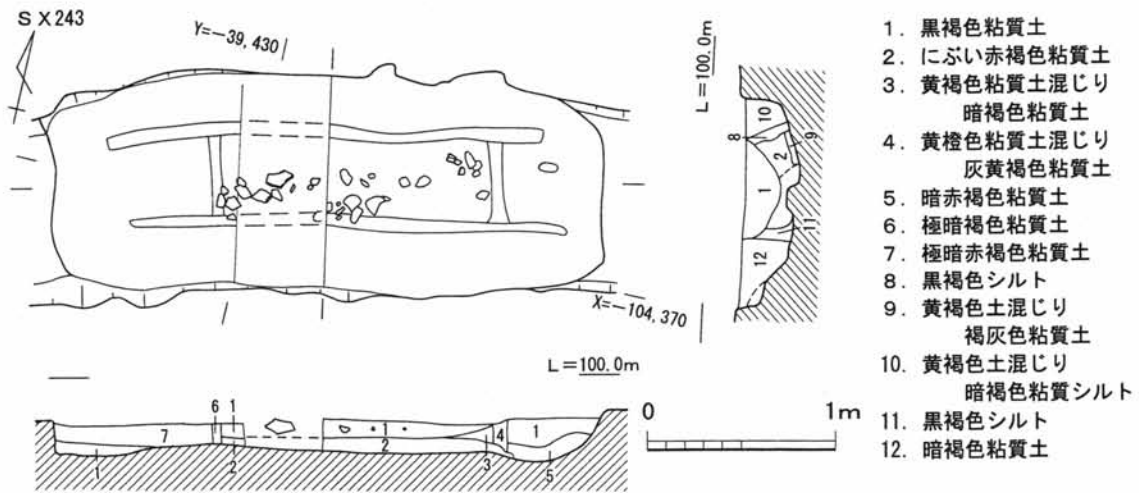
溝SD44(第111図) 両トレンチ中央部を西流する溝である。断面形状は「Y」字形であり、非常に深い。上面幅は最大で1.2m、深さは最大で0.84mを測る。埋土は主に黒ボク土であり、最上層から奈良時代の須恵器片が出土しているが、これがこの遺構の時期を示すかどうかは疑問である。また、後述する掘立柱建物跡との先後関係は埋土の区別がほとんどつかず、不明である。この溝は座標東から北に20~30°振っている。この遺構は規模や形状が加茂町恭仁宮跡で検出された基幹排水溝に類似する^(注23)ため、遺跡が立地する台地上から西側の平地へ雨水などを抜くための基幹排水溝である可能性が考えられる。

掘立柱建物跡SB01(第112図) A-1トレンチ南端で検出した東西方向の掘立柱建物跡である。柱間は2.10m(7尺)で、建物規模は2間×3間、桁行き5.8m(1丈9尺)、梁行き4.4m(1

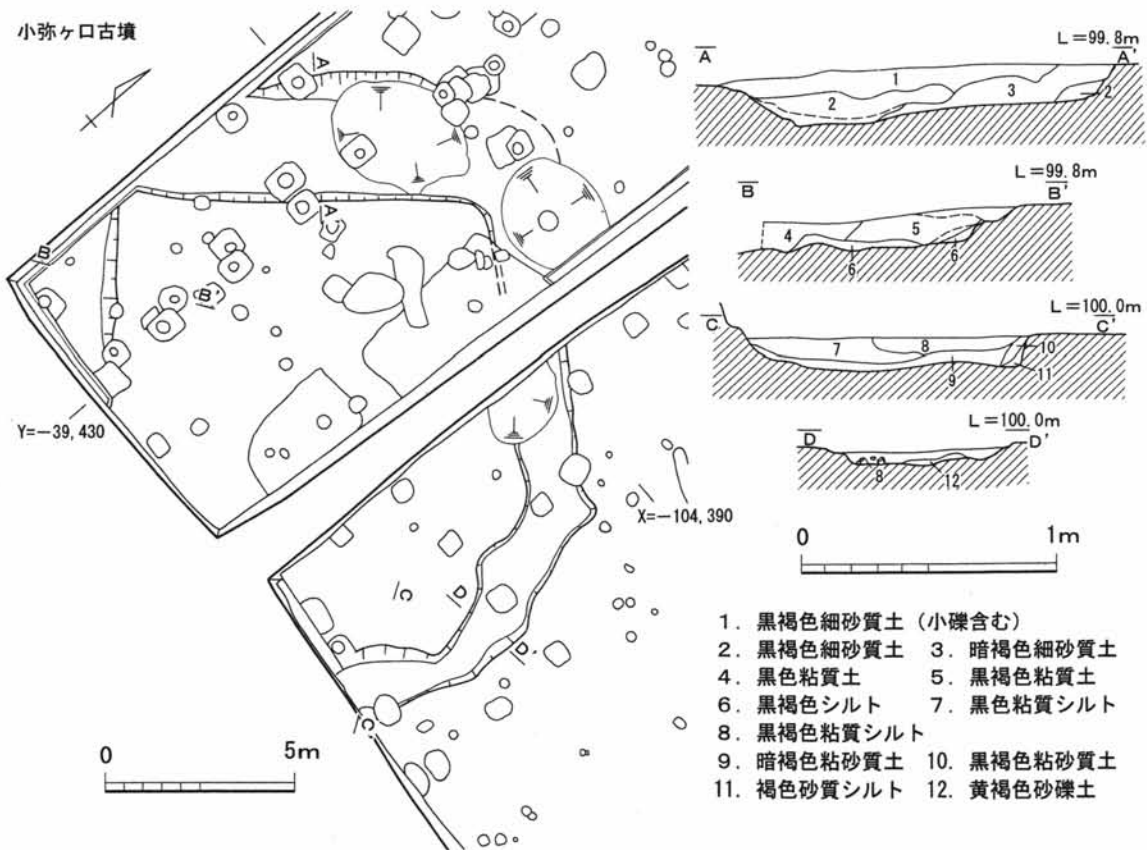


- | | | |
|---------------------|-----------------------------|-------------------|
| 1. 黒褐色粘質土 (弱い粘性) | 2. 極暗褐色粘質シルト | 3. 黒褐色粘質シルト |
| 4. 細砂混じり黒褐色シルト | 5. 黒褐色シルト | 6. 暗褐色シルト |
| 7. 小礫混じり黒褐色シルト | 8. 暗褐色シルト | 9. 暗褐色粘質シルト |
| 10. 暗褐色粘質土 | 11. 黒褐色粘質土 | 12. 暗褐色細砂質土 |
| 13. 礫混じり黒褐色粘質土 | 14. 暗褐色粘質土混じり黄褐色粘質土 (礫少量含む) | |
| 15. 黄褐色粘質土混じり黒褐色粘質土 | 16. 暗褐色粘砂土 | 17. 黒褐色砂質土 (礫含む) |
| 18. 黄褐色粘質土混じり暗褐色砂質土 | 19. 黒褐色細砂質土 | 20. 灰黄褐色砂質土 (礫含む) |
| 21. 黒褐色粘砂土混じり黒褐色粘質土 | 22. 黄褐色砂質土混じり黒褐色砂質土 | |
| 23. 黒褐色粘質土混じり褐色粘質土 | 24. 黒色粘質シルト | 25. 黄褐色砂質土 |

第106図 方形周溝墓ST01・02実測図



第107図 周溝内埋葬 S X 243実測図



第108図 小弥ヶ口古墳実測図

丈5尺)を測る。建物の主軸は座標東西から4°北に傾いている。柱穴はS P 84・85・87・88・94・97・100・235・246・274で構成される。各柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、一辺50~80cm、深さ0.32mを測る。各柱穴には柱痕跡が認められる。柱痕の直径は33cm前後である。柱穴S P 88の掘形から須恵器杯(第119図21)が出土した。柱穴S P 84の柱痕内から三日市瓦窯産と思われる平瓦片(第121図81)が出土した。主軸の傾きおよびこの瓦から、掘立柱建物跡S B 01の廃絶時期は奈良時代後半、三日市瓦窯の操業期間中と考えられる。

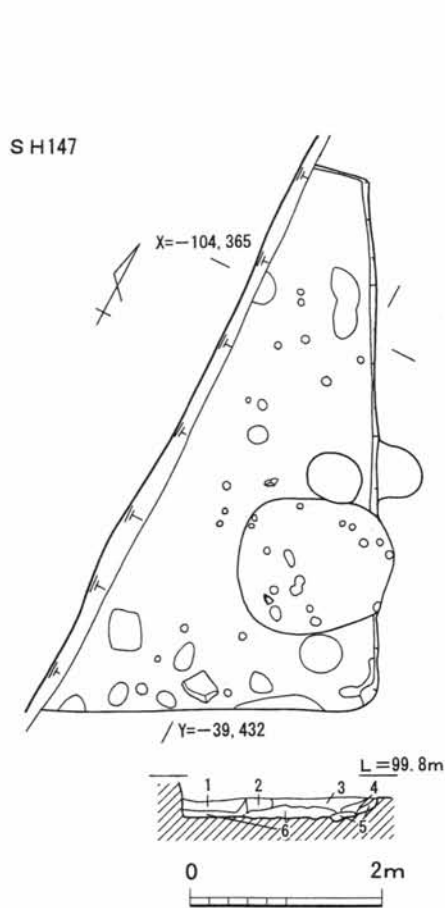
掘立柱建物跡S B 03(第113図) A-2トレンチの中央部で検出した東西方向の掘立柱建物跡

である。SB03の柱間は1.93m(6尺4寸)で、建物規模は2間×2間以上、桁行き4.9m(1丈6尺)以上、梁行き3.9m(1丈3尺)を測る。SB03の主軸はほぼ座標北に一致している。柱穴はSP251・204・203・127・179などで構成される。各柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、一辺60～90cm、深さ33cmを測る。各柱穴には柱痕跡が認められる。柱痕の直径は17cm前後である。柱穴SP251の掘形から須恵器杯(第119図41)とほぼ完形の黒色土器碗(第119図43)が出土した。これらの土器から、SB01の造営は奈良時代後半と考えられる。また、第119図38はSB03のSP179と後述するSB02-bのSP188との間で接合関係があり、同時性が推定される。

掘立柱建物跡SB02(第114図) A-2トレンチ南西隅で検出した南北方向の掘立柱建物跡である。ほぼ同じ場所で建て替えが行われているため、先行する建物をSB02-a、建て替え

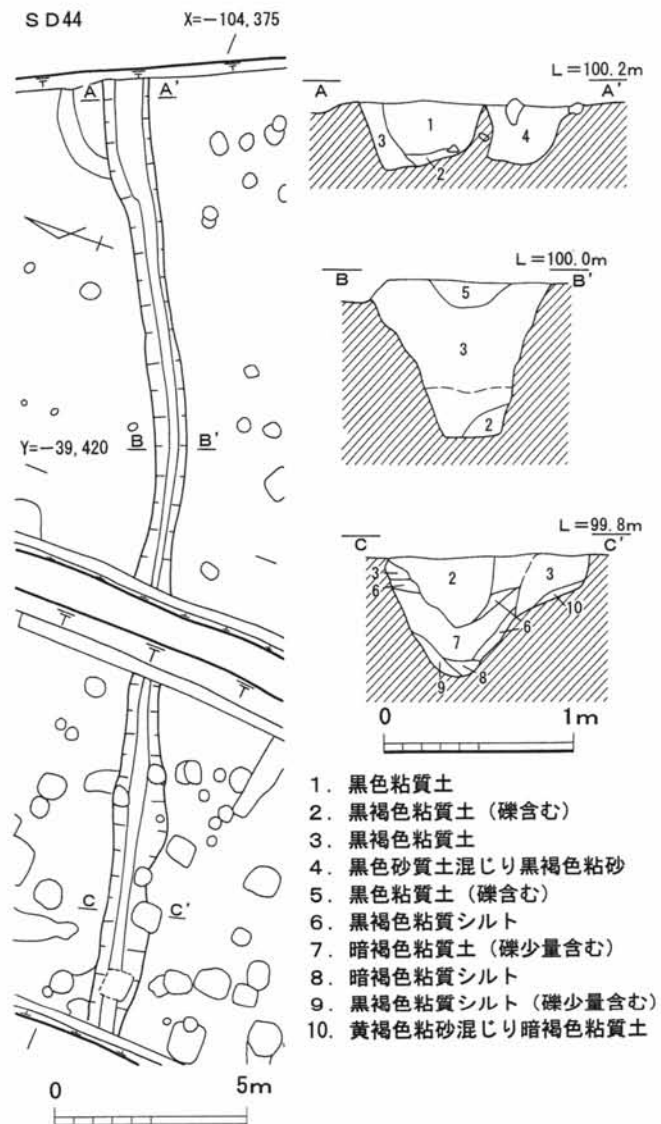


第109図 周溝内遺物出土状況図



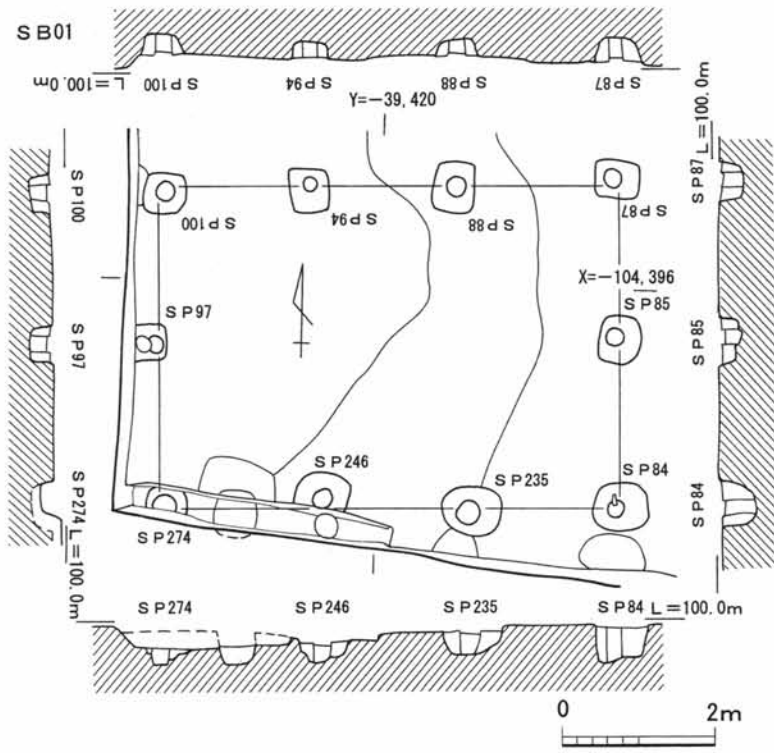
1. 暗褐色粘質土混じり黒褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土
3. 黒褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土混じり黄褐色粘質土
5. にぶい黄褐色粘質土混じり黄褐色粘質土
6. 黄褐色粘質土混じり暗褐色粘質シルト

第110図 竪穴式住居跡SH147実測図

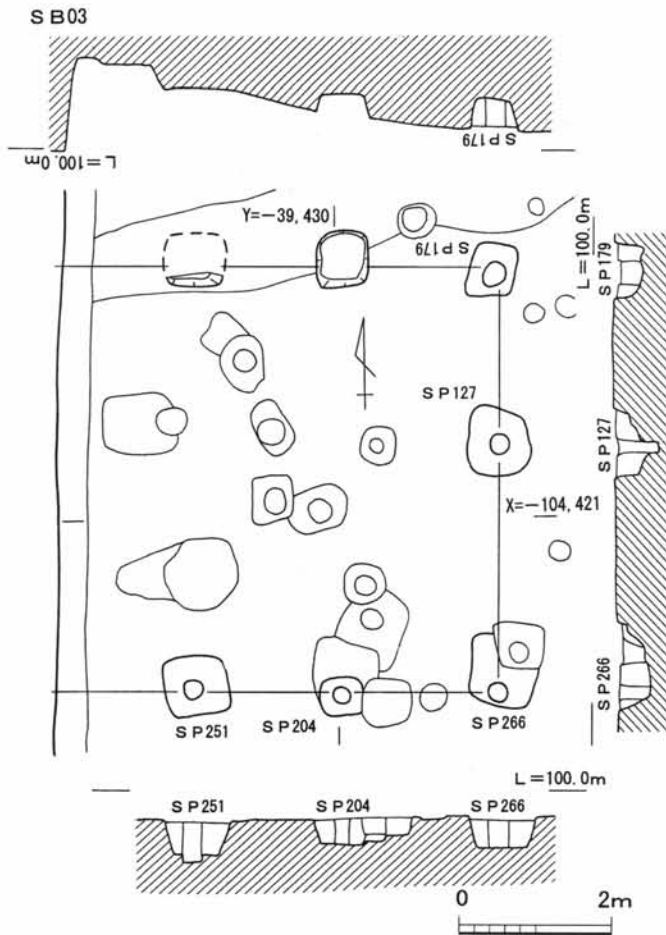


1. 黒色粘質土
2. 黒褐色粘質土(礫含む)
3. 黒褐色粘質土
4. 黒色砂質土混じり黒褐色粘砂
5. 黒色粘質土(礫含む)
6. 黒褐色粘質シルト
7. 暗褐色粘質土(礫少量含む)
8. 暗褐色粘質シルト
9. 黒褐色粘質シルト(礫少量含む)
10. 黄褐色粘砂混じり暗褐色粘質土

第111図 溝SD44実測図



第112図 掘立柱建物跡 S B01実測図



第113図 掘立柱建物跡 S B03実測図

後の建物を S B02-b とする。
 S B02-a の柱間は1.94m (6尺4寸)で、建物規模は2間以上×4間以上、桁行き6.5m (2丈1尺5寸)以上、梁行き2.1m (7尺)以上を測る。S B02-aの主軸は座標東に対して4°北に振っている。柱穴は S P 189・186・140・135・212で構成される。各柱穴の平面形は隅丸方形～円形を呈し、一辺または直径71～94cm、深さ35cmを測る。各柱穴には柱痕跡が認められる。柱痕の直径は24cm前後である。柱穴 S P 186の掘形から須恵器蓋(第119

図22・23)、須恵器杯(第119図24)が出土した。須恵器杯の時期から S B02-a は奈良時代前半以降に築造されたことが分かる。S B02-b の柱間は215cm (7尺)で、建物規模は2間以上×4間、桁行き9m (3丈)、梁行き2.4m (8尺)以上を測る。S B02-bの主軸はほぼ座標北に一致している。柱穴は S P 245・208・185・139・134・183・188で構成される。各柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、一辺60～80cm、深さ46cmを測る。各柱穴には柱痕跡が認められる。柱痕の直径は19cm前後である。S P 245の掘形から須恵器杯(第119図26)と平瓦(第121図82)、S P 208の掘形から須恵器杯(第119図28・29)、S P 183の掘形から須恵器底部(第119図36)、S P 134から平瓦(第121図83)が出土し

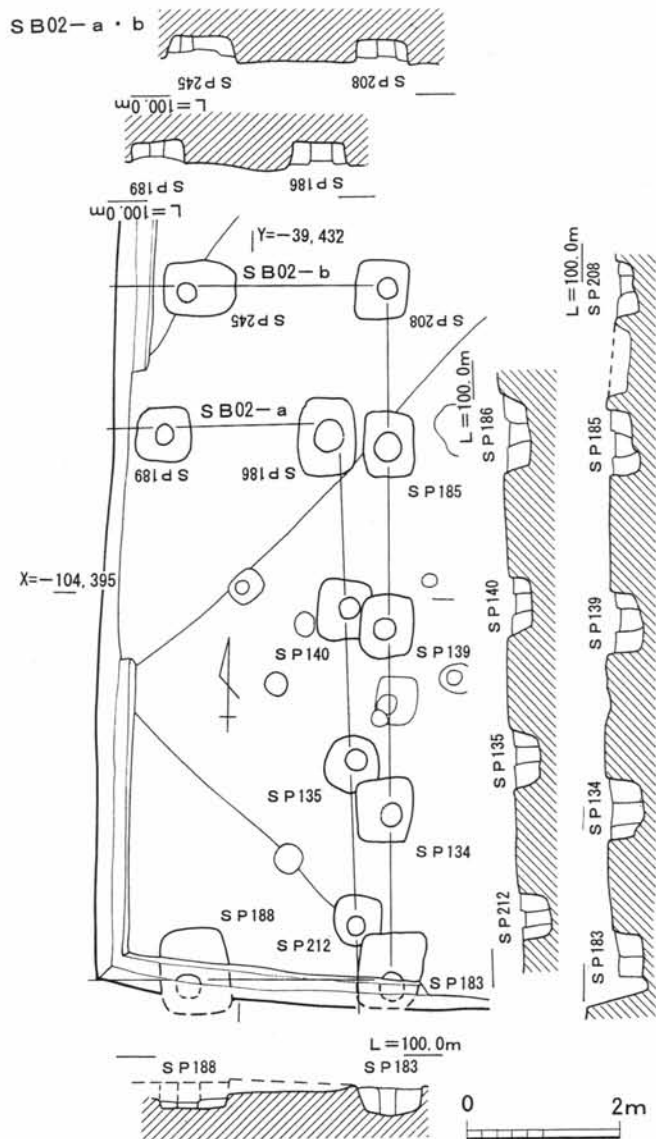
た。平瓦は、三日市瓦窯の製品と考えられることから、三日市瓦窯の操業期間を上限とする時期に築造されたことが分かる。また、S P 208の柱痕から須恵器蓋(第119図30)、S P 139の柱痕から土師器鍋(第119図32)が出土しているが、これらからS B 02-bが廃絶時期を明らかにすることは難しい。また、その他のS B 02-bの柱穴から出土した須恵器も上記の推定と矛盾しない。また、第119図38はS B 02-bのS P 188出土破片と前述する掘立柱建物跡S B 03のS P 179出土破片が接合したもので、両建物跡の同時性が推定される。

掘立柱建物S B 04(第115図) A-2トレンチの中央部で検出した掘立柱建物跡である。主軸が座標北に対して25°西へ振っている。この主軸は前述のS H 147・S D 44と共通であるが、S D 44とは切り合い関係にあるため、同時併存せず、前後関係は不明である。また、S B 03とも柱穴が切りあい関係にあるが、先後関係は不明である。S B 04の建物規模は身舎が2間×2間、北東辺に廂が付く。身舎の桁行き6.2m(2丈1尺)、梁行き5.1m(1丈7尺)を測る。身舎は、柱穴S P 269・127・272・175・266などで、庇の柱穴はS P 267・194・259で構成される。各柱穴の平面形は隅丸方形ないし円形を呈し、一辺または直径40~82cm、深さ44cmを測る。各柱穴には柱痕跡が認められる。柱痕の直径は25cm前後である。この建物の時期を判定できるような遺物は出土していない。

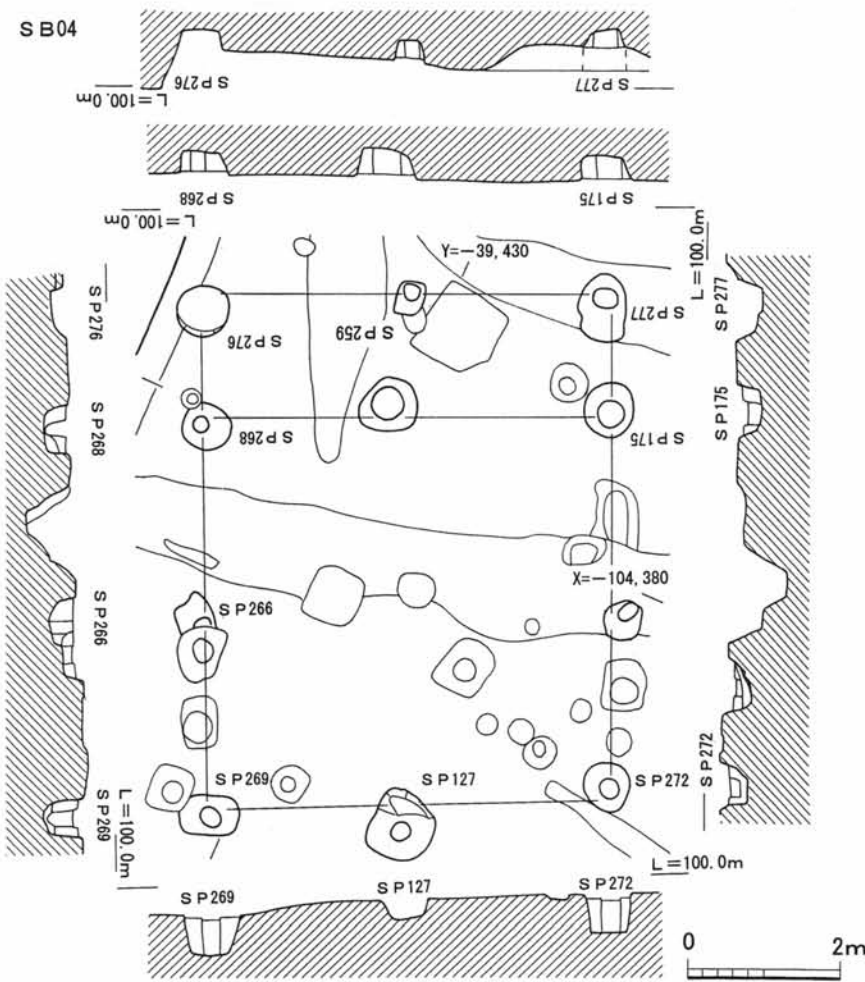
土坑S K 177(第116図) 方形周溝墓S T 01の南に隣接する隅丸方形の焼土坑である。規模は一辺92cm、検出面からの深さは20cmを測る。土坑中央部には高温で焼けた痕跡が円形に残り、土坑下部は質の異なる土をあらかじめ埋め込む地業が行われている。出土遺物は少なく、時期は不明である。

土坑S K 115(第117図上) A-2トレンチ北寄り検出した。長さ2.9m、幅1.3m、深さ0.4mを測る。平面形は長楕円形を呈し、土坑底には不規則な凹凸がある。遺構の性格については不明である。

土坑S K 107(第117図下) A-2トレンチの南東寄り検出した不整長方形の土坑である。規模は南北が4.7mを測り、東西は東端がトレンチ外にのびるため不



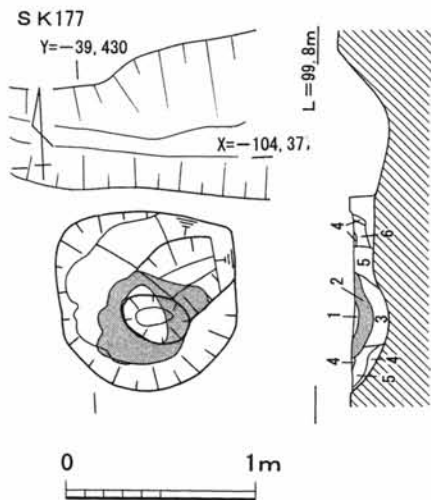
第114図 掘立柱建物跡S B 02-a・b実測図



第115図 掘立柱建物跡 S B04実測図

明であるが、トレンチ内で2.15mを測る。土坑底には不規則な凹凸があり、ピット状に深く掘り込まれる箇所もある。直線的な西辺の主軸は座標北から4°西に振っている。埋土から須恵器杯(第129図57・58)、須恵器鉢(第120図59)が出土した。これらから奈良時代後半のものであると考えられる。

土坑 S K 130(第117図下) S K 107の南に隣接する土坑である。東辺がトレンチ外にのびるが、A-1トレンチまではの



1. 明赤褐色混じり暗褐色シルト
2. 暗赤褐色粘質シルト (焼土を含む)
3. 暗褐色砂質シルト
4. 黒褐色粘質シルト
5. 黒褐色砂質シルト (小礫混じり)
6. 黒褐色砂質シルト

第116図 土坑 S K 177実測図

びないので、隅丸長方形を呈すると考えられる。南北の規模は4.2mを測る。土坑底には不規則にピット状に深く掘り込まれる箇所がある。埋土からは須恵器各種(第120図47~56)、三日市瓦窯産と思われる平瓦(第121図84~87)が出土した。このうち第120図47は隣接する S K 105や S B 03の S P 251との間で接合関係を有するため、これらの遺構間の共存関係を有する可能性を示唆する。これらの出土遺物から奈良時代後半の三日市瓦窯の操業期間に併行する時期がこの遺構の時期と考えられる。

(2) 出土遺物

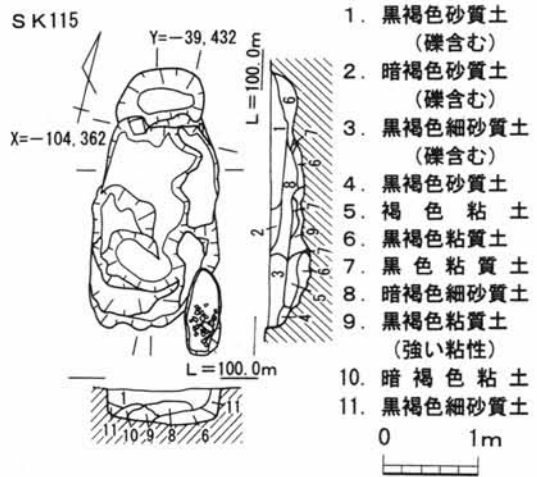
a. 土器(第118図1~第120図80)

方形周溝墓 S T 01遺物(第118図1・2) 1は弥生土器壺の頸部である。櫛描直線文が頸部に施されている。2は弥生土器甕の胴部下半である。内外面ともハケメ調整である。

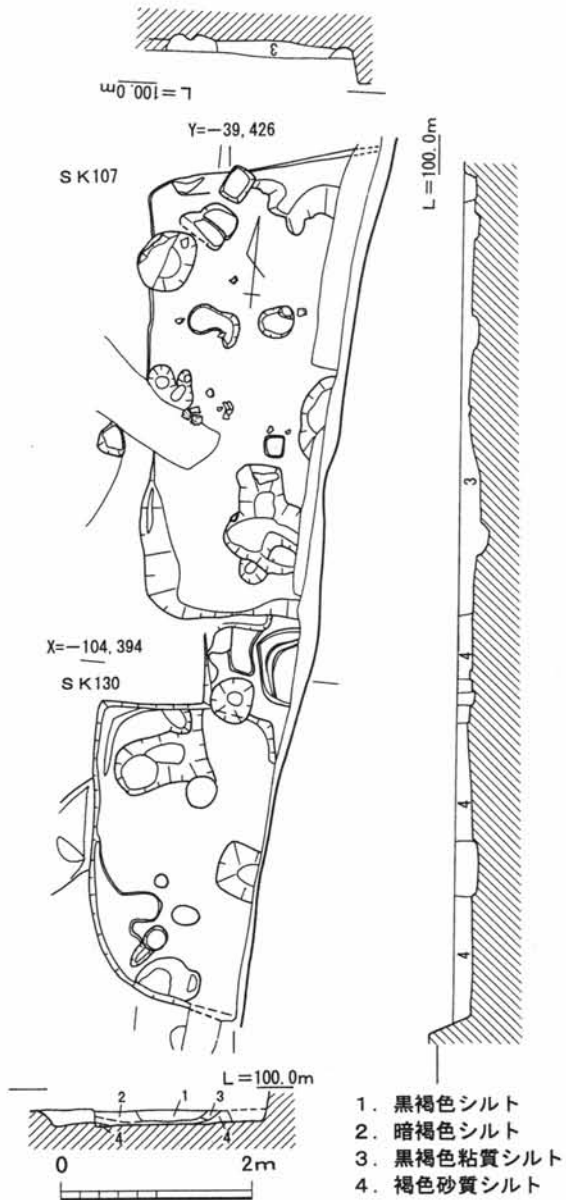
これらの土器に弥生時代中期の時期が考えられるが、細分はできない。

(福島孝行)

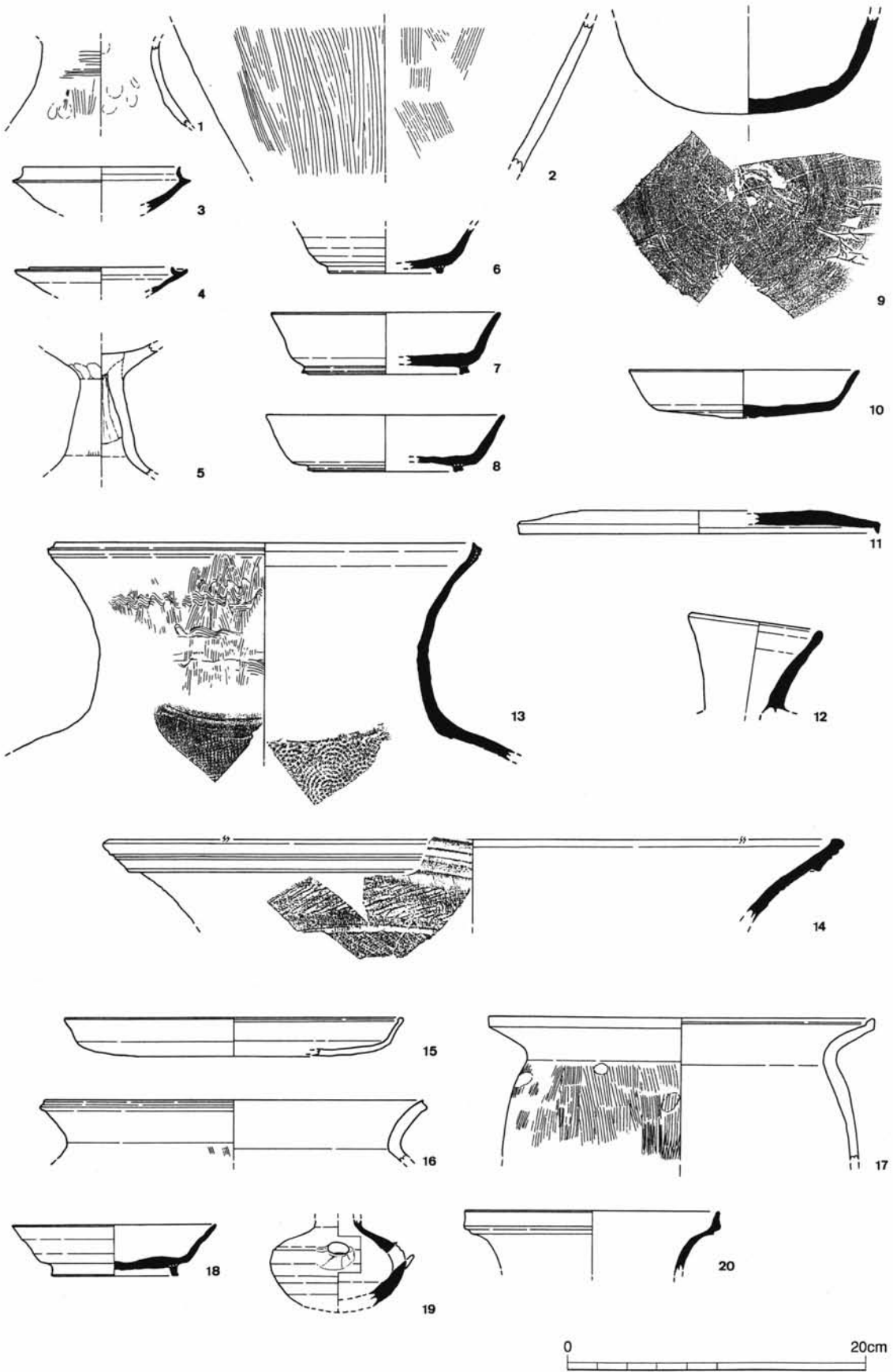
小弥ヶ口古墳出土遺物(第118図3~20)
 3・4は須恵器杯Hである。3は口径10.5cm、残存高3.2cmである。4は杯Hとして図示しているが、杯G蓋である可能性も否定できない。口径9.6cm、残存高1.8cmである。5は土師器高杯脚部である。残存高8.9cmである。6~8・18は須恵器杯Bである。6は口縁部を欠損するが、ほかは全体の復原が可能である。18は口径13.5cm、器高3.5cm、底径7.9cmである。9は須恵器壺の底部である。外面に「十」字をヘラで描く。10は須恵器皿Aである。口径15.3cm、器高3.3cmである。11は須恵器杯B蓋である。口径24.0cm、残存高1.5cmである。12は平瓶の口縁部である。口径8.5cm、残存高6.5cmである。13は須恵器甕の口縁部から肩部にかけて破片である。口縁部外面に波状文を5条を一組として3段施す。口径27.9cm、残存高14.5cmである。14も須恵器甕の口縁部の甕の破片である。小破片のため口径は推定である。15は土師器皿である。口径22.5cm、残存高2.6cmである。16・17は土師器甕である。16は口縁端面に沈線状のくぼみがめぐる。17は口縁端部を上方につまみあげる。口縁部はヨコナデで仕上げ、体部外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。19は須恵器甕である。頸部以上と底部を欠損するが、体部中央に直径1.2cmの穴が穿たれている。20は須恵器壺の口縁部である。受け口状を呈する。口径16.9cm、残存高4.3cmである。小弥ヶ口古墳の周溝から出土した土器群のうち、5は古墳時代中期末~後期前半のもの、3・4・19は飛鳥時代のもの、それ以外の大半は奈良時代のものである。奈良時代のものは、須恵器杯Bや土



S K 107・130



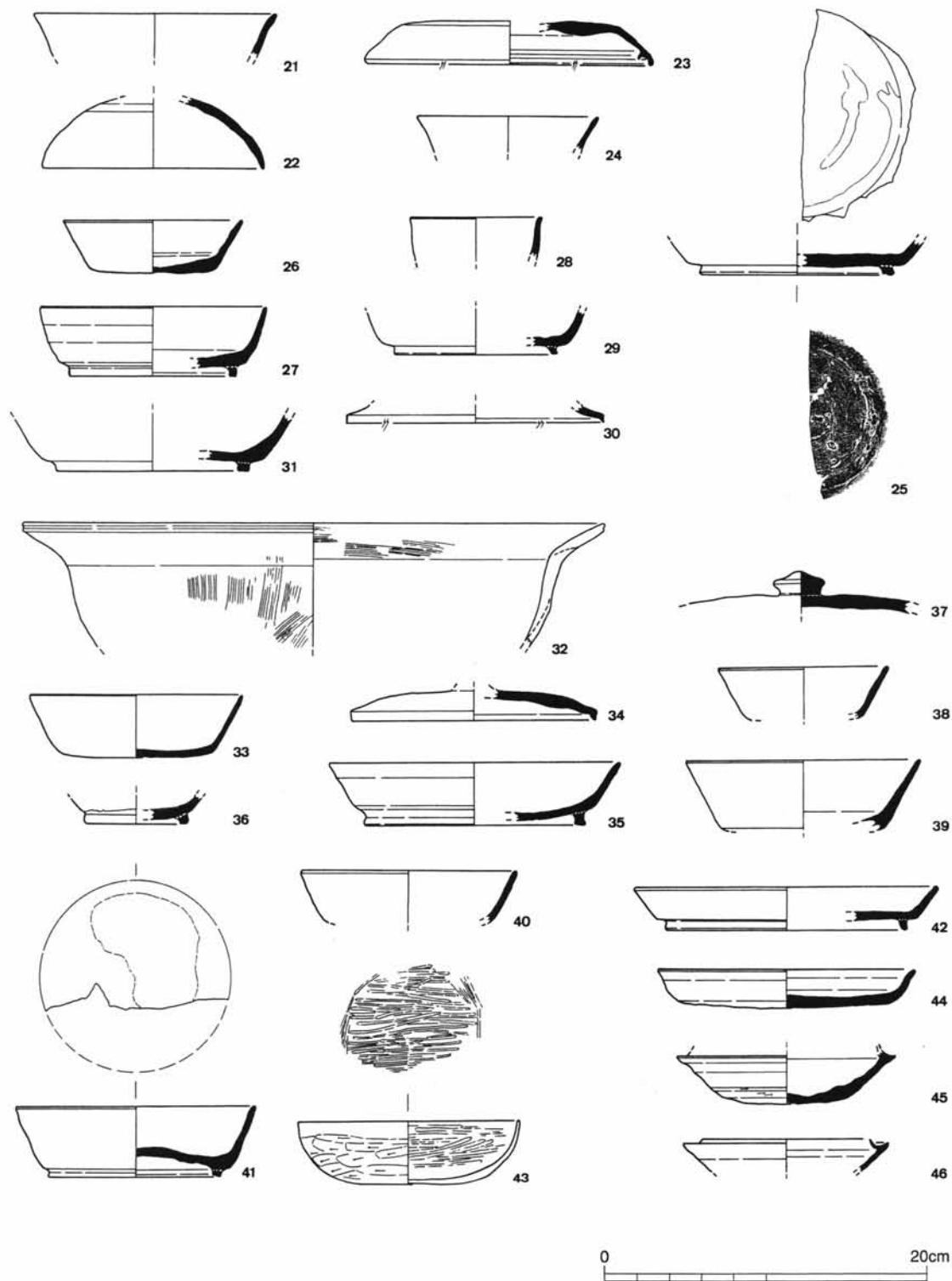
第117図 土坑S K 115・107・130実測図



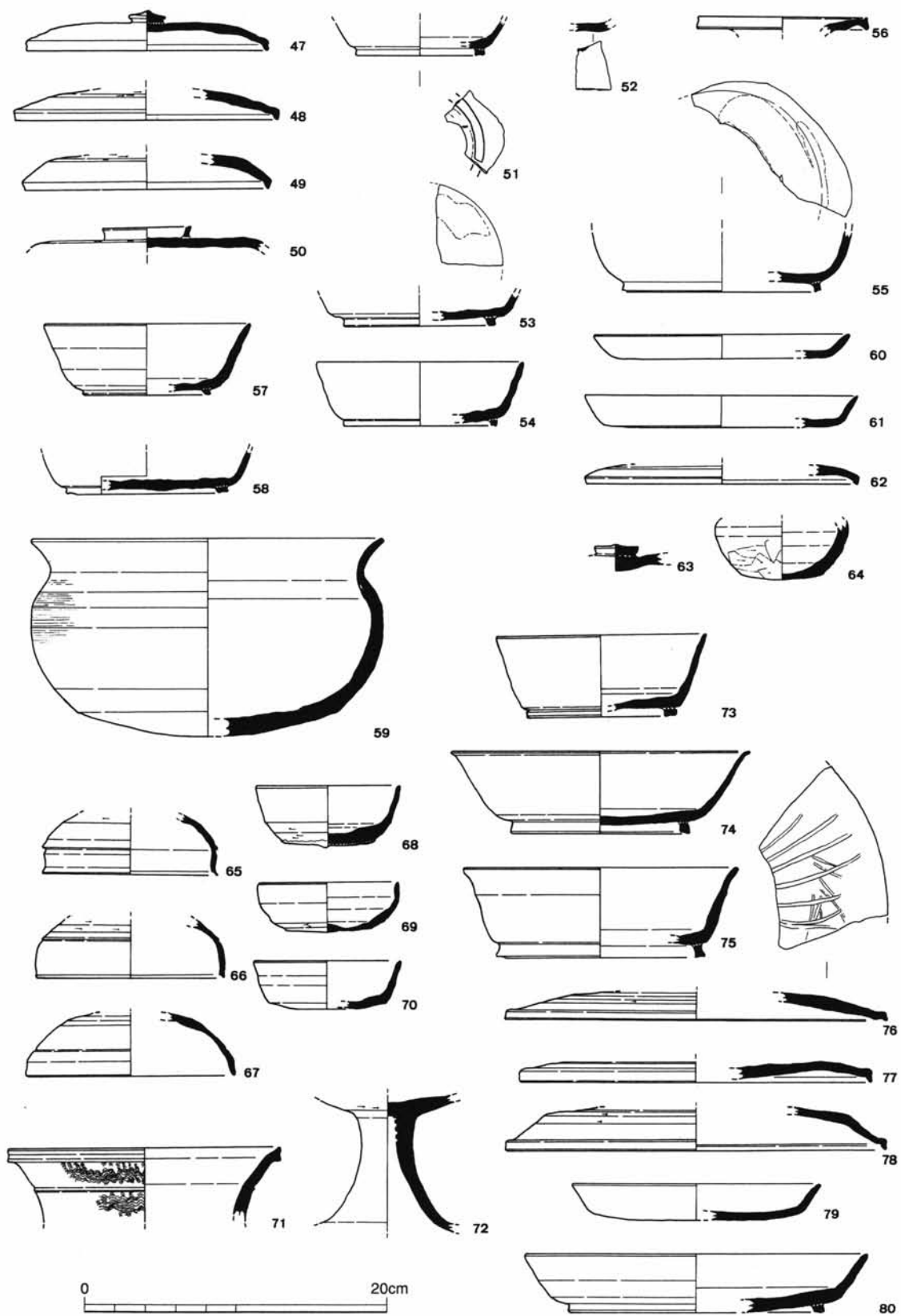
第118図 A地区出土遺物実測図(1)

師器皿などから奈良時代でも前半と考えられる。これらの土器類は、掘立柱建物跡S B01・S B02の造営に先だつて小弥ヶ口古墳の周溝の埋め立てが行われた時期をあらわすと考えられる。

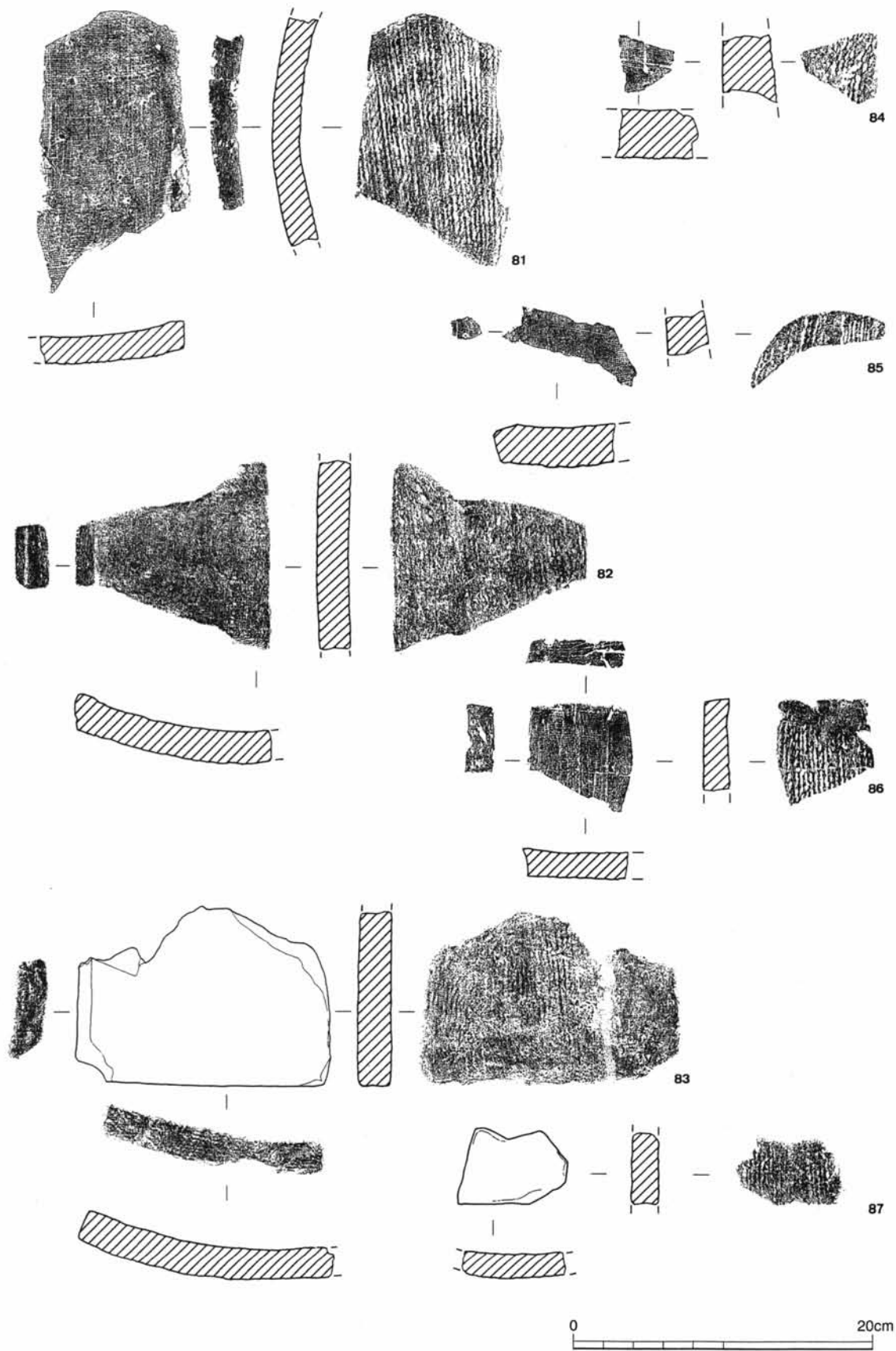
掘立柱建物跡S B01出土遺物(第119図21) 21は柱穴S P88から出土した須恵器杯の口縁部である。口径15.0cm、残存高2.7cmである。この破片から掘立柱建物跡S B01の時期を明らかにすることはできないが、掘立柱建物跡S B02-a とほぼ同方位であることからS B02-a と同時期



第119図 A地区出土遺物実測図(2)



第120図 A地区出土遺物実測図(3)



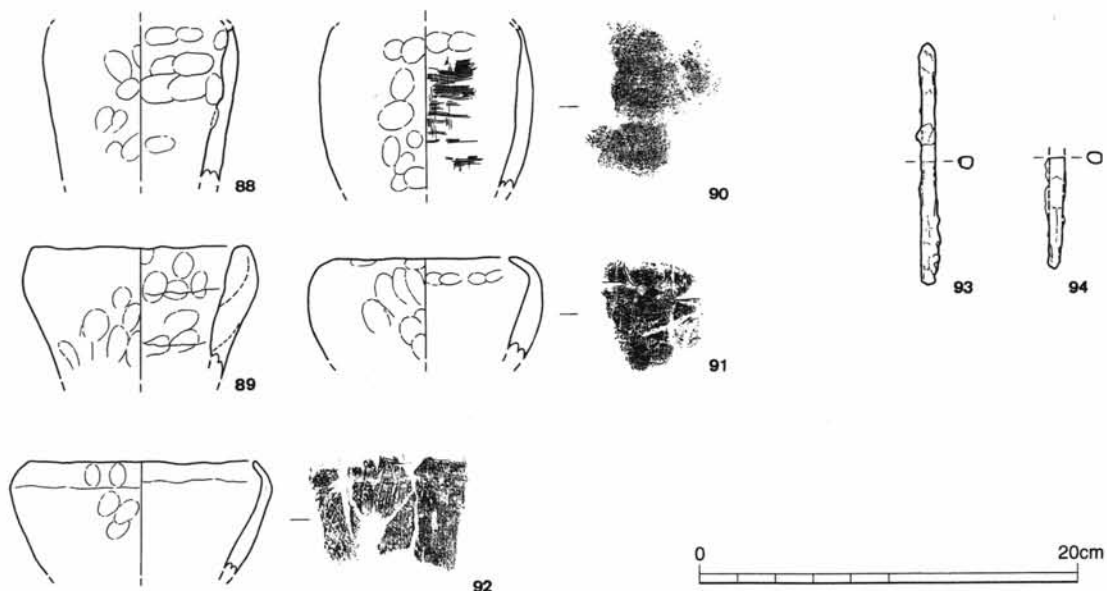
第121図 A地区出土遺物実測図(4)

の建物と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 02— a 出土遺物(第119図22~25) 22は古墳時代に通有な須恵器蓋である。口径13.6cm、残存高4.3cmである。古墳時代後期末の陶邑 T K 209型式に相当すると考えられる。23は内面にかえりをもつ須恵器杯蓋である。小破片のため口径は推定であるが、やや器高が高い。飛鳥編年の第4期に位置づけられると考えられる。24は須恵器杯の口縁部の小破片である。25は内面を硯に転用した須恵器杯Bである。いずれも S P 186掘形内から出土している。22・23はやや時期が古く、混入品と考えられる。建物跡の時期を決めるのは25と考えられ、高台の形状などから奈良時代前半と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 02— b 出土遺物(第119図26~39) 26・33はいずれも須恵器杯Aである。26は口径11.0cm、器高3.4cmである。33は口径13.1cm、器高4.0cmである。27・29・31・35はいずれも須恵器杯Bである。28は須恵器杯の一種と考えられるが、口径が小さい一方、器高が高く深手を呈するようである。30・34・37は須恵器杯蓋である。30は口縁端部の一部しか依存していない。34はつまみ付近を欠損する。口径15.0cm、残存高2.0cmである。37は口縁部を欠損する。つまみはやや高さのある宝珠つまみを呈する。36は須恵器杯と考えられる。内面に自然釉が付着する。38・39は須恵器杯であるが底部を欠損するため、杯Aであるか、杯Bであるか判断できない。38は口径10.3cm、残存高3.3cmである。39は口径14.4cm、残存高4.5cmである。底部から口縁部への立ち上がりやや厚手を呈する。なお、38は建物跡 S B 02— b の柱穴と建物跡 S B 03の柱穴から出土した破片が接合したのである。32は土師器の鍋である。口径36.0cm、残存高7.6cmである。26・27は S P 245掘形、28・29は S P 208掘形内、30は S P 208柱痕内、31は S P 185、32は S P 139柱痕内から出土した。33~35は S P 134掘形内から、36は S P 183掘形内、37~39は S P 188掘形内から出土した。

掘立柱建物跡 S B 03出土遺物(第119図40~42) 40は須恵器杯である。口径13.2cm、残存高



第122図 A地区出土遺物実測図(5)

3.2cmである。41は須恵器杯Bである。口径14.8cm、器高4.4cmである。焼け歪みがみられる。底部内面の一部に転用されたような痕跡が認められる。42は須恵器皿Bである。口径18.6cm、器高2.7cmである。口縁端部内面がわずかにくぼむ。43は黒色土器である。口径13.6cm、器高4.0cmで、残存率は7/8ほどある。外面にケズリ調整、内面にミガキ調整を施す。また、内面のみ黒色処理を施す。このような黒色土器は亀岡市域でもほとんど出土例がない。共伴した須恵器杯Bから、この黒色土器が奈良時代後半のものと考えられるが、この時期になると、平城京や寺院などにおいても黒色土器杯類の出土が増えている。43は、形態的にはこうした都城や寺院における出土例に類似している。胎土がやや粗いようにも思われるが、この時期の黒色土器と判断してよいだろう。また、黒色土器としては亀岡市域ではもっとも古い例といえる。

44は柱穴S P 117から出土した須恵器皿Aである。口径15.8cm、器高2.5cmである。45は柱穴S P 173、46は柱穴S P 206からそれぞれ出土した須恵器杯Hである。45は口縁端部を欠損し、残存高3.3cmである。底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。46は底部を欠損し、残存高2.0cmである。45よりも小型化した器形を呈する。

土坑S K 130出土遺物(第120図47～56) 47～49は須恵器杯B蓋である。いずれも笠形を停止、口縁端部が下方へ屈曲する。47は口径15.8cm、器高2.7cmである。48は口径17.2cm、49は口径16.2cmである。50は環状つまみを有する蓋である。環状の径は5.8cmである。51・52は底部外面に墨痕の認められる須恵器である。しかし、いずれも部分的であるため文字であるかどうかも含めて不明である。51は底径8.2cm、残存高2.3cmである。53～55は須恵器杯Bである。53・55は杯内部の状況から硯に転用された可能性が高い。53は底径9.7cm、残存高2.1cmである。55は底径12.4cm、残存高4.0cmである。底部から口縁部への立ち上がり部分がやや丸味を帯びている。54は口径13.6cm、底径9.9cm、器高4.2cmである。56は須恵器壺の口縁部と考えられる。口径11.1cmである。

土坑S K 107出土遺物(第120図57～59) 57・58は須恵器杯Bである。57は口径13.4cm、底径8.0cm、器高4.7cmである。底部から口縁部への立ち上がり部分がやや丸みを帯びる。58は底径9.2cm、残存高2.8cmである。59は須恵器鉢である。口径22.8cm、残存高12.9cmである。

土坑S K 106出土遺物(第120図60・61) 60・61は須恵器皿Aである。ほぼ同形同大のもので、60は口径16.8cm、器高1.6cm、61は口径18.0cm、器高2.1cmである。

土坑S K 108出土遺物(第120図62) 須恵器杯B蓋である。口縁端部の破片で、笠形を呈すると考えられる。

溝S D 44出土遺物(第120図63・64) 63は須恵器杯B蓋のつまみ部分の破片である。64は須恵器壺または甕の体部と思われる。残存高4.0cmである。

遺物包含層出土遺物(第120図65～80) 65～67は古墳時代の須恵器杯蓋である。65・66は口縁端部に面を持ち、口縁部から天井部になるところの稜は明瞭である。天井部の回転ヘラ削り調整も広範囲に及ぶ。これに対して67は口縁端部が丸く、稜も沈線に変わっている。また、天井部の回転ヘラケズリ調整も範囲が狭くなっている。65は口径11.5cm、残存高4.0cmである。66は口

径12.4cm、残存高3.8cmである。67は口径13.6cm、残存高4.2cmである。68～70飛鳥時代の杯である。69は体部がやや丸みを帯びる。古墳～飛鳥時代にかけて一般的な杯蓋を杯身に転じたような形状をしている。68・70は平底の底部に斜め情報に立ち上がる口縁部を有する杯である。68は立ち上がる部分がやや丸みを帯びる。71は須恵器甕口縁部である。外面に上下2段の波状文を施す。口径17.8cm、残存高5.0cmである。72は須恵器高杯の杯部と脚部の一部である。残存高9.1cmである。73～75は須恵器杯Bである。73は口径13.8cm、器高5.3cmである。74は口径19.3cm、器高5.5cmである。75は口径17.8cm、器高5.9cmである。76～78は須恵器杯蓋である。いずれも口縁部から天井部にかけての破片で、つまみ部分を欠損する。76・77はやや扁平であるが、78は笠形を呈する。76は外面に暗文状のミガキが施される。76は口径25.0cm、残存高1.9cmである。77は口径22.9cm、残存高1.4cmである。78は口径24.8cm、残存高2.8cmである。79は須恵器皿である。口縁部が著しく焼けひずむ。残存高2.5cmである。80は須恵器皿Bである。口径22.4cm、残存高4.0cmである。

b. 瓦(第121図81～87)

出土した瓦は、いずれも平瓦である。胎土や焼成などから三日市遺跡で焼成された瓦と考えられる。今回の調査では軒瓦は確認していない。81は建物跡S B01の柱穴S P84の柱痕から出土した。81は大きく焼けひずんでおり、本来凸面であるべき縄目タタキの側に反っている。82・83は建物跡S B02-bの柱穴掘形から出土した。82は柱穴P245、83は柱穴P134からの出土である。84～87は土坑S K130から出土した。いずれも細片である。84は他の瓦に比べてやや厚い(約3.5cm)。

C. 製塩土器(第122図88～92)

製塩土器は、調整手法から内外面ともナデ、ユビオサエで調整する88・89と、内面に布の圧痕の認められる90～92に分けられる。形態の上では、88・90～92は口縁端部が大きく内傾するのに対して、89は厚手の口縁形態をとる。また、色調は88・89が暗橙褐色、90～92が灰色を呈する。88・89は土坑S K204から出土した。

D. 鉄製品(第122図93・94)

2点とも、おそらく鉄鏃と考えられる。93はほぼ完存し、全長12.7cmである。94は鉄鏃の茎で、残存長5.9cmである。 (筒井崇史)

(3) まとめ

A地区での調査成果は多岐にわたっている。

まず、弥生時代中期の方形周溝墓群が時塚遺跡から当該調査地点まで広がっていることが確認された。これにより弥生時代中期の墓域が時塚遺跡・車塚遺跡にかけて南北350mにわたる広大なものであったことが明らかとなった。

次に埋没古墳の発見が挙げられる。既に時塚遺跡において時塚1・2号墳が発見され、坊主塚古墳の南西約1kmにはほぼ同時期の方墳群が存在することが明らかとなっているが、さらに南に約350mで、古墳時代後期前葉の千歳車塚古墳とも200mしかはなれていない当該地で発見された古

墳は、両者を地理的にも時期的にも結びつける存在であると言える。既にこの段丘上に埋もれた古墳があるであろうことは故足利健亮氏が推測しているが^(注24)、小字名を採って小弥ヶ口古墳と名付けられたこの古墳は、千歳車塚古墳が全くの単独の古墳ではなく、古墳時代中期からの川東の首長墓系譜の上に位置づけられる古墳であることを示している。

最後に掘立柱建物群と土坑群から構成される遺構群である。S B01とS B02-aは出土遺物および建物の主軸が共通することから、同時併存の建物であり、「L」字形の建物配置をとる。この建物群は奈良時代前半以降に建てられ、三日市瓦窯の操業期間中に廃絶している。また、その直後にS B02-Bが建てられ、S B01は再建されないが、新たにS B03が建てられている。S B02-BとS B03は須恵器の接合関係と建物の主軸が共通することから同時期の掘立柱建物であると考えられる。S B02-B・S B03は柱穴の平面形が隅丸方形で、一辺80~100cmを測るものであり、逆「L」字形の配置を採るため、官衙的な建物群である可能性が高い。S P186から出土した転用硯の可能性のある須恵器杯の存在もこの推定を裏付ける。遺物の接合関係にあるS K130・S K107もS B02-B・S B03と同時に機能していると考えられるが、ここから出土した土器にも墨書土器や転用硯がみられる。これらも官衙的建物群の周辺施設として位置づけられよう。この推定が肯定されるのであれば、前段階のS B01・S B02-Bは柱穴の規模こそ小さいが、S B02-B・S B03の前身的な官衙的建物群である可能性がある。川東地区の奈良時代遺跡の動向と照らし合わせると、前段階の官衙群は、池尻遺跡の国府と推定される大型掘立柱建物群と併行する時期に建てられ、丹波国分二寺の建立を契機に三日市瓦窯が操業を開始し、これと連動してS B01・S B02-Bを廃絶し、S B02-B・S B03が築造される。そして、周山窯跡群はこの時期には操業を終え、篠窯跡群の操業はこの時期から開始される。車塚遺跡の官衙遺跡はこうした丹波国支配の大きな転換に伴って築造され、規模を拡大し、そして長岡京遷都と共に廃絶していくとみられる。

(福島孝行)

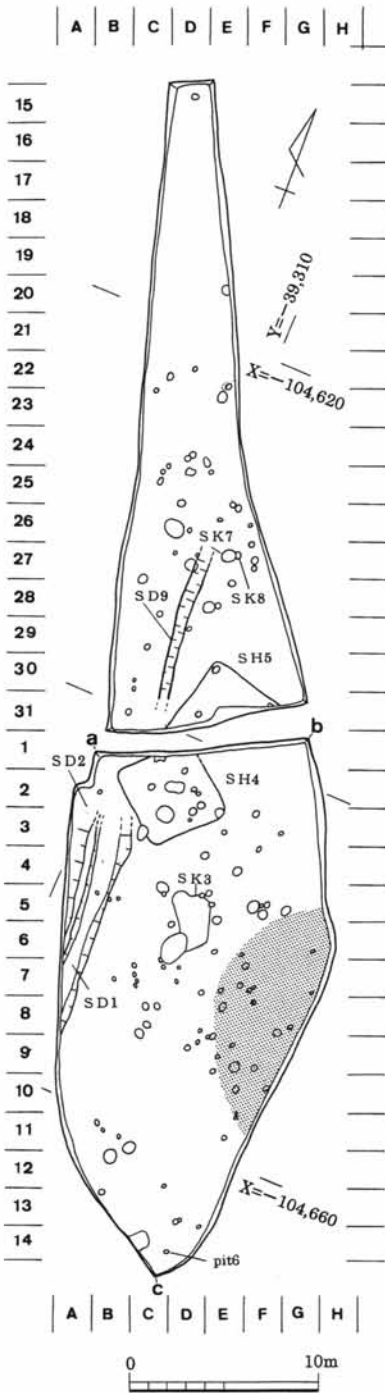
3. B地区の調査

B地区では現況の耕作地の関係から2か所のトレンチを設定し、北側をB1地区、南側をB2地区とした。調査の結果、縄文土器および石器の出土、古墳時代前・後期の竪穴式住居跡、奈良~鎌倉時代さらに江戸時代の土坑・溝・柱穴などを検出した。平成16年度末にB1・B2地区の重機掘削を開始し、多量の縄文土器を含む厚い堆積層が確認された。表土(水田耕土・床土)直下の黒褐色系の粘質土がそれで、特にB2地区の北東側に厚く堆積していた。当初は縄文時代の純粹層と捉え、遺構が存在している可能性を考えた。そのため、遺物取り上げに際してはグリッドによる取り上げの必要があると判断し、調査区を2mメッシュによる地区割りを行い、各地区での遺物取り上げを実施することとした。また、遺物の集中する地点に関しては座標による記録・取り上げ作業を併行して実施した。しかし、調査が進むにつれ、これらの縄文時代資料の集中するレベルおよびその下位から、古墳時代・奈良・平安時代の土器が出土し、新しい時代の土器も混入していることが明らかとなった。黒褐色粘質土層は奈良~鎌倉時代の土坑、柱穴も検出され

たため、中世の整地層とした。縄文時代の遺構面はなく、縄文土器・石器は平安時代末～鎌倉時代初頭を上限とする時代の遺物とともに、当地に整地による土砂とともに運ばれたものと判断した。このような状況から、B2地区に関しては原則グリッドによる遺物取り上げを行ったがB1地区については同様の作業を実施していない。

(1) 基本的層序

B地区における基本層序は、1層：水田耕作土・床土、2層：暗灰褐色粗礫土、3層：黒褐色



粗礫混じり粘質土、4層：黒灰色細砂質土、5層：淡黒灰色粘質土、6層：黒色粘質土(礫少ない)、7層：暗橙褐色細砂質土、8層：濁橙褐色粘質土、9層：黄褐色細砂質土(地山)である。3～6層は鎌倉時代の整地層である。B1地区とB2地区とでは3層・6層主体の整地層の厚さに差があり、B2地区ほど厚く堆積している。

縄文時代の土器・石器を多量に包含している層位は、この整地層の中間部(標高約98m)である。層の厚さは東壁中央で約30cm、北壁中央で約65～70cm、西壁北端～中央で約65～20cmを測る。B2地区の北東部ほど厚く、そこから南北方向のいずれに向かっても包含層は薄くなっていくことがわかった。

下層の暗橙褐色粘質土(7層)からは古墳時代とみられる土師器や須恵器が若干出土する。B1地区におけるガラス小玉は7層からのものである。地盤と形成する黄褐色粘質土(9層)からは、遺物の出土は認められず、地山と判断した。

(2) 遺構と遺物

B地区では縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が検出された。以下、時代別に概観する。

A. 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査により、出土した遺物の大部分を占めるのが、縄文時代に属する土器と石器である。しかしながら、先述のように、これらの遺物は、中世段階における整地により移動されたものであると判断した。また、当該期の遺構については検出されなかった。遺物の出土状況についてみると、土器・石器の分布には粗密があり、グリッド番号で示すと、B2地区の7E・7F・8F・8G区に集中し、そこから離れるにつれて希薄になる。出土量はコンテナ箱にして10数箱である。以下、土器・石器に大別し資料の概観、検討を行う。

第123図 B地区検出遺構配置図

(黒坪一樹)

縄文土器

縄文土器は、比較的まとまった量が出土している。前述のように、出土状況は二次堆積である可能性が高いものの、整理作業の結果、以下の点で重要な資料であることが明らかになった。

- ① 型式学的特徴から、縄文時代後期前葉(以下、後期前葉)にほぼ限られる資料である。
- ② 土器表面が比較的磨耗しておらず、原位置から大きく移動していないことが予想できる。また、このことにより表面の調整痕などが容易に観察できる^(注25)。
- ③ 「生駒西麓産」であるといわれる、角閃石類を多量に含む特徴的な胎土の資料が半数以上を占める。
- ④ 「細密条痕」と呼ばれる、山陰から近畿北部の土器にみられる特徴的な調整を施した資料が存在する。

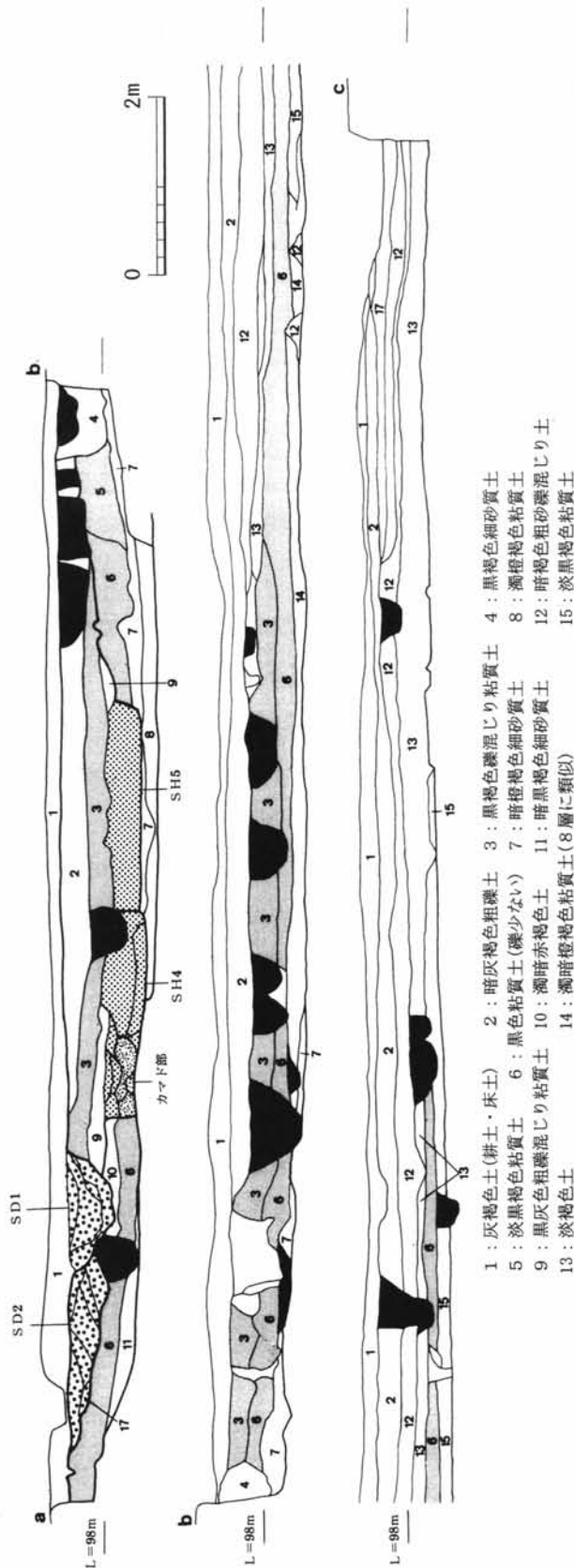
とくに、③および④の特徴は、亀岡盆地の地理的位置とあわせて、当時の集団関係を復原する上で重要な手がかりになる。そのためには、同時期の他の遺跡との比較を可能にする、器種組成の数量的な把握が必要であると考えられる。

そこで、ここでは、有文の口縁部を中心に図化を行い、併せて資料全体の統計的な分析を行った。

a. 分類

①縄文時代中期

量的には少ないものの、今回の調査地からは縄文時代中期に属する土器が出土している。第125図1は口縁端部の形状および胎土、文様などから、中期後葉の里木Ⅱ～Ⅲ式に比定できるものである。



本遺跡の他の土器と比べて表面の磨耗が著しい。第125図2～4は中期末葉の北白川C式である。2・3は沈線による楕円形区画内に縄文を施す。2には補修孔を穿つ。4は口縁部文様帯の把手であると考えられる。2・4は灰白色、3は橙色を呈する。いずれも胎土には角閃石を含まない。

②縄文時代後期前葉

本遺跡の主体となる時期である。器形から大きく深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器(以下、深鉢、鉢、浅鉢、注口とする)に大別し、これを口縁部形状や文様などから器種に細別した。

深鉢

A類(第126図5～8)：外反する口縁の端部に突起をもち、その両側に沈線を施すもの。6の外側に縦位の沈線が施されるほかは、外面を無文とする。縁帯文土器成立期に比定できる。5は突起の側面に、7は突起の頂部と内面中央に、それぞれ貫通しない円孔を施している。

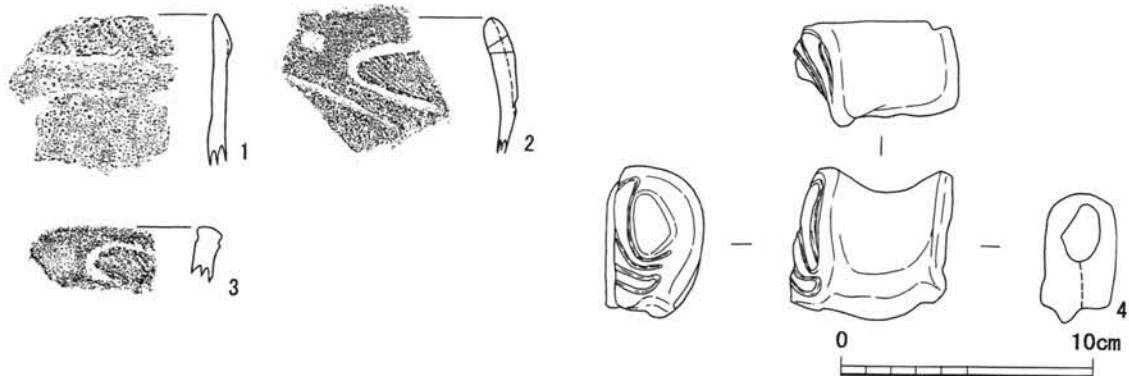
B類：屈曲や肥厚によって区別した口縁部に文様帯を形成するもの。いわゆる縁帯文土器である。

B1類(第127図9～11)：しっかりした段状肥厚によって区別された、幅広い口縁部文様帯を形成するもの。なだらかな波状口縁で、波頂部下に渦文あるいは多重同心円文をもつ。北白川上層式1期に典型的なタイプである。口縁部が内湾するもの(9・10)と強く屈曲するもの(11)がある。

B2類(第127図12～第130図)：口縁部外面を肥厚させることで、比較的幅狭の口縁部文様帯を形成するもの。北白川上層式2期に比定できる。口縁部断面形態を基準に次の2種に細分する。

B2類a(第127図12～24)：口縁部断面形態が三角形を呈するもの。肥厚部下端を強くナデることによってこの形態が実現される。口縁部をやや内湾させるものと直立させるものがある。長方形区画文や鋸歯状文が目立つ。渦文はB1種と比べて小さい。無文のものはほとんどみられない。21は肥厚部上面に2本の沈線を引きその間に刻目を施す。また、肥厚帯に貼付文を有する。

B2類b(第127図25～第6図)：口縁部断面形態がかまぼこ状を呈するもの。口縁部を直立させるものとやや外反させるものがある。26・34は肥厚部下に沈線を施すことによって口縁部文様帯を区別している。文様には多重同心円文もみられるが、横位または斜位の直線文が主体である。地文には縄文を施すものが主体であるが、無文のものもみられる。撚糸文を地文とするもの(34)



第125図 中期の土器

もある。頸部は基本的には無文であるが、縦位の条線を施すものも一定量存在する。このような有文のものほかに、口縁部肥厚帯に細条線(注26)のみを施すもの(53・54・69～74)、縄文のみを施すもの(75・77～85)、無文のもの(88～103)が数多くある。この点については後述する。86・87の口縁部肥厚帯には、細長い小圧痕が規則的にされた擬縄文を施す。巻貝による擬縄文である可能性が高い。

B 3 類(第131図104～126)：口縁部を内湾または屈曲させることで文様帯を形成するもの。口縁部断面形態を基準に次の2種に細分する。

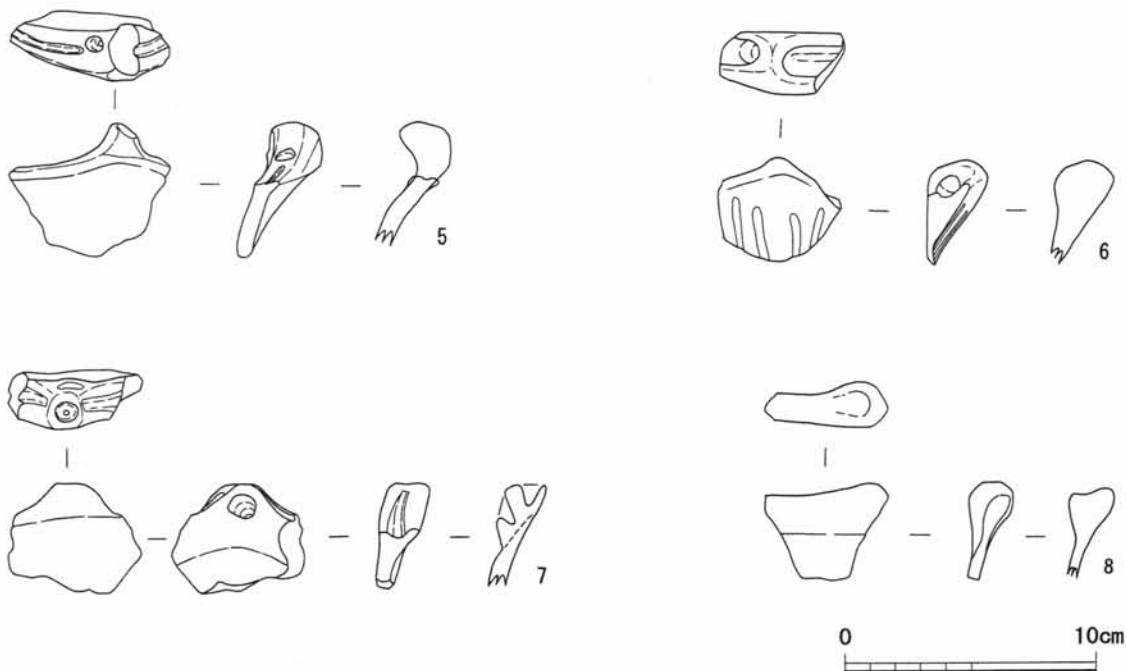
B 3 類 a(第131図104～111)：口縁部を「く」字状に屈曲させるもの。文様には横位の沈線と縦位の沈線が多い。107は長方形区画文を有し、その中に竹管状工具による刺突を施す。111は口縁波頂部の屈曲部と上端にボタン状の貼付突起を有する。

B 3 類 b(第131図112～125、第8図126)：口縁部を内湾させるもの。112～116は大きく内湾する波状口縁をもつものである。112は口縁波頂部の屈曲部と上端および波頂部両側面に円孔を穿つ。117～126は口縁部内面に横位の強いヨコナデを施すことで、口縁を内湾させるものである。

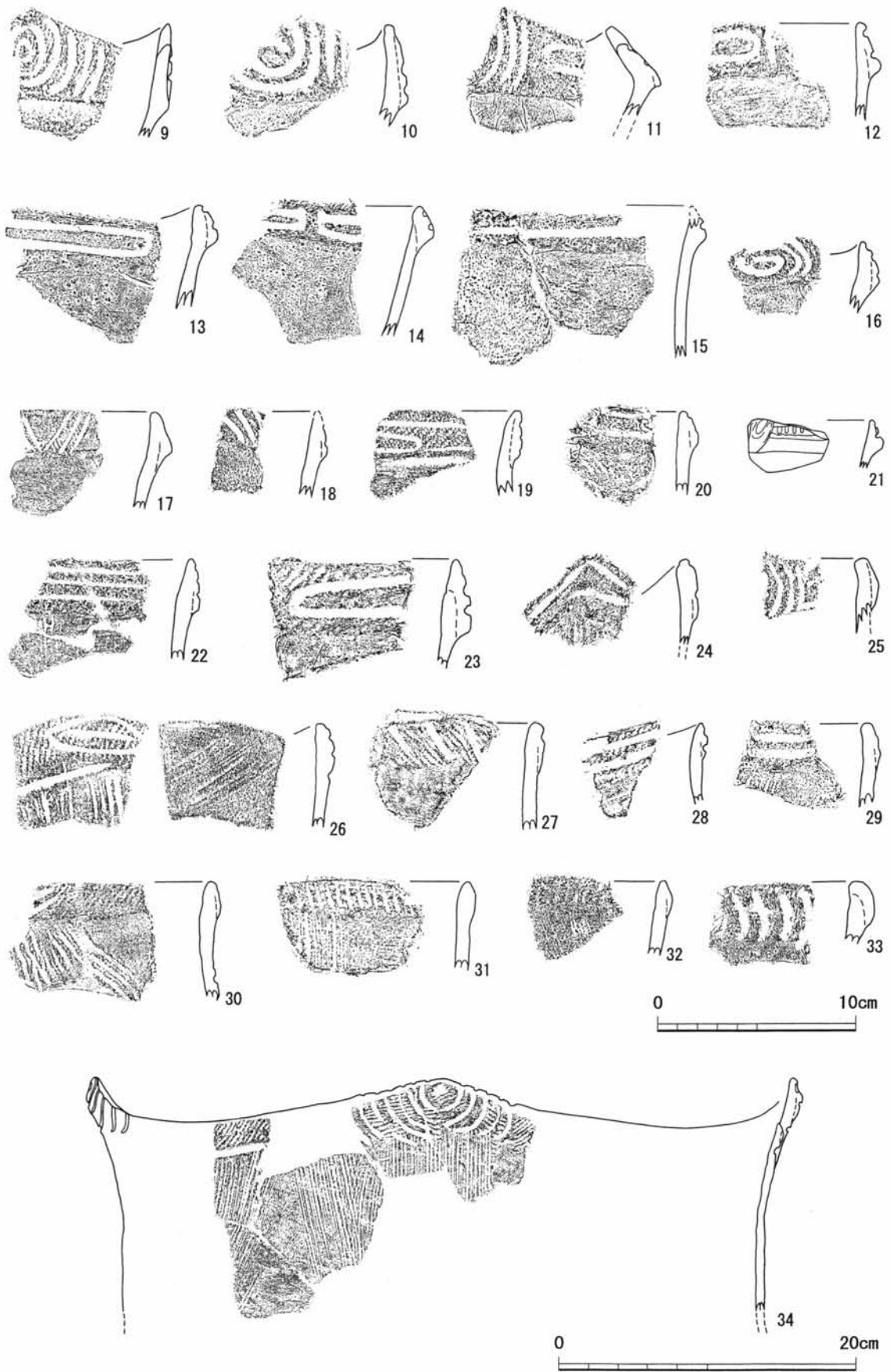
B 4 類(第132図127～第133図)：口縁端部を肥厚させ、上端に文様帯を形成するもの。口縁部断面形態を基準に次の2種に細分する。

B 4 類 a(第132図127～133)：内湾ぎみの口縁部端部を肥厚させるもの。口縁部外面を肥厚させるものがほとんどであるが、内面を肥厚させるものも存在する。130は頸部に細かい縄文と沈線文を施す。

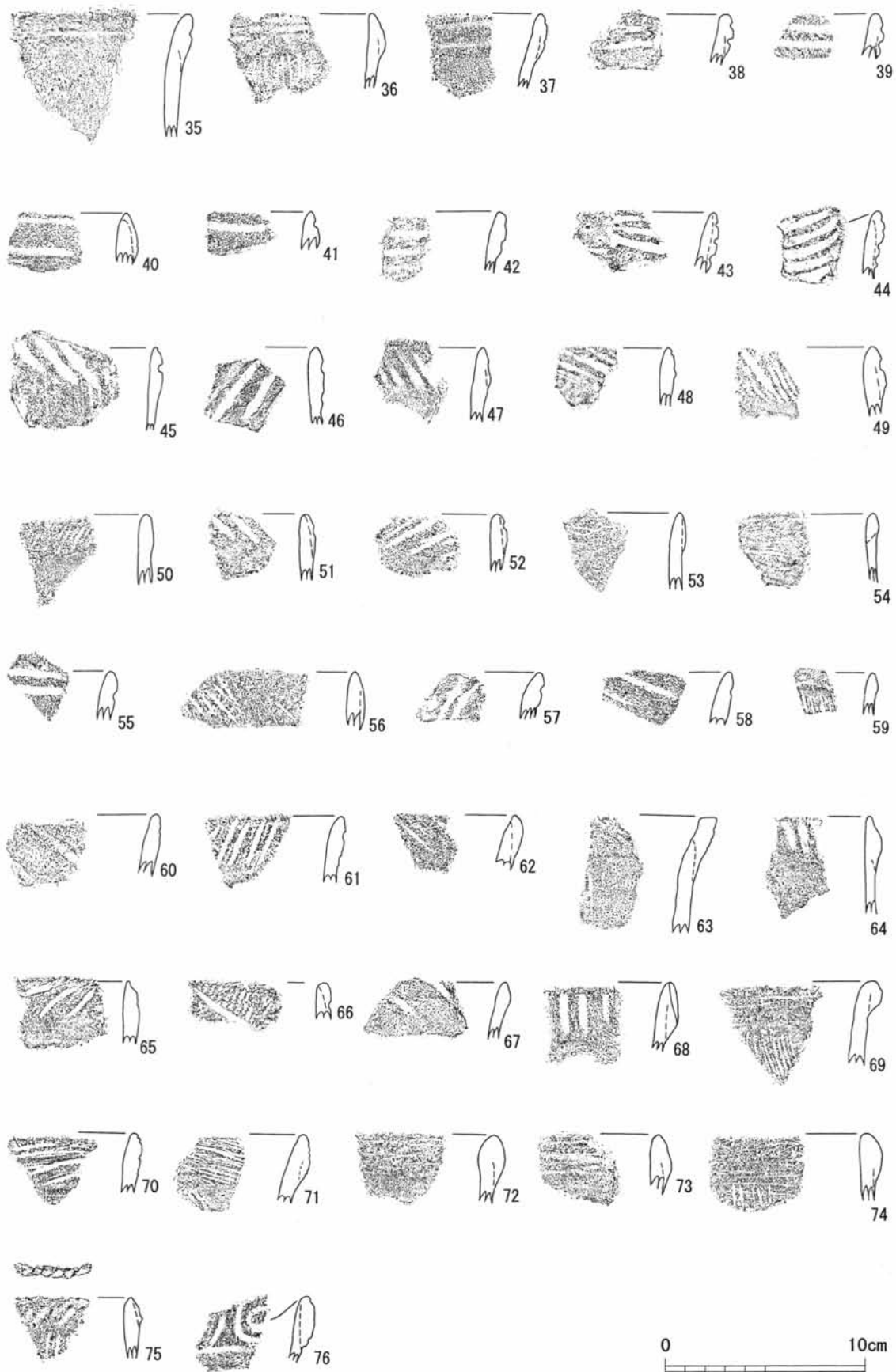
B 4 類 b(第132図134、第133図144)：口縁部断面形態がT字状を呈するもの。134は波頂部が剥離しているが、8字状浮文をもつと考えられる。144は4単位の波状口縁である。波頂部の両側面に渦文をもち、3本の横位沈線によってそれらをつなぐ。胴部には条痕調整(条痕B、後述)



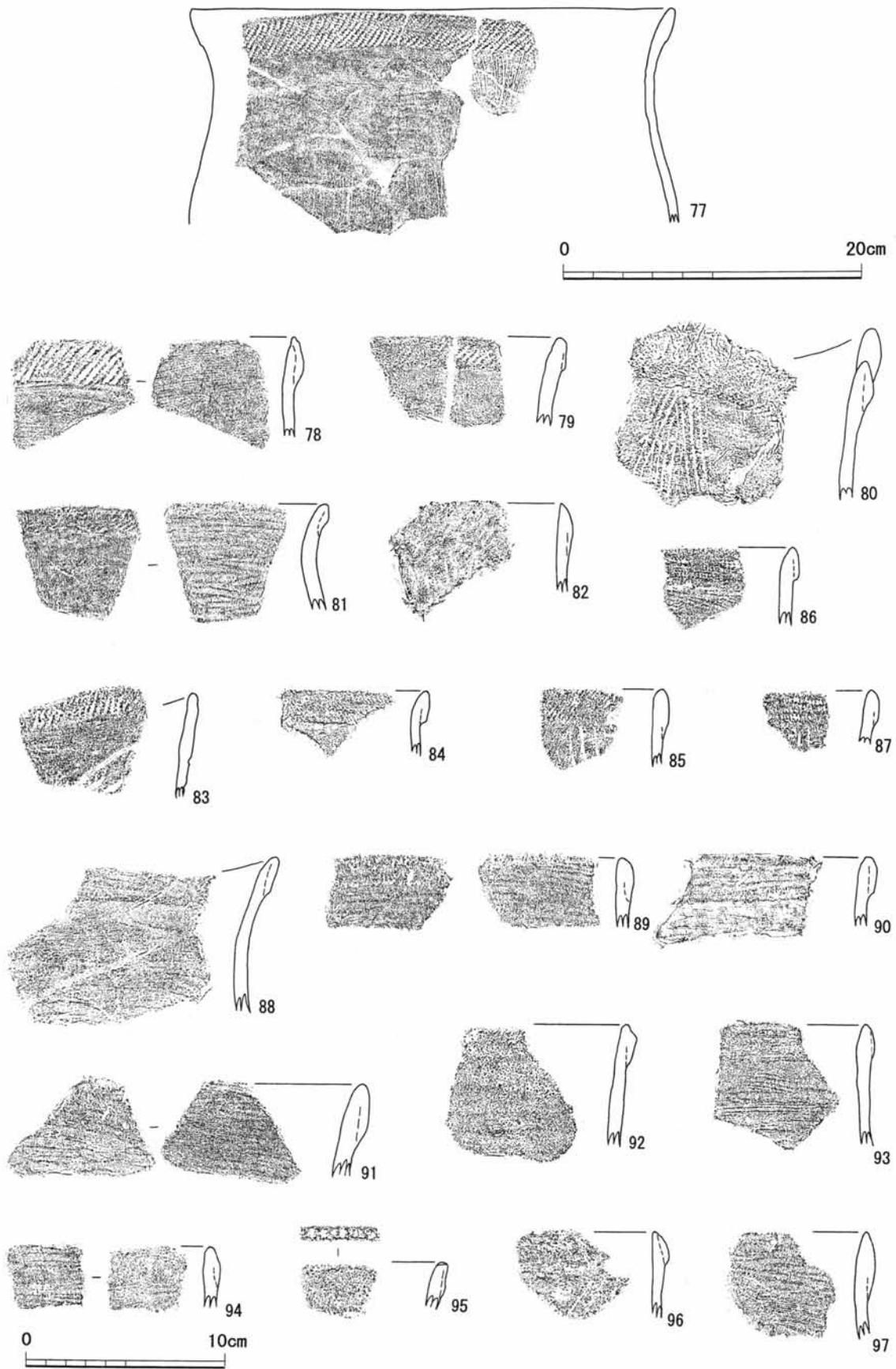
第126図 後期前葉の土器(1)



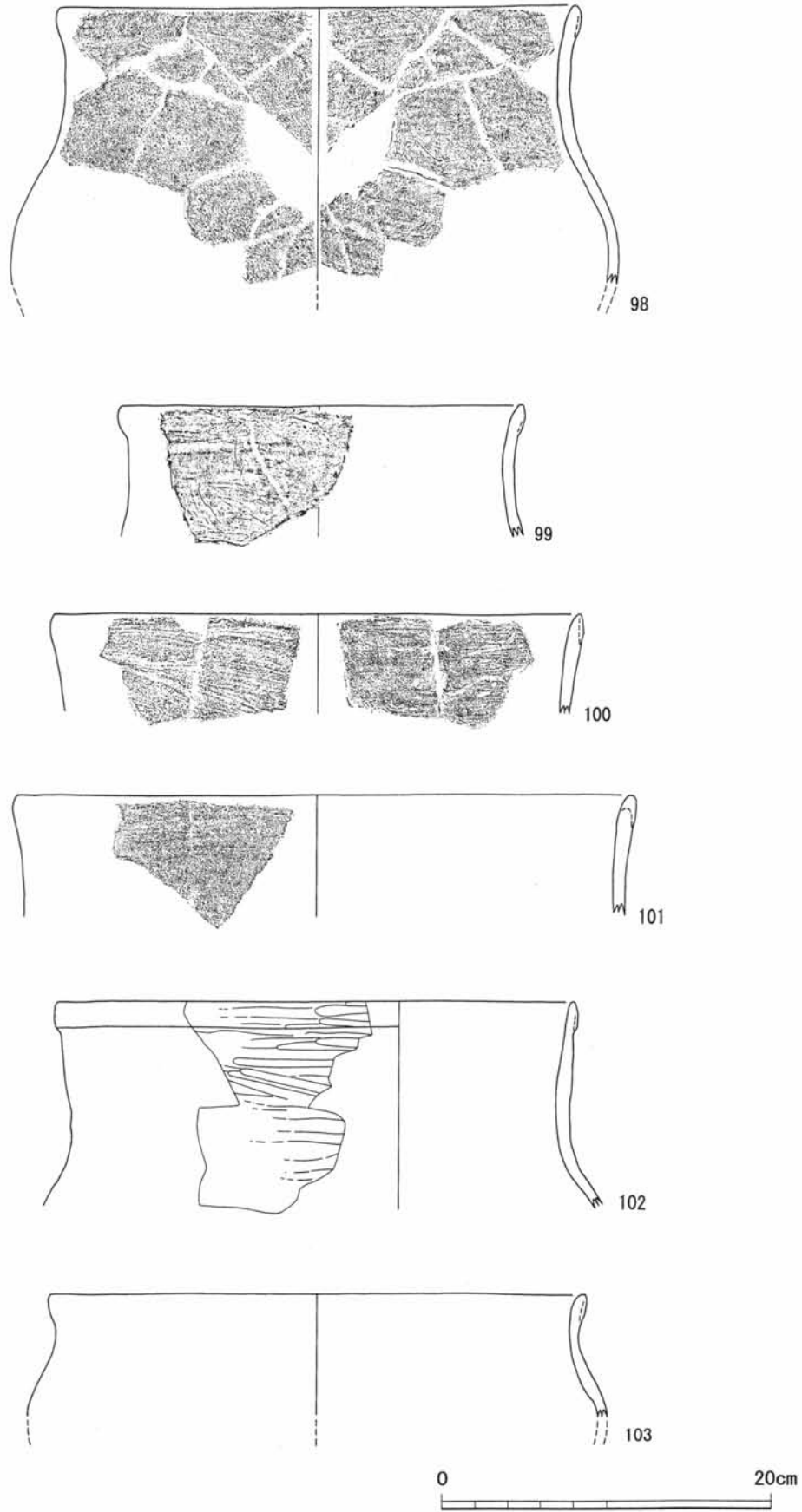
第127図 後期前葉の土器(2)



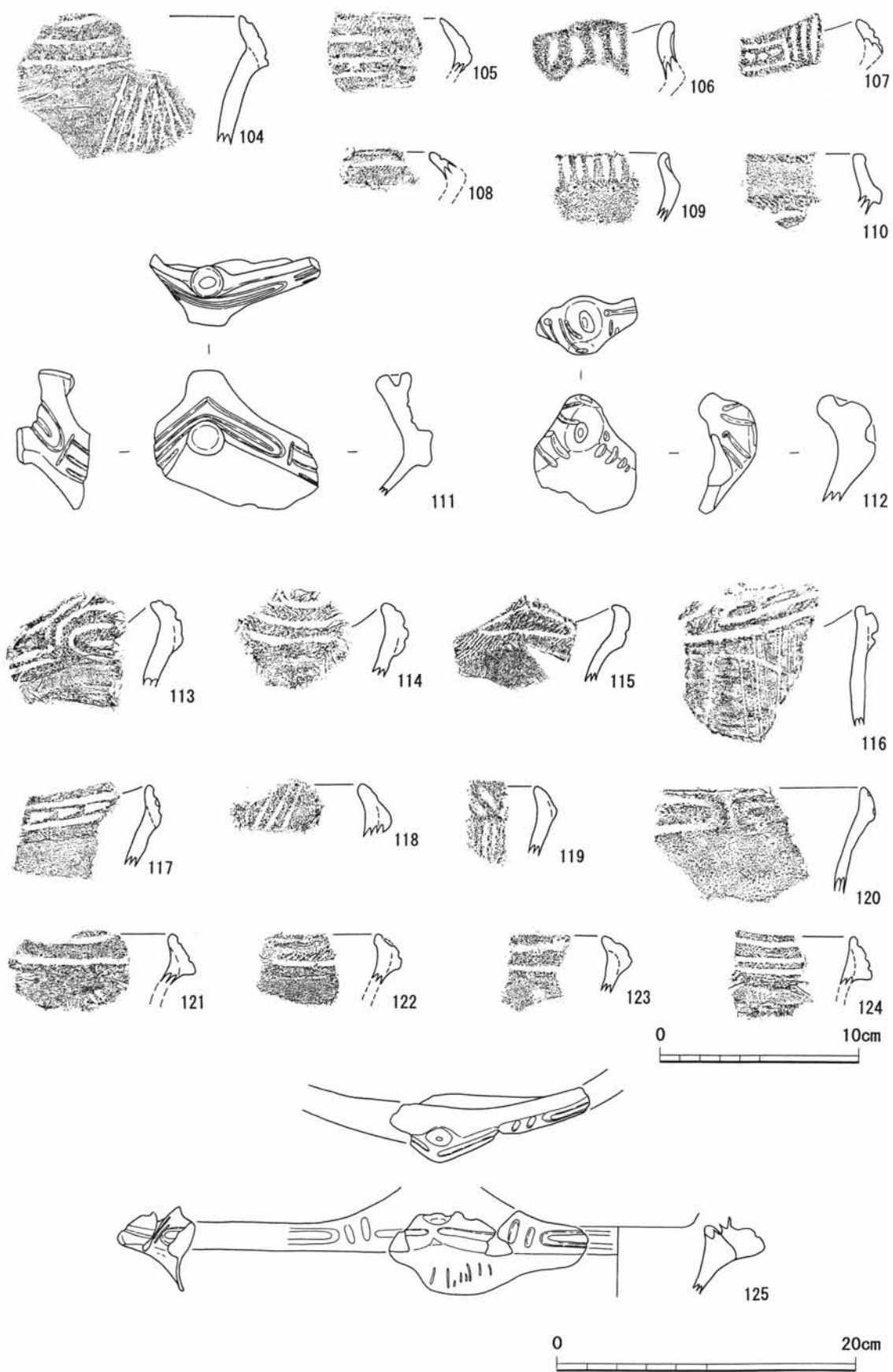
第128図 後期前葉の土器(3)



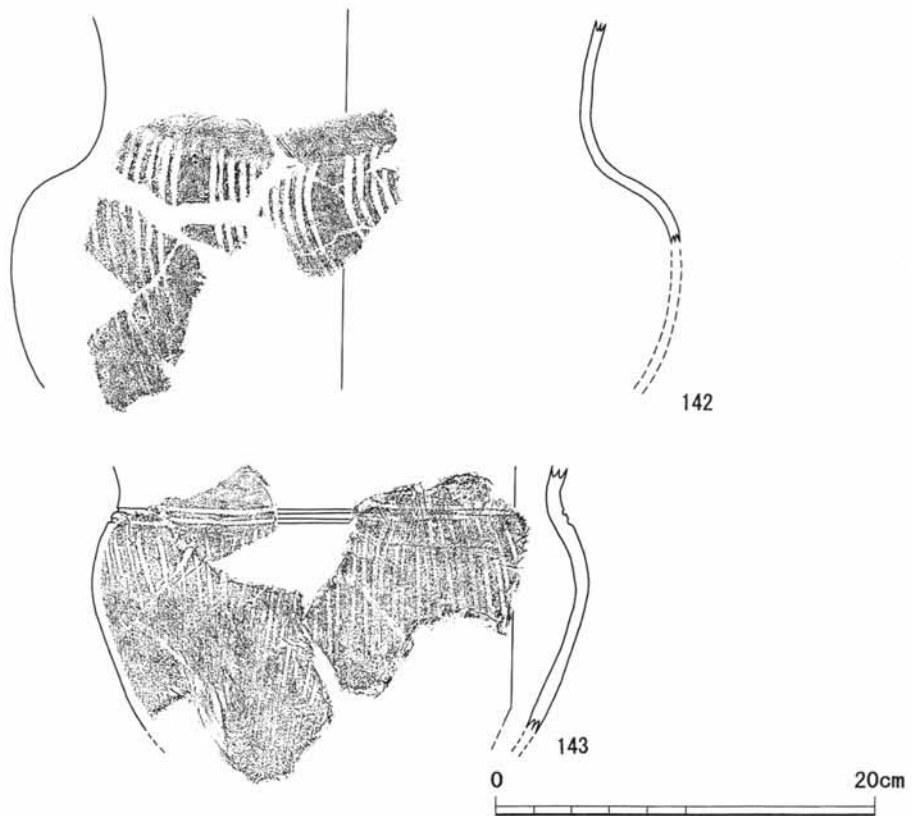
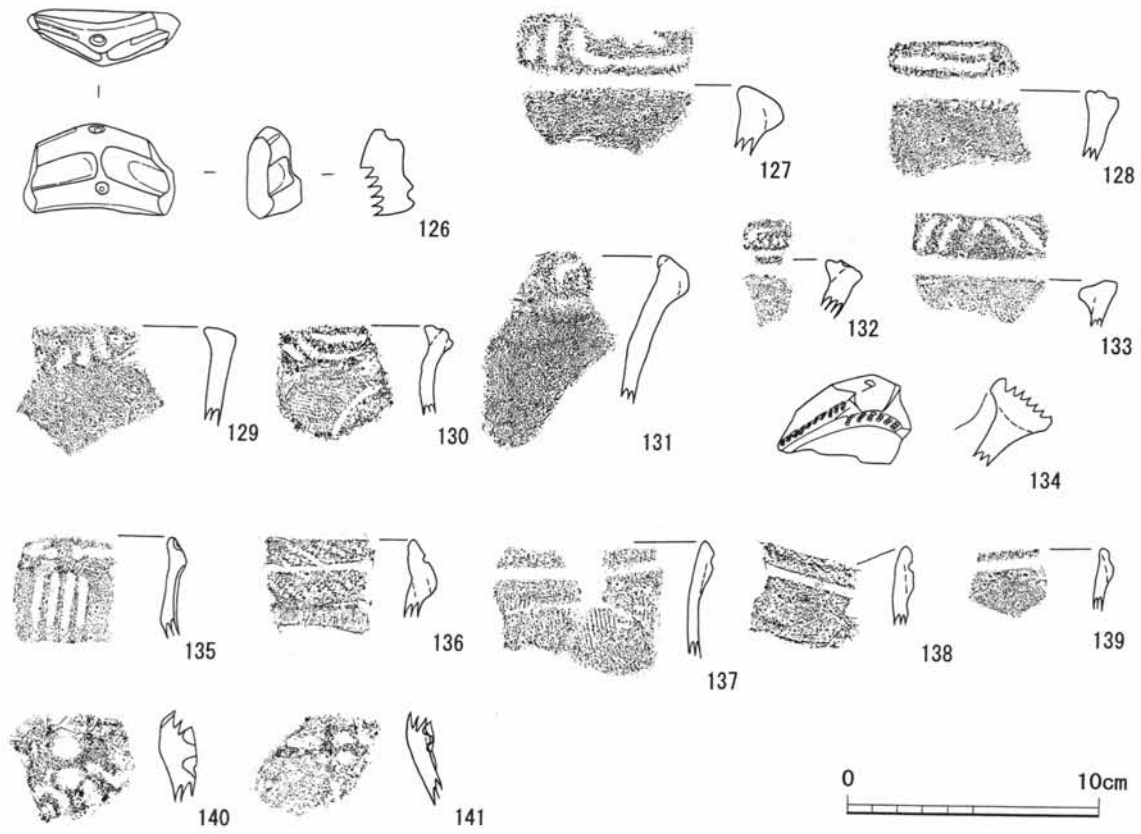
第129図 後期前葉の土器(4)



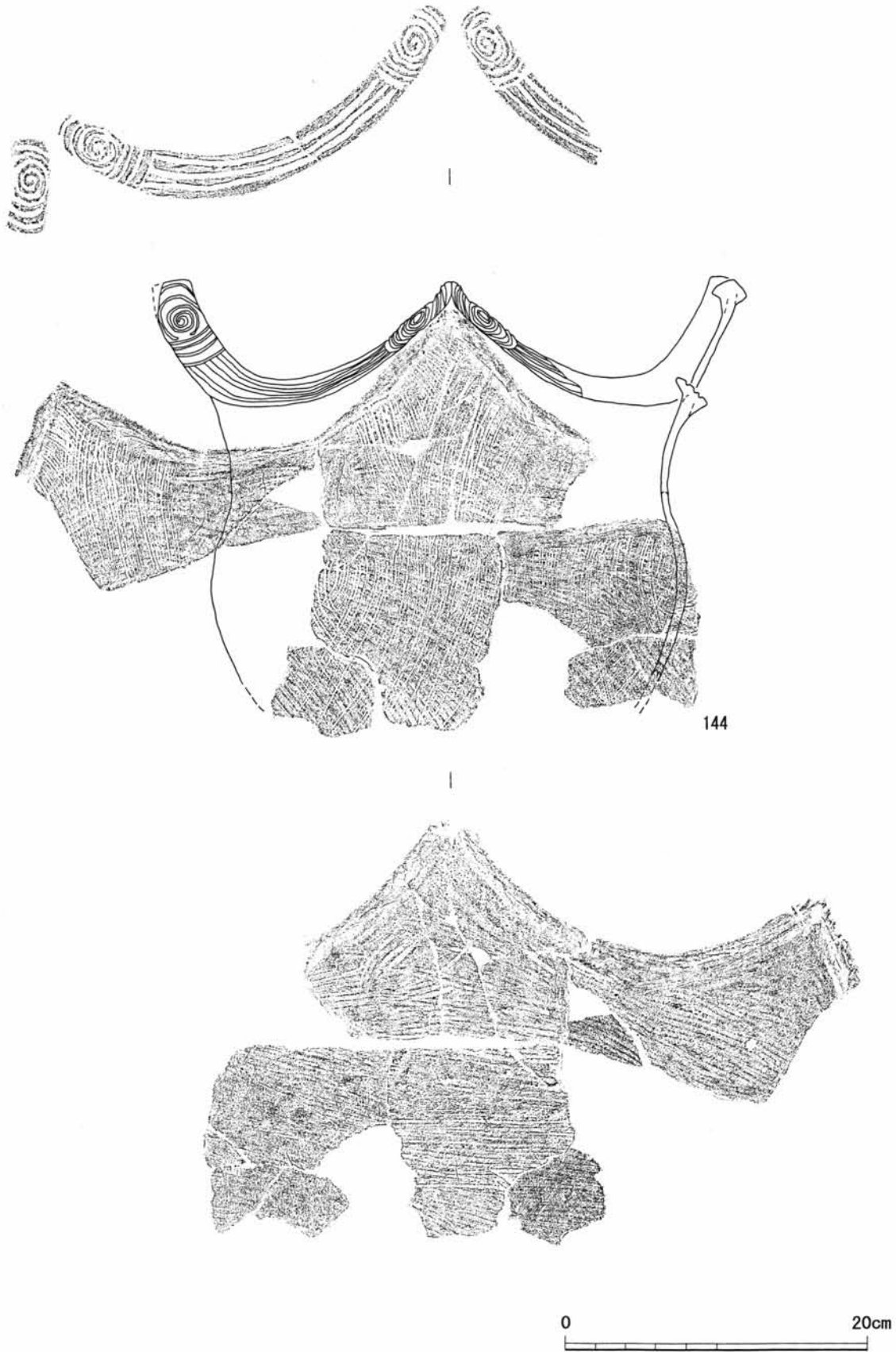
第130図 後期前葉の土器(5)



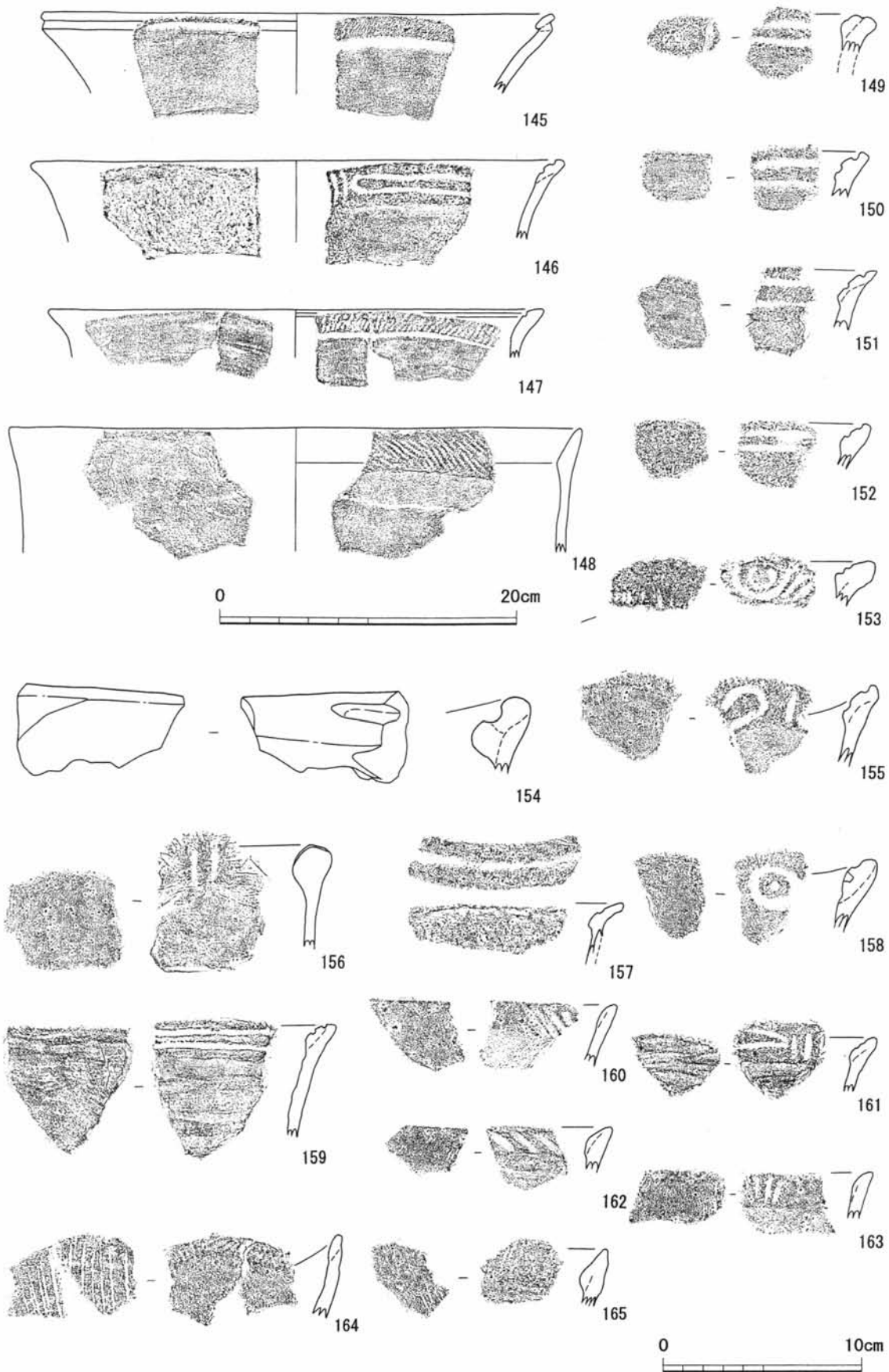
第131図 後期前葉の土器(6)



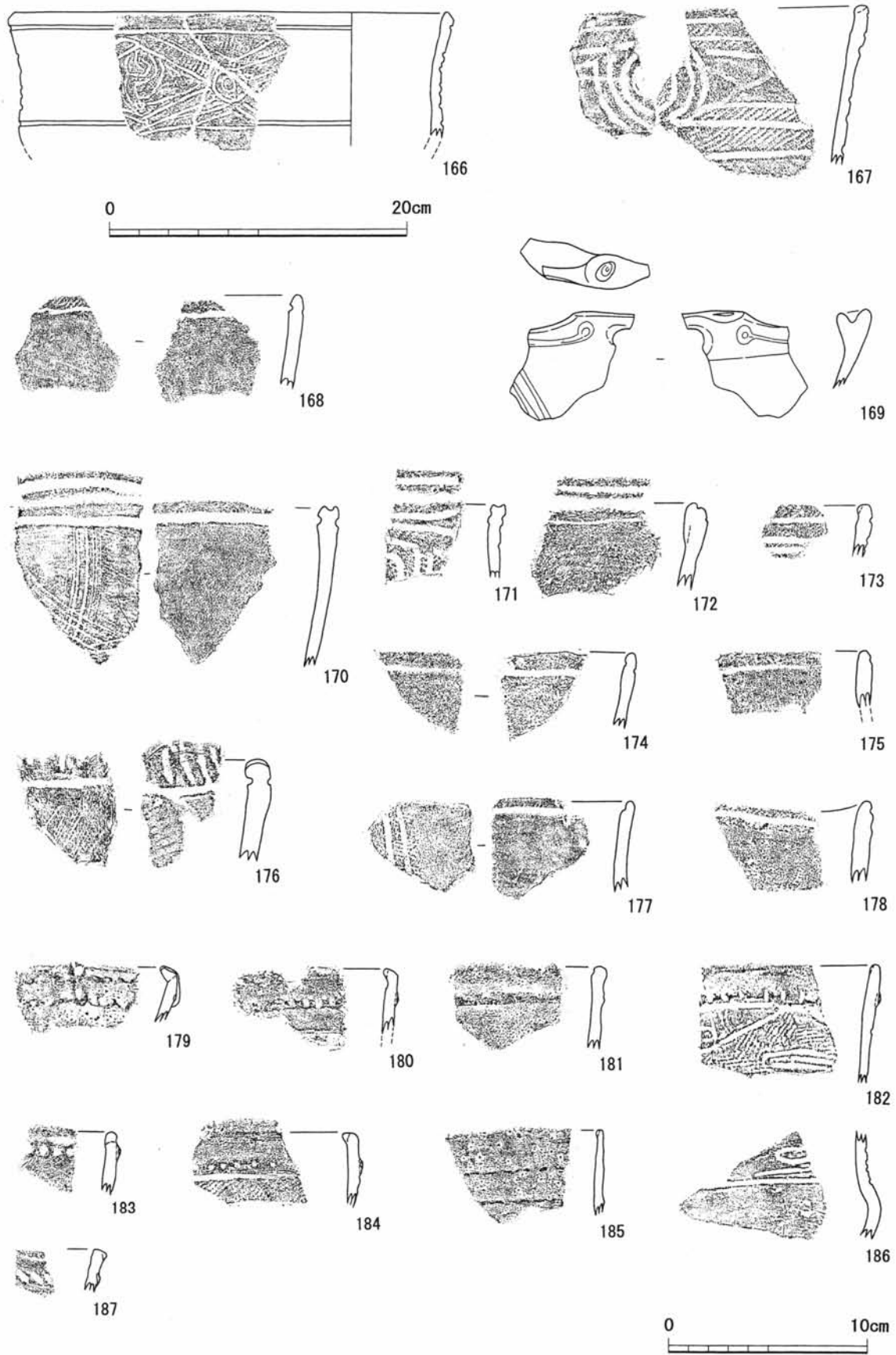
第132図 後期前葉の土器(7)



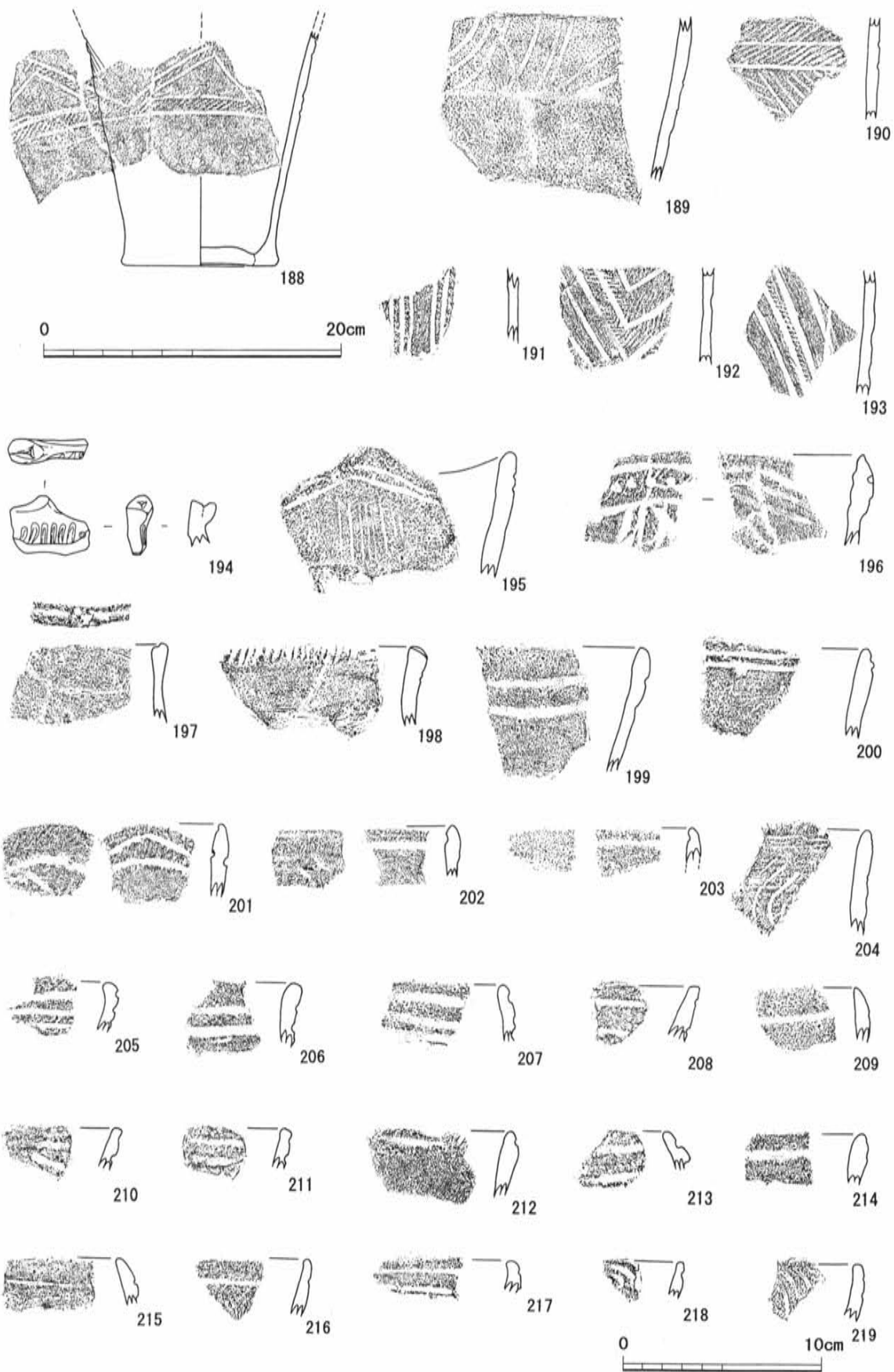
第133図 後期前葉の土器(8)



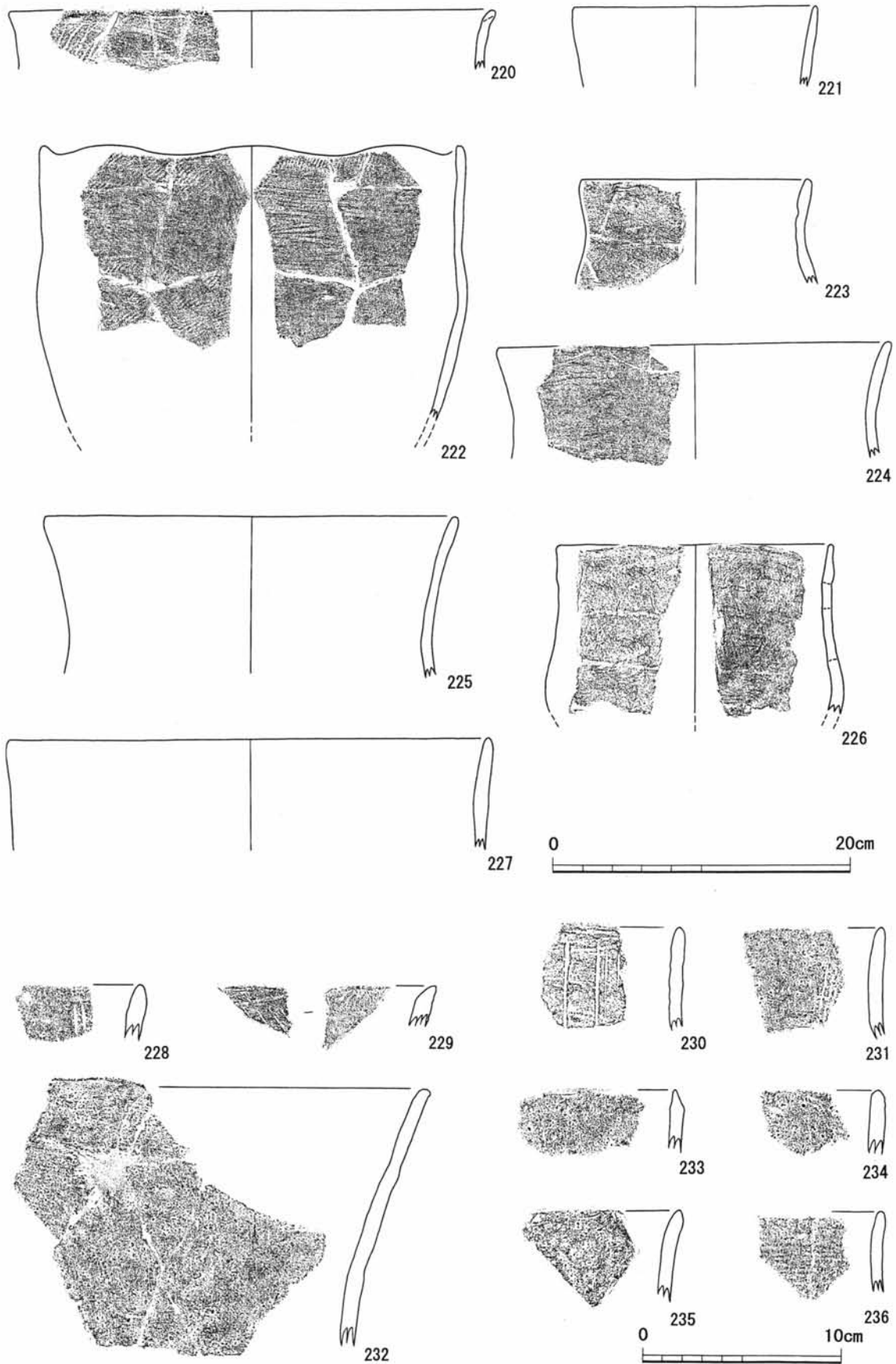
第134図 後期前葉の土器(9)



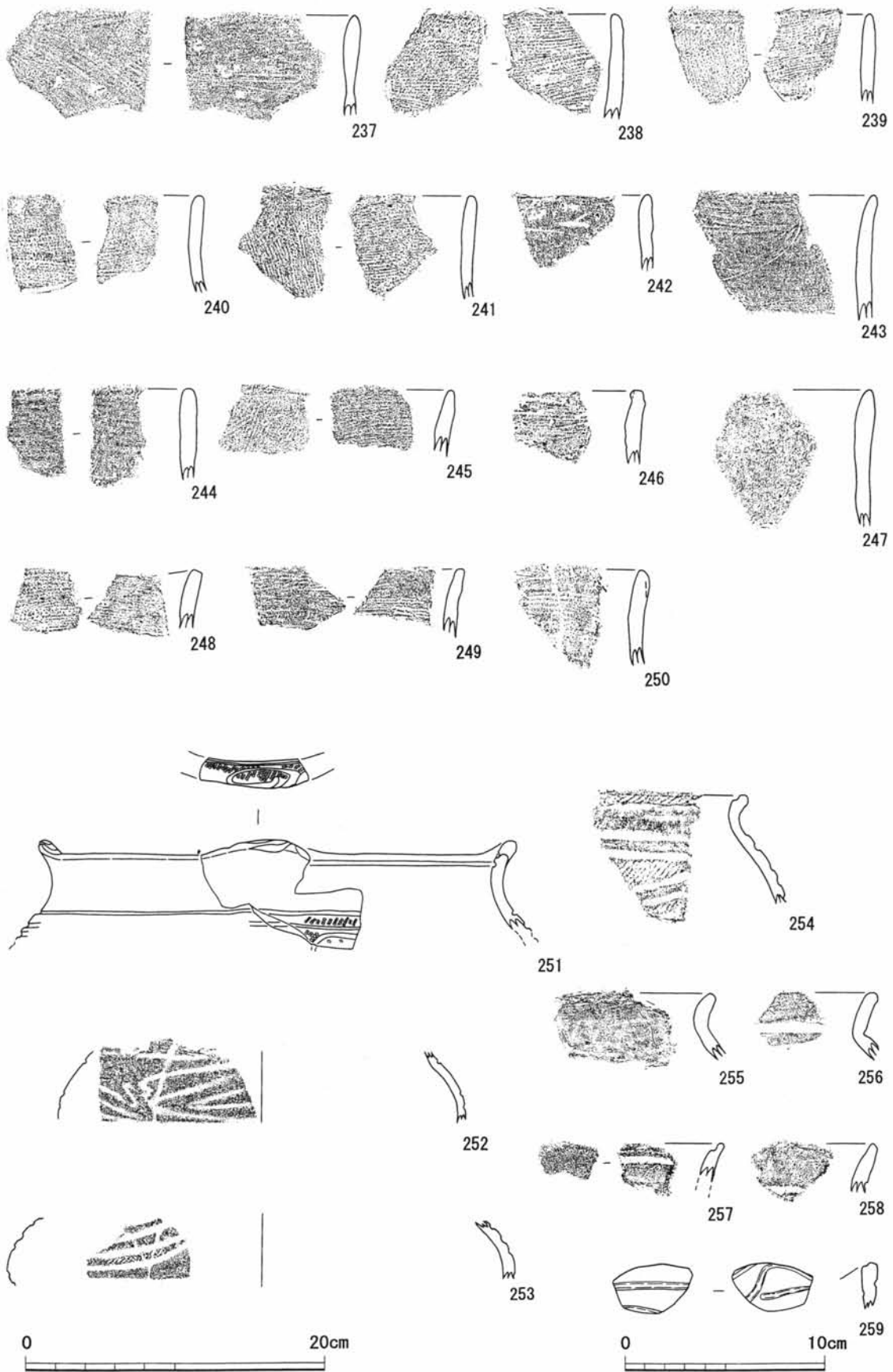
第135図 後期前葉の土器(10)



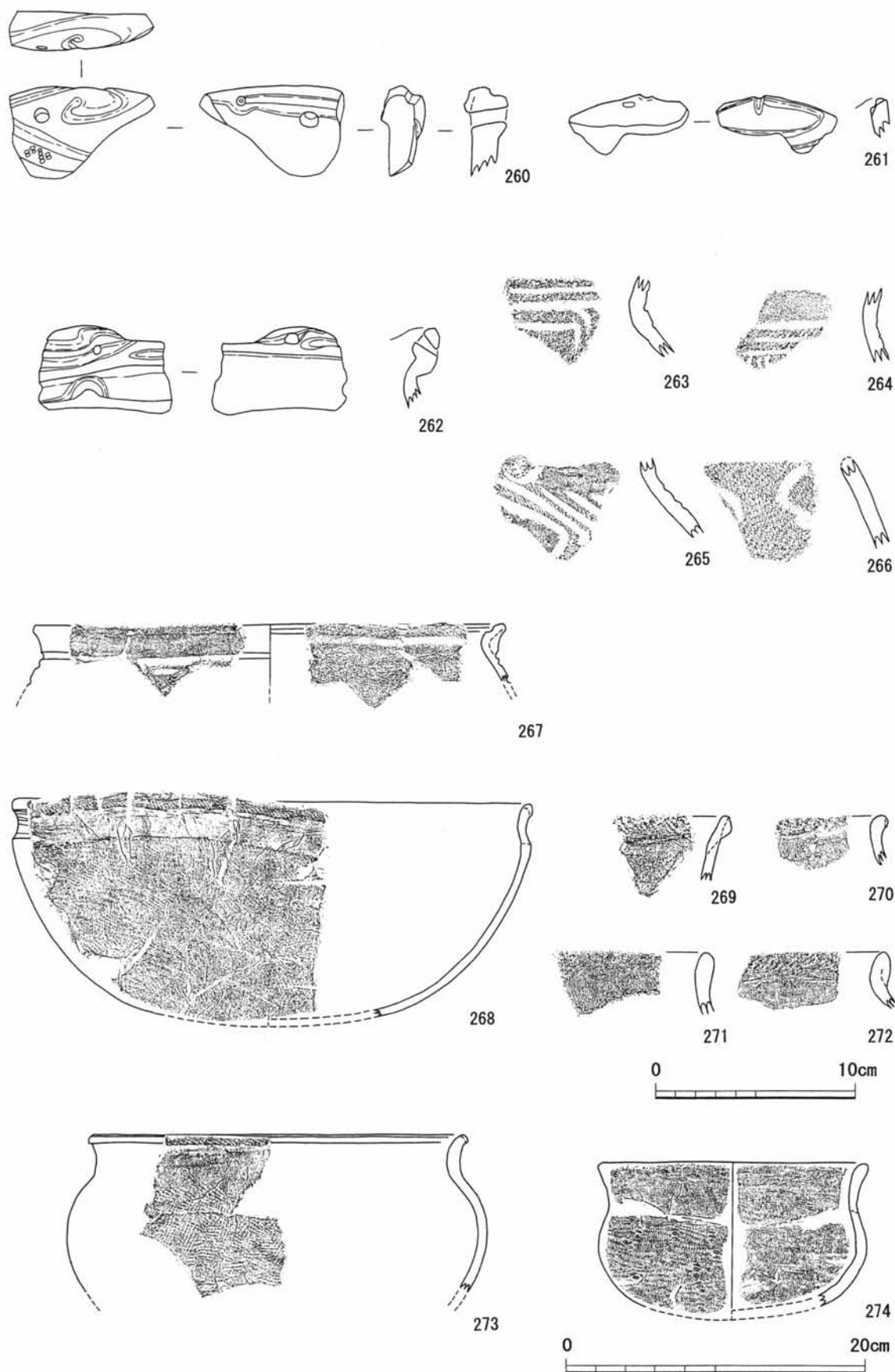
第136図 後期前葉の土器(11)



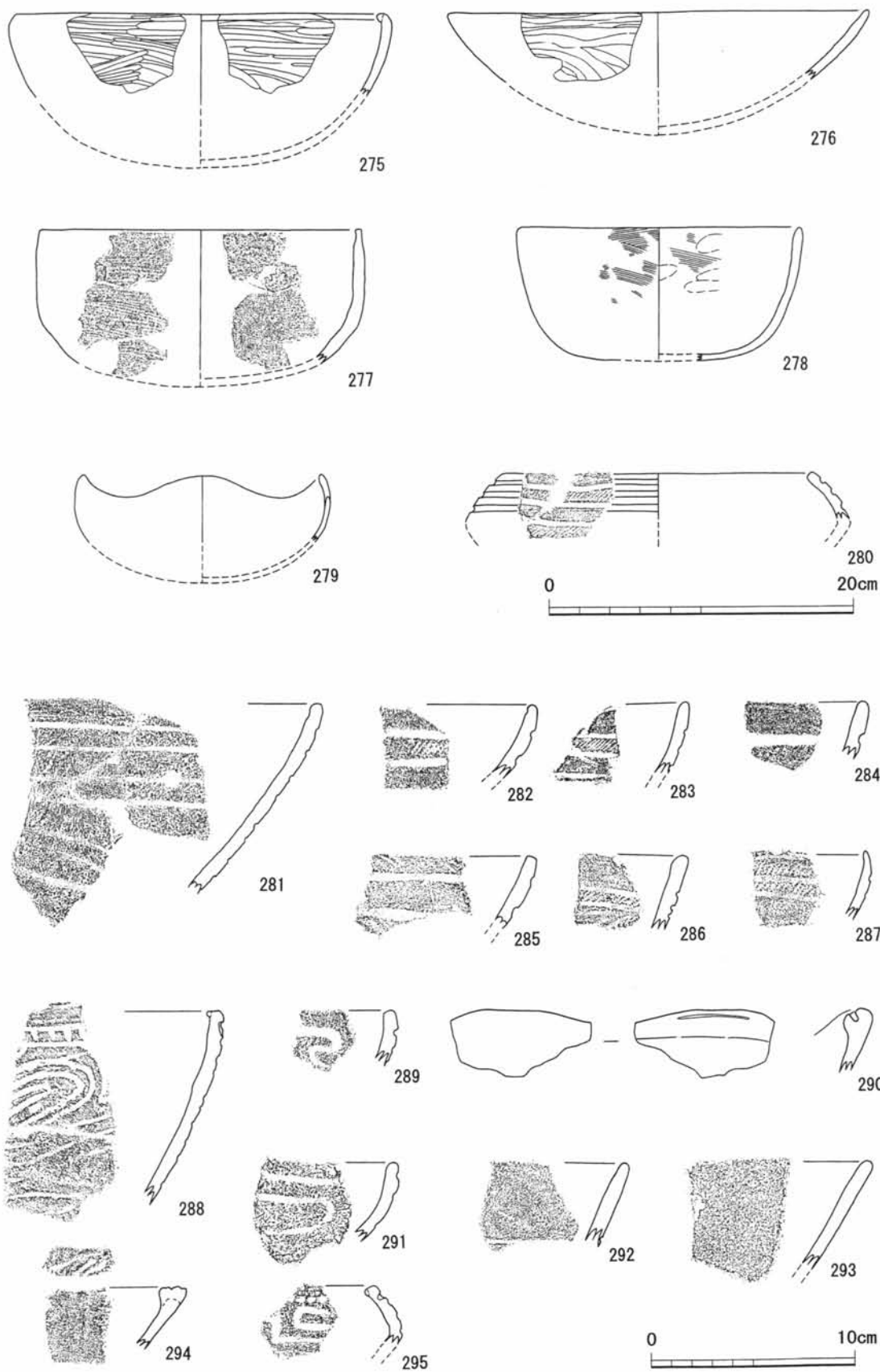
第137図 後期前葉の土器(12)



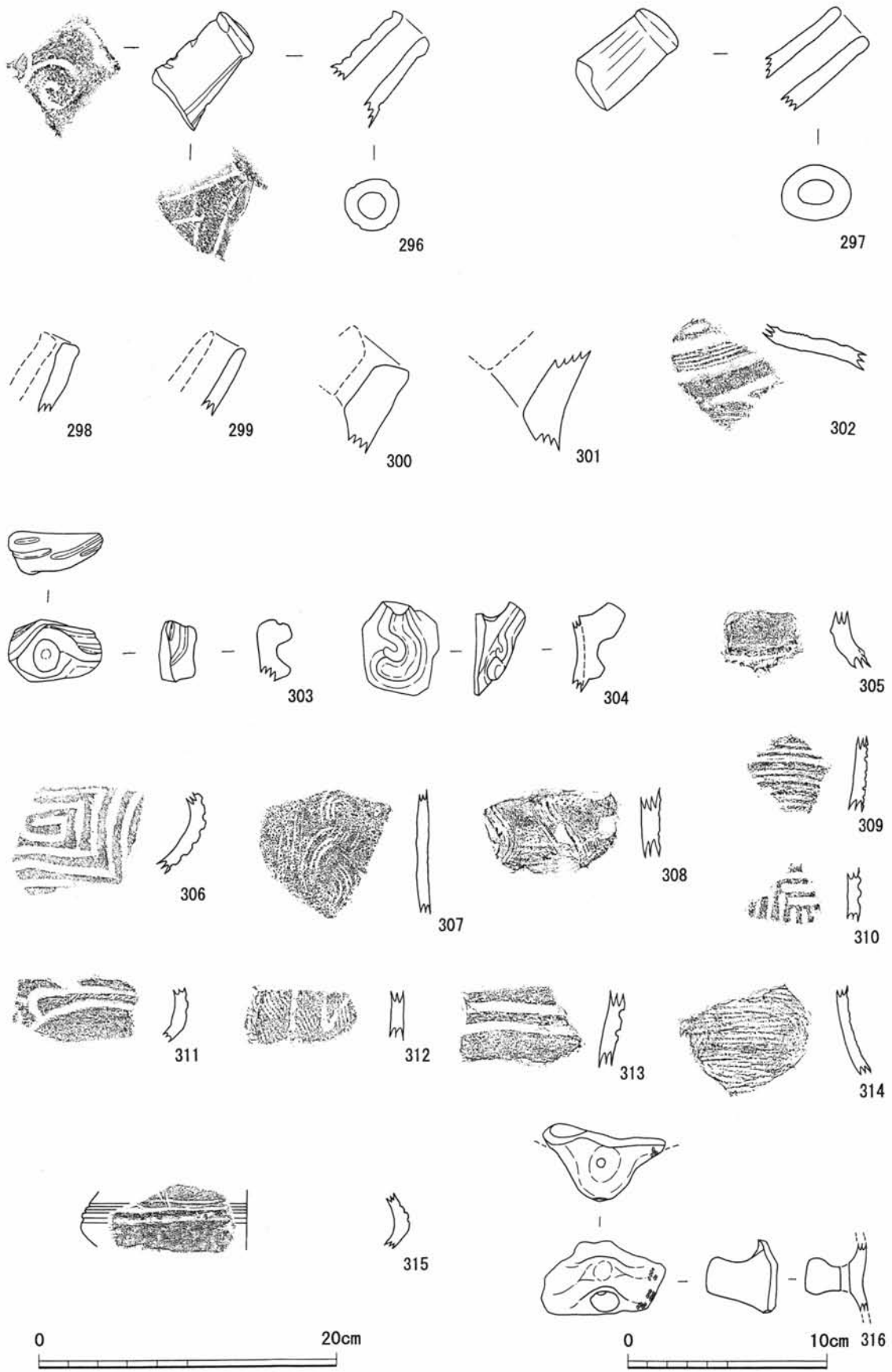
第138図 後期前葉の土器(13)



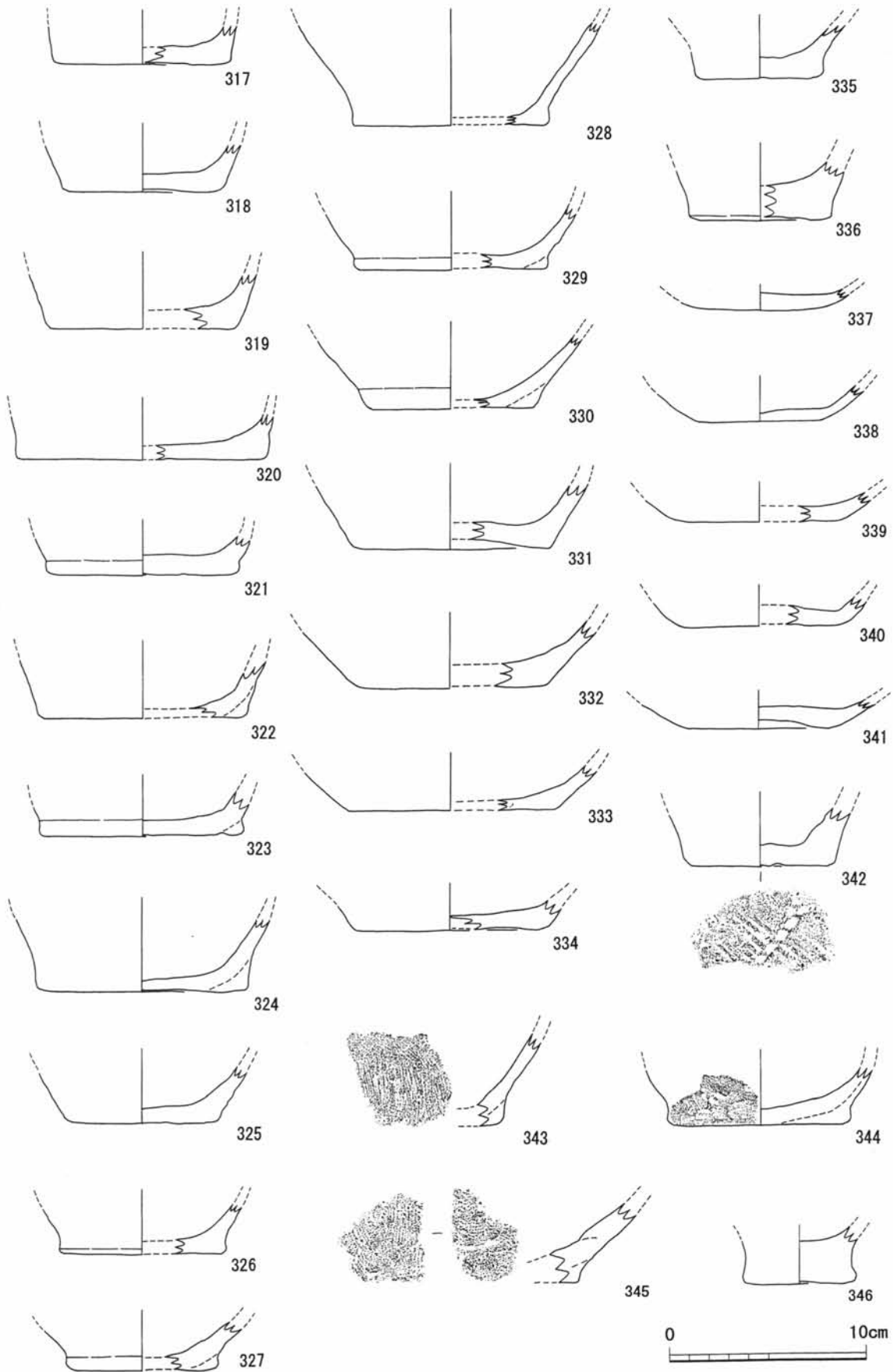
第139図 後期前葉の土器(14)



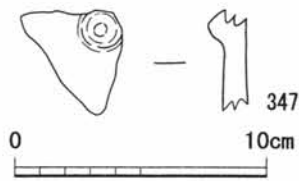
第140図 後期前葉の土器(15)



第141図 後期前葉の土器(16)



第142図 後期前葉の土器(17)



第143図 土製品

ののち、条線を施している。

B 5 類(第132図135~139)：口縁部外面に1条の沈線をもつもの。この特徴は堀之内式の要素であると評価できることから、ひとつの器種とした。

第132図140~143はB類の胴部と考えられるもの。140・141は頸部と胴部の境目に8字状浮文をもつ。142は肩の張る胴部に、比較的太い多条沈線を施す。143は142と比べて胴部の肩の張りが弱く、条線を施すことから、型式学的に後出の様相を示すものである。頸部に2本の沈線を施す。142の胎土は角閃石を含まない一方で、143は角閃石を含む。

C 類(第134図145~165)：口縁部内面に文様帯をもつもの。円文や長方形区画文、横位・斜位・縦位の直線文などを施す。縄文のみのものや無文のものは少ない。外面はほとんどが無文あるが、153・164は縦位の条線を施す。145は直線的に大きくひらく口縁部に帯状の粘土紐を貼り付けた後、縄文を施している。147は強く外反する口縁部内面に一条の沈線を施す。156はコブ状突起をもつ。157は他のものと異なり、口縁部断面形態がT字状になり、やや古い様相を示す。

D 類(第135図166~187、第136図188~193)：直線的にひらく口縁部に幅広い文様帯をもち、口縁部内面に細い粘土帯を貼り付けるか、あるいは一条の沈線をもつもの。強いヨコナデを行うだけになるものもある。堀之内式の影響を強くうけたものであると評価できる。底部から口縁部にかけて直線的にひらくバケツ(朝顔)形の器形と、頸部で屈曲する器形がある。口縁部外面の文様により細別する。

D 1 類(第135図179~187)：口縁部外面に刻目突帯をもつもの。179は8字状浮文をもち、口縁部内面の肥厚が非常にはっきりとしている。182は細かい縄文を施した磨消縄文帯によって文様を描く。186は182の胴部片であると考えられるが、接合しない。185は磨耗が激しく判然としないが、2条の刻目突帯をもつと考えられるものである。

D 2 類(第135図166~176・178)：口縁部外面に1条の沈線をもつもの。166は頸部で屈曲する器形をもち、沈線によって文様を描く。縄文はみとめられない。169は小波頂部で沈線がとぎれ、末端を深くくぼませている。波頂部上端にも同様のくぼみをつくる。170~172は口縁部上端にも1条の沈線を施す。176は口縁部上端に沈線による刻みを施す。

D 3 類(第135図177)：刻目突帯および1条沈線をもたないもの。

第12図188~193はD類の胴部片と考えられるものである。いずれも直線的な器形に磨消縄文帯による文様をもつ。

E 類(第136図194~第138図250)：A~D類に含まれないものを一括した。将来細分されるべき一群である。口縁部を肥厚せず直立させるものが大半を占める。

鉢

A 類(第138図251~第139図267)：口頸部を無文とし、口縁部内面に1条の沈線を施すもの。胴部は幅狭の磨消縄文帯により横位展開の文様を描く。四国南西部および九州北東部を中心に分布する平城式・鐘崎式の要素をもつ一群である。251・259・260・262は口縁上に沈線の巻きつく突

起を有する。260・262は突起部に円孔を施している。255・256・258は口縁部内面の沈線を有さないが、器形などから本類に含めた。252・253・263～266は同類の胴部と考えられるものである。ソロバン玉形に屈曲する器形になると考えられるものが主体となる。比較的太く浅い沈線で文様を描くものが多い。

B類(第139図268～274)：頸部を無文(ヘラミガキがなされることが多い)とし、口縁部外面と胴部に縄文を施すもの。器形は丸底で頸部が外反し、口径が大きく肩の張らないボウル形の胴部を有するもの(268)と、口径が小さく肩の張る球形の胴部を有するもの(273・274)がある。また、口縁部縄文帯と頸部と胴部の稜を明瞭につくるもの(268)は、そうでないもの(273・274)よりも型式学的に古い要素であると考えられる。

浅鉢

A類(第140図281～289・291)：有文のもの。いずれもボウル形の器形をもつと考えられる。磨消縄文帯で横位展開の文様を描くものが多い。288は刻目突帯および口縁部内面肥厚帯をもつ。

B類(第140図275～279・290・292～294)：無文のもの。ボウル形のもの(275・279)と皿形のもの(276)、底部近くで屈曲して口縁部がまっすぐ立ち上がる椀形のもの(277・278)などがある。275・276は器表面内外にヘラミガキを施す。一方で277・278は器表面に条痕調整(条痕D、後述)が残る。279は4単位の波状口縁に復原したが、残存するのはひとつの波頂部のみなので、異なる単位である可能性もある。290は肥厚した口縁端部に深く細い沈線を施す。294は肥厚した口縁端部に文様を描く。

C類(第140図280・295)：口縁部が「く」字状に屈曲するもの。280は口縁部に磨消縄文帯をもつ。295は口縁部に多重長方形文をもち、その上部に刺突列を施す。

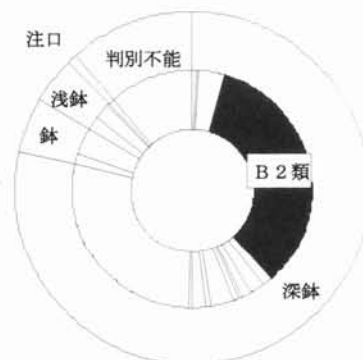
注口

注口部を一括した(第141図296～301)。296には渦文および直線文が施される。296・297は注口端部に稜をもつものに対して、298～300は端部がまっすぐおさまる。300・301は比較

付表2 器種組成比率

器種	個数	(器種内；全体)
深鉢 A類	4	(0.6%；0.4%)
B1類	3	(0.4%；0.3%)
B2類 a	32	(4.6%；3.6%)
B2類 b	305	(43.4%；34.1%)
B3類 a	14	(2.0%；1.6%)
B3類 b	17	(2.4%；1.9%)
B4類 a	13	(1.9%；1.5%)
B4類 b	2	(0.3%；0.2%)
B5類	7	(1.0%；0.8%)
C類	27	(3.8%；3.0%)
D1類	9	(1.3%；1.0%)
D2類	14	(2.0%；1.6%)
D3類	6	(0.9%；0.7%)
E類	249	(35.5%；27.9%)
小計	702	(78.5%)
鉢 A類	13	(28.3%；1.5%)
B類	33	(71.7%；3.7%)
小計	46	(5.1%)
浅鉢 A類	16	(43.2%；1.8%)
B類	19	(51.4%；2.1%)
C類	2	(5.4%；0.2%)
小計	37	(4.1%)
注口	6	(- ；0.7%)
判別不能	103	(- ；11.5%)
総計	894	(100%)
底部	291	

※ 比率は小数点以下第二位を四捨五入
ただし小計および総計は元の値から算出



第144図 器種組成比率グラフ

付表3 B2類bの口縁部文様比率

■有文	■細条線のみ	■縄文のみ	□無文
47 (15.6%)	14 (4.6%)	53 (17.5%)	188 (62.3%)

※ 比率は小数点以下第二位を四捨五入

的器壁が厚く、特に301は注口部ではない可能性がある。302は注口土器の肩部と考えられる。沈線による区画の中に、櫛歯状工具による文様を描く。

その他

付表4 器種別調整比率

	□ナデA	■ナデB	□条痕A	■条痕B	■条痕C	■条痕D
深鉢 A類	3 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
B1類	2 (66.7%)	1 (33.3%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
B2類 a	17 (89.5%)	2 (10.5%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
B2類 b123	123 (71.9%)	4 (2.3%)	21 (12.3%)	16 (9%)	7 (4.1%)	0 (0%)
B3類 a	6 (75.0%)	2 (25.0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
B3類 b	11 (84.6%)	2 (15.4%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
B4類 a	6 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
B4類 b	1 (50.0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (50.0%)	0 (0%)	0 (0%)
B5類	6 (85.7%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (14.3%)	0 (0%)
C類	13 (86.7%)	1 (6.7%)	1 (6.7%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
D1類	5 (71.4%)	2 (28.6%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
D2類	11 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
D3類	5 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
E類	94 (65.7%)	11 (7.7%)	11 (7.7%)	4 (2.8%)	8 (5.6%)	15 (10.5%)
鉢 A類	5 (55.6%)	4 (44.4%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
B類	22 (78.6%)	5 (17.9%)	0 (0%)	1 (3.6%)	0 (0%)	0 (0%)
浅鉢 A類	7 (63.6%)	4 (36.4%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
B類	7 (43.8%)	6 (37.5%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (6.3%)	2 (12.5%)
C類	2 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
注口	6 (100%)	(0%)	(0%)	(0%)	(0%)	(0%)

※ 比率は小数点以下第二位を四捨五入

第141図303～316に、その他の土器片を一括した。306は長方形の渦文をもつ胴部片である。南四国を中心に分布する松ノ木式に比定できる。315はソロバン玉形に屈曲する胴部片で、胎土に結晶片岩を含む。^(注27)注口土器であろうか。316は双耳壺の把手部分である。双耳壺は北白川上層式期にはみられないので、それ以前のものであると考えられる。

底部

第142図317～346は底部片である。底部から口縁部までを復原できる資料はないため、別の分類群とした。291点中、5点が凹底であり、ほとんどが平底である。底部の立ち上がり方には、まっすぐ立ち上がるものと、大きくひらきながら立ち上がるものがある。とくに、中軸線から45°以上の角度で立ち上がるもの(332～334・337～341)は鉢や浅鉢の底部であると考えられる。全資料中1点だけ底部に圧痕をもつものがある(342)が、同時期の周辺遺跡に存在する網代の圧痕とは異なる。縄文土器の底部ではない可能性もある。また、側面に条痕調整を施すものが3点ある(343～345)。

土製品

土偶の可能性のある破片が1点出土した(第143図347)。山形の突起がつけられ、乳房を表現した部分であると考えられる。しかし、

付表5 器種別胎土比率

		□角閃石を含まない胎土 ■判別不能 ■角閃石を含む胎土		
深鉢	A類	4 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
	B1類	3 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
	B2類a	16 (50.0%)	1 (3.1%)	15 (46.9%)
	B2類b	39 (12.8%)	17 (5.6%)	249 (81.6%)
	B3類a	9 (64.3%)	0 (0%)	5 (35.7%)
	B3類b	4 (23.5%)	0 (0%)	13 (76.5%)
	B4類a	4 (30.8%)	1 (7.7%)	8 (61.5%)
	B4類b	2 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
	B5類	5 (71.4%)	1 (14.3%)	1 (14.3%)
	C類	8 (29.6%)	1 (3.7%)	18 (66.7%)
	D1類	7 (77.8%)	0 (0%)	2 (22.2%)
	D2類	7 (50.0%)	0 (0%)	7 (50.0%)
	D3類	3 (50.0%)	2 (33.3%)	1 (16.7%)
	E類	88 (35.3%)	17 (6.8%)	144 (57.8%)
鉢	A類	10 (76.9%)	1 (7.7%)	2 (15.4%)
	B類	18 (54.5%)	4 (12.1%)	11 (33.3%)
浅鉢	A類	8 (50.0%)	1 (6.3%)	7 (43.8%)
	B類	9 (47.4%)	1 (5.3%)	9 (47.4%)
	C類	0 (0%)	1 (50.0%)	1 (50.0%)
注口		5 (83.3%)	0 (0%)	1 (16.7%)
判別不能		43 (41.7%)	9 (9%)	51 (49.5%)
総計		292 (32.7%)	57 (6%)	545 (61.0%)
底部		82 (28.2%)	24 (8%)	185 (63.6%)

※ 比率は小数点以下第二位を四捨五入
ただし総計は元の値から算出

付表6 B2類bの文様別胎土比率

	□角閃石を含まない胎土	■判別不能	■角閃石を含む胎土
有文	6 (12.8%)	2 (4.3%)	39 (83.0%)
細条線のみ	2 (14.3%)	1 (7.1%)	11 (78.6%)
縄文のみ	5 (9.4%)	4 (7.5%)	44 (83.0%)
無文	25 (13.3%)	10 (5.3%)	153 (81.4%)

※ 比率は小数点以下第二位を四捨五入

同時期の土偶と比較すると器壁が薄く、土偶ではない可能性も残る。^(注28)胎土には角閃石を含む。

b. 統計的検討

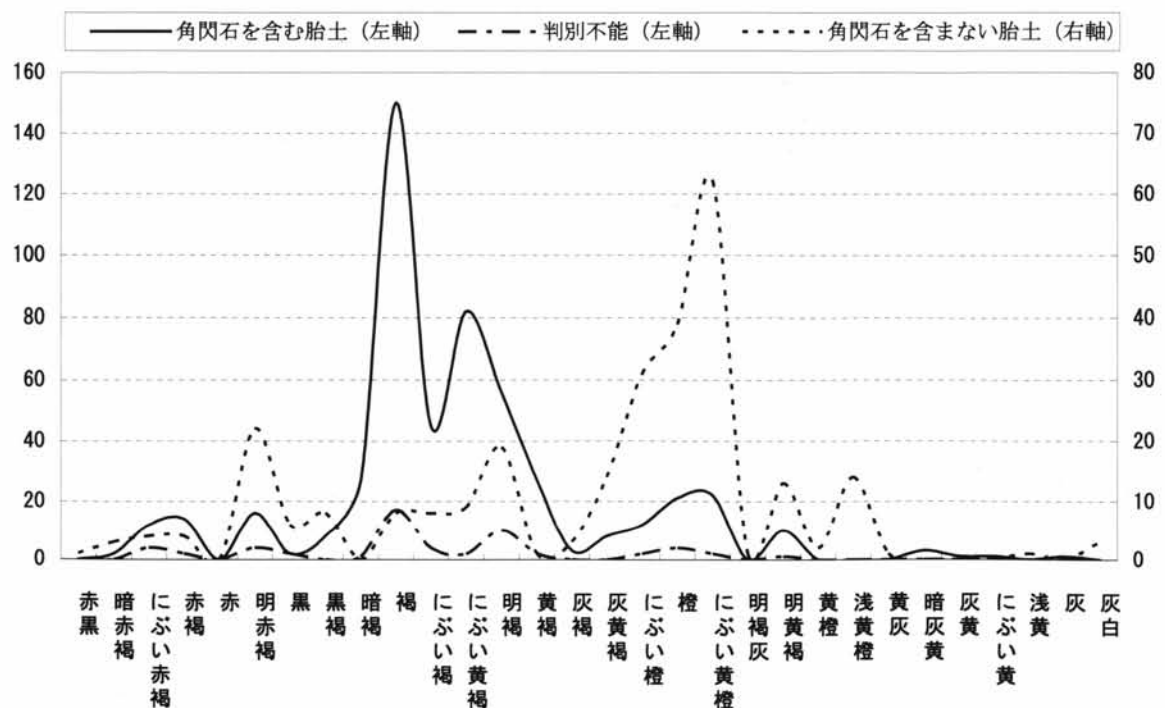
器種組成および胎土・調整の傾向を数量的に把握するため、統計的な分析を行った。すべての口縁部片と底部片をカウントした。た

だし、接合した破片および明らかに同一個体であると判断できるものは1点として数えた。

器種組成 口縁部片の総数は894点、うち深鉢78.5%、鉢5.1%、浅鉢4.1%、注口0.7%であった(付表2、第144図)。器種組成の大半を占める深鉢において、B2類bが43.3%と圧倒的に多く、E類がそれに次ぐ。他の細別器種はほとんどが1%前後であるが、B2類aとC類は4%前後とやや多い。

また、B2類bについて、口縁部に文様を施すものと細条線のみもの、縄文のみもの、無文のもの比率を算出した(付表3)。その結果、無文のものが62.3%と過半を占め、細条線のみものと縄文のみものを合わせると8割を超えることが明らかになった。

調整手法 前述のように、本遺跡では「細密条痕」と呼ばれる、刷毛目様の調整を施した資料が存在する。この調整は縄文時代中期末から後期中葉にかけて、山陰から近畿北部の土器にみられる特徴的なもので、この地域との関係を考える上で重要である。



第145図 胎土別色調グラフ

ここでは、そのような特徴的なものを含め、調整手法が器種ごとにどのような比率で用いられているかを検討する。ナデ調整を器面の平滑さを基準に2種類、条痕調整を条線(凹部)の様相を基準に4種に分類した。

付表7 縄文の撚りの方向

	LR	RL
角閃石を含まない胎土	19 (59.4%)	13 (40.6%)
判別不能	6 (66.7%)	3 (33.3%)
角閃石を含む胎土	65 (82.3%)	14 (17.7%)
総計	90 (75.0%)	30 (25.0%)

ナデA：ビルディングの際につく指頭圧痕などが残り、凹凸のある器面になるもの。

ナデB：凹凸のほとんどない平滑な器面を形成するもの(図版第92)。

※ 比率は小数点以下第二位を四捨五入
ただし総計は元の値から算出

条痕A：1cm幅で3・4本の条線が数えられ、条線の内部が平滑であるもの(図版第92)。

条痕B：1cm幅で3・4本の条線が数えられ、条線の内部に細かい筋がみられるもの(図版第92)。

条痕C：1cm幅で5本以上の条線が数えられ、原体の幅が1cm以下のもの(図版第92)。

条痕D：1cm幅で5本以上の条線が数えられ、原体の幅が1cm以上のもの(図版第92)。

これらの調整手法を、土器片の表裏両面についてカウントした(付表4)。ただし、磨耗により判別できないものはカウントしなかった。したがって、資料数は、器種別口縁部数とは対応しない。

ナデ調整 ナデAは、指などの比較的柔らかい工具で器面を撫でた痕跡であると考えられる。それに対して、ナデBは小石などのナデAよりも硬い工具で器面を調整したものであると考えられる。ナデAと比べてナデBの方がていねいな調整であると評価できる。

器種ごとの出現比率をみると、深鉢の大半はナデAである一方で、鉢A類・浅鉢A・B類では4割前後がナデBであり、深鉢よりも鉢A・浅鉢の調整がていねいである傾向が読み取れる。また、深鉢でもB1・B3・D1類は比較的ナデBの割合が高い。

条痕調整 条痕A、条痕Bは、それぞれ二枚貝、巻貝による調整の痕跡と考えられるものである。一方で、条痕C、条痕Dはいわゆる「細密条痕」である。しかし、「細密条痕」と呼ばれる調整痕は、その定義や変異、施文原体について不明な点が多い。そこで以下に「細密条痕」についての研究状況をまとめたうえで、本遺跡の資料の観察を行う。

横山浩一氏は、弥生時代以降の調整痕である刷毛目の原体を板小口であると指摘した上で、類似したものが縄文時代中期末から後期後葉における日本海側の土器にみられることを述べ、「細密条痕」と呼称した(横山1978・1979)。矢野健一氏は、兵庫県小路頃オノ木遺跡出土の土器について、凹凸の細かさを基準に6種に分類し、原体については刷毛目原体と二枚貝原体があるとした(矢野1990)。千葉豊氏は、兵庫県小森岡遺跡出土の土器について、条線の細かさと横断面の形状を基準に4種に分類し、原体については刷毛目原体と二枚貝原体があるとした(千葉1990)。中村友博氏は鳥取県出土の資料の観察と実験から、「細密条痕」が二枚貝の殻頂の擦過痕跡であるとした(中村2003)。このように、「細密条痕」は日本海沿岸を中心に分布する特徴的な調整であ

るとの認識は共有されているものの、その定義と原体については諸説があるようである。

本遺跡では、当て具痕の観察を試みた。その結果、資料の少なさと断片性から確認できる例は多くないものの、条痕Cは当て具痕が弧線を呈するものが確認できる例があり、一方で、条痕Dには当て具痕が直線を呈するものが確認できる例があった。ここから、条痕Cは二枚貝の殻頂、条痕Dは板小口が原体として想定できる。

器種ごとの出現比率をみると、条痕A・B・Cは深鉢B2類bと深鉢E類に一定量みられる。一方で、条痕Dは、深鉢E類と浅鉢B類のみにみられることがわかった。また、深鉢E類においては、条痕Dが最も多い。

角閃石を含む特徴的な胎土 前述のように、本遺跡では「生駒西麓産」であるといわれる、角閃石類を多量に含み、(暗)褐色を呈する胎土の資料が半数以上を占める。この胎土は肉眼観察でも比較的判別しやすいため、生駒西麓との関係を示唆する可能性のあるものとして注目されてきた。ただし、縄文時代のこの胎土の土器については、弥生時代以降のそれとは異なる議論がなされている。現在までの研究状況をまとめると以下ようになる。

- ① 縄文時代の近畿地方において、広い範囲でこの胎土の土器が確認される時期と、ほとんど確認されない時期がある(矢野2006)。本遺跡の土器の大部分を比定できる北白川上層式2期は、前者である。
- ② 生駒山西麓から離れた地域でも、この胎土の土器が土器組成の高い割合を占める場合があり、その比率は必ずしも生駒山からの距離と反比例しない。
- ③ 胎土分析の結果から、近畿地方の各地域から出土したこの胎土の土器は、肉眼で角閃石と認定した鉱物のあり方が異なる場合がある(清水2006)
- ④ ②③から、この胎土の土器すべてが生駒西麓産であるとはいえない(矢野2006)。
- ⑤ 胎土分析の結果から、生駒山地西麓に近い地域から出土したこの胎土の土器には、断層内物質が用いられた可能性が高い(藤根・小阪1997)。

ここでは、この特徴的な胎土が、本遺跡の土器群全体においてどのように用いられているかを

付表8 調整別胎土比率

	□角閃石を含まない胎土	■判別不能	■角閃石を含む胎土
ナデA	122 (31.9%)	30 (7.8%)	231 (60.3%)
ナデB	31 (68.9%)	2 (4.4%)	12 (26.7%)
条痕A	3 (8.8%)	6 (17.6%)	25 (73.5%)
条痕B	7 (30.4%)	3 (13.0%)	13 (56.5%)
条痕C	8 (42.1%)	3 (15.8%)	8 (42.1%)
条痕D	17 (100%)	0 (0%)	0 (0%)

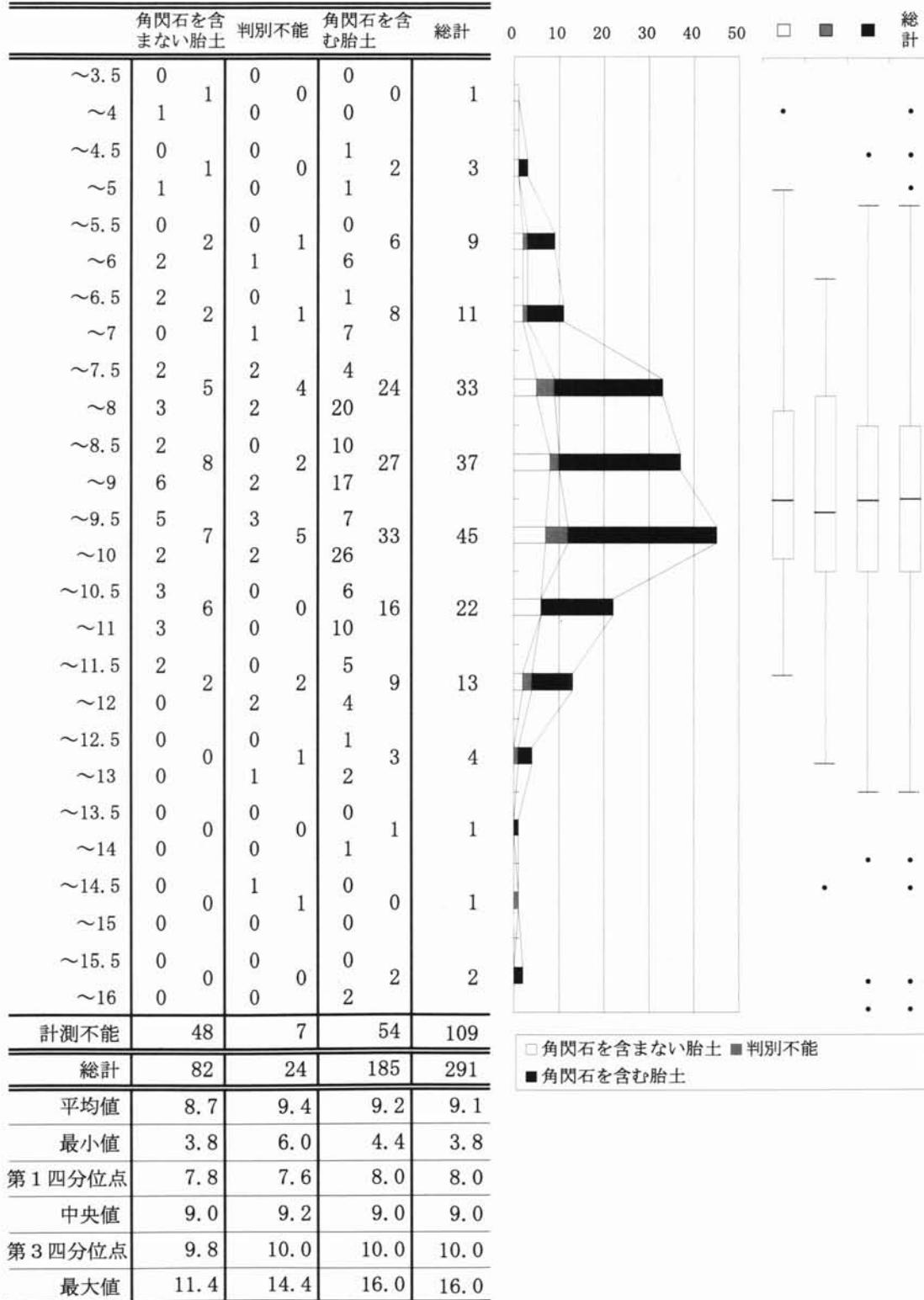
※ 比率は小数点以下第二位を四捨五入

検討する。肉眼観察により土器片の胎土を、角閃石を含むもの、含まないもの、判別不能のもの^(注29)の3つに分類し、器種や技術的要素との相関性を分析した。

器種と胎土 土器群全体において、角閃石を含む胎土は61%を占める(付表5)。細別器種ごとにみると、型式学的にやや古い様相を示す深鉢A類・B1類と、他地方の特徴が顕著な深鉢B5類・D1~3類・鉢A類、および注口では、角閃石を含む胎土石を含む胎土は比較的

低い割合にとどまる。一方で、深鉢B 2類bでは8割以上が、深鉢B 3類b・B 4類a・C類では3分の2程度が角閃石を含む胎土である。浅鉢A～C類では半数程度が角閃石を含む胎土である。千葉豊氏は京都盆地の資料について浅鉢に角閃石を含む胎土が非常に少ないことを指摘し、作り分けの可能性を述べている(千葉1993)が、本遺跡では京都盆地ほどの差異はみとめられない。

付表9 底部の直径と胎土



また、深鉢B 2類aにおいて、文様ごとに胎土の比率をみた(付表6)。いずれも本類全体の比率と大きく異ならない。

色調と胎土 次に色調との相関関係を示す(第145図)^(注31)。角閃石を含む胎土は褐色系統に多いのに対し、角閃石を含まない胎土は橙色系統に多い。角閃石を含む胎土とそうでない胎土では、色調が異なるといえる。

縄文の燃りの方向と胎土について 後期前葉の近畿地方では、LRの縄文の割合が高くなることが指摘されている(千葉1989a)。本遺跡では、LRが3/4を占め、この指摘を追認できる(付表7)。これを胎土ごとにみると、角閃石を含まない胎土では、LRは6割弱である一方で、角閃石を含む胎土では8割以上を占める。

調整と胎土について 次に、調整との関係をみた(付表8)。ナデAでは土器群全体における胎土別の比率(付表4)とほぼ同様であるが、ナデBの施される土器では、角閃石を含まない胎土が7割近くとなり、圧倒的に多い。また、条痕調整では条痕A、条痕Bにおいて角閃石を含む胎土が半数以上を占めるのに対して、条痕Cでは半数以下となり、条痕Dの施される土器には角閃石を含む胎土は存在しない。

底部 幸泉満夫氏は、土器の底部形態および直径に地域性を読み取った(幸泉2002)。本遺跡では、底部はほとんどが平底であることは前述した。また、角閃石を含む胎土の割合は口縁部片のそれとほぼ同様であった(付表5)。

ここでは、本遺跡における底部の直径の傾向をみるとともに、胎土との関係を調べた(付表9)。直径は9cm前後をピークとする分布である。胎土別の分布もすべて全体の傾向とほぼ同様で、有意な差は見出せない。

(稲畑航平)

石器

a. 剥片石器

当遺跡から出土した剥片石器の帰属時期は、縄文土器が北白川上層2式期にほぼ限定され、また弥生土器の出土もごく少量であることから、多くが縄文時代後期のものと考えてよい。ただ、先述したように縄文時代の土器・石器は、当時の原位置を保ってはならず、古墳時代以降の土器とともに整地土中に包含されていたものである。また水洗選別もおこなわれていないため、特に剥片石器においては、剥片・碎片(チップ)といった微細遺物のサンプリング・エラーが危惧される。今回の整理・分析ではこうした負の要因も考慮しつつ、限られた資料ではあるが、できる限りいねいに各器種の属性を記述する。

また、当遺跡のサヌカイト製剥片石器の剥離面には風化度がおおよそ3段階観察される。風化が最も浅い剥離痕は非常にランダムで、人為的なものとは考え難い場合が多く、器種分類には反映していない。また、文中に実測図と対応しない番号があるが、それらは写真のみの掲載となっている。実測図断面内の矢印は石理走向を示す。

①属性表について

属性表の各項目について説明を加えておきたい。「長さ」、「幅」は剥片以外の器種に関しては図面と同じ方向に据え、四角形を想定して計測する。剥片は剥離軸を基準に四角形を想定して計測する。「厚さ」は全器種、最大厚を計測する。「打面形態」は礫打面、単剥離面打面、複剥離面打面、点状打面、折れ面打面に分類する。ただし剥片は折れ面打面の認定が困難であった。そのため、剥片の単剥離面打面には折れ面打面が含まれているものと考えておきたい。なお石核は素材の打面形態ではなく、最終剥離痕の打面形態とする。また石核を含め剥片以外の器種で素材剥片の打面形態がわかるものは、属性表に項目は設けてはいないが、すべて図化している。「背面の礫面」は素材剥片の背面に礫面が認められるものを有、認められないものを無とする。「素材面残存数」は表裏両面に素材面が残るものを2、片面のみのものを1、残らないものを0とする。「ポジ面の有無」はポジティブな剥離面が残るものを有、残らないものを無とする。「剪断面の有無」は剪断面が最終剥離痕となるものを最終、剪断面が認められるが最終剥離痕とはならないものを有、認められないものを無とする。「完形度」は著しく破損したものを×、完形もしくは完形に準じるものを○とする。

②サヌカイト製剥片石器

サヌカイト製剥片石器には石核・石鏃・石錐・刃器類・楔形石器が認められる。以下、器種ごとに分類と観察を行う。

石核(附表10・11、第146・147図)

16点出土している。素材、作業面と打面の関係により以下のように分類する。

I類 (348～353)「主に剥片を素材とし、側面に打面を設定するもの」。8点出土した内、6点図化した。ポジティブな剥離面を残し、剥片素材とわかるもの(349・351・352・353)が比較的多く、なかでも、353は分割礫を素材としている。348・350は剥離作業の進行により素材は不明であり、348の裏面は他の剥離面に比べ明瞭に風化が進んでいる。またI類石核の多くは側面の礫面を打面としているが、351や352は折れ面を打面としている。

II類 (354・355)「剥片素材で、素材のポジティブな剥離面を打面に、小口面を作業面に設定するもの」。2点出土しており、すべて図化した。354のポジティブな剥離面は非常に湾曲している。裏面の剥離痕は非常に浅く、ポジティブな剥離面の湾曲部より奥に剥離はのびていない。355は裏面に小剥離が連続して認められるが、打面調整を意図した可能性もある。このように、本類はいわゆる交互剥離状石核に類似するものの、概して小口面に施された剥離痕のほうが深く、大型であることから、主な作業面は小口面側であったと考えられる。

III類 (356)「小礫を素材とするもの」。2点出土した内、1点図化した。いずれも、あまり剥離作業は進行しておらず、目的剥片を得ていたかは不明である。また小礫は2点出土しており(361:写真のみ掲載)、搬入形態の一つであったと考えられ、398のように楔形石器の素材にもなっている。

IV類 (357)「打面と作業面の関係が一定せず著しく打面転移をおこなうもの」。1点出土しており、すべて図化した。357は剥離作業の進行により素材は不明である。

また、その他分類不可能なもの(358～360)が3点出土している。358は裏面にポジティブな剥離面を残し剥片素材とわかる。また正面に下面の折れ面を切る剥離痕が認められ、それが最終剥離痕となる。359は全面、ネガティブな剥離面で構成されるが、左側面の剥離痕は剪断面状を呈しており、楔形石器の可能性もある。また右側面上方には何らかの加工を意図したと考えられる小さな剥離痕が認められる。360は背面に礫面、側面に剥離面を取り込んだ礫打面の剥片を素材とする。主要剥離面の末端側に一枚の剥離痕が認められる。また主要剥離面の左方にはクモの巣状のヒビが認められる。

剥片(付表12～15)

剥片・チップは多量に出土している。本来ならば、細かな観察を行い、製作技術を復原する必要がある。しかし、上述したように当遺跡の出土状態では製作技術を復原するには限界があり、より良好な資料が分析された後に位置づけられるものといえよう。そこで、本報告においては、属性表で基本的なデータを提示するにとどめたい。なお提示するデータは単純最大長2cm以上で打面を有するもののみ(169点)とするが、2cm以下のものも出土している。

石鏃(付表16、第147図)

18点出土した内7点図化し、図化分以外のものも、すべて写真掲載している。

I類(362～368)：「凹基、基部を明瞭に抉るもの」。7点出土している。364は他に比べて特に抉りが深い。

II類(369～372)：「凹基、基部の抉りが浅く、弧状を呈するもの」。4点出土している。

III類(373)：「尖基」。1点出土している。373は素材の打面側を先端に用いており、背面は主要剥離面に比べ明瞭に風化が進んでいる。有茎石鏃とみることも可能かもしれない。

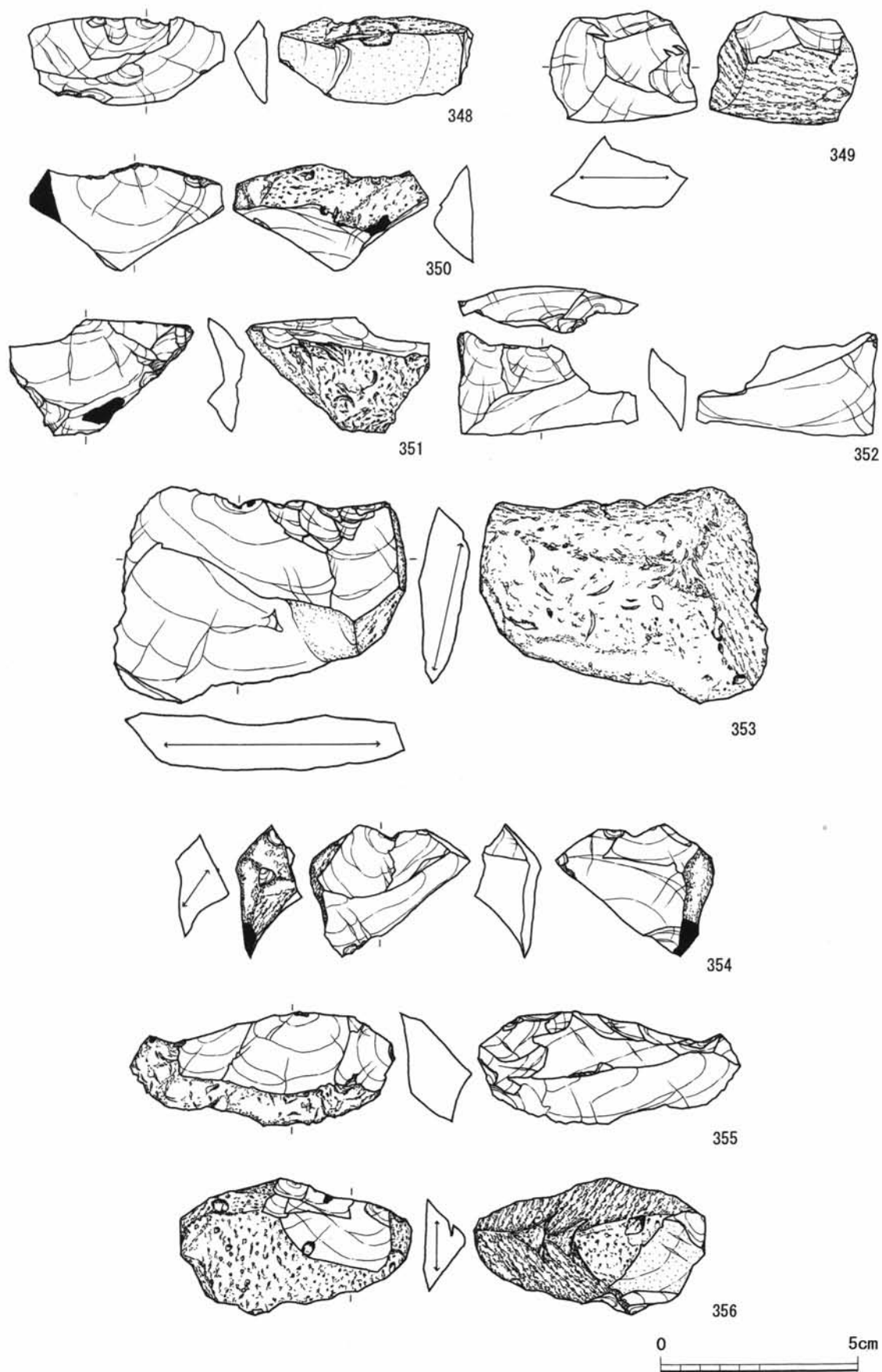
他にも製作途中の失敗もしくは使用による破損のため基部形態が不明で分類不可能なものが4点出土している(376～379)。また基部を観察することはできるが、調整が荒く形態的に整っていないため未完成品の可能性があるものが2点出土している(374・375)。374は形態的にはII類の範疇に入るが、基部の調整の粗さなどから未完成品と考えられる。

石鏃は長さ20～30mm、幅15mm、厚さ3～4mm前後のサイズのもが多く(第149図)、III類が他に比べ細長いのみで分類による違いもほとんど認められない(第149図)。また、二次加工により素材が不明な場合が多いが、すべて小型薄手であることから剥片素材であったと考えられる。また素材の背面に礫面が認められるものはない。

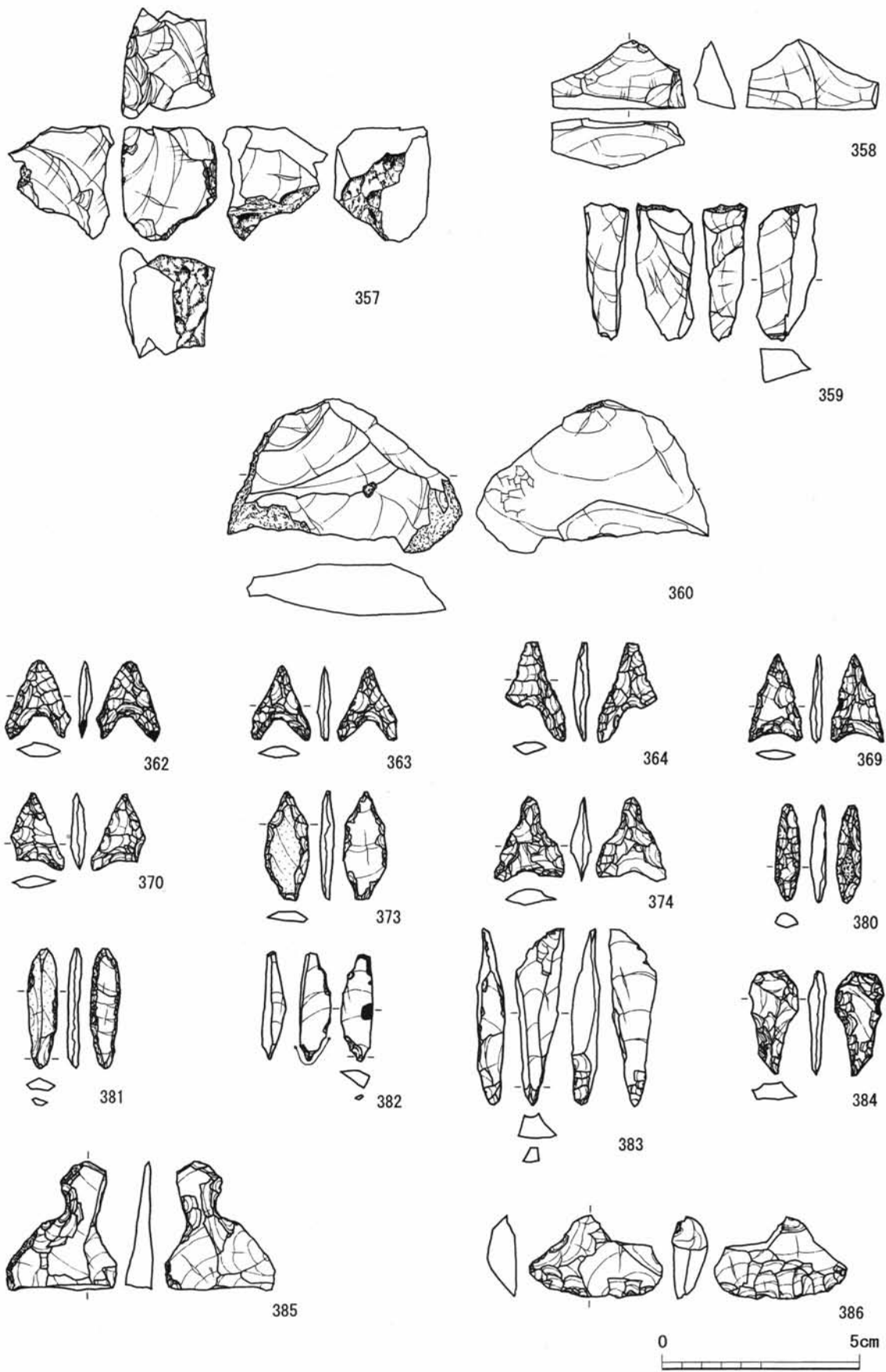
石錐(付表17、第147図)

5点出土しており、すべて図化した。二次加工部位と形態により以下のように分類する。また380以外は素材の主要剥離面を残し、石鏃と同様小型薄手であることから、すべて剥片素材であったと考えられる。

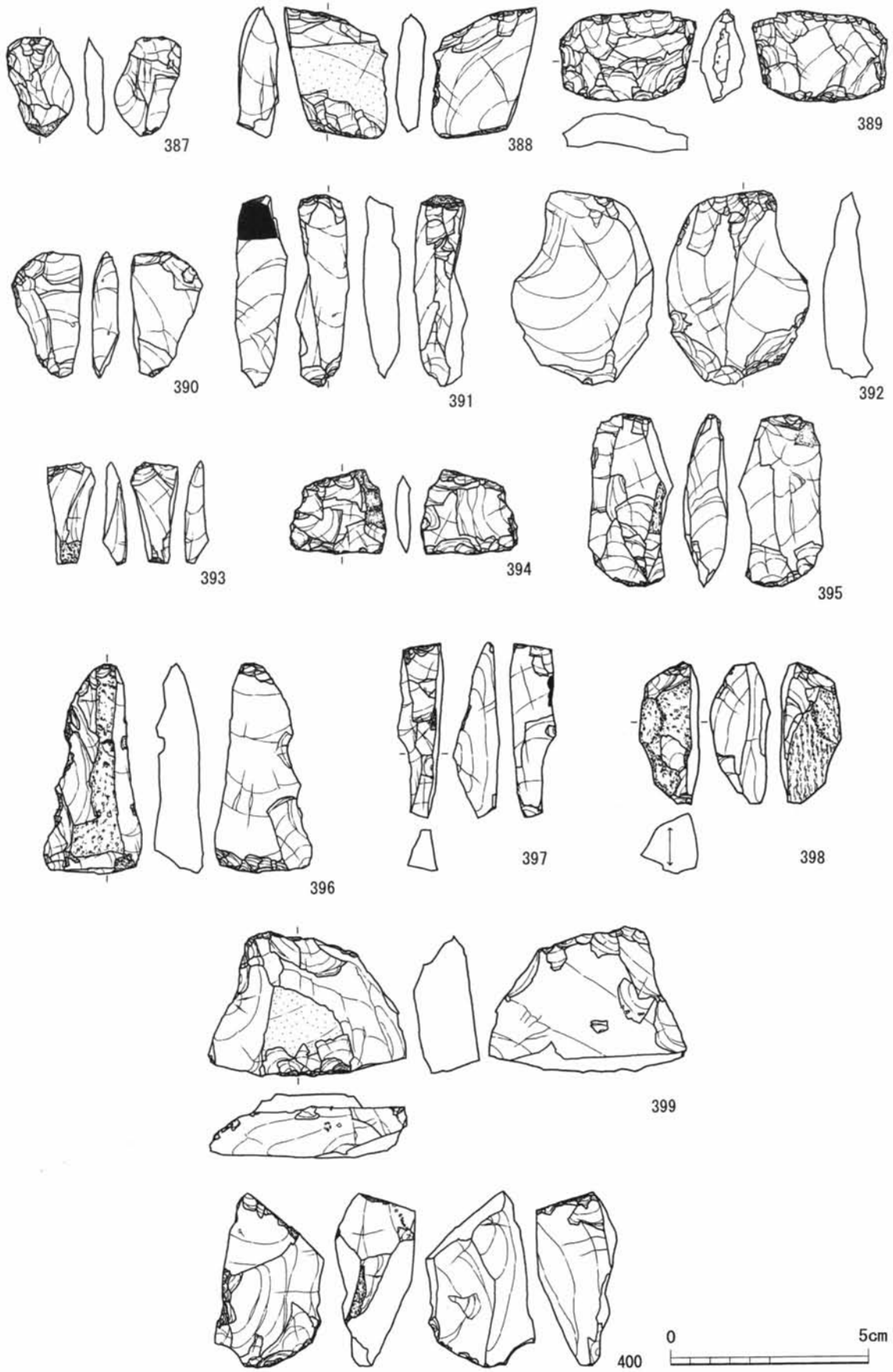
I類(380・381) 「全周に二次加工を施し棒状に整形するもの」。2点出土している。380は素材の背面に礫面が認められる。381は素材を縦位にもちい、細かな二次加工を主に主要剥離面側に施す。背面は主要剥離面に比べ明瞭に風化が進んでいる。



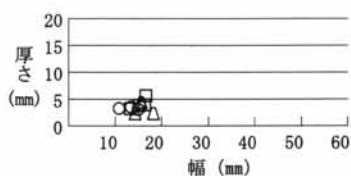
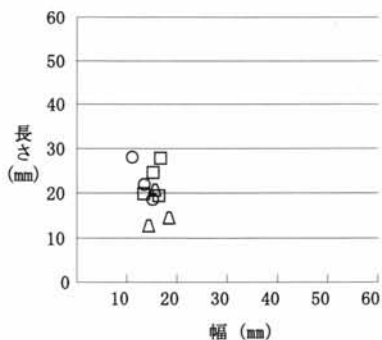
第146図 B地区出土石器実測図(1)



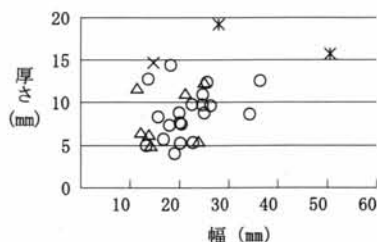
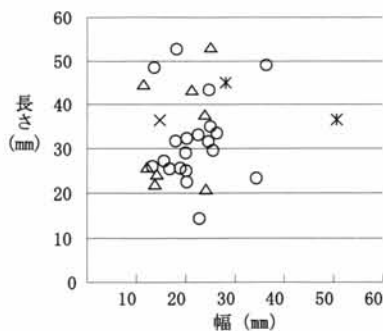
第147図 B地区出土石器実測図(2)



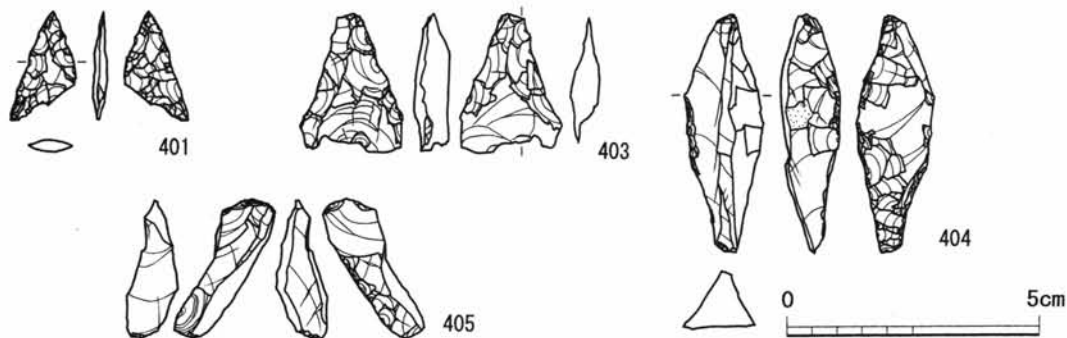
第148図 B地区出土石器実測図(3)



第149図 B地区出土石鏃法量グラフ



第150図 B地区出土楔形石器法量グラフ



第151図 B地区出土石器実測図(4)

II類(382・383) 「二次加工を主に先端に施し錐部とするもの」。2点出土している。いずれも剥離面観察から、両極剥片を素材とすると考えられ、打面側を錐部として使用する。382の錐部は明瞭に磨滅している。

III類(384) 「基部をもつもの」。1点出土している。384は素材を横位に用いている。基部と錐部の境界はあまり明瞭ではない。

刃器類(付表18・19、第147図)

石匙が1点(385)、スクレイパーが1点(386)出土しており、すべて図化した。385は剥片素材であり素材の末端側につまみ部を作出している。つまみ部の右側辺は折れ面を打面に主要剥離面側に二次加工を施すことで決っている。素材の打面は折損しているが、主要剥離面のリングの収束具合から比較的打点は近いと考えられる。386は当遺跡で唯一スクレイパーと認定しうるものであった。非常に小型であり、加工により素材は不明である。

楔形石器(付表20、第148図)

付表10 B地区出土小礫観察表

整理No	挿図No	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
36	361	サヌカイト	80.1	27.2	16.0	39.4	棒状礫
251		サヌカイト	43.2	26.5	7.7	7.6	扁平礫、小型な剥離痕有

付表11 B地区出土石核観察表

整理No	挿図No	石材	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	打面形態	ポジ面の有無	備考
29	348	サヌカイト	I	22.2	49.5	9.2	11.7	礫	無	
27	349	サヌカイト	I	28.2	36.9	18.2	19.5	礫	有	
255	350	サヌカイト	I	26.4	49.2	13.5	13.3	礫	無	
252	351	サヌカイト	I	29.3	46.5	11.9	11.2	折れ面	有	
30	352	サヌカイト	I	26.1	45.3	9.2	9.7	折れ面	有	作業面は背面のみ
26	353	サヌカイト	I	55.0	72.8	11.8	69.3	礫	有	
31	354	サヌカイト	II	33.9	40.1	15.1	16.1	単剥離面	有	
33	355	サヌカイト	II	28.8	67.9	15.7	28.4	複剥離面	有	
34	356	サヌカイト	III	34.6	59.0	16.3	30.6	礫		小礫素材
35	357	サヌカイト	IV	28.9	23.1	19.4	16.2	不明	無	
249	358	サヌカイト	不明	18.3	33.8	8.9	5.2	複剥離面	有	
74	359	サヌカイト	不明	33.4	15.2	13.0	6.0	礫	無	
28	360	サヌカイト	不明	38.5	59.1	13.0	26.5	単剥離面	有	
38		サヌカイト	I	38.1	43.2	18.6	33.3	礫	無	
250		サヌカイト	III	21.9	39.8	11.4	6.3	礫		小礫素材
254		サヌカイト	I	37.9	54.2	13.9	24.2	折れ面	有	主要剥離面内部に礫面が食い込む、打撃痕有

31点出土している。楔形石器は石鏃や石錐のように形態的な分類が困難である。そこで、素材による分類を行う。ただしI、II類には小礫素材や石核素材であっても、加工の進行によりIII、IV類として認定しえなかったものが含まれているものと考えられる。

I類(387～392)：「正面に礫面が認められないもの(IV類除く)」。20点出土した内6点図化した。388・390・392はポジティブな剥離面を残し、剥片素材と考えられる。388は礫打面の剥片を素材としていることがわかり、背面は主要剥離面に比べ明瞭に風化が進んでいる。392は正面の大きな剥離面により分割されているものの非常に厚手である。387・389・391は加工の進行により素材は不明である。389の右側面の剥離面は剪断面である可能性が高く、階段状剥離に切られており、打撃痕が認められる。

II類(393～397)：「正面に礫面が認められるもの(III、IV類除く)」。8点出土した内5点図化した。393・394・396はポジティブな剥離面を残し、剥片素材と考えられる。395・397は加工の進行により素材は不明である。397の右側面には比較的打点の明瞭な横位の折れ面が認められ、階段状剥離に切られている。打点の位置からして両極技法によるものとは考えにくい。さらに、この折れ面を打面とする微細な剥離痕が正面に認められ、下方の剥離痕は左側面の剪断面に切られている。

III類(398)：「小礫素材のもの」。1点出土しており、すべて図化した。

IV類(399、400)：「石核素材のもの」。2点出土しており、すべて図化した。399の正面左方の

付表12 B地区出土剥片観察表(1)

整理 No	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	打面形態	背面の 礫面	完形度	備考
32	サヌカイト	75.6	30.6	15.5	48.4	点状	無	○	R.F.
39	サヌカイト	19.2	17.6	6.6	2.2	点状	有	○	
40	サヌカイト	36.9	12.9	7.7	3.5	点状	無	×	
54	サヌカイト	44.4	13.3	10.6	8.3	点状	有	○	スポール、側面にボジ面を取り込む?
73	サヌカイト	23.0	13.4	3.8	1.3	単剥離面	無	○	
74	サヌカイト	26.3	31.8	7.8	5.8	礫	有	○	
75	サヌカイト	31.5	33.9	9.8	8.6	点状	有	○	石核か?
76	サヌカイト	30.8	24.8	2.8	2.5	礫	無	○	
77	サヌカイト	21.0	17.4	2.8	1.2	点状	無	○	
78	サヌカイト	18.0	28.1	5.8	2.3	点状	有	○	
79	サヌカイト	42.1	49.1	10.5	16.8	礫	無	○	打面調整あり、背面に潜在的割れ
80	サヌカイト	25.1	17.5	6.7	3.0	単剥離面	無	○	
81	サヌカイト	25.1	34.7	3.9	3.0	単剥離面	無	○	打面調整あり
82	サヌカイト	37.6	25.2	8.7	4.1	点状	無	×	
83	サヌカイト	47.2	51.3	7.4	18.7	礫	無	○	風化著しい
84	サヌカイト	19.0	24.1	7.0	2.6	点状	無	○	
85	サヌカイト	26.7	29.9	7.3	5.8	単剥離面	無	×	
86	サヌカイト	15.3	25.5	2.1	1.0	点状	無	×	
87	サヌカイト	43.2	32.0	11.2	10.5	礫	無	○	
88	サヌカイト	28.7	21.1	5.4	2.5	点状	有	○	
89	サヌカイト	34.0	16.9	5.3	2.3	礫	無	○	
90	サヌカイト	18.7	27.3	4.8	2.4	単剥離面	無	○	
91	サヌカイト	22.7	20.3	5.3	2.0	単剥離面	有	○	
92	サヌカイト	28.0	40.7	6.7	5.1	礫	無	○	
93	サヌカイト	46.8	25.1	8.1	9.9	礫	無	×	R.F.
94	サヌカイト	33.2	22.9	10.1	5.2	礫	無	×	
95	サヌカイト	12.2	22.3	4.1	1.3	単剥離面	無	○	
96	サヌカイト	20.4	22.9	5.9	2.9	礫	無	×	
97	サヌカイト	26.8	21.3	4.4	2.9	点状	有	○	
98	サヌカイト	29.2	28.0	5.0	4.6	礫	無	○	底面に礫面あり
99	サヌカイト	19.9	20.3	2.6	1.8	礫	無	×	
100	サヌカイト	19.7	20.1	5.9	1.8	点状	有	○	
101	サヌカイト	66.7	39.1	17.8	31.4	点状	無	○	
102	サヌカイト	15.9	29.5	3.5	2.0	単剥離面	有	○	
104	サヌカイト	23.5	14.6	3.8	1.2	点状	無	○	
105	サヌカイト	37.6	29.0	7.7	4.8	礫	無	○	
107	サヌカイト	22.5	21.2	5.4	2.6	礫	無	○	
108	サヌカイト	27.6	18.5	5.2	3.0	点状	有	○	石錐か?
109	サヌカイト	18.3	26.0	3.7	1.9	単剥離面	有	○	
110	サヌカイト	36.3	20.2	7.3	4.3	点状	無	○	
111	サヌカイト	32.5	40.1	10.0	7.6	単剥離面	無	×	
112	サヌカイト	19.4	18.8	4.6	2.0	複剥離面	無	○	
113	サヌカイト	17.3	28.1	6.4	2.8	礫	無	○	
114	サヌカイト	26.7	23.1	6.9	5.1	礫	無	○	
115	サヌカイト	26.2	17.5	6.5	2.3	点状	無	○	
116	サヌカイト	34.8	52.3	10.0	15.0	礫	有	×	
117	サヌカイト	24.8	24.8	6.6	3.8	単剥離面	無	○	
118	サヌカイト	34.6	18.0	9.7	4.6	点状	無	○	
119	サヌカイト	30.4	26.3	6.0	4.4	礫	無	○	
120	サヌカイト	12.2	22.4	3.2	1.0	単剥離面	無	○	

付表13 B地区出土剥片観察表(2)

整理 No	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	打面形態	背面の 礫面	完形度	備考
121	サヌカイト	26.8	32.1	4.9	4.0	複剥離面	有	○	
122	サヌカイト	46.5	28.8	8.0	10.8	点状	無	○	
123	サヌカイト	23.7	14.0	3.5	1.1	点状	有	○	R.F.
124	サヌカイト	15.7	24.3	3.2	1.3	点状	有	○	
125	サヌカイト	24.3	20.3	7.2	3.2	点状	無	○	
126	サヌカイト	22.6	22.2	5.3	2.7	単剥離面	無	×	
127	サヌカイト	32.7	9.5	4.8	2.8	点状	無	×	スポール
128	サヌカイト	24.4	17.1	6.5	2.4	礫	無	×	
129	サヌカイト	18.3	19.4	2.5	1.0	点状	無	×	
131	サヌカイト	25.9	18.4	4.0	2.3	単剥離面	無	×	
132	サヌカイト	23.0	25.1	6.1	2.8	単剥離面	無	○	
133	サヌカイト	35.4	23.3	8.9	6.9	礫	有	○	礫端片
134	サヌカイト	21.4	39.4	7.1	5.6	単剥離面	無	○	
135	サヌカイト	20.3	30.9	9.1	4.9	礫	無	○	
136	サヌカイト	29.4	14.8	7.0	2.8	点状	有	×	
137	サヌカイト	27.1	15.8	3.5	1.3	点状	無	○	
138	サヌカイト	13.6	21.1	6.8	1.9	単剥離面	有	○	
139	サヌカイト	36.0	23.1	6.3	5.3	単剥離面	無	×	
140	サヌカイト	21.7	16.4	3.7	1.4	礫	無	○	
141	サヌカイト	9.9	27.9	4.3	0.9	礫	無	○	
142	サヌカイト	44.9	17.1	8.9	6.9	礫	有	×	
143	サヌカイト	27.3	32.7	7.0	5.1	点状	有	○	
145	サヌカイト	17.3	28.7	5.4	2.1	礫	無	○	
146	サヌカイト	15.4	25.6	2.9	1.5	単剥離面	無	○	底面あり
147	サヌカイト	20.2	17.1	2.6	0.9	点状	無	×	
148	サヌカイト	17.9	23.5	5.6	2.3	複剥離面	無	○	打面に礫面が少し
149	サヌカイト	20.3	37.9	9.7	7.1	礫	無	○	
150	サヌカイト	22.7	24.4	5.3	2.4	礫	無	○	
153	サヌカイト	35.3	15.7	3.7	2.0	点状	有	○	礫面は風化の著しい面である 可能性がある
154	サヌカイト	22.2	19.0	4.1	2.2	点状	無	○	
155	サヌカイト	14.9	22.2	4.0	1.1	単剥離面	無	×	
156	サヌカイト	20.5	20.6	5.3	2.0	点状	無	○	
157	サヌカイト	29.9	21.5	4.3	2.5	点状	無	○	
158	サヌカイト	24.7	23.6	7.8	3.6	礫	無	○	
159	サヌカイト	14.3	20.4	2.9	0.8	単剥離面	有	○	
160	サヌカイト	25.9	14.7	4.1	1.4	点状	無	○	
161	サヌカイト	18.7	22.2	5.1	2.7	単剥離面	無	○	
162	サヌカイト	24.6	21.1	5.1	2.7	点状	無	○	
163	サヌカイト	16.3	23.0	3.8	1.7	単剥離面	無	○	
164	サヌカイト	18.1	21.9	3.1	0.4	単剥離面	有	○	
165	サヌカイト	29.5	15.6	4.8	2.3	点状	無	○	
166	サヌカイト	25.2	11.9	3.4	1.0	単剥離面	無	○	
167	サヌカイト	23.6	17.3	4.7	1.9	単剥離面	無	×	
168	サヌカイト	51.4	21.5	9.6	5.2	単剥離面	有	×	
169	サヌカイト	26.5	29.9	7.6	5.5	礫	無	○	
170	サヌカイト	18.1	33.6	4.0	2.0	礫	無	○	
171	サヌカイト	32.7	17.5	5.0	2.0	点状	無	×	
172	サヌカイト	11.8	26.2	5.1	1.5	点状	無	○	
173	サヌカイト	15.0	21.2	4.0	1.1	複剥離面	無	○	
174	サヌカイト	31.6	18.1	4.6	2.5	点状	無	○	底面に礫面付着
175	サヌカイト	21.6	26.3	4.8	1.9	礫	無	○	

付表14 B地区出土剥片観察表(3)

整理 No	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	打面形態	背面の 礫面	完形度	備考
176	サヌカイト	26.7	9.3	2.1	0.7	点状	無	○	
177	サヌカイト	42.3	18.3	8.1	7.0	点状	無	○	
178	サヌカイト	22.3	23.9	2.8	1.5		無	○	バルバースカーの剥片?
179	サヌカイト	42.3	24.6	8.7	7.6	点状	無	○	
180	サヌカイト	25.1	24.8	5.0	2.7	単剥離面	有	○	
181	サヌカイト	14.7	23.3	2.8	1.0	単剥離面	無	○	
182	サヌカイト	21.2	34.4	3.9	2.4	単剥離面	無	○	
183	サヌカイト	32.0	12.6	5.8	2.2	礫	無	○	
184	サヌカイト	16.3	47.6	7.2	4.2	礫	無	○	
185	サヌカイト	22.5	22.1	3.3	1.7	単剥離面	無	○	
186	サヌカイト	35.4	14.7	8.3	3.9	礫	無	○	
187	サヌカイト	32.0	18.8	4.9	3.0	点状	無	○	
188	サヌカイト	39.8	14.1	8.6	4.4	単剥離面	有	×	側面に剥離面を取り込む
189	サヌカイト	31.0	12.9	2.5	1.2	単剥離面	無	○	
190	サヌカイト	19.7	33.7	7.3	3.8	礫	無	×	R.F.
191	サヌカイト	32.8	18.3	6.6	3.9	点状	無	×	
192	サヌカイト	21.1	21.2	6.8	2.8	礫	無	○	
193	サヌカイト	22.9	20.4	3.1	1.2	単剥離面	無	○	
194	サヌカイト	18.3	18.7	4.8	1.9	点状	無	×	
195	サヌカイト	19.8	23.9	5.5	3.4	礫	無	×	
197	サヌカイト	45.1	36.8	10.8	14.0	礫	無	○	
198	サヌカイト	31.2	20.1	5.6	2.2	点状	無	○	
200	サヌカイト	13.3	22.9	3.9	1.1	点状	無	○	
201	サヌカイト	23.7	33.2	5.7	4.1	単剥離面	無	×	
202	サヌカイト	24.9	20.2	3.7	1.3	複剥離面	無	○	
203	サヌカイト	32.3	23.4	3.5	2.7	複剥離面	無	○	
204	サヌカイト	15.0	20.2	3.2	1.0	単剥離面	無	×	背面の風化著しい
205	サヌカイト	43.5	18.8	5.0	4.0	点状	無	×	二重バルブ
206	サヌカイト	17.0	26.7	5.6	2.3	点状	無	×	
207	サヌカイト	77.2	19.7	19.2	18.1	点状	無	○	底部に礫面、大型剥片(礫打面)の側面を剪断したスポール
208	サヌカイト	54.4	40.1	15.9	28.7	単剥離面	無	○	R.F.
209	サヌカイト	41.5	9.7	6.1	2.7	点状	有	○	スポール
210	サヌカイト	34.1	11.5	8.3	2.9	点状	無	○	スポール
211	サヌカイト	31.7	23.2	8.4	7.8	点状	無	×	
212	サヌカイト	42.3	46.1	18.3	22.3	単剥離面	有	○	立体的、側面に剥離面を取り込む
213	サヌカイト	28.4	26.8	5.2	3.8	礫	無	○	
214	サヌカイト	20.2	18.3	3.4	1.5	単剥離面	無	○	R.F.
215	サヌカイト	43.4	29.7	11.5	14.0	礫	有	○	R.F.、側面に剥離面をとり込む
217	サヌカイト	56.2	56.9	16.3	34.7	複剥離面	有	○	R.F.
218	サヌカイト	46.4	21.5	11.2	6.2	点状	無	×	
220	サヌカイト	14.6	22.7	2.5	1.0	点状	無	○	
221	サヌカイト	32.1	21.1	7.2	2.7	礫	無	×	
222	サヌカイト	22.6	16.8	3.7	1.8	単剥離面	無	×	
223	サヌカイト	22.0	12.3	4.8	0.9	点状	無	○	
224	サヌカイト	21.0	14.4	3.6	0.9	点状	無	○	
225	サヌカイト	36.5	12.4	8.1	3.7	点状	有	○	スポール、背面に階段状剥離面を取り込む
226	サヌカイト	24.9	30.1	9.2	6.4	単剥離面	無	○	
227	サヌカイト	15.0	20.0	3.9	1.2	複剥離面	無	○	

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成16・17年度発掘調査概要

付表15 B地区出土剥片観察表(4)

整理No	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	打面形態	背面の礫面	完形度	備考
228	サヌカイト	26.3	30.2	7.3	5.0	礫	無	×	
230	サヌカイト	34.7	44.4	20.1	20.7	礫	有	○	強い湾曲
231	サヌカイト	31.3	35.3	14.3	14.0	礫	無	×	強いヒンジ
232	サヌカイト	43.2	32.5	10.5	13.1	礫	無	×	
233	サヌカイト	35.0	10.2	6.4	1.9	点状	無	○	
234	サヌカイト	19.0	37.3	6.5	3.2	礫	無	○	
235	サヌカイト	32.4	10.0	3.4	0.9	点状	無	○	
236	サヌカイト	40.0	35.5	12.2	12.9	礫	無	×	R.F.
237	サヌカイト	43.7	28.4	5.5	6.6	単剥離面	無	×	
238	サヌカイト	35.1	17.4	7.5	5.3	単剥離面	無	×	
239	サヌカイト	42.3	30.5	11.6	12.6	礫	無	×	
240	サヌカイト	13.6	21.1	2.5	0.7	単剥離面	無	○	
241	サヌカイト	29.9	28.7	10.1	4.3	単剥離面	有	×	
242	サヌカイト	16.3	19.7	3.6	1.3	複剥離面	無	○	
243	サヌカイト	33.7	39.1	9.8	17.7	礫	無	×	R.F.
244	サヌカイト	33.5	16.0	8.4	3.3	点状	有	×	
245	サヌカイト	41.6	25.8	11.3	9.7	礫	無	×	R.F.
246	サヌカイト	24.7	17.1	4.3	1.9	礫	無	×	
247	サヌカイト	44.0	30.0	12.5	14.4	単剥離面	有	○	側面に剥離面を取り込む
248	サヌカイト	26.8	32.1	6.3	5.7	点状	有	○	
1006	チャート	18.1	28.1	6.2	3.0	礫	無	○	赤チャート
1007	チャート	20.8	25.1	4.9	2.6	点	無	○	
1008	チャート	35.1	32.3	7.4	7.9	礫	有	○	礫端片

付表16 B地区出土石鏃観察表

整理No	挿図No	石材	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(mm)	素材面 残存数	欠損部	背面の 礫面	備考
1	362	サヌカイト	I	19.3	16.4	3.9	0.8	0		無	片脚新欠
6	363	サヌカイト	I	18.3	15.3	2.9	0.5	0		無	
2	364	サヌカイト	I	24.6	16.4	3.3	0.8	1	片脚・先端	無	挟りが深い
3	365	サヌカイト	I	20.3	15.9	4.2	1.2	1	先端	無	
5	366	サヌカイト	I	14.2	18.5	2.1	0.5	1	先端	無	
10	367	サヌカイト	I	12.4	14.6	2.1	0.4	0	先端	無	
250	368	サヌカイト	I	20.2	13.9	3.0	0.7	0	片脚・先端	無	
7	369	サヌカイト	II	21.6	13.7	3.3	0.8	1		無	
8	370	サヌカイト	II	19.7	13.4	3.2	0.6	2	片脚	無	
9	371	サヌカイト	II	27.7	16.7	5.6	1.8	0	片脚	無	
11	372	サヌカイト	II	24.4	15.2	3.8	0.9	0	片脚	無	
13	373	サヌカイト	III	27.7	11.2	3.1	1.2	2		無	
12	374	サヌカイト	不明	21.1	17.8	5.0	1.1	1		無	未完成品? II類?
4	375	サヌカイト	不明	24.9	20.3	5.6	2.0	0	先端	無	未完成品? I類?
14	376	サヌカイト	不明	24.9	13.3	3.3	1.2	2	片側辺	無	
15	377	サヌカイト	不明	22.5	11.7	2.7	0.7	0	片側辺	無	
16	378	サヌカイト	不明	24.3	17.0	4.2	1.4	0	片脚	無	
17	379	サヌカイト	不明	15.8	14.5	3.7	0.8	1	基部	無	
1001	401	チャート	I	21.2	13.2	2.5	0.5	0	片脚	無	赤チャート
1002	402	チャート	I	20.2	13.5	4.4	0.8	0	先端	無	赤チャート
1003	403	チャート	不明	26.7	20	5.7	2.7	2		無	赤チャート、未完成品?

剥離痕はフリーレイキングによるものであり、この剥離痕の打面である裏面右方には打撃痕が認められる。裏面はポジティブな剥離面でありⅡ類石核を素材としている。正面中央の剥離面は他の剥離面に比べ明瞭に風化が進んでいる。400は右側面上方に打撃痕が認められ上縁の階段状剥離に伴うとは考えにくい位置にある。また左側面の折れ面を打面とする正面の剥離痕はやや平坦であることから両極技法による可能性も否定できないが、対向する辺にダメージはなくフリーレイキングによるものと考えられる。裏面はポジティブな剥離面であり剥片素材のⅠ類石核を素材とする。このように楔形石器の素材は多様であったと考えられる。またサイズに関しても、小型薄手なものから、大型厚手なものまで様々なものがある(第150図)。

③チャート製剥片石器(第151図)

剥片石器の石材はサヌカイトが主体であるものの、チャートも若干認められ、石鏃3点、石錐1点、楔形石器1点(405)が出土している。すべて、赤色チャートである。401・402(写真のみ掲載)は上記サヌカイト製石鏃のⅡ類に分類される。403は石鏃の未完成品と考えられる資料で打面側を基部に用いる。打面は主要剥離面形成時に破碎しており、二重バルブが認められる。石錐(404)は剥離面観察から両極剥片を素材とすると考えられ、末端側を錐部に用いる。上記サヌカイト製石錐のⅡ類に分類される。なお剥片も少量、出土しており、サヌカイト製のものと同様の基準で属性表にデータを提示している。

(吉村駿吾)

b. 礫石器

礫石器は打製石斧1点、磨製石斧3点、石錘2点、敲石25点、台石6点である。礫石器は目的にあわせて刃部や形状を作り出して「加工した礫石器」と、自然の礫をそのまま道具として使用する「無加工の礫石器」とがある。今回の出土石器でみると、前者は磨製石斧、打製石斧と石錘、後者は敲石と台石である。出土したものは不明瞭なものを除き、全点実測した。出土グリッド、

付表17 B地区出土石錐観察表

整理No	挿図No	石材	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	素材面残存数	欠損部	背面の礫面	備考
18	380	サヌカイト	I	25.0	6.2	4.1	0.8	1		有	
19	381	サヌカイト	I	30.0	7.5	3.1	0.8	2		無	
21	382	サヌカイト	Ⅱ	27.0	8.2	4.1	0.9	2		無	両極剥片素材
20	383	サヌカイト	Ⅱ	44.8	12.4	5.6	2.7	2		無	両極剥片素材
22	384	サヌカイト	Ⅲ	26.5	12.8	4.4	1.2	2	錐部	無	
1003	404	チャート	Ⅱ	46.1	15.7	12.3	7.5	2		無	赤チャート、両極剥片素材

付表18 B地区出土石匙観察表

整理No	図版No	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	素材面残存数	背面の礫面	備考
25	385	サヌカイト	33.2	28.0	9.1	5.5	2	無	打面折損

付表19 B地区出土スクレイパー観察表

整理No	図版No	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
23	386	サヌカイト	21.4	34.1	8.0	5.4	素材不明、礫面付着なし

付表20 B地区出土楔形石器観察表

整理 No	挿図 No	石材	分類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	ボジ面 の残存	剪断面 の有無	備考
45	387	サヌカイト	I	25.1	17.1	5.6	2.5	無	無	
42	388	サヌカイト	I	33.1	26.5	9.5	8.3	有	最終	
69	389	サヌカイト	I	23.1	34.5	8.5	8.8	無	有?	打撃痕有
47	390	サヌカイト	I	31.4	18.2	7.2	4.3	有	最終	
50	391	サヌカイト	I	48.2	13.9	12.6	7.9	無	最終	
49	392	サヌカイト	I	48.8	36.6	12.4	22.4	有	無	
61	393	サヌカイト	II	25.6	12.5	6.3	2.1	有	最終	
55	394	サヌカイト	II	20.7	24.3	5.3	3.1	有	無	
67	395	サヌカイト	II	43.0	21.5	10.9	10.8	無	最終	
60	396	サヌカイト	II	52.8	25.3	12.2	15.0	有	最終	
62	397	サヌカイト	II	44.4	11.7	11.5	5.0	無	最終	
71	398	サヌカイト	III	36.0	15.1	14.5	8.7	無	無	
57	399	サヌカイト	IV	36.1	50.8	15.5	32.8	有	無	打撃痕有
64	400	サヌカイト	IV	44.6	28.2	19.1	22.2	有	無	打撃痕有
37		サヌカイト	I	43.1	25.0	10.8	14.3	無	最終	新欠で接合
41		サヌカイト	I	22.3	20.4	5.1	2.7	無	無	
43		サヌカイト	I	29.3	25.8	12.2	8.4	有	最終	
44		サヌカイト	I	28.7	20.2	8.6	4.4	有	無	
46		サヌカイト	I	34.8	25.2	8.6	7.6	有	無	
51		サヌカイト	I	25.2	19.2	3.9	2.0	有	最終	
52		サヌカイト	I	32.9	22.8	9.6	5.8	無	最終	
58		サヌカイト	I	31.2	24.9	9.6	8.9	無	最終	
59		サヌカイト	I	52.4	18.5	14.2	15.3	無	無	
63		サヌカイト	I	14.0	23.0	5.2	2.0	無	無	
65		サヌカイト	II	21.7	14.0	6.1	2.0	無	最終	
66		サヌカイト	I	26.8	15.9	8.2	2.9	無	最終	
68		サヌカイト	I	24.7	20.3	7.5	4.2	有	最終	
70		サヌカイト	I	32.0	20.5	7.3	5.7	無	無	
151		サヌカイト	II	37.3	24.1	5.6	4.8	無	無	
152		サヌカイト	I	25.7	13.6	4.8	2.2	無	最終	
249		サヌカイト	II	24.0	14.5	4.8	1.5	有	無	
1004	405	チャート	I	27.3	20	9.2	2.5	無	最終	赤チャート

法量、石材については一覧表(付表21)で示した。

打製石斧(第153図406)

小型で薄い短冊形のものである。刃部に当たる先端部に、使用による細かな剥離痕が形成されている。

磨製石斧(第153図407・408、第152図470)

407と408は、ともに刃部を含めた破損品で、全体が滑らかに研磨されている。研磨による側縁部の面取りも顕著である。407は蛇文岩製で、遺跡近隣には産出しない石材を用いている。408は刃部の中央がやや尖る形状である。

470は小型の両刃石斧である。滑らかに研磨されており、側縁部も研磨による面取りがみられる。

石錘(第153図409・410)

409は扁平な円盤の両先端部に打撃を加えて打ち欠き、引っ掛け部を形成している。

410は黒っぽい頁岩製で、小型・軽量のものである。ほぼ対する側縁部に剥離痕が形成されて

いる。下端部の剥離痕の範囲はかなり大きい。

敲石類(第153図411～第155図435)

敲石類は合計25点出土している。敲石類は敲石、磨石を含め、自然の円礫の表面に敲打痕・擦過痕・磨痕・剥離痕・打裂痕をとどめる石器である。敲打痕は連続した敲打により、礫表にアバタ状の潰れや、それがすすんで凹みが生じているものも含める。擦過痕は対象物を打撃すると同時に掠め擦ることにより、引っ搔いたような線状痕が集合して荒れた状態になったものである。磨痕は対象物の磨り潰しによって滑らかな面となったものである。剥離・打裂痕は激しく強い打撃により剥離面や割れを生じたものである。それぞれの敲石類に、これらの使用痕がどの部位に形成されているかについては付表22に示した。周縁部に敲打痕を全周または部分的にもつもの(411～417)、表裏面に敲打痕および擦過痕をとどめるもの(418～421)、表裏面に磨面を形成するもの(428・449)、周縁部と表裏面に敲打痕・擦過痕をもつもの(422・423・425)、周縁部に敲打痕・剥離面、表裏面に磨面をもつもの(426・427・430～435)、先端部に敲打痕、剥離痕をもつもの(424)がある。

さらに使用痕の範囲をできる限り明示した。アバタ状に潰れた敲打痕は破線で、研磨面は実線で、激しい打撃による剥離・打裂痕は一点破線で区別して示している。

こうしてみると、複数の使用痕や形成部位が組み合わさっているものが多く、単一の使用痕しかもたないものは、側縁部に敲打痕がめぐるもの(416・417)と同じく側縁部に剥離痕をもつもの(414)、そして表面に広くアバタ状の敲打痕をもつもの(428)の4点である。しかし、417と428は破損品であるため断定はできないので、単一の使用痕を有するものはわずか2点にすぎない。

礫形態は多様で、シンメトリーに均整のとれた礫形態をもつものはむしろ少ない。磨面を有する磨石のなかでは、厚みをもつ428・429・434の3点が、その形態からみて堅果類の磨り潰しに用いられた可能性が高い。これらは比較的シンメトリーで均整のとれた礫を用いている。

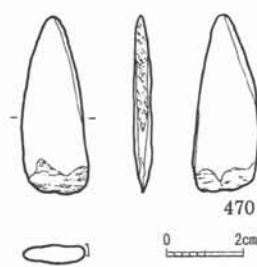
さらに、今回の敲石類は破損しているものの割合が非常に高いことも特徴としてあげられる。通常、植物質食料の調理具とされる敲石・磨石の類は、使用に際しほとんど激しく破損することはない。ちなみに、縄文時代早期の大川遺跡^(注22)(奈良県)、縄文時代後期の桑飼下遺跡^(注23)(京都府)、同北村遺跡^(注24)(長野県)における調理具と推される整美な形態の凹石・磨石の破損率(破損点数÷総数)をパーセントで示すと、大川遺跡では 20%(14点÷70点)、桑飼下遺跡と北村遺跡でそれぞれ7%(5点÷76点)、10%(48点÷459点)という状況である。

敲石類25点のうち12点が、もとの礫形の法量を計測できないまでに大きく破損している。当時の使用の際ではなく、原位置から運ばれて当地にもたらされた時点で破損した可能性もあるが、いずれにしても非常に高い破損率である。

台石(第156図436～441)

一般的に台石は、両極打法による剥片石器を製作する際の受けの台として、また植物質食料の堅果類や根菜類の殻割りや粉碎などに用いられた可能性がある。今回出土した6点は、研磨面を有さず、敲打痕および強い打撃による剥離痕をもつものである。

植物食利用のため、長期間に一定量の堅果類を磨り潰すように使用すれば、作業面は滑らかな磨面となるが、そうした使用痕をもつものはみられない。また、堅果類の殻割りは敲石による打撃が加わるが、台石と敲石とが頻繁に激しく当たることは稀である。したがって、植物食利用のための台石・石皿・敲石には、よほど長い年月の使用を経たものでなければ顕著な使用痕はつかないといえる。



第152図 B地区
出土石器実測図(5)

こうしてみると、すべて作業面は平坦か凸面をなしている。そして敲打痕および剥離痕の状態は非常に顕著で、細かく平滑になったような敲打痕や磨面はみられない。さらに敲石類と同様、台石も破損率が高く、465以外はすべて大きく破損している。465は複数の丸い局所的な凹みをもつ、蜂の巣石のような特殊なものである。

以上の点と剥片石器の剥片や楔形石器の多さを考えあわせると、石器製作にともなう台石の可能性が高い。

B. 縄文時代以外の遺構と遺物

a. 古墳時代前期の遺構と遺物

古墳時代前期に属する遺構としては堅穴式住居跡SH5がある。

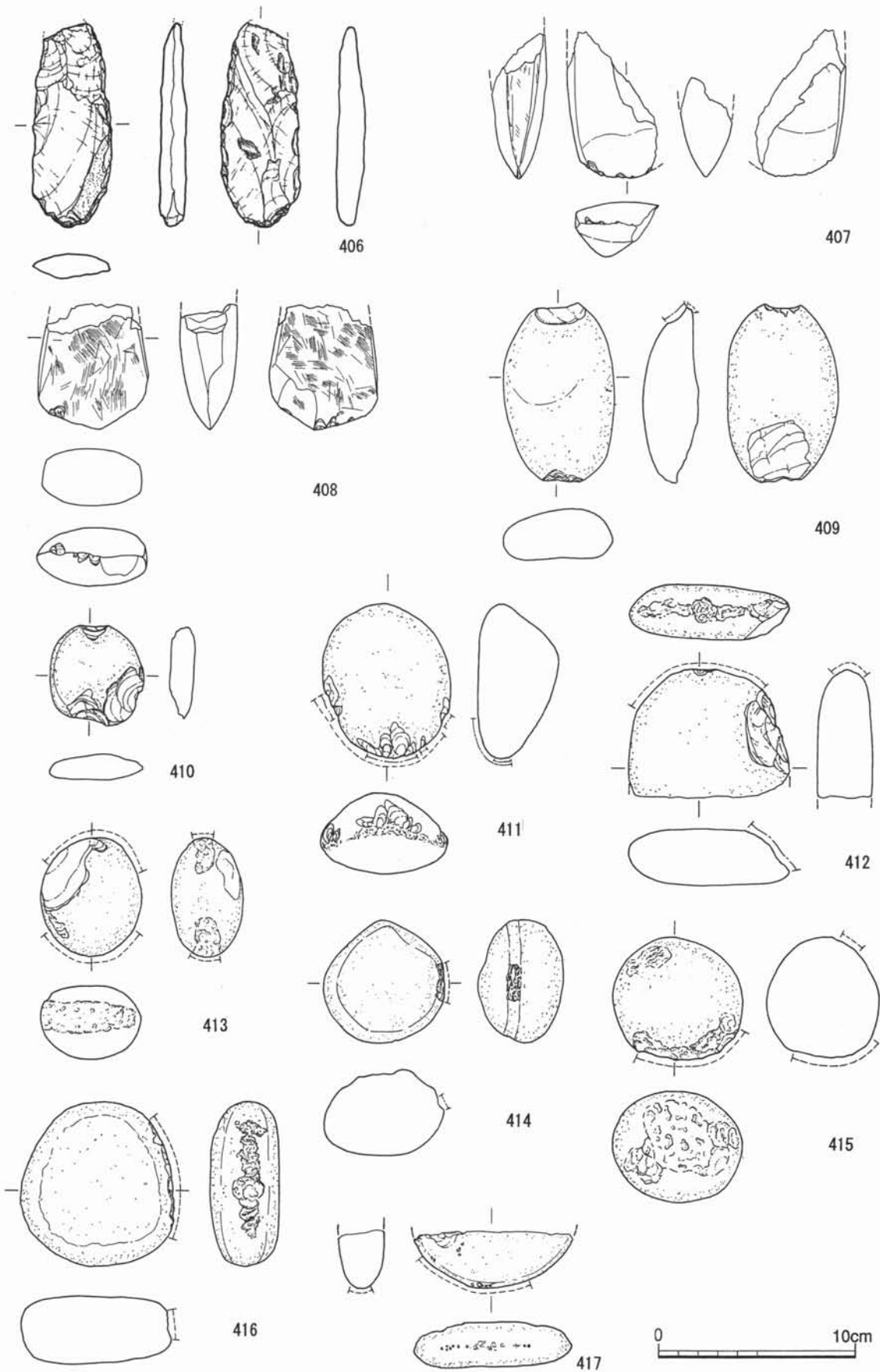
堅穴式住居跡SH5は北側のB1地区に部分的な平面ラインが検出されたが、北壁断面において、堅穴式住居跡SH4との切りあいが確認できた。掘形の隅部分を1か所しか確認できなかったため、正確な規模・形状は不明であるが、一辺4m前後の方形プランと推定される。B1地区の北東側の壁面直下で土師器甕(布留2式併行期)の口縁部破片(451)が出土した。口縁端部は明瞭に折り返されている。支柱穴の基数や全体の配置はわからない。地山面(9層)において確認したため、壁面の立ち上がりはおよそ10cm程度であるが、土層断面で見ると少なくとも40cmほどの深さが確認できる。焼土・炭化物などは確認されなかった。

b. 古墳時代後期の遺構と遺物

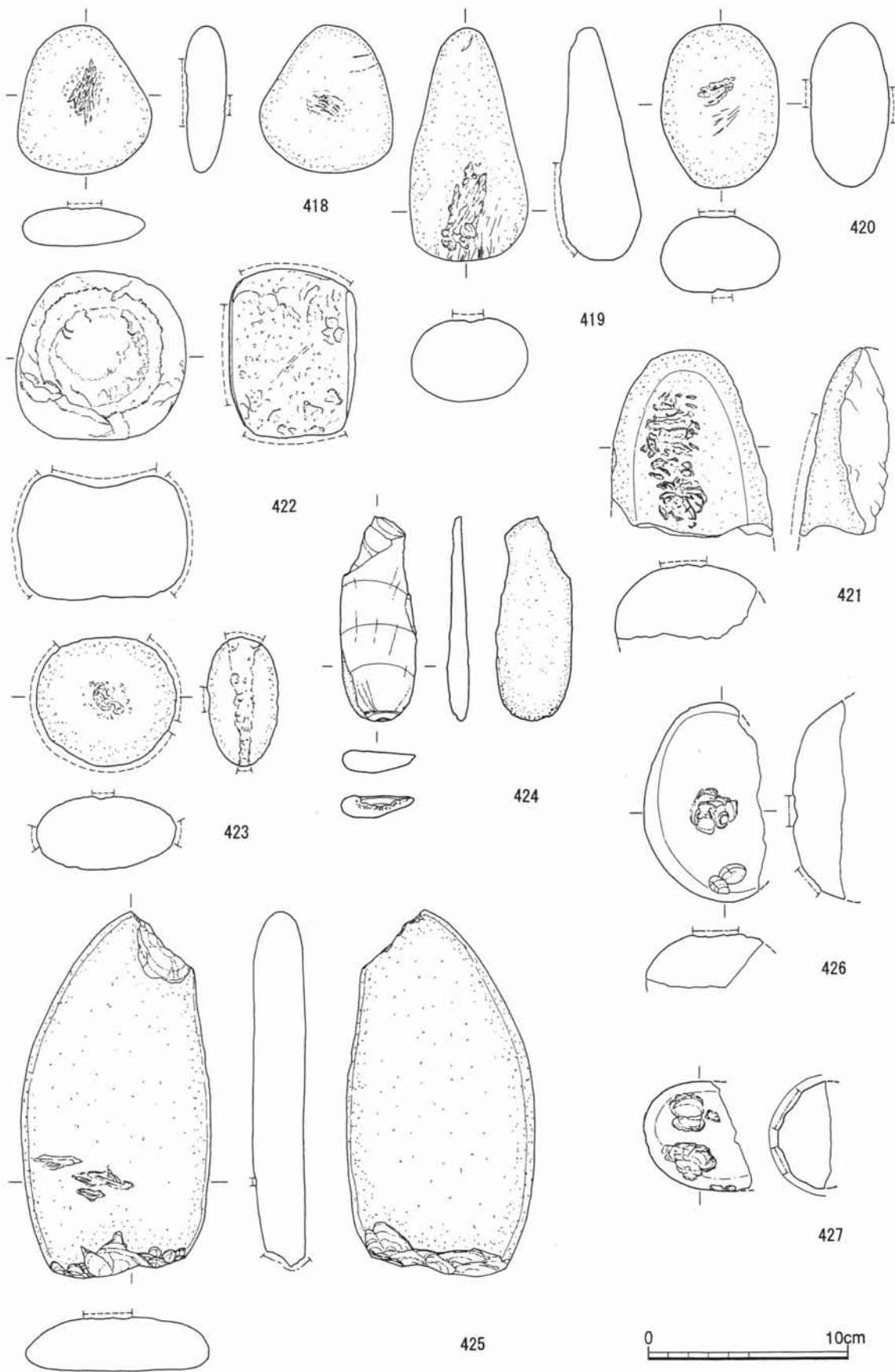
古墳時代後期に属する遺構として、堅穴式住居跡SH4を確認した。

堅穴式住居跡SH4は4.3m×4.5mを測るほぼ正方形プランを呈する。検出面からの深さ25cmを測り、壁面にそって部分的ながら排水溝が掘られていた。支柱穴は4基で構成されていたものと考えられる。北辺中間部に竈が設置されている。竈部は馬蹄形に築かれた本体の一部が残っていた。竈の燃焼部や周囲から、赤色の焼け土や炭化物のまとまりとともに、炊飯具としての土師器甕の口縁部が複数出土した。土師器の甕は大小あわせて4個体ある。比較的薄い器壁で、口縁部が体部から緩やかな弧を描いて外反するもの(444・445)と、肉厚でやや角度とつけて口縁部が外反するもの(446・447)がある。内外面の調整は、細かなハケ目や、ケズリが施されている。また椀(448)は竈部に近接して、潰れた状態で出土した。偏球形の体部をもち、体部外面の上半にほぼ縦方向のハケ目、同下半にケズリ、内面に横方向のハケ目が施されている。赤っぽい色調をもつ。

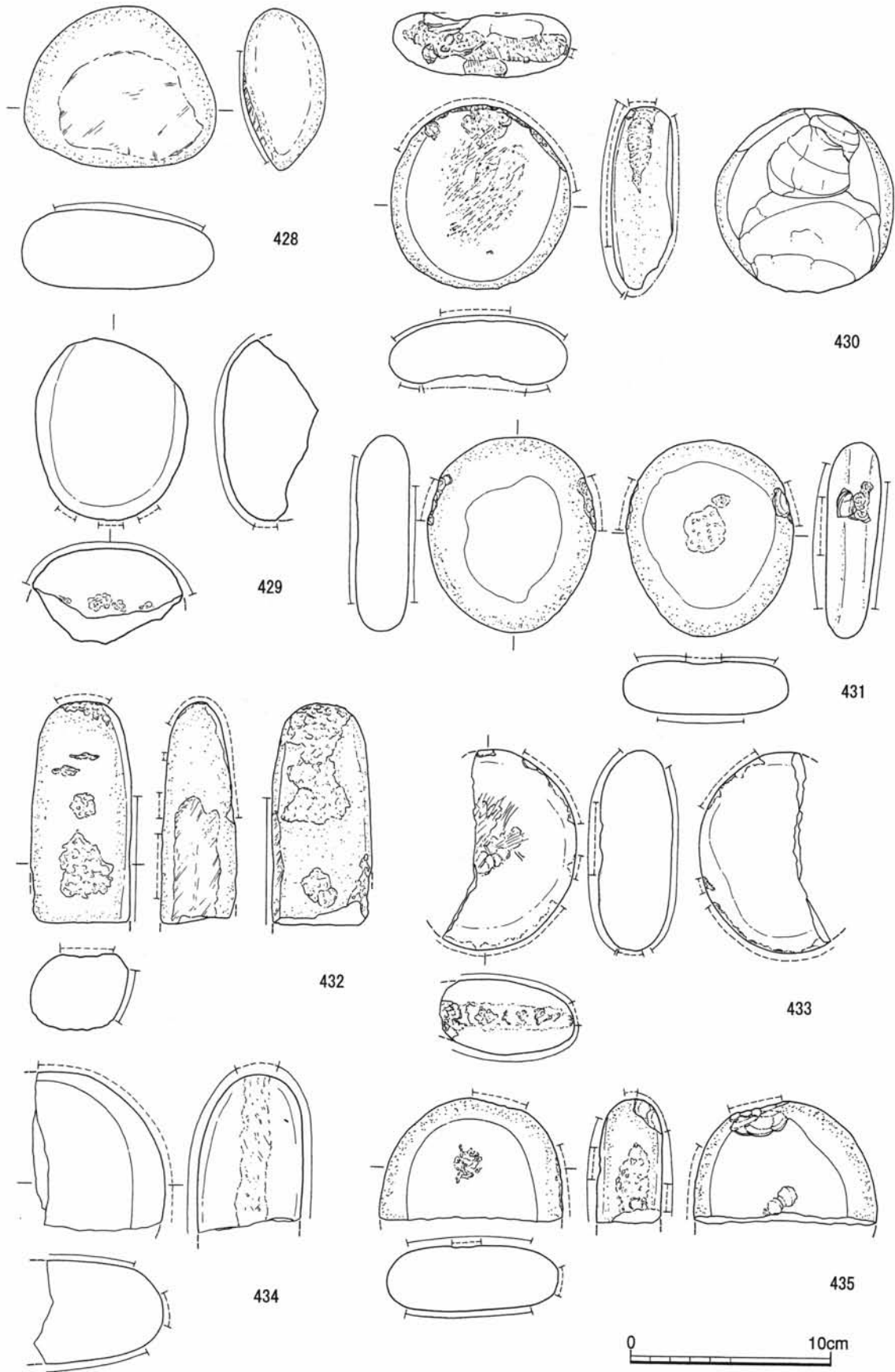
その他の遺物として、南壁の中間部近くから須恵器杯身(442)が完形で、支柱穴(P-23)の東



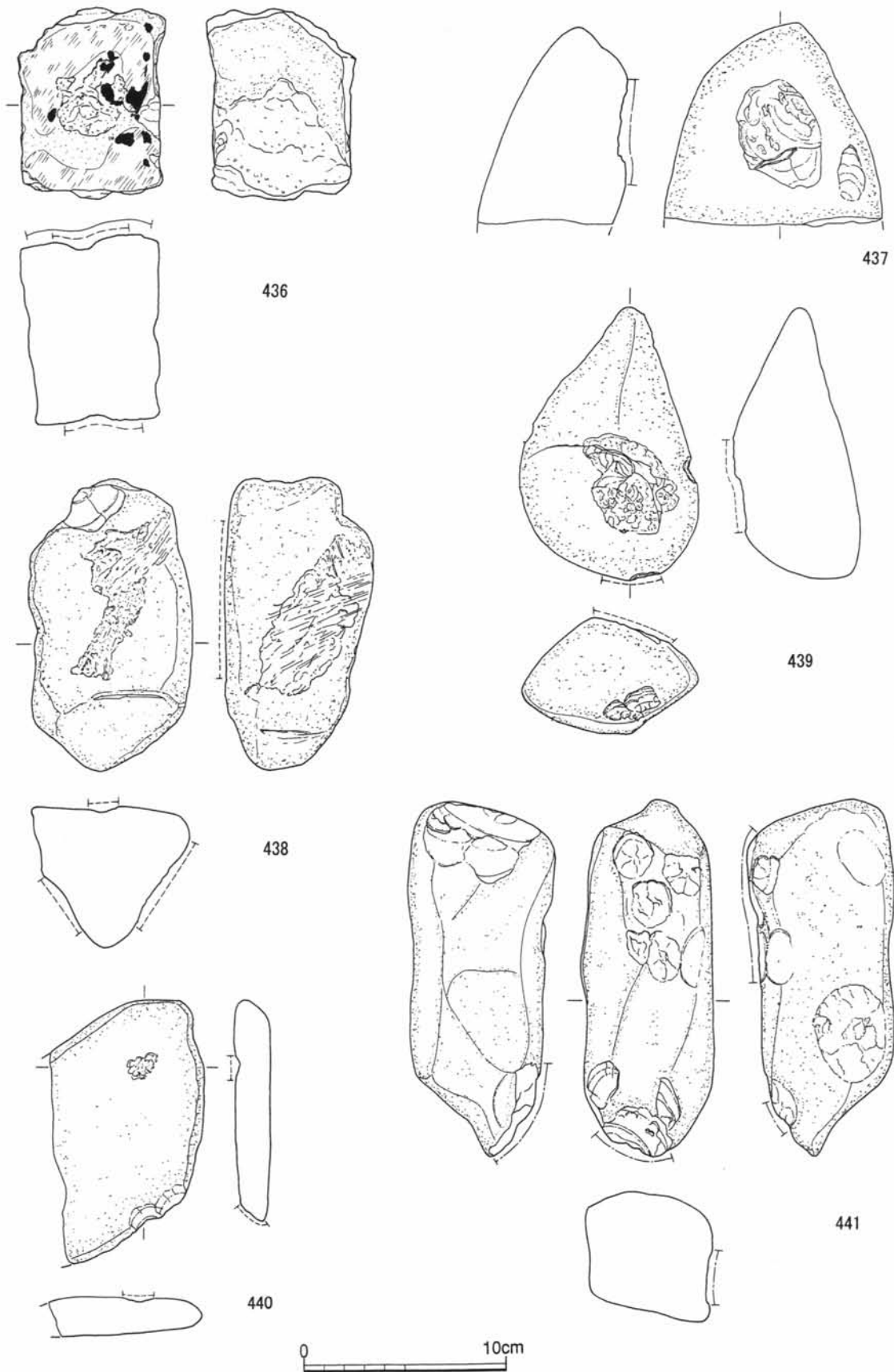
第153図 B地区出土石器実測図(6)



第154図 B地区出土石器実測図(7)



第155図 B地区出土石器実測図(8)



第156図 B地区出土石器実測図(9)

付表21 B地区出土楔形石器観察表

挿図 No	器種	出土地区	層位	法量(cm)			重さ (g)	石材	破損品 △	備考
				長さ	幅	厚さ				
406	打製石斧	5 F	黒・上	10.15	4.0	1.3	68	粘板岩		
407	磨製石斧	8 F	黒・上	(7.2)	(4.5)	(2.6)	(94)	蛇紋岩	△	
408	磨製石斧	—	黒	(6.2)	(5.6)	(2.9)	(124)	頁岩	△	
470	磨製石斧	—	黒	4.6	1.7	0.5	35	頁岩		
409	石錘	—	黒	8.9	5.6	2.8	186	砂岩		
410	石錘	4 E	黒・上	5.1	4.8	1.3	45	頁岩		
411	敲石類	9 E	黒・上	7.8	6.5	3.9	244	砂岩		
412	敲石類	8 E	黒・上	(6.5)	(8.1)	(2.8)	(228)	砂岩	△	
413	敲石類	7 E	黒・下	6.0	5.1	3.7	136	砂岩		
414	敲石類	8 E	黒・上	6.3	6.2	4.3	210	チャート		
415	敲石類	8 E	黒・上	6.2	6.5	5.7	327	砂岩		
416	敲石類	8 E	黒・下	8.5	7.6	3.5	252	砂岩		
417	敲石類	2 E/2 D	黒・下	(8.0)	(2.9)	(1.3)	(66)	花崗岩	△	
418	敲石類	—	黒	7.4	6.7	1.9	134	砂岩		
419	敲石類	—	黒	11.5	5.9	3.9	352	頁岩		
420	敲石類	8 F	黒・下	8.1	5.9	3.9	252	砂岩		
421	敲石類	8 C	黒・下	(9.3)	(7.8)	(3.9)	(350)	砂岩	△	
422	敲石類	9 Q	黒・上	8.5	8.4	6.3	680	砂岩		被熱あり
423	敲石類	9 C	黒・上	7.0	6.5	3.6	228	砂岩		
424	敲石類	7 E	黒・下	10.2	3.8	1.1	(44)	粘板岩	△	
425	敲石類	(SD1)	近世溝内	(5.4)	(4.5)	(2.7)	(105)	蛇紋岩	△	
426	敲石類	8 D	黒・下	17.8	9.5	2.7	700	砂岩		
427	敲石類	60F	黒・上	(9.9)	(6.0)	(2.6)	(196)	蛇紋岩	△	
428	敲石類	10E	黒・上	9.5	7.9	4.1	416	砂岩		
429	敲石類	—	黒	(9.1)	(7.5)	(4.7)	(358)	砂岩	△	
430	敲石類	7 F	黒・上	9.2	8.9	3.1	342	砂岩		
431	敲石類	5 F	黒・上	9.7	8.9	2.7	394	砂岩		
432	敲石類	9 F	黒・上	(11.0)	(5.0)	(3.8)	(360)	砂岩	△	
433	敲石類	28C/28D	黒・下	(7.9)	(6.5)	(5.2)	(442)	砂岩	△	
434	敲石類	5 E	黒・上	(9.8)	(6.6)	(3.5)	(302)	花崗岩	△	
435	敲石類	8 F	黒・下	(9.1)	(6.1)	(3.3)	(294)	砂岩	△	
436	台石	7 F	黒・上	9.2	7.2	9.2	1040	砂岩		赤色顔料付着
437	台石	SH4	下層	(10.7)	(9.8)	(7.0)	(805)	砂岩	△	
438	台石	4 E	黒・上	14.3	7.8	6.8	925	砂岩		
439	台石	SH4	下層	13.2	8.7	5.7	660	砂岩		
440	台石	11E	黒・上	(11.3)	(7.5)	(1.9)	(284)	砂岩		
441	台石	8 F	黒・下	17.2	6.2	5.8	1090	砂岩		

側で刀子の茎部とみられる鉄器(456)が1点出土している。木質が遺存しているため、関部の形状は観察できないが、刀身部寄りに目釘穴が1か所観察される。この須恵器杯身や土師器甕の形態から判断して、およそ6世紀末に建てられた住居と判断できる。

c. 奈良・平安時代の遺構と遺物

この時期に属する遺構には柱穴と思われるピット群や土坑などがある。ピットは直径20～35cmの中・小型のものであり、30～40基を確認したが、まとまりを欠き掘立柱建物として復原するには至らなかった。出土遺物のないものが大半であり、また、中世の土器を出土するものも含まれていることから厳密に当該期に属するとはいい難い。

土坑は、隅丸四角、楕円形、不定形なもの 付表22 B地区出土敲石類の使用痕跡形成部位観察表などあわせて数基確認している。

土坑SK08は深さ35~40cmを測る不定形の土坑である。風倒木痕ともみられたが、掘削を進めると底近くで須恵器や鉄器類が出土し、また、赤化した焼け土などもみられることから、廃棄土坑とした。出土遺物には須恵器、土師器、鉄器などがある。448はつまみをもつ須恵器蓋で、口縁端部に鈍い返りがみられ、口径20cm、器高3.8cmを測る。449は須恵器杯身で口径11.1cm、器高4.3cmである。さらに土師器甕片が1点(450)ある。体部から口縁部にかけての外反は緩やかで、内外面にハケ目調整を施す。また、鉄器の刀子の破片とみられるものが1点(458)出土している。

その他、包含層出土ではあるが、当該期のものとして、須恵器杯身(452)がある。口径10.8cm、器高3.3cmを測る。

d. 鎌倉・室町時代の遺構と遺物

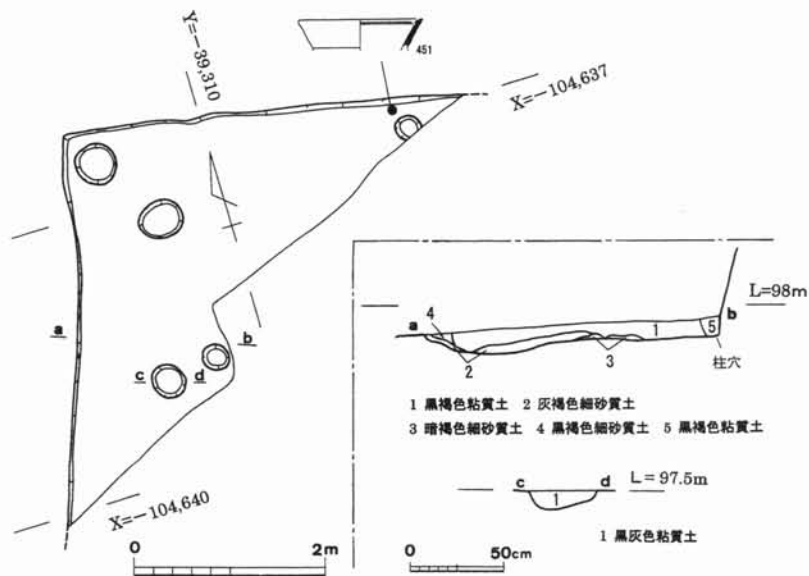
当該期の遺構としてはピットなどがあるが前述のように、奈良・平安時代のものとの峻別が困難であり、厳密な遺構の抽出はできていない。

土師器碗(454)は柱穴(P6)内から出土した。口径14.4cm、器高4.7cmを測る。黄白色の色調で、体部中間に回転ナデのあと強いハケがかかり沈線状になっている。

包含層出土遺物として、須恵器の碗(453)がある。口径14cm、器高4.9cmを測り、口縁端部は玉縁状で底部糸切を施す。平安~鎌倉時代にかけてのものであろう。

455は羽釜である。口径19.3cm、体部最大径23.4cmを測り、暗灰色

挿図 番号	先端部				表裏面				側縁部			
	敲	擦	磨	剥	敲	擦	磨	剥	敲	擦	磨	剥
411									○			○
412									○			○
413									○			○
414												○
415									○	○		
416									○			
417									○			
418					○	○						
419					○	○						
420					○							
421					○							
422					○				○			
423					○				○			
424	○			○								
425	○			○	○							
426					○		○	○				
427					○		○	○				
428							○					
429							○		○			
430					○	○	○	○	○	○		
431					○		○		○			○
432	○				○					○	○	
433					○	○	○	○	○			
434							○		○			
435					○		○		○			○



第157図 竪穴式住居跡SH5実測図

で、凸帯下位は煤やこげが付着している。これも包含層中からのものである。

e. 江戸時代の遺構と遺物

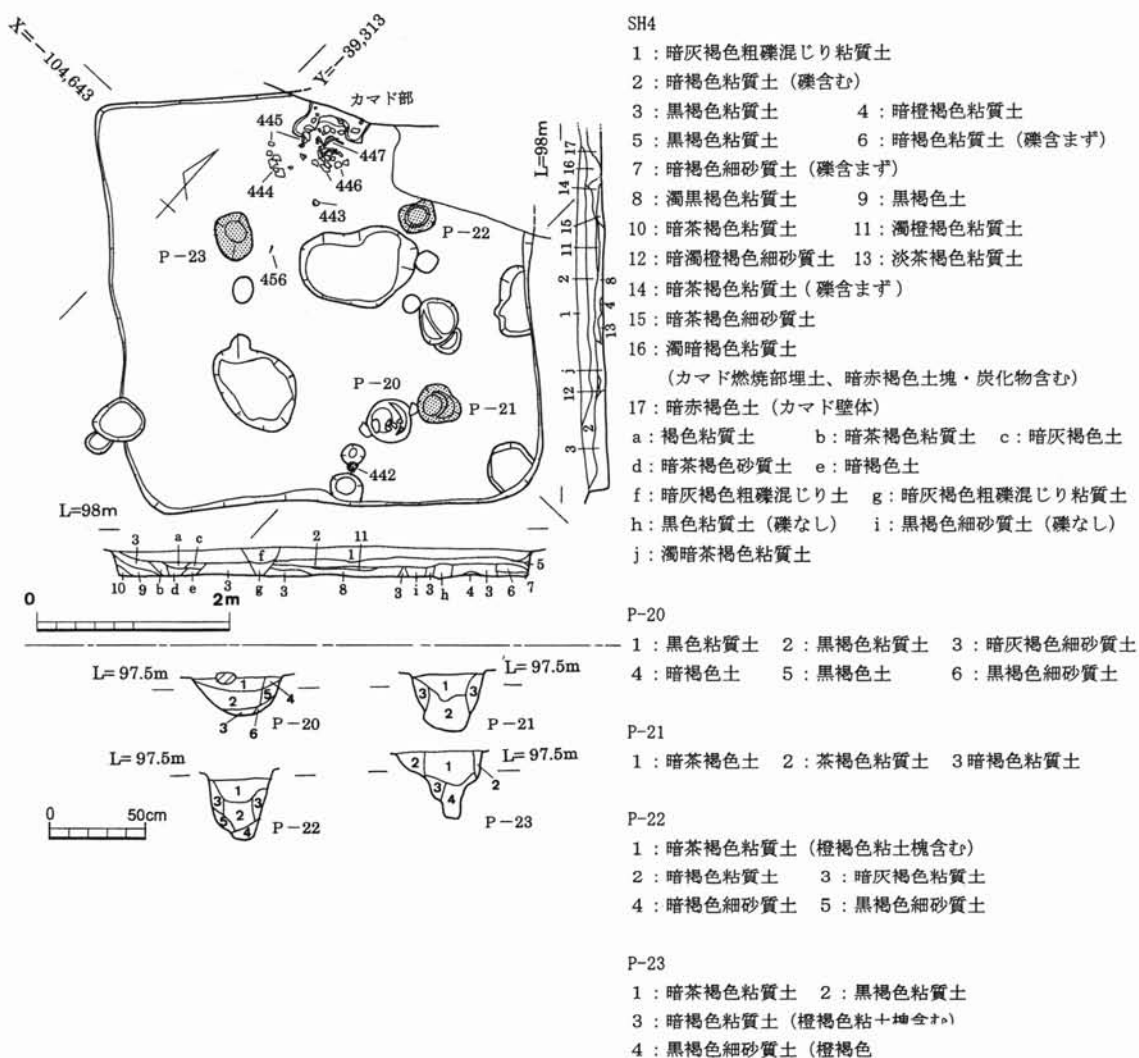
江戸時代に属する遺構として溝を2条検出した。

溝SD1はB2地区の北東から南東方向に掘削される素掘り溝である。総延長約12.5mを確認した。幅1m、深さ0.30~0.35mを測る。埋土は暗灰色細砂混じり粘質土である。江戸時代後半の陶磁器細片が出土している。

溝SD2は溝SD1に平行して掘削される素掘り溝である。総延長7.5mを確認した。幅1m深さ20cmを測る。出土遺物はなく時期は断定できないが、埋土や、溝の主軸方向などから溝SD1と同時期と考える。

溝SD9はB1地区で検出した。B2地区のSD1、SD2と同方向に調査区を北東から南西にかけて走る溝である。長さ16mを検出し、幅60~80cm、深さ18~25cmを測る。江戸時代後期のものである。

なお、これらの遺構出土遺物については図示していない。



第158図 竪穴式住居跡SH4実測図

f. 時期不明の遺構と遺物

時期は不明であるが、B2地区で土坑SK7・8を検出した。SK7はほぼ円形で、1m×0.7m、深さ25cmを測る。検出上面から中間に土師器片が集積していた。また土器と同一レベルで焼土が広がることを確認した。SK8は径25cm、深さ10cmほどの小土坑である。検出面で土師器片が出土した。

遺構以外に、包含層出土遺物のうち所属時期は不明であるものの特徴的なものを図示した。鉄器・土錘・ガラス玉などがある。

461・457・458はB1地区北壁断ち割り中に出土した。詳細な出土位置が定かでないが、竪穴式住居跡SH4に伴っていた可能性がある。461は鉄鏃の刃部である。457は刀子刃部片である。458は刀子茎部である。

467は11D区から出土した。錆が進行し、詳細な観察はできないが鈍と思われる。

459は7C区から出土した棒状の鉄製品である。途中で屈曲し、先端がやや鋭利になる。

462は4B区出土である。長頸鏃の筧被部と思われ、樹皮の痕跡が錆上に観察される。

463は5A区出土の棒状の鉄製品である。サイズから見て鉄鏃の頸部と思われる。

464は錆化が著しいが、方頭鏃の可能性はある。

B1地区出土の鉄製品として460・465・466がある。460は長頸鏃である。刃部は錆化が著しいが、逆刺をもつ三角形鏃と思われる。465は先端が細くなる棒状の鉄製品である。鉄釘もしくは鉄鏃の茎部の可能性がある。466は厚手の破片である。断面は台形を呈し、先端がやや細身を帯びる。断面の観察から鑄造品の可能性がある。

土錘(469)はB2地区出土である。直径4.3cm、長さ1.25cmを測る。

ガラス小玉(468)はB1地区から出土した。直径4.5mm、長さ4.5mmを測る。また円孔は径2.5mmを測る。色調はスカイブルーを呈する。また、高倍率ルーペにより気泡の観察を行ったが、製作技法を特定するには至らなかった。また、成分分析の結果、ガラスの素材はアルカリ珪酸塩ガラスであることが明かとなった。^(注25)

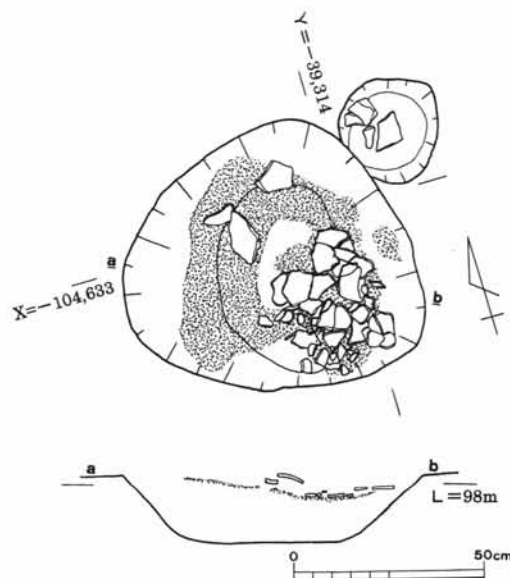
(黒坪一樹)

(3) まとめ

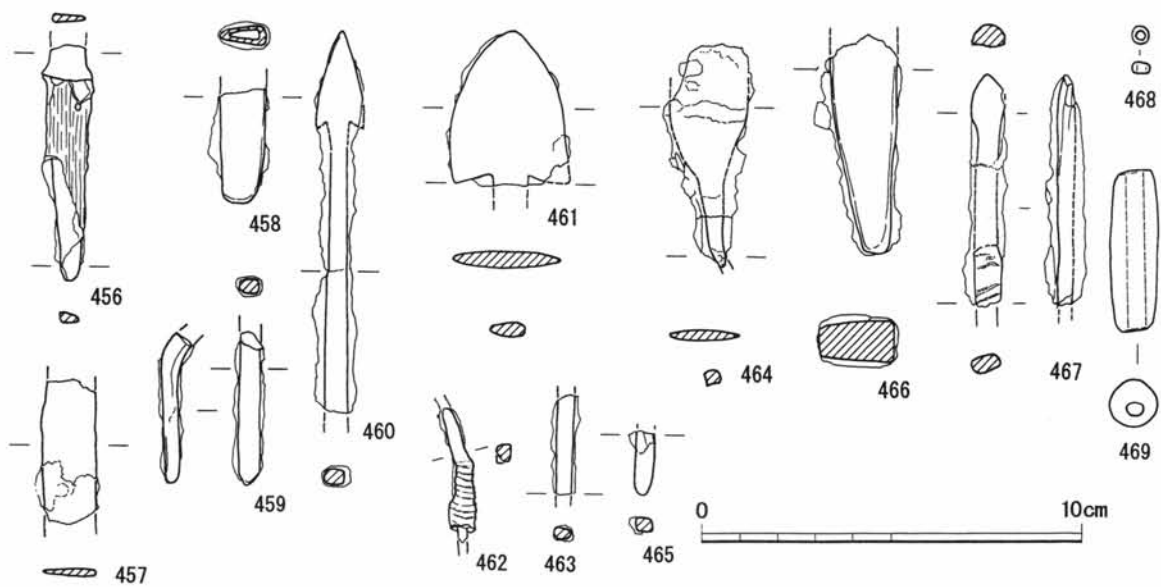
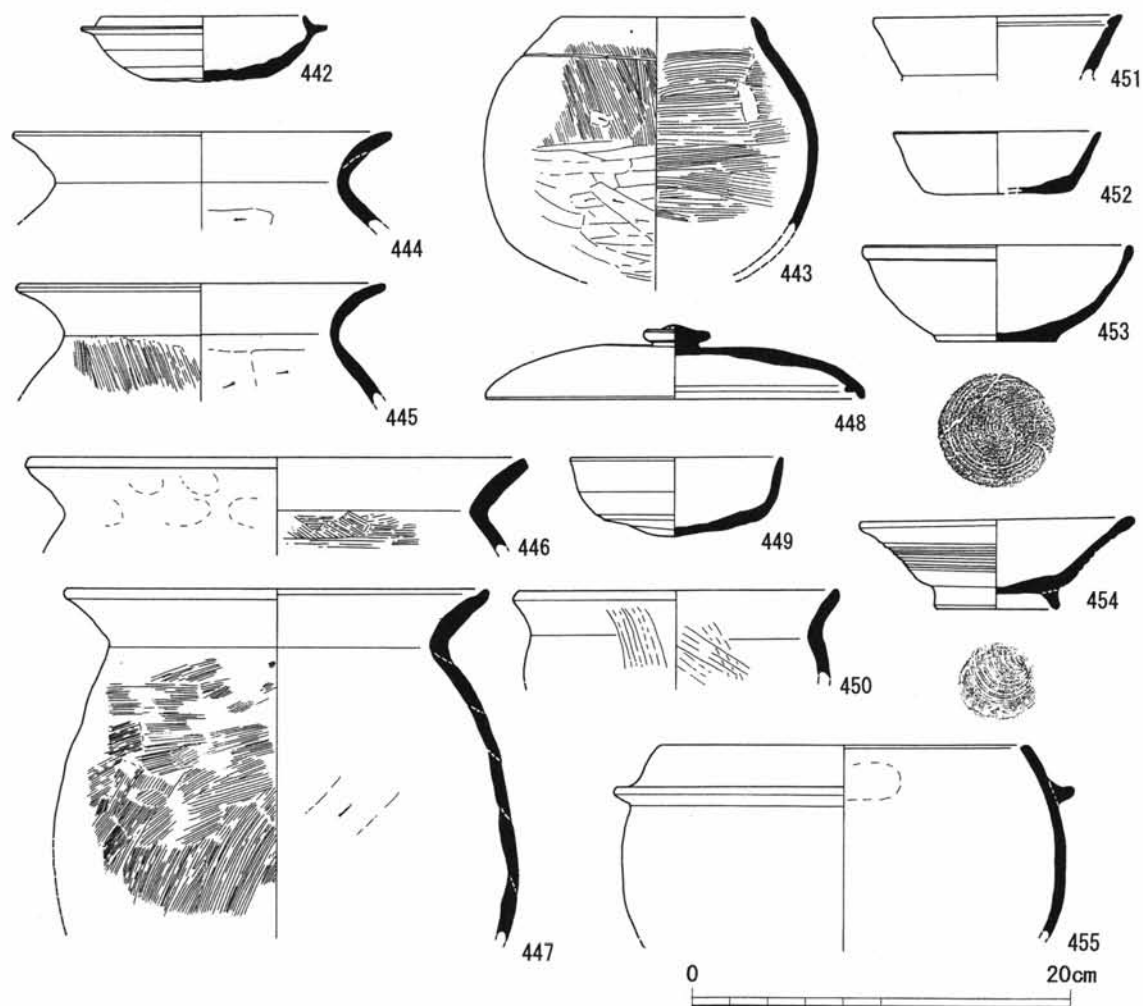
以上、車塚遺跡B地区の調査について概観してきた。その結果、縄文時代の遺物について大きな成果をあげることができたといえる。

縄文土器については、観察・統計学的な処理を行った結果、以下の点を明らかにすることができた。

- ① 北白川上層式2期にはほぼ限定できる土器群である。縁帯文土器成立期から北白川上層式1期に比定できる土器を若干含むが、北白川上層式3期以降の



第159図 土坑SK7・8実測図
(スクリーン・トーン部は赤化焼け土)



第160図 B地区出土古墳時代以降の土器・鉄器など実測図

土器は全くみられない。

- ② 関東系・九州系の特徴をもつ資料が一定量存在する。
- ③ 器種組成では口縁部外面を断面かまほこ形に肥厚させる深鉢B 2類bが最も多い。
- ④ 細密条痕と呼ばれる条痕には、原体に二枚貝殻頂部と板小口を用いたとみられる2種類がある。後者は角閃石を含まない胎土の口縁部を直立させる深鉢および無文の浅鉢だけに施される。
- ⑤ 全体の6割強が角閃石を含む特徴的な胎土である。
- ⑥ 角閃石を含む胎土は、型式学的に古い様相を示す一群と他地域の要素をもつ一群にはほとんどみられないが、その他の器種には半数程度存在し、特に口縁部外面を断面かまほこ形に肥厚させる深鉢B 2類bでは8割以上を占める。
- ⑦ 胎土は、色調と相関関係にある。
- ⑧ 縄文の撚りの方向はLRが多く、角閃石を含む胎土ではさらに多い。
- ⑨ 底部は平底のものがほとんどで、凹底はほとんどなく、網代痕のついたものはない。
- ⑩ 底部の直径は平均9.1cmで、胎土による差はほとんどみられない。

一方、石器の検討結果からは、まとまった量のサヌカイト剥片や石核、石鏃・削器などの剥片石器、そして激しい打撃による打裂・剥離痕をもつ敲石類・台石・石斧類が多数出土していることが明らかとなった。先述したように縄文時代の土器・石器は、近隣の開発によって動かされ、当地点に廃棄されたものと考えられ、本来の集落内における原位置からの出土ではない。とはいえ、以上のような剥片・石核および敲石類・台石のあり方から推すと、本来の集落内における石器製作に関わる作業空間の存在が強く想起される。

以上のように、車塚遺跡B地区出土の縄文時代遺物は、包含層出土の遺物ではあるものの、後期前半の土器・石器の組成や、その製作技法などについて亀岡盆地内での実態を示す資料として重要である。当該期の遺物は亀岡盆地でこれまでのところ6遺跡で知られている。千代川遺跡(中期初頭～後期後葉)、北金岐遺跡(後期)、八木嶋遺跡(後期)、三日市遺跡(中期末～後期初頭)、大田遺跡(後期)、鹿谷遺跡(後期前葉)である。

亀岡盆地内およびその周辺では、縄文時代中期の遺跡および土器は少なく、後期前半に遺跡数の増加傾向が指摘されている(三好2000)。当遺跡の近くでは三日市遺跡から縄文土器の出土が知られているが、大堰川左岸の川東地区において、これほどまとまった縄文時代資料の出土は初めてである。亀岡盆地のみならず府内的にみてもきわめて貴重な事例となろう。今後、さらに広範な地域の資料との比較・検討を行っていく必要がある。また、石器の検討結果や土器の残存状態からみて、近接地には当該期の集落が展開しているものと考えられ、今後の周辺部での調査に期待される。

また、縄文時代以外にも、古墳時代前期・後期の竪穴式住居跡、奈良時代から中世にかけての土坑・ピット群が確認されたことは、この地における土地利用が古墳時代前期以降、継続的に行われたことを示しており、さらに集落が拡大していることが予想される。

(黒坪一樹・稲畑航平)

おわりに

以上、平成16～17年度に調査を実施した、池尻・馬路・車塚の各遺跡の調査について概要を記してきた。この数年内に実施されてきた国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴う数々の調査により、従来不明瞭であった亀岡盆地桂川東岸域の遺跡の諸相が明かとなってきた。

縄文時代の成果として、車塚遺跡B地区でまとまった量の後期土器資料を得ることができ、当地域の縄文土器研究に重要な資料を提示することができた。当地域の代表的な資料群として、今後活用されることが期待される。また、土器・石器の検討から近接した地点に集落が存在することが予測され、周辺部の調査に期待される。

弥生時代では、池尻遺跡で中期初頭の方形周溝墓群が検出された点が大きく評価される。現在、調査・整理中である時塚遺跡でも中期中葉から後半の方形周溝墓が検出され、車塚遺跡A地区や馬路遺跡でも中期の方形周溝墓が確認されている。これらの遺跡を総合的に評価することにより、当地域の弥生墓制の変遷や、社会情勢の変化を知りうる資料となろう。一方で、中期の弥生集落は中期中葉から後半にかけて営まれる時塚遺跡が確認されるのみであり、中期初頭の弥生集落本体の存在については不明瞭な部分が多く、今後の検討課題といえよう。池尻遺跡では前期後半の遺構も確認されていることから、継続的に営まれた集落が近接して存在する可能性は高いと思われる。

古墳時代では池尻遺跡第12次で検出された大規模な溝と集落が注目される。この地域では中期に方墳が盟主墳として造られ、後期の千歳車塚古墳の出現以降に円墳が盛行するものと思われるが、池尻遺跡12次の集落はこの過渡期から造営のはじまる集落とみられ、墓制と共に当該期の社会情勢を検討する良好な資料を提示したといえよう。また、大規模な溝は古墳時代後期の大規模開発のあり方や、飛鳥・奈良時代にまで存続する幹道との関連を示唆する資料である。

池尻遺跡第7次D地区で確認された奈良時代の大規模な官衙的建物群は、国府関連遺構である可能性が高いと考えた。同種の遺構は京都府教育委員会や亀岡市教育委員会の実施している発掘調査でも断片的ながら確認され、池尻廃寺周辺の広範な地域に官衙的建物が存在する可能性が高い。奈良時代には丹波国分寺・国分尼寺、国分寺瓦窯である三日市遺跡、同じく官衙的建物の確認された車塚遺跡A地区などの律令国家と直接的な関連性をもつ遺跡が多数存在することが明らかとなりつつある。また、これらの主要遺跡群は当該地域に想定されている古山陰道の存在と有機的に関連していたものと思われ、古代丹波の中核的な地域として律令期における丹波を考える上で重要な資料を提示することができた。

今後、調査・整理作業を進めている蔵垣内遺跡や時塚遺跡の調査成果を含めて検討を行い、当地域を含む丹波地方の考古学的な調査成果について再評価する必要があると思われる。

(石崎善久)

注1 調査参加者は以下のとおりである(順不同・敬称略)

—平成16年度調査参加者—

調査補助員 天池佐栄子・山岡匠平・奥浩和・村上奈弥・村上計太・井上亮・田村和成・北森さやか・草薙大蔵・武田雄志・田中洸太郎・平井耕平・松本景太・大道真由美・井上優・青石達哉・畑和弘・中津梓・坂内裕志・石井健太・谷秀平・吉村真美・吉田翔・野口昌宏・中村智・関正樹・中村領・安井容子・竹内律輝・杉崎哲郎・山田智子・豊田洋貴・田部直樹・塩田将人・橋本翔太・浅井達也・石井太基・津野義人・笠原直哉・戸塚悟史・野崎文人・藤本卓司・雪本敬人・宇野隼人・岡本寛明・藤田広海・澤鮎美・的場明日香・阿部絵理子・鷲見素直・米山紗矢香・中川祐輔・竹中慎詞・田邊義高・竹内慎也

整理員 山本弥生・荻野富紗子・丸谷はま子・西村香代子・松下道子・山中道代・内藤チエ・森川敦子・高田真由美・関口睦美・藤井矢壽子・柿谷悦子・松元順代・清水友佳子・春日満子・兵藤真千・中川香世子・阪口美智代・俣野明子・堤百合美・中川由美子

作業員 西田千代和・村上福治・脇上トシ子・岩本勝美・田中千代子・松本栄子・大西啓之・桂孝子・山本君代・関口澄子・岡本ユカ・石本昇・茨木吉光・黒田武夫・牧澤文夫・森山兼夫・石本和江・桂邦雄・八木浩二・清水満里子・沼田みさを・小幡一幸・川本みち子・岸敬子・岸昇・平井武夫・岸妙子・林田洋子・茨木節子・関徹・藤木建直・関あさ江・水谷敏夫・中西秋江・森山きよ子・近藤正裕・寺町為三・小泉正男・中村幸二・安藤美智子・杉崎征夫・八木まゆみ・橋本幸子・畑弥生・堤和代・才津鈴美・畑信弘・北村博・澤田秀子・中澤まゆみ・福島智香・堤明裕・楠本小夜子・堤清子・中澤耕一・中澤義己・中沢春美・中澤一義・川村勇・堤富男・中野美代子・奥田宏・畑きく恵・堤洋一・大西勝治・堤富子・森江津子・平岩敬子・中川しづゑ・中澤多美・中川正之・人見正毅・中島千恵子・堤純子・林節子・中川慶弘・竹田晴美・広瀬宗吾・杉崎勉・山田優・平野かすみ・亀谷憲二・杉崎貢・岩本滝雄・堤達也・堤操・中澤次雄・岩田守・小川益次郎・堤務・河原博・名倉艶子・伊豆田進・堤翼・筑前明子・上田伊佐男・飯田久美子・畑和樹・名倉清司・畑純子・堤真凡・鈴木真佐子・堤末夫・中沢好子・堤智恵子・中野和子・堤明・名倉達雄・中川一成・川村敏雄・中澤紀男・中川恵美子・林八郎・人見茂実・中川坦・小松とみ子・桠々下英美利・浅田昌子・中川将俊・浅田信仁・浅田圭二・野々村桂・村上英子・俣野明美・名倉正子・浅田マサ子・川村フクエ・人見美子・畑貢・畑八重子・堤廣子・中川章代・堀口慶子・林昭子・杉崎稔・興津嘉子・中澤大介・酒井勝美・松本憲明・西口則幸・田中嘉男・中澤康夫

—平成17年度調査参加者—

調査補助員 天池佐栄子・奥浩和・村上奈弥・井上亮・北森さやか・草薙大蔵・山口由希子・武田雄志・田中洸太郎・麻田智也・平井耕平・松本景太・大道真由美・中津梓・坂内裕志・関正樹・中村領・安井容子・杉崎哲郎・豊田洋貴・田部直樹・橋本翔太・浅井達也・野崎文人・藤本卓司・田邊義高・武内慎也・岡本寛明・梅村大輔・吉村駿吾・稲畑航平・中嶋直樹・村田豊・原口彰太・平田和範・桂啓輔・谷上真由美・後藤大輝・副井克哉・加藤純平・松川考男・木村允哉・古川史高・早川真也・松村龍哉・加藤千尋・守本裕一・植田哲也・南部直志・大下永・平井将吾・小野宏一郎・中屋啓太・平井祐成・作野大介

整理員 山本弥生・荻野富紗子・中島恵美子・西村香代子・松下道子・高田真由美・関口睦美・長尾美恵子・藤井矢壽子・柿谷悦子・松元順代・川村真由美・中川香世子・堤百合美・中川由美子

作業員 石本昇・茨木吉光・黒田武夫・石本和江・桂邦雄・八木浩二・清水満里子・沼田みさを・小幡一幸・川本みち子・岸敬子・岸モトエ・岸昇・平井武夫・岸妙子・林田祥子・橋本幸夫・茨木節子・関徹・藤木建直・関あさ江・中西秋江・島津伴一・島津イト子・近藤正裕・寺町為三・広瀬秀夫・小泉正男・谷尻小ちゑ・安藤美智子・松田義兼・河島信晴・杉崎征夫・八木まゆみ・面屋龍

憲・橋本幸子・畑弥生・堤和代・才津鈴美・畑信弘・北村博・澤田秀子・中澤まゆみ・福島智香・堤明裕・楠本小夜子・堤清子・中沢義己・中沢春美・中澤一義・中野美代子・奥田宏・畑さく恵・堤洋一・堤富子・森江津子・中川しづゑ・中澤多美・人見正毅・中島千恵子・堤純子・林節子・中川慶弘・杉崎和雄・山田優・平野かすみ・亀谷憲二・平野寿美枝・堤達也・堤操・中澤次雄・岩田守・小川益次郎・椋本好美・堤務・名倉艶子・中澤一雄・堤翼・飯田久美子・畑和樹・名倉清司・畑純子・堤真凡・鈴木眞佐子・堤末夫・中澤好子・堤智恵子・中野和子・堤明・名倉達雄・川村敏雄・中澤紀男・中川恵美子・林八郎・鈴木秀雄・藤井多恵子・林儀治・安藤孝司・茨木福夫・中川末男・中澤豊・人見茂実・中川坦・埜々下英美利・浅田圭二・野々村桂・村上英子・俣野明美・浅田マサ子・川村フクエ・人見美子・畑貢・堤廣子・中川章代・堀口慶子・林昭子・杉崎稔・興津嘉子・井上四郎・村上美雪・平岩利男・三浦禮司・中川寛之・河原鈴子・川村悦子・川村有加子・武内征男・森川セイ・名倉峯子・平野由紀子・橋本辰彦・広瀬征夫・北口泰正・西村眞弓・平野博美・岡本晴子・松田弘和・澤田勲・浅田節子・中川まゆ子・中澤美津子・畑正彦・中澤隆征・浅田義幸・寺町義則・畑照美・井上美代子・林彩和子・堤藍子・畑克己・谷尻文夫・関一美・関晶代

現地調査・整理作業において、以下の諸機関・個人から様々な御協力・御教示を得ることができた(順不同・敬称略) 泉拓良、富井眞、千葉豊、千國ひろ子、河本純一、小島孝修、堀真人、肥後弘幸、藤井整、上峯篤史

注2 遺跡の所在する行政区名は特に記さない限り、亀岡市に所在する。なお、行政区名は初出のものみに付した。

注3 本項の執筆に当たり、多数の文献、報告書を参考にしたが、紙幅の都合で割愛した。

注4 池尻遺跡の過去の主要な調査成果については下記の文献に報告がなされている。

a. 田代弘「2. 池尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

b. 柴暁彦「2. 池尻遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

c. 藤井整「[1] 池尻遺跡第8次調査」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』(平成17年度) 京都府教育委員会) 2006

d. 「池尻遺跡第6次」(『亀岡市文化財調査報告書』第71集 亀岡市教育委員会) 2006

なお、第3図の亀岡市教育委員会調査分のトレンチは上記文献dに基づいて作成したが、座標が記入されていないため、正確な位置関係は不明である。

注5 京都府教育委員会との協議による。

注6 前掲注4-d

注7 杉本宏「飛鳥時代初頭の陶硯(宇治隼上り瓦窯跡出土陶硯を中心として)」(『考古学雑誌』73-2 日本考古学会) 1987

注8 『古代の官衙遺跡』II 遺物・遺跡編(奈良文化財研究所) 2004

注9 藤井整「方形周溝墓の成立」(『京都府埋蔵文化財情報』第82号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注10 藤井整ほか『下植野南遺跡』II(『京都府遺跡調査報告書』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

注11 石崎善久「丹後地方弥生墳墓における祭祀行為について—墳墓祭祀からみた赤坂今井墳丘墓—」(『京都府埋蔵文化財情報』第91号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

- 注12 中川和哉「池上遺跡第12次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第108冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
 中川和哉「池上遺跡第13・18次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第112冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004
- 注13 岸岡貴英「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成17年度発掘調査報告」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成17年度 京都府教育委員会) 2007
- 注14 埋蔵文化財研究会『第54回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の滑石製品 発表要旨・資料集』 2005
- 注15 岡崎研一「池尻遺跡第12次の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』100号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- 注16 村田和弘「2. 馬路遺跡第3次」(『京都府遺跡調査概報』第114冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 注17 注16と同じ。
- 注18 引原茂治「3. 馬路遺跡第6次・池尻遺跡第14次」(『京都府遺跡調査概報』第123冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
- 注19 藤井整「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成17年度発掘調査報告」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成17年度 京都府教育委員会) 2006
- 注20 田代弘「池尻遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注21 亀岡市教育委員会「坊主塚古墳・池尻廃寺発掘調査報告」(『市内遺跡発掘調査報告書』一亀岡市文化財調査報告書 第50集) 1999
- 注22 これまでの発掘調査では、坊主塚古墳や時塚1号墳など5世紀代と考えられる古墳の多くが方墳であり、6世紀代には円墳が確認される。したがって、この時期に円墳へと変化したと考えられる。
- 注23 森正『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』 京都府教育委員会 2000
- 注24 足利健亮「村落と条理」(『新修 亀岡市史 本文編』第1巻) 京都府亀岡市 1995
- 注25 しかし、接合作業には十分な時間をかけたにもかかわらず、接合率は高くない。
- 注26 ここでは、櫛歯状工具による単位のある細い沈線文を「条線」、それよりもさらに細く、口縁肥厚部へ主に地文として施される沈線文を「細条線」と呼称する。
- 注27 京都大学考古学研究室、河本純一氏のご教示による。
- 注28 財団法人滋賀県文化財保護協会、小島孝修氏のご教示による。
- 注29 角閃石を含む胎土には、比較的大粒の角閃石を多量に含むものから、数粒の角閃石しか確認できないものまで、含有状況に変異があるが、ここでは一括して扱った。
- 注30 財団法人滋賀県文化財保護協会、堀真人氏のご教示を参考にした。
- 注31 この折れ線グラフでは、縦軸に土器の点数を、横軸に土器の表面の色調(標準土色帖2001 年度版を、色相ごとに左から右へ明度が高くなるよう配列してある。京都大学考古学研究室、河本純一氏の提案した手法を一部改変したものである。
- 注32 松田真一「(11)磨石・凹石類」(『大川遺跡』山添村教育委員会) 1989 pp.203~215
- 注33 長谷川豊「第五節四、敲石、五、磨石」(『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館) 1975 pp.191~206
- 注34 田中勝則「キ磨石・凹石・敲石」(『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11-明科町内-北村遺跡本文編』長野県埋蔵文化財センター) 1993 pp.196~199

- 注35 成分分析は奈良大学の協力のもと、奈良大学大学院生北森さやかが電子顕微鏡法(E P M A法)により、走査型電子顕微鏡(日立S3000N系走査電子顕微鏡E5126)－{SEMEDX(EDX部)/EX-220SE(装置形式)/7021H(検出器)};HORIBA社} を使用し材質分析を行った。
- 注36 三好博喜ほか「新修 亀岡市史 資料編第1巻」 亀岡市教育委員会 2000

参考・引用文献

縄文土器の整理報告に際しては以下の文献を引用、もしくは参考とした。

- 泉拓良「北白川上層式土器の細分—京都大学教養部構内A O 24地区出土の縄文土器を中心に—」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1979 pp.53~70
- 植田文雄「正楽寺遺跡出土縄文後期土器群の検討」(『正楽寺遺跡 本文編』 能登川町埋蔵文化財調査報告書40 能登川町教育委員会) 1996 pp.227~260
- 幸泉満夫「土器底部形態にみる縄文時代後期社会の小地域性—四国西北部地域とその周縁—」『四国とその周辺の考古学』(犬飼徹夫先生古稀記念論集) 2002 pp.41~66
- 清水芳裕「角閃石を中心とした胎土の特徴」『縄文~古墳時代における土器の特徴的胎土の分布に関する定量分析的研究』 2006 pp.10~23
- 千葉豊「縁帯文系土器群の成立と展開—西日本縄文後期前半期の地域相—」『史林』72-6 1989 pp.102~146
- 「名張市赤目 辻垣内遺跡出土の縄文土器」『埋蔵文化財発掘調査報告』I(三重県埋蔵文化財調査報告79) 三重県教育委員会 1989 pp.7~26
- 「縄文土器」(『小森岡遺跡』 兵庫県城崎郡竹野町教育委員会) 1990 pp.13~44
- 「京都盆地の縄文時代遺跡」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』1989~1991年度 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1993 pp.53~74
- 中村友博「刷毛目様細密条痕の一種について」(『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念論文集) 2003 pp.39~46
- 藤根久・小坂和夫「生駒西麓(東大阪市)産の縄文土器の胎土材料—断層内物質の可能性—」(『第四紀研究』36-1) 1997 pp.55~62
- 矢野健一「縄文土器」『小路頃オノ木遺跡発掘調査報告書』(関宮町埋蔵文化財調査報告書4 関宮町教育委員会) 1990 pp.6~20
- 「縄文時代早期の近畿地方における角閃石を多量に含有する土器の分布」『縄文~古墳時代における土器の特徴的胎土の分布に関する定量分析的研究』 2006 pp.1~7
- 山崎真治「縁帯文土器の編年的研究」(『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室 紀要』18) 2003 pp.35~109
- 横山浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』23 1978 pp.1~24
- 「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』24 1979 pp.223~246